9803 Space Design

スペースデザイン ISSN 0563-0991
第402号 1998年3月1日発行
毎月1回1日発行
昭和40年2月5日第三種郵便物許可

SD

表層革命再考:
チェコのキュビズム-ロンドキュビズム建築

Czech Cubist/Rondocubist Architecture: A Reappreciation of the Revolution



香山壽夫のドローイングと空間
Hisao Kohyama: Drawings and Space

Monthly Journal of Art and Architecture

KANDENKO









大切なのは、
何かをつかもうとする心。

電気は光・熱・情報・音響などに姿を変え、私たちの暮らしを支えています。関電工はこうした電気を、住宅で、オフィスで、劇場で、工場で、環境への配慮と安全性を第一に具体的なシステムや設備のカタチでお届けしています。そしてつねに、さらなる可能性を広げようと、新たな夢を描き、日夜さまざまな研究を続けています。今までも、これからも、関電工の技術はいつもあなたの近くにいます。

いつも、人に優しい技術で未来へ。

関電工

本社：〒108-8533 東京都港区芝浦4丁目8番33号
☎：NTT 03(5476)2111 TTNet 03(4431)2111

1日24時間、
いつでもおしりを
ささえてくれる。



福祉機器コンテスト'96
『優秀賞』受賞

便座が動いて、座ったり立ったりを
やさしくサポート。
「簡易昇降便座」新発売。

お年寄りや足腰の弱い人にとっては、座ったり立ったりする動作がいちばんツラい。せめてトイレくらいはツラい思いをしなくてすむようにできないか。TOTOのそんな発想が、電動で便座を斜め方向に上下させて、座ったり立ったりをやさしく手助けする「簡易昇降便座」をつくりました。

※お問い合わせは、TOTOレブリス推進部フリーダイヤル
0120-54-1210まで。(10:00～17:00 土日・祝日を除く)

◎ご家庭にも手軽に導入できる新価格。
EWC120 本体価格78,000円(税別)
※便座用接続品が必要です。※ウォシュレット、便器等は含みません。

TOTO
簡易昇降便座

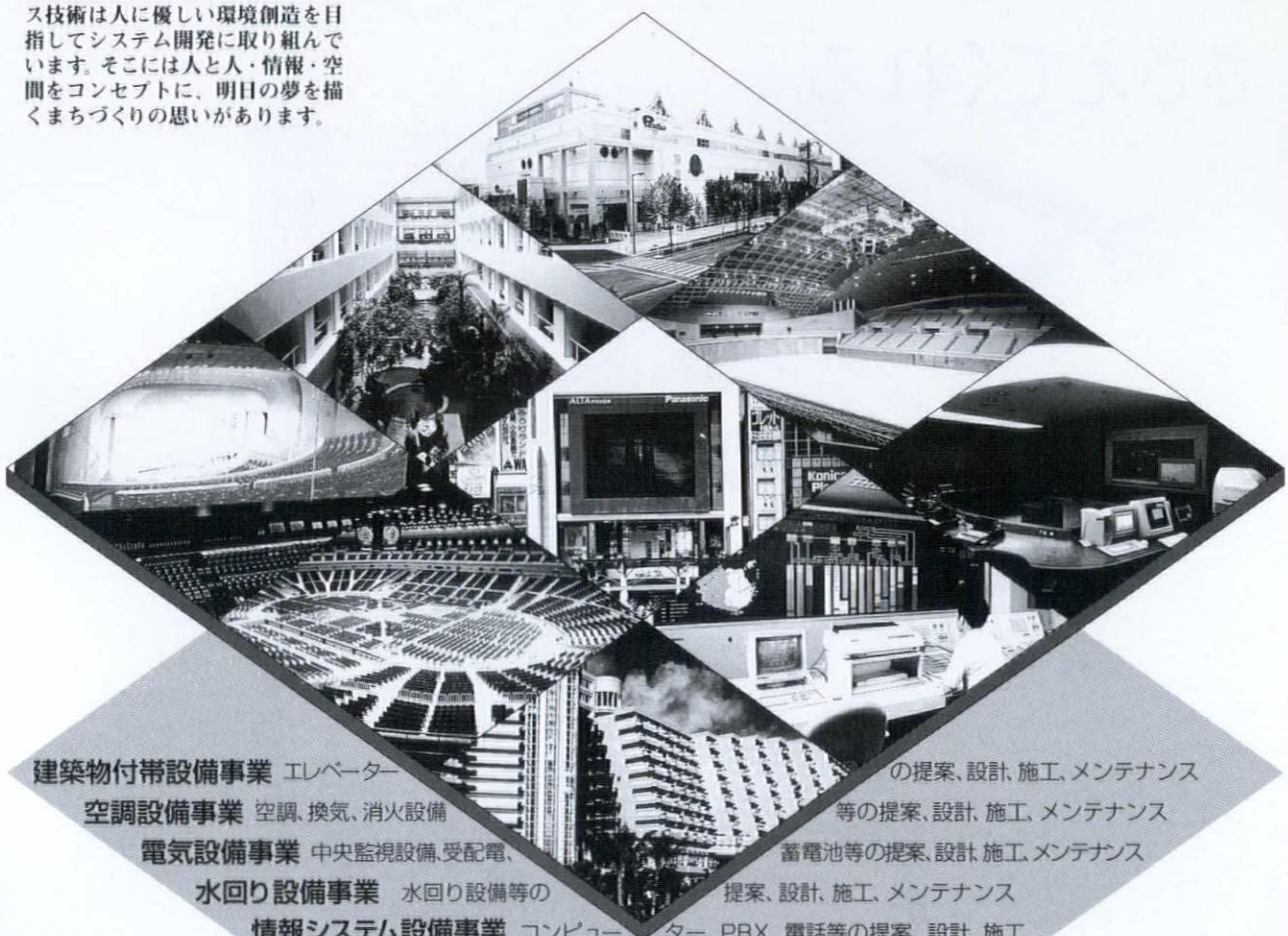
新しい視点で、高齢社会の快適を考える、レブリス商品群 REVLIS

カタログご希望の方は、〒154-0015 東京都世田谷区桜新町2-24-2 TOTO広告宣伝部「昇降便座」係まで住所・氏名・電話番号を記入のうえご請求ください。

National/Panasonic

私たちは快適をシステムにしてお届けします。

松下電器産業の建設エレクトロニクス技術は人に優しい環境創造を目指してシステム開発に取り組んでいます。そこには人と人・情報・空間をコンセプトに、明日の夢を描くまちづくりの思いがあります。



建築物付帯設備事業 エレベーター の提案、設計、施工、メンテナンス

空調設備事業 空調、換気、消火設備 等の提案、設計、施工、メンテナンス

電気設備事業 中央監視設備、受配電、 蓄電池等の提案、設計、施工、メンテナンス

水回り設備事業 水回り設備等の 提案、設計、施工、メンテナンス

情報システム設備事業 コンピューター、PBX、電話等の提案、設計、施工、メンテナンス

映像・音響設備事業 映像、音響システムの提案、設計、施工、メンテナンス

まちづくり事業 都市再開発、施設開発、環境創造の提案、設計

FLAPS、羽ばたくという意味をもつ新キーワード「AV & CC FLAPS」は映像・音響・情報通信システム・食品流通・照明・空調・水管理・搬送とさまざまな設備システムの融合により真の快適環境を求め夢の実現へと願いをこめて事業展開を進めていきます。



松下電器産業株式会社

建設システム営業本部	☎03-5500-7504
北海道支店	☎011-207-7722
東北支店	☎022-711-3551
新潟支店	☎025-246-1031
関東支店	☎0286-37-2241
神奈川支店	☎045-651-5051
建設システム営業本部中部支店	☎052-951-6010
長野支店	☎0262-26-3990
北陸支店	☎0762-23-1121
静岡支店	☎054-247-5155
建設システム営業本部関西支店	☎06-949-2111
中国支店	☎082-247-5272
四国支店	☎0878-26-1711
九州支店	☎092-431-1100
沖縄支店	☎098-869-2926

AV&CC FLAPS

AUDIO VISUAL COMMUNICATION COMPUTER FOOD LIGHT AIR&AQUA PASSAGE SOFTWARE&SYSTEM

快適さは…安全、確実が基本。

快適な環境づくりに、豊かな経験。

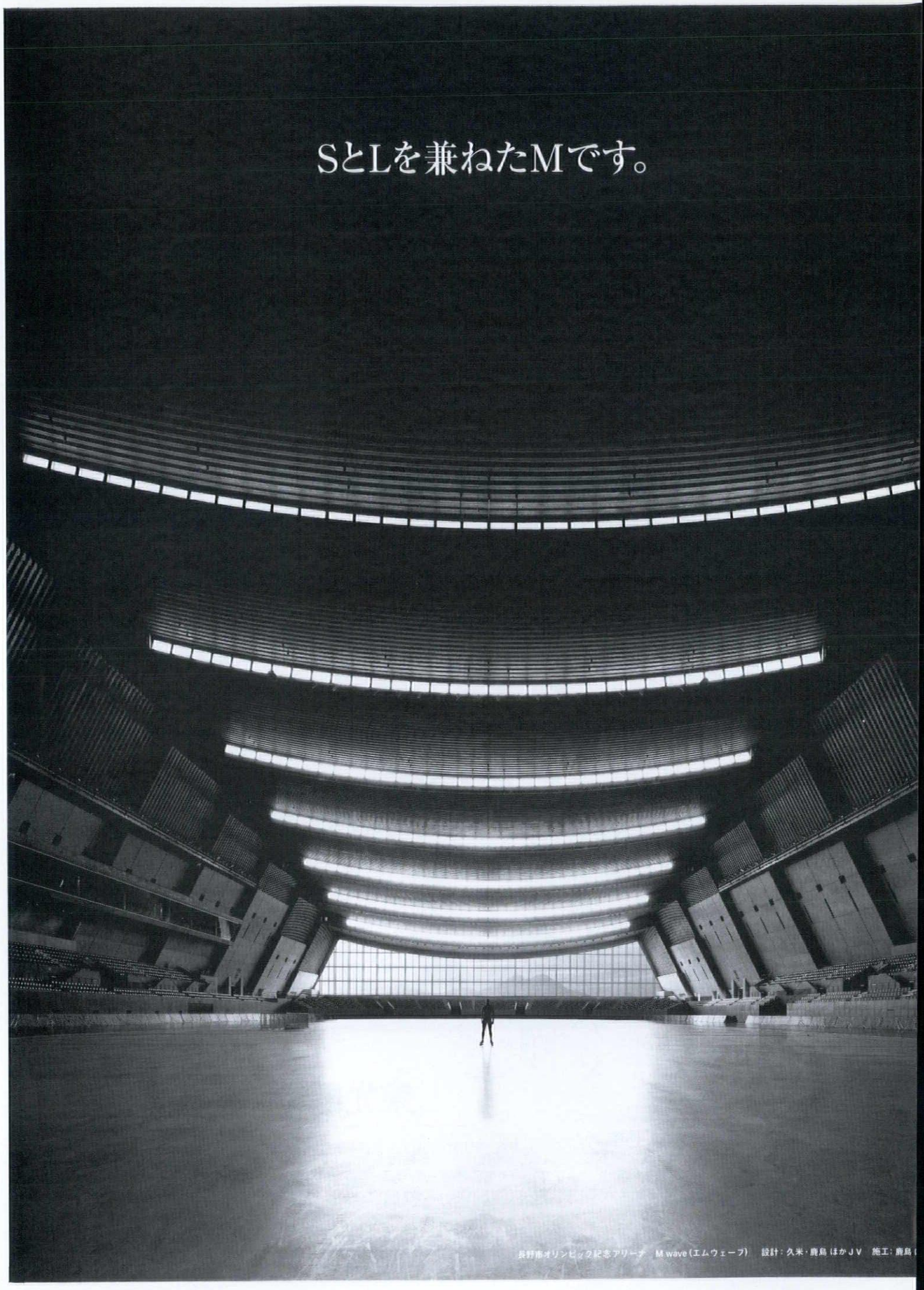


●技術と伝統の…
内線工事■外線工事

東光電気工事株式会社

本社　〒101-8350 東京都千代田区西神田1-4-5　TEL.(03)3292-2111

支社所在地／札幌・仙台・大宮・千葉・丸の内(東京)・新宿(東京)・横浜・名古屋・大阪・福岡


SとLを兼ねたMです。
長野市オリンピック記念アリーナ　M wave（エムウェーブ）　設計：久米・鹿島 ほかJV　施工：鹿島

大きなアリーナ。いいですねえ。夢がありますよね。世界大会、大コンサート、何万人もの観衆、沸き上がる歓声・・・。大空間はやっぱり建築の醍醐味です。でも、最近、空間の巨大さが気になることが、ときどきあるんですよね。
というのは、大きな空間になればなるほど、「本来の目的」以外の使い方が、必ず増えてくることがはっきりしてきたからなんです。(プロ野球の本拠地になっているところでさえ、ほかの目的で利用される回数の方が圧倒的に多いそうです。)ところが、いままでのやり方だと、たとえばアリーナ全面を使う必要のない場合でも、無理して全面使ってしまったり、あるいは仮設スタンドを入れても、実は天井から跳ね返ってくる音のことを我慢していたり。人が気持ち良く過ごすことを目指した場所で、結果としてまずその気持ち良さが犠牲にされている。おかしなことだと思いませんか。

長野に世界一のスピードスケートリンクをつくろう、ということになったときは、だから、大イベントだけでなく、他の目的で空間を小さく使うこともほんとに真剣に考えたらどうなるか、初めてやってみたいと思ったわけです。全世界に向け、日本をアピールできる大空間であることと、その後何十年も何百年もに渡り、少しでも多くの地元の方に気持ち良く使っていただけることの両立・・・。
いわば、ほんとの意味で「大は小を兼ねる」といったところでしょうか。

この建物の愛称『M wave(エムウェーブ)』の由来になっている、ドームとは逆に真ん中の下がった「木造吊り屋根構造」は、そんなわけで、'前代未聞の形'とか'日本らしさ'とかそういうこと以上に、アリーナの大きさをいろいろ変えても、気持ちいい空間規模をつくれることが狙いなんですね。スタンドだけじゃなく、照明も音響も含めた全体を可変式にしたのも同じ意図です。その結果、アメフトとママさんバレーが、一流の大コンサートと一流の小コンサートが、じっさい両方できるようになりました。(もちろん、この空間、空調がしやすいので氷の状態がベストに保てるし、木だと結露しにくいのでリンクに露がたれてこないし・・・と、世界一のスピードスケート競技を実現するたくさんのメリットが集約されているのは、いうまでもありません。ご心配なく。)

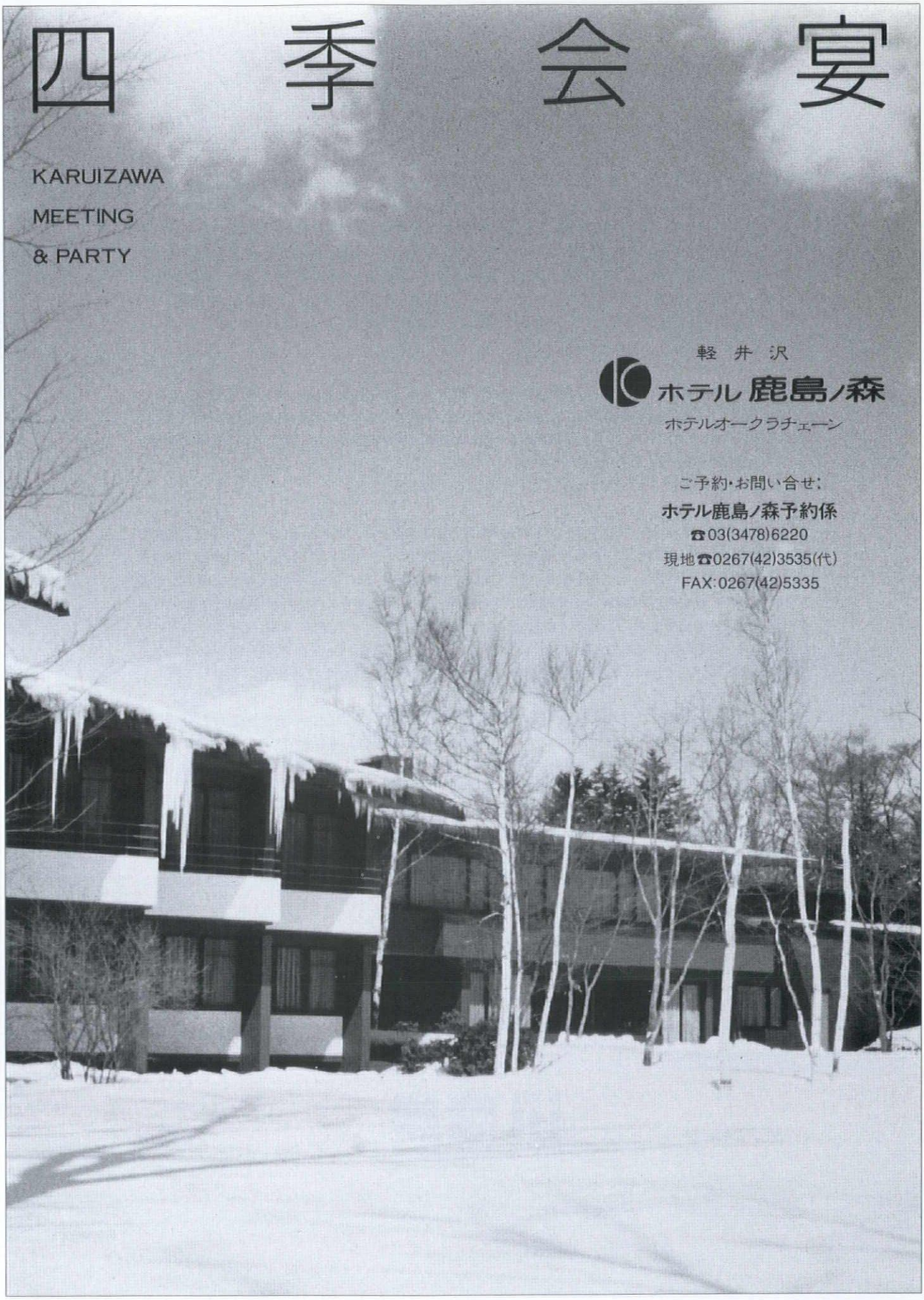
ところで、いろいろな仕事で、このようにいろいろな疑問にぶつかり、答えを探していくうち、わたしたちは、こんな考えを持つようになりました。「技術やスケールだけで建築を語る時代は、そろそろ終わりにしよう」。どんなにすごい建物でも、できただけでは、まだ未完成。これからの建築は、そこで人間が様々なドラマを繰り広げて、初めて完成したというべきなんじゃないかな。そう思うんです。

以上。わたしたち鹿島は、そんな視点で、新しい仕事に取り組んでいることを、ここにご報告いたします。

ある日、
その発想に
人は集まる。

鹿島

〒107-8388 東京都港区元赤坂1-2-7 tel.03-3404-3311(代表)
http://www.kajima.co.jp


四季会宴
KARUIZAWA
MEETING
& PARTY
軽井沢
ホテル鹿島ノ森
ホテルオークラチェーン
ご予約・お問い合せ:
ホテル鹿島ノ森予約係
☎03(3478)6220
現地☎0267(42)3535(代)
FAX:0267(42)5335



Classical Elegance in Tokyo

19世紀初頭のヨーロッパ様式で統一された本格的都市型ホテル。

すべてのファシリティに調度品に、そしてきめ細やかなおもてなしに漂う欧州の美意識。
ドアマンに迎えられホテルに一歩脚を踏み込めば、あなたの新しい物語がはじまります。

■モダンを楽しみ、ヨーロッパを憩う■

東京都現代美術館宿泊プラン

■期間　1998年3月31日まで

※ただし12月28日～1月4日を除く※美術館の休館日は、毎週月曜日（祝日の場合は翌日）となっております。

ホテルから東京都現代美術館へ、徒歩10分。現代美術をゆったりと楽しみホテルで優雅に憩う、そんな心の贅沢を充分に満喫できるプランです。

お一人様料金	
1室1名様利用（シングル）	¥16,500
1室2名様利用（ツイン）	¥13,000
1室3名様利用（トリプル）	¥11,500

※一泊朝食付・美術館入場券（常設展）・お土産・サービス料込み、税別。

HOTEL East 21 TOKYO

株式会社 鹿島ホテルエンタプライズ
KAJIMA HOTEL ENTERPRISES, LTD.

ホテル イースト21東京

〒135-0016 東京都江東区東陽6-3-3 TEL03(5683)5683(代) FAX03(5683)5775
地下鉄東西線「東陽町駅」より徒歩7分。東陽町駅～ホテル間、ホテル専用シャトルバス運行。

大興物産の海外建材シリーズ

No.6　木製品(ツーバイフォー,集成材)







大興蓼科山荘

大興物産は、米国ツーバイフォーシステム用各種部材をパッケージ輸入しており、
企画段階から調達・施工段階までトータルなコーディネーションを致します。

お問い合わせは、大興物産株式会社・海外調達部まで。
〒107-8318 東京都港区元赤坂1-5-31(新井ビル) TEL 03-5474-6054 FAX 03-5474-6386

建設資機材の総合商社

鹿島グループ　**大興物産株式会社**

本　社　〒107-8307 東京都港区元赤坂1－6－4 安全ビル

本　社	☎(03)3423-2511 FAX(03)5474-6076	札幌営業所	☎(011)231-6841 FAX(011)222-4074	四国営業所	☎(0878)39-3191 FAX(0878)35-4722
東京支店	☎(03)3423-2511 FAX(03)3423-1915	東北営業所	☎(022)219-6861 FAX(022)219-6867	九州営業所	☎(092)441-2624 FAX(092)471-7996
横浜支店	☎(045)212-3925 FAX(045)212-3996	関東営業所	☎(03)5632-6717 FAX(03)5632-6719	シンガポールオフィス	☎65-3440590　FAX65-3446714
名古屋支店	☎(052)961-6171 FAX(052)961-6179	北陸営業所	☎(025)247-2286 FAX(025)243-5248		
大阪支店	☎(06) 762-5661 FAX(06) 762-1074	広島営業所	☎(082)249-9221 FAX(082)249-9270		

自然素材をイメージした意匠に、抗菌・防カビ性能を加えたビニル床シートです。



お客様の満足が私たちの目標です
ISO 9001 認証取得

医療福祉施設や商業施設をはじめとする重歩行用の床材には、機能性とともに自然のぬくもりが感じられる美しい意匠性を——。こうしたご要望にお応えしたのがロンパティオです。デザインは、リノリウム調の"ミトス"と、トラバーチン(大理石)をモチーフにした"コリント"の2タイプをラインアップ。耐久性、耐水性にすぐれているだけでなく、抗菌・防カビ性能も標準装備。高い機能性と同時にデザイン性を追求し、さらには価格を抑えたコストパフォーマンスの高いビニル床シートです。

ファッションビニル床シート〈重歩行用〉抗菌仕様

ロンパティオ

ミトス、コリント

特　長

デザイン性　リノリウムやトラバーチン(大理石)がもつ独特の美しさを再現し、透明なトップ層で保護しています。ナチュラルで落ち着いた自然の質感ですから、四季を通じて歩行者に快適なイメージを演出します。

抗菌・防カビ性　抗菌・防カビ性能を標準装備。床面に落下した菌やカビの発育を阻止し、増殖を防止します。また、専用抗菌性樹脂ワックス「コーキンロンワックス」との併用でより一層効果を持続し、クリーンな環境を維持します。

施工性　継ぎ目はスーパーシームシーラーによる液溶着ですから接合部が目立たず、一枚フロアのような美しい仕上がりで、かつ十分な強度を実現しています。また、下地によくなじむうえにカッティングも軽く、細部の施工が容易です。

耐久性　重歩行に耐える、すぐれた耐久性を備えていますから、仕上がり時の美しさを保ちます。

清掃性　一体化した床面をつくることができるため、ホコリがたまりにくく日常のメンテナンスが容易です。

用　途

学校・幼稚園等文教施設、病院・養護老人ホーム等医療福祉施設、庁舎等公共施設の一般室・廊下・通路・階段、レストラン・喫茶室・デパート・ショッピングセンター・オフィスなどのロビー・エレベーターホール・湯沸室など

規　格

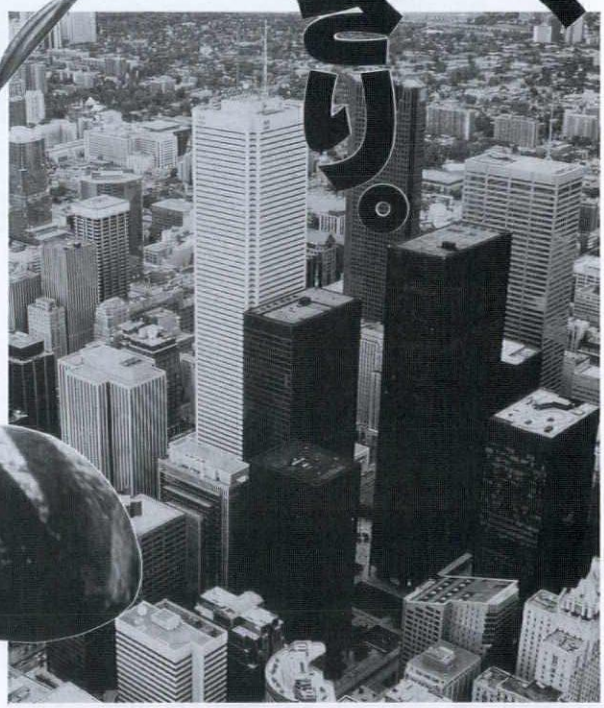
- 2柄、18色
- 2.0㎜(2.5㎜※)厚さ×1820㎜幅×9m長さ
  ※受注生産品

ときめきの生活空間をサイエンスする
ロンシール工業株式会社
●本　社／〒130-8570 東京都墨田区緑4-15-3　☎03(5600)1821
●大阪支店／〒532-0011 大阪市淀川区西中島3-9-13 大北ビル　☎06 (304) 2700

●営業所
札幌 ☎011(271)0411　盛岡 ☎019(624)6925　仙台 ☎022(265)4771　新潟 ☎025(243)3791
大宮 ☎048(664)1511　土浦 ☎0298(32)8813　千葉 ☎043(246)5851　横浜 ☎045(662)7370
静岡 ☎054(251)3712　名古屋 ☎052(935)7063　金沢 ☎076(292)1161　岡山 ☎086(231)6011
広島 ☎082(211)2700　高松 ☎087(831)4177　福岡 ☎092(472)5857　鹿児島 ☎099(258)6571



この世に雨の、降るかぎり。



自然が私たちに雨と光を与えてくれる限り、
今日もどこかで新しい生命が芽生えます。
私たち日新工業の防水材料も、
人々が快適な暮らしを望む限り、
建築と共に今日もどこかで生まれています。
多様化する都市空間の生活環境づくりにおいて、
日新工業はつねに新しいトレンドを見据え、
時代のニーズにフレキシブルに応える
防水材料・工法を開発しつづけています。

アスファルト防水　合成高分子シート防水　塗膜防水　改質アスファルト防水　土木防水　シングル葺き

マルエス S 日新

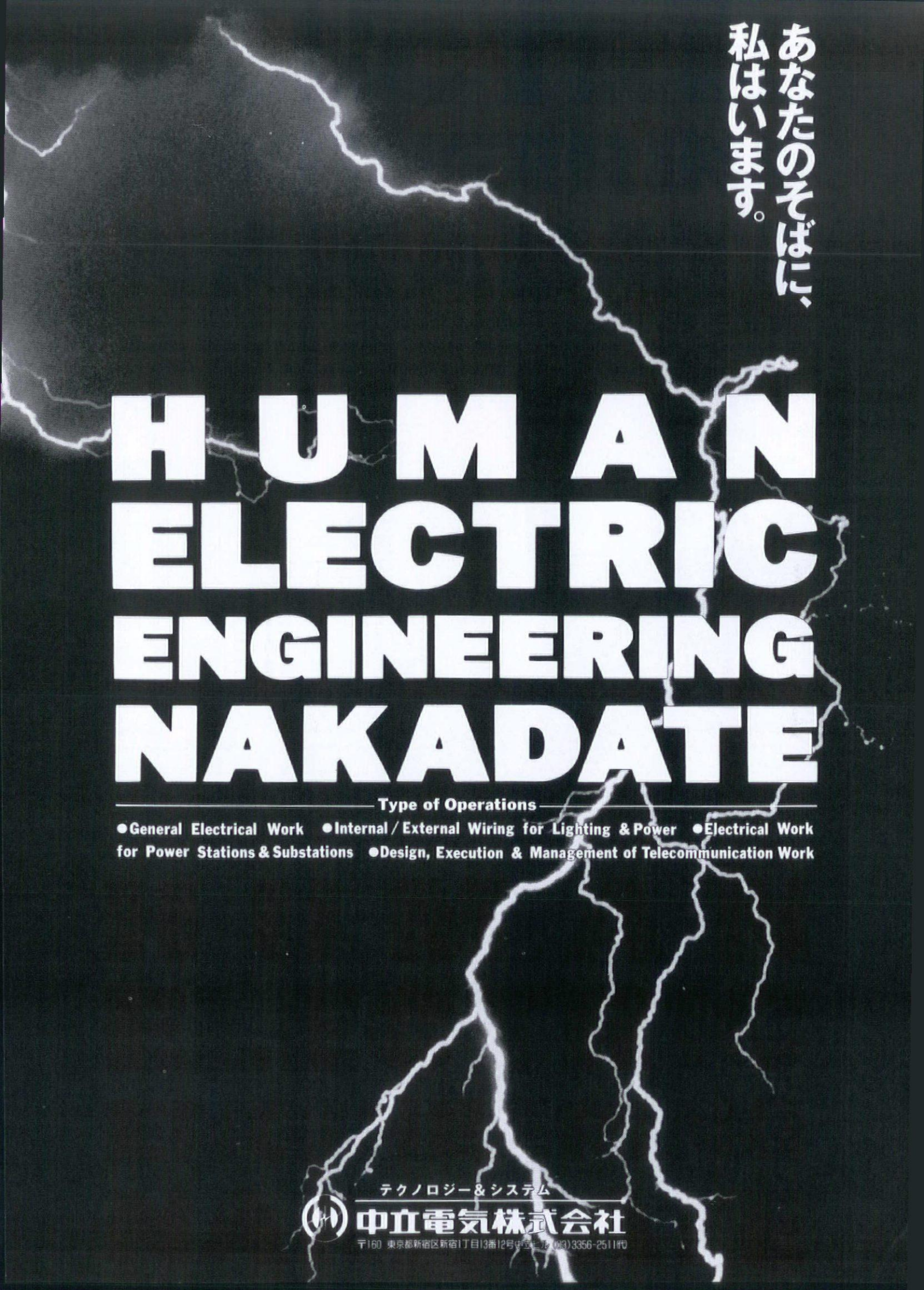
総合防水メーカー

日新工業株式会社

営業本部 〒103-0005/ 東京都中央区日本橋久松町9-2 ☎ 03 (5644) 7211 (代表)

札幌 ☎011(281)6328(代表)　名古屋 ☎052(933)4761(代表)
仙台 ☎022(263)0315(代表)　金沢 ☎0762(22)3321(代表)
大宮 ☎048(642)5811(代表)　大阪 ☎06(533)3191(代表)
東京 ☎03(5644)7221(代表)　高松 ☎0878(34)0336(代表)
千葉 ☎043(227)9971(代表)　広島 ☎082(294)6006(代表)
横浜 ☎045(316)7885(代表)　福岡 ☎092(451)1095(代表)




あなたのそばに、
私はいます。
HUMAN
ELECTRIC
ENGINEERING
NAKADATE
Type of Operations
●General Electrical Work ●Internal / External Wiring for Lighting & Power ●Electrical Work for Power Stations & Substations ●Design, Execution & Management of Telecommunication Work
テクノロジー&システム
中立電気株式会社
〒160 東京都新宿区新宿1丁目13番12号中立ビル (03)3356-2511㈹

より快適な水環境をめざして。



文明の栄えた土地には、必ずといっていいほど豊かな水がありました。
自然に恵みを与え、生命を育み、人々の暮らしをうるおしてくれる“水”。
地球規模の環境汚染が問題となっている今、
西原は、都市のより快適な水環境の創造を通して、
社会に貢献してまいります。

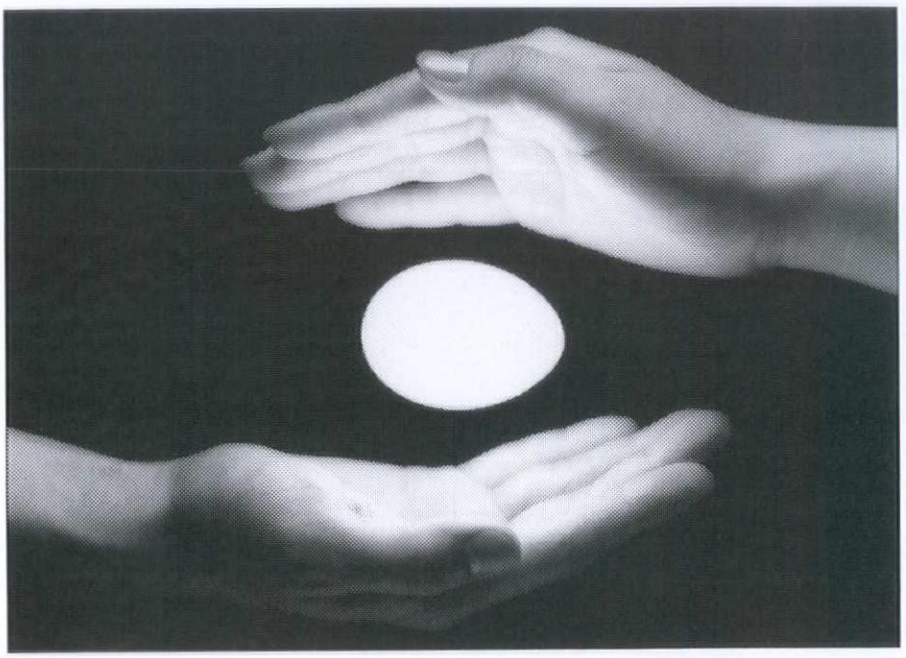
水と人のあいだに
NISHIHARA

株式会社 西原衛生工業所

東京都港区芝浦3-6-18　TEL.(03)3452-7441大代表　支店／札幌・東北・新潟・東関東・横浜・名古屋　事業内容／給排水衛生設備、冷暖房設備、消火設備の設計、施工

SANKEN
ENVIRONMENTAL ENGINEERING

設備は手にとって選べません。
だから……



大切なのは、技術の信頼性。
豊富な実績と、
そのなかで培われた
確かなノウハウです。
私たち三建設備工業は、
求められる環境を
信頼の技術で創りだします。

望まれる環境を、信頼の技術で。

三建設備工業株式會社

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛎殻町1-35-8 TEL.03-3667-3431



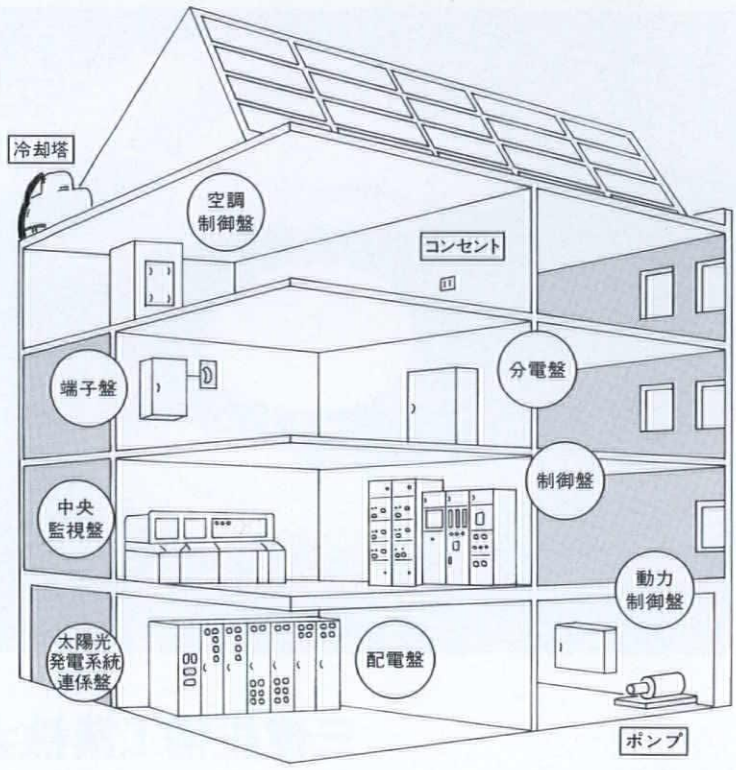
自然より自然に、
あなたを包みたい。

あなたの、いちばん心地良い場所はどこですか。
きっと、多くの方が、
大自然の中をイメージされることでしょう。
私たちは、そんな快適さをあらゆる建物の内に
創造していきたいと考えています。
人間は、あくまでも自然の一部。その事実を大切に、
新しい最適環境を創造していきたい。
もっとナチュラルに、
いつもあなたのそばに、ダイダンです。

Always With You.

—光と空気と水を生かす—
ダイダン

見えない電気を交通整理
それは盤



川崎電気株式会社

●本　　社／山形県南陽市小岩沢225
●東京本社／東京都港区芝浦３－７－４

建築設備の一役を担う

電気設備工事

最新の技術と信頼される施工

大栄電気株式会社

代表取締役社長　伊藤　　赳

本　　社　東京都中央区銀座３－７－10　TEL 03(3562)0311(大代表)

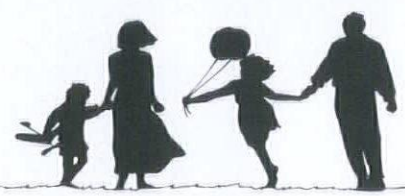
支店営業所　大阪、名古屋、北海道、東北、北関東、東関東、神奈川、浜松、神戸、四国、中国、九州、沖縄

YUME 夢 TRONICS

夢×技=∞

無限大

安らぎと喜びがある。
生み出すための第一歩は
夢からもらった。
形を築くための第一歩は
技からもらった。
ふたつの可能性が出会う時
私たちのフィールドは
無限大です。



何時もあなたの街で、
お会いしている
クリハラ。

私達の生活環境に必要な
電気設備・エネルギー
情報通信・環境の分野で
企画、設計、施工、保守に
わたる一貫したシステムで
事業を展開しています。



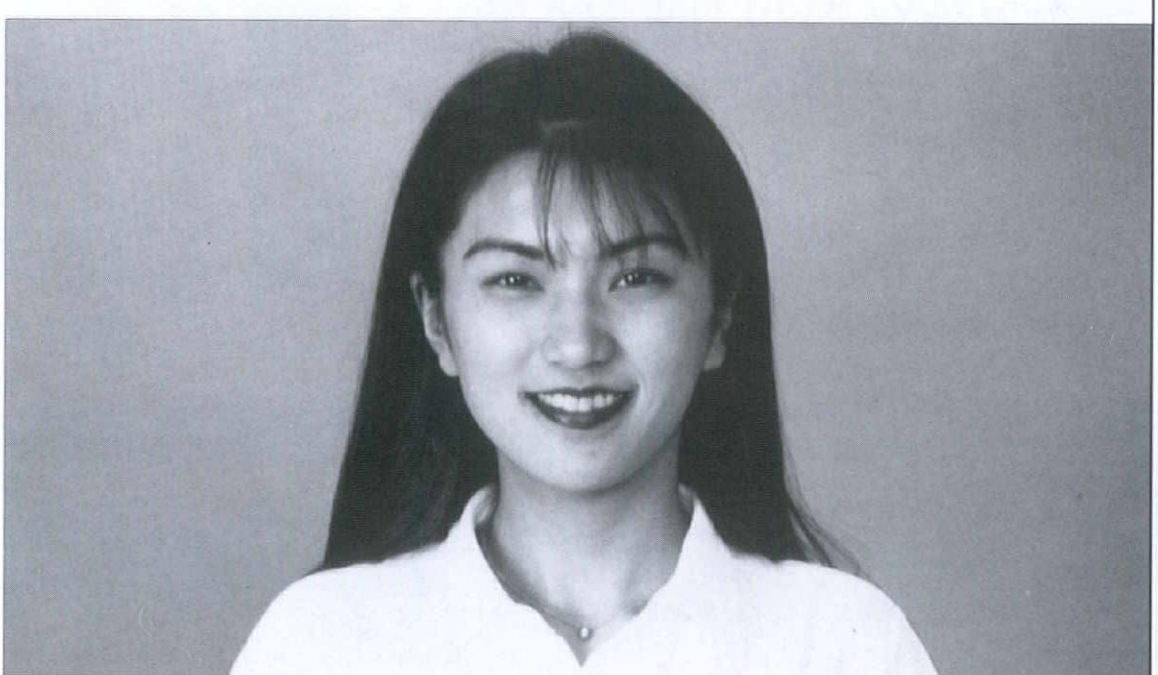
創業1919 あなたの街でお会いしています

K栗原工業株式会社

本　社／〒530－0017 大阪市北区角田町1-1（東阪急ビル）TEL.06(313)1101
東京本店／〒105－0012 東京都港区芝大門1-4-8（浜松町清和ビル）TEL.03(3432)1901

CHUDENKO

確かな歩み未来まで……



総合設備の設計施工　電気・情報通信・計装・空調・給排水・水道施設

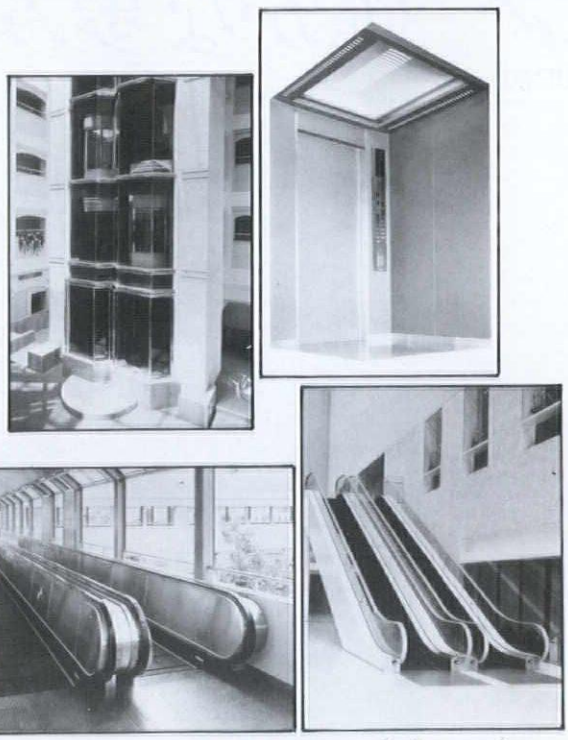
株式会社 中電工

本店／広島市中区小網町6番12号　TEL.(082)291-7411
支店／広島・岡山・山口・島根・鳥取・東京・大阪



乗る人の気持ちを考える。
そこから始まる技術、
すすめています。

21世紀を生きる、私たちの子供たち、そのまた子供たちが安心して利用できるエレベーター・エスカレーターづくりを。
そのために東芝が理想としている技術をひと言でいえば、それは、技術を感じさせない技術。乗っていることを感じさせない技術こそ、私たちの理想です。
人やモノを運ぶタテの輸送機関から、人の気持ちを考えたアメニティ空間へ。
私たち東芝は、21世紀を見すえた都市環境づくりに取りくんでいます。



東芝エレベーター・エスカレーター

株式会社 東芝　昇降機事業部

本社 〒105-8001 東京都港区芝浦1-1-1(東芝ビルディング) TEL(03)3457-4613

SD

バックナンバー

鹿島出版会
東京都港区赤坂6-5-13
電話：03-5561-2550
振替：00160-2-180883
Home Page Address:
http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm
年間定期購読料
26,000円（特別定価号＋消費税、送料込み）

SDバックナンバー常備店
［東京］
八重洲ブックセンター
03-3281-8203
三省堂本店（神田）
03-3233-3314
書泉ブックマート
03-3294-0011
紀伊国屋本店 03-3354-0131
大盛堂書店 03-3463-0511
［大阪］
旭屋書店本店
柳々堂 06-443-0167
［札幌］
旭屋書店 011-241-3007
［横浜］
有隣堂本店 045-261-1231
［京都］
大龍堂書店 075-231-3036
［大学生協内書店］
東北工業大学　東京工業大学
法政大学工学部　早稲田大学理工学部　関東学院大学

9603　ベトナム建築大博覧 2548円
ベトナムの都市と建築：ハノイ、フエ、ホイアン、チャンパ遺跡、ホーチミン。ベトナムの工業団地、ベトナム現代建築事情、他。文＝重枝豊、中沢信一郎、村松伸、他

9604　大地と光の変様　オーストラリア建築1788- 1988円
1788年入植以来のオーストラリア建築の変遷を追う。［ネクストジェネレーション in New York：スミス＝ミラー＋ホーキンソンとジョエル・サンダース］

9605　多様性と調和の建築　ゲルカン＋マルクの最新作 1988円
コンペの秀作で知られる大規模設計事務所の'90年代の新作を紹介。［海と建築――鈴木了二の最新作］物質試行：佐木島プロジェクト、佐木島の住宅

9606　建築家の椅子111脚 3059円
19世紀後半から現在に至るまでの建築家がデザインした椅子を111脚紹介。C.R.マッキントッシュ、A. ガウディ、O. ワーグナー、ル・コルビュジエ、M.van D.ローエ、C. イームズ、A. ロッシ、他

9607　再考 建築家土浦亀城 1988円
戦前、戦後の作品を紹介しながら、昭和初期モダニズムにおける土浦の再評価を試みる。作品：土浦邸（第1、2）［スタジオ建築計画の集住考］最新作 FH-HOYA-Ⅱを取りあげながら彼らの設計思想を紹介

9608　マイケル・ホプキンス 2447円
「構造上の表現がクリアな」主要作品を紹介。ホプキンス自邸、イギリス国税局新庁舎、ブラッケン・ハウス、他［光と空間の夢を訪ねて：ドナルド・ジャッドとウォルター・デ・マリア］文＝南條史生

9609　デンマーク・モダンハウスの最盛期 1988円
デンマークの50-60年代の住宅を紹介。キンゴー・ハウス、ヨーン・ウッツォン、他［山上の都市と塔の家――イエメン：都市と住居の形態学］文＋写真＝芦川研究室

9610　中世の光と空間 1988円
フランス中南部のロマネスク建築を紹介。ル・トロネ修道院、他。写真＝堀内広治、文＝羽生修二、他［ふたつの都市考〈近代都市と芸術展〉〈未来都市の考古学展〉］［97の椅子プロジェクト］

9611　栗生明 2548円
彼のみごとなディレクションに裏付けられた、コラボレーションの結晶を紹介。岡崎市美術館、植村直巳冒険館、カーニバル・ショーケース、他。［田窪恭治のサン・ヴィゴール・ド・ミュー礼拝堂プロジェクト3］

9612　SDレビュー1996 1988円
第15回SDレビュー誌上発表。ユストス・ビザール＋ペーター・ルーゲ、高橋昌巳、城戸崎和佐建築設計事務所、他［伊丹潤の近作より：石彫の教会、木の教会、土の教会］

9701　葉祥栄：カリステニクス 3059円
地方自治体主体のまちづくりプロジェクトを紹介。事例：くまもとアートポリス、クリエイティブTOWN岡山、長崎アーバン・ルネッサンス、白石メディア・ポリス、他

9702　木を生かした架構と空間 1988円
木の性質を生かした国内外の25例を紹介。金山の火葬場、モルジュのホール、他。文＝川口衛、今川憲英［アジアを熱くする新世代建築家たち：IAA国際会議より］アジアの都市・建築の現在、未来を問う。



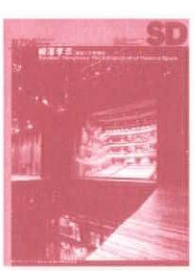
9703
ミニマル・スペース・アーキテクチュア
ミニマルでシンプルな建築表現が特徴的な、4人の建築家を紹介。ジョン・ポーソン、小川晋一、岸和郎、石田敏明。文＝丸山洋志、他［東京国際フォーラム］写真＝堀内広治
1988円



9704
拡張するデジタル・デザイン
コンピュータとネットワーク技術による、建築・都市の新しい環境を造り出すプロジェクトを紹介。文＝田島則行、山口重之、桂 英史、マイケル・ベネディクト、藤幡正樹、久保田晃弘、坂村健、奥出直人、両角光男、他
3059円



9705　アフラ＋トビア・スカルパと「ベネトン」
アフラ＋トビア・スカルパによるベネトンのオフィス社屋、ショップなどを紹介。文＋インタビュー＋写真＝豊田博之［都市ピサとカルマッシの仕事］カーサ・ムーティ、ヴェルディ劇場修復計画など
2000円



9706
柳澤孝彦：劇場の空間構成
新国立劇場、東京オペラシティビル、三鷹市芸術文化センター、他。文＝長友宗重、本杉省三　対談＝川向正人×柳澤孝彦［装飾を排したフォルムデザイン――スウェーデンのグッドデザイン展より］
2000円



9707
加速都市・香港
「速度」をテーマに激動する香港の姿を捉える。参加作家＝アラン・チャン、タイクーングラフィックス、浅川敏、江頭慎、他　監修＝村松伸、小嶋一浩、木下光　文＝松田直則
2000円



9708
R.ヴェンチューリ＋D.スコット・ブラウン：90年代の仕事
日本での処女作〈メルパルク日光霧降〉を中心に90年代の作品を紹介。シアトル美術館、他。文＝香山壽夫、安山宜之、他［岐阜県営北方住宅プロジェクト］談＝磯崎新
2400円



9709
駅空間の新曲面
コミュニティ性を重視した駅を紹介。JR矢吹駅、JR大曲駅、他。国際コンペとして衆目を集めたJR京都駅も併せて紹介する。文＝宮林敬幸、饗庭孝男、他。対談＝横尾忠則×原広司　写真＝大野繁
2000円



9710
ガラス建築
光学的、構造的特性など、ガラスの性質を幅広く採り入れた作品を紹介し、ガラス建築の現在と今後の可能性を探る。ガラス建築23作品、他。座談会＝伊東豊雄×難波和彦×今川憲英、他
3000円



9711
隈研吾
ポストモダン以降の建築における言説を続けてる隈研吾。今年建築学会賞、ヴェネディクタス賞を受賞した近作を紹介する。慰霊公園、他。文＝飯島洋一、グレッグ・リン、対談＝槇文彦×隈研吾
2800円



9712
SDレビュー1997
第16回SDレビュー誌上発表。建築研究室高安重一事務所＋佐久間達也＋橋爪宏直＋重富博之、川人洋志、藤本壮介、松澤穣、他。［光と色が彩る空間――チェコのガラスアーティストたち］写真＝鈴木豊
2000円



9801
SDレビューの15年
これまでのSDレビューを一挙に振り返る。出展作、建築界での意義などを再確認し、今後の方向性を探る。文＝槇文彦、原広司、飯島洋一、中筋修、他。座談会＝元倉眞琴＋鈴木了二＋栗生明＋小嶋一浩
2800円



9802
都市へ向かう透明性：スイス・ドイツ語圏の建築
スイス建築の背景、建築の生まれる文脈を捉えながらその魅力を探る。文＝貝島桃代、ハンス・フライ、他。往復書簡＝篠原一男×ヘルツォーク＆ド・ムロン
2200円

SD

現代の建築家、ハードカバー・シリーズ

鹿島出版会がホームページを開設いたしました。

SDをはじめ、当社で出版している書籍の検索が出来ます。是非ご覧下さい。

Address: http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm



アルヴァ・アアルト

巨匠A.アアルトの全主要作品を掲載した総特集。A.アアルトのデザイン・ヴォキャブラリー：武藤 章、アアルトの年表1899-1976、アアルト建築所在一覧。

3090円



高松 伸

88年度建築学会賞受賞作のキリンプラザ大阪を中心とし、1988年までの全主要作品を一挙掲載。精緻なる細部と大胆な素材の扱い、独特な造形により、磨ぎ澄まされた独自の作品を創り続ける高松伸の世界を紹介する。線陣Ⅰ、Ⅲ、他。

3800円



槇事務所のディテール/TEPIA

機械産業情報会館（TEPIA）というハイテクの殿堂にふさわしいデザインを支える、精密かつダイナミックなディテールの仕組みを写真とドローイングの構成で解剖する。槇文彦のディテールとしては初の作品集。

6800円



菊竹清訓

メタボリスト菊竹清訓の初期から1980年までの作品集。第三世代の建築/とりかえ論1950-1960年/方法論の時代1960年-1970年/私の中の菊竹清訓の作品：内井昭蔵、他/作品データ・主要作品分布図。年表、他。

3090円



早川邦彦

プロジェクト、商業施設、都市型複合建築、集合住宅、住宅、コンペ案まで、初期の作品から1988年までの全主要作品を一挙に紹介した早川邦彦の初作品集。SKY VILAGE、ラビリンス、成城交差点の家、アトリウム、他。

4300円



磯崎新❸ 1985-1991 part 1

キーワードを軸に自らの作品をいくつかの流れに分けて、つくばセンタービル以来、1985-1991年の作品群を紹介。水戸芸術館、サンジョルディパレス、お茶の水スクエア、他。

4800円



白井晟一

孤高の建築家・白井晟一の珠玉の作品集。懐霄館、ノアビル、聖アキラ館、昨雪軒、尻別山寮、虚白庵、他。論文＝磯崎新、針生一郎、浅野敏一郎、白井晟磨。座談＝大江宏＋藤井正一郎＋宮内嘉久。作品文献年表1935-1975年。

3605円



ドイツ表現主義の建築

1920年代のドイツを席捲した表現主義の嵐。そこにはレンガとガラスを素材とした自由奔放な造形と多様な表情をもった建築が生まれた。近代建築誕生の母体となり、現代にも影響を与える表現主義建築の全容を紹介。B.タウト、他。

3300円



磯崎新❹ 1985-1991 part 2

part 1 同様、自らの「自註」と共に作品を紹介してゆく。ティーム ディズニー ビルディング、北九州国際会議場、シュトゥットガルト現代美術館、パラディアム、［蝶々夫人］舞台美術、他。

4500円



象設計集団

独自の造形理念により常に新鮮な作品を生み出し続ける象設計集団の初めての作品集。そのユニークな建築群の生々しい姿を捉える。安住町農協町民センター、名護市庁舎、宮代町立笠原小学校、進修館、他。論文＝荒俣宏、宇佐美圭司、他。

4000円



続・木造建築の現在

海外61作品、国内13作品の木造建築を紹介。豊かで暖か味のある空間を生み、またあらゆる空間構造に対応できる木構造を再評価する。インタビュー：坪井善勝、杉山英男、内田祥哉。対談：今川憲英×安村基。

3708円



カルロ・スカルパ図面集

ブリオン家墓地を始めとする主要作品のドローイング約150点を収蔵。ブリオン・ヴェガ墓地、フェルトレの遺跡博物館、ヴェネツィア大学文学・哲学部校舎増改築、他。文：豊田博之、カルロ・スカルパ、他。

3500円



槇 文彦❷

槇文彦の80年代の活動を知る第2作品集。そこには増々精緻さと多彩さを加えた作品群が見て取れる。スパイラル、藤沢市秋葉台文化体育館、前沢ガーデンハウス、慶應義塾日吉図書館、電通大阪支社、京都国立近代美術館、他全21作品。

4326円



ブルーノ・タウト

1933-36年滞日期間の活動を中心に、没後40年を記念した特集。作品＝熱海の家、ボスポラス海峡に臨む自邸、ヴァイネルト通りの集合住宅、グレル通りの集合住宅、他。タウトの工芸品と著書、他。

2575円



安藤忠雄❸アンビルト・プロジェクト

70年代からの見逃せないアンビルト作品29点を紹介。JR京都駅改築設計競技案、岡本ハウジング、I計画、伊豆プロジェクト、水の劇場、中之島プロジェクトⅠ・Ⅱ、Iギャラリー、大淀の茶室、他。

3800円



伊東豊雄

風のように、光のように変様する建築。独自の感性で貫かれた作品群、その初期から1986年までの軌跡。中野本町の家、シルバー・ハット、レストラン・ノマド、馬込沢の家、風の塔、東京遊牧少女の家具、ホンダクリオショールーム他。

3914円



ボザール：その栄光と歴史

ボザールの全貌を紹介。アカデミーの功罪：高階秀爾、ボザール―その歴史と思想：三宅理一編、ボザールの成立とネオ・グレコの形成、折衷主義の世界、近代の憂愁、戦後のボザール、パリ・オペラ座の図面と写真、他。

2575円



都市デザイン｜横浜

横浜市の20年にわたる都市デザイン活動の足跡を辿り、これからのアーバンデザインの課題と展望を探る。座談会：都市づくりの新局面へ向けて、槇 文彦×養原敬×小澤恵一、他。

5000円

9803 Space Design

スペースデザイン 第402号
1998年3月号
都市・建築・芸術の
総合誌

SD

5 特集
表層革命再考:チェコのキュビズム-ロンドキュビズム建築
写真+文=鈴木豊

6 チェコ・キュビズム 建築概説 ズデニェク・ルケシュ 訳=平野清美
9 色あせた西欧モダニズムからの脱却 長谷川 章
32 チェコ・キュビズムの家具と工芸品 ダニエラ・カラソヴァ 訳=平野清美
49 チェコ・キュビズム 前後左右
50 建築に見るチェコ・キュビズム ヴラジミール・シュラベタ 訳=平野清美
52 プラハでの夢想 新見 隆
54 チェコ・キュビズム 建築年表
55 キュビズム建築地図

10 ヨゼフ・ホホル
10 ネクラノヴァ通りの集合住宅
12 コヴァジョヴィッチ邸
16 ヴィシェフラットの3世帯住宅
20 ヨゼフ・ゴチャール
20 ボフダネッツ・スパ

24 ブラック・マドンナ
26 チェコスロヴァキア・レジオン銀行
30 フラッドチャニーの2世帯住宅
31 アングロ・チェコスロヴァキア銀行
31 ブルノ銀行
34 パヴェル・ヤナーク

34 ファーラ邸改築
36 アドリア宮
40 ベルフジモフの家
41 パルドゥビッチェの火葬場
42 ヴラスティスラフ・ホフマン
42 ジャーブリッチェの墓地入口

43 エミール・クラーリーチェック
43 ユングマノヴォ広場のランプポスト
43 フス教会ベツレヘム礼拝堂祭壇
44 ダイアモンド館
45 オタカル・ノヴォトニー
46 教員住宅組合アパート

47 教員組合アパート

57
香山壽夫のドローイングと空間
89 描くということ 香山壽夫
90 ドローイングによる建築意匠講義 八木幸二
91 過程の輝き 鈴木 恂
91 ドローイング・光・イメージ 青木 淳

58 彩の国さいたま劇場
74 東京大学工学部建築学科土木工学科棟
75 関川村歴史資料館
76 東京大学農学21世紀館
77 聖学院大学礼拝堂
72 対談:アーティストにも観客にも理想的な劇場 諸井 誠×香山壽夫

78 長久手町文化の家
79 瀬高町立図書館
80 小品集
84 旅の記録

94 連載:森島紘史の起こし絵図——日本のかたち紙考 3. 雛祭 森島紘史
97 連載:世界の現代美術館探訪——美術館は生まれ変わる 8. 旅への誘い——ベルリンの新現代美術館 水沢 勉
105 新刊紹介
106 書評
108 メトロポリタン・ライブラリー 港 千尋
110 展覧会レポート:脳内空間の現在形?——建築家・高松伸展より 末包信吾
113 ニュース「新しい都市環境」展とシンポジウム
114 お知らせ

編集長:相川幸二
編集スタッフ:
寺田真理子　高木伸哉
大野由美　飯塚りえ
高森和志
制作協力:久世健
勅使河原馨/guild
アドバイザー:伊藤公文

発行人:平田翰那
編集人:長谷川愛子

発行所:鹿島出版会
〒107-8345東京都港区
赤坂6丁目5番13号
電話:
(03) 5561-2551 営業
(03) 5561-2555 編集
FAX:
(03) 5561-2561 営業
(03) 5561-2565 編集
TELEX:
02422467 KAJIMA J
振替00160-2-180883番
Home Page:
http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm

印刷・製本:
凸版印刷株式会社
〒174-0056 東京都板橋区
志村1丁目11番1号
電話:
(03) 3968-5111 案内

取次店:トーハン・日販・
大阪屋・太洋社・
栗田出版販売・誠光堂・
鈴木書店・西村書店・中央社

定価:2,000円
[本体1,905円]

年間直接購読料:26,000円
特別定価号+送料込み

表紙:
アドリア宮/パヴェル・ヤナーク
表紙写真:鈴木豊
表紙デザイン:小泉均

9803 Space Design

Monthly Journal of Art and Architecture
No.402
March 1998

SD

5 **Special Feature:**
Czech Cubist/ Rondocubist Architecture: A Reappreciation of the Revolution
Photo and Text: **Yutaka Suzuki**

6 An Introduction to Czech Cubist Architecture
Zdeněk Lukeš
Translated by Kiyomi Hirano

9 Breakaway from a Fading Western European Modernism
Akira Hasegawa

32 Czech Cubist Furniture and Craftwork
Daniela Karasová
Translated by Kiyomi Hirano

49 Works Before, After and Contemporary with Czech Cubism

50 Czech Cubism in Architecture
Vladimir Šlapeta

52 Prague Dreams
Ryu Niimi

54 Chronology of Czech Cubist and Rondocubist Architecture

55 Cubist Architecture Map

10 Josef Chochol

10 Apartment Building on Neklanova Street

12 Kovařovič's Villa

16 Triplex in Vyšehrad

20 Josef Gočár

20 Bohdaneč Spa

24 House At the Black Mother of God

26 Bank of Czechoslovak Legion

30 Duplex in Hradčany

31 Anglo-Czechoslovak Bank

31 Bank of Brno

34 Pavel Janák

34 Reconstruction of Dr. Fára's House

36 Adria Palace

40 House in Pelhřimov

41 Crematorium in Pardubice

42 Vlastislav Hofman

42 Cemetery Entrance with Gate and Kiosks in Ďáblice

43 Emil Králíček

43 Lamppost in Jungmannovo Square

43 Altar of Bethlehem Chapel of Hussite Church

44 Diamant Commercial and Apartment Building

45 Otakar Novotný

46 Teachers' Housing Co-operative Building

47 Teacher's Co-operative Apartment Building

57
Hisao Kohyama: Drawings and Space

89 Drawing
Hisao Kohyama

90 Lecture on Architectural Design through Drawings
Koji Yagi

91 The Splendor of Process
Makoto Suzuki

91 Drawing, Light, and Image
Jun Aoki

58 Saitama Arts Theater

74 School of Architecture and Civil Engineering, University of Tokyo

75 Sekikawa Museum

76 Faculty of Agriculture Auditorium, University of Tokyo

77 Seigakuin University Chapel

72 Dialogue:
The ideal Theater for Artists and Audience
Makoto Moroi and Hisao Kohyama

78 House of Culture, Nagakute

79 Public Library, Setaka

80 Collected Sketches

84 Travelogue

94 The Okoshi-e of Hiroshi Morishima: Forms of Japanese Tradition in Paper
3. The Doll Festival — Hiroshi Morishima

97 "Museums of the World" Series: The Museum Transforms
8. Invitation to Travel: The New Contemporary Arts Museum in Berlin — Tsutomu Mizusawa

105 Book Information

106 Book Review

108 Metropolitan Library — Chihiro Minato

110 Exhibition Report:
The Present in Cerebral Space? — Shingo Suekane

113 News:
"New Urban Environment" Exhibition and Symposium

114 Announcements

Chief Editor: Koji Aikawa
Associate Editors:
Mariko Terada
Shinya Takagi
Yumi Ohno
Rie Iizuka
Kazushi Takamori
Production Cooperation:
Takeshi Kuze
Kaoru Teshigahara/guild
Adviser: Kobun Ito

Publisher: Kanna Hirata
Executive Director:
Aiko Hasegawa

Published by
Kajima Institute Publishi
Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka,
Minato-ku, Tokyo 107-8
Japan
TEL:
03.5561.2551 [Manager
03.5561.2555 [Editing]
FAX:
03.5561.2561 [Manager
03.5561.2565 [Editing]
TELEX:
02422467 KAJIMA J
Home Page:
http://www.kajima.co.jp
group/publish/
index.htm

Printed in Japan

This Copy: ¥2,000
¥30,000 a year
¥50,000 two years

Order Form: Page124

Cover :
Adria Palace/Pavel Janá
Cover Photo: Yutaka Su
Cover Design:
Hitoshi Koizumi/NID

特集

表層革命再考: チェコのキュビズム- ロンドキュビズム建築

Spesial Feature

Czech Cubist/Rondocubist Architecture: A Reappreciation of the Revolution



チェコ・キュビズム建築――それはピカソやブラックのキュビズムに触発されて、チェコの若手建築家が巻き起こしたモダニズムに対する革命運動。1910年から1925年のわずか15年の間に、「キュビズム」と「ロンドキュビズム」の2回のピークをむかえ、閃光のように輝いて消えた。

バロック建築がルネッサンス建築のファサードを漆喰で覆うことから生まれたように、キュビズム建築は、近代建築のファサードをプラスティックな形態=キュビズム的表層で覆う。そして、ロンドキュビズム建築は、チェコ独立後湧き上がる民族意識に呼応して、キュビズム的な表層がスラブ民族神話のモティーフに形を変えて生まれた。

表層を換えることで本質を変える――彼らが目指したものが彼らを歴史から去らせる理由となった。しかし、残るは「破壊」だけとなった現在、「建築は表層がすべて」と言い切る彼らは再び歴史に登場したのだ。

写真・作品解説=鈴木 豊　Photographs and texts: Yutaka Suzuki

チェコ・キュビズム建築概説

ズデニェク・ルケシュ／訳＝平野清美

キュビズムは、周知のとおり今世紀初めにフランスで画家のパブロ・ピカソとジョルジュ・ブラックが基礎を築いた芸術様式である。その後、チェコではキュビズムを建築に適用する運動が起きた。長年に渡り研究されてきた課題なのだが、なぜチェコでキュビズム建築が生まれたのか。その理由を幾つか挙げてみよう。

第一は、当時のチェコの建築界のリーダー、ヤン・コチェラの影響を払拭しようとした数名の建築家達の試みがあったことである。ヤン・コチェラは造形芸術協会「マーネス」の中心人物であり、師であるウイーン芸術アカデミーのオットー・ワーグナーの建築思想の忠実な伝承者であった。当時、プラハ工芸美術大学内、さらにはワーグナー学校の卒業生達の間にも、コチェラの合理主義が肌に合わず、懐疑的な眼差しを向ける一派がいた。この次世代の建築家達が抱いた建築理念は、個人主義を前面に打ち出したもので、そのためであれば幾分奇妙なものでも多少目的が不明瞭でもかまわなかった。

彼らが着目したのは新しい芸術傾向であるキュビズムであった。マーネス造形芸術協会の画家や彫刻家が讃美したように、建築家の彼らもキュビズムが持つそのダイナミズム、立体感に魅了された。また、彼らは当然のことながら、中世的な趣を持つプラハの街並みのユニークさも考慮していた。プラハには様々な時代の多彩な建築スタイルのファサードが共存する上、チェコ、ドイツ、ユダヤ文化といった複数の文化が競合する都市であった。こうした状況で、彼らは新しいグループ、「造形芸術家クラブ」を結成し、オーストリアやドイツの哲学者の作品や、後期ビラチスラフ・ゴシック様式、サンチーニ・アイヘルのバロック・ゴシック様式を研究し始めたのである。

チェコ・キュビズム建築の代表的な理論家、パヴェル・ヤナーク（1882–1956年）、彼はワーグナーに師事し、コチェラの同僚でもあるのだが、結晶体と曲折した面のモチーフに関心を抱いた。1911年から1912年の彼のスケッチには互いに浸透し合うプリズムのスケッチが多数見られる。鉱物のスケッチをきっかけに、ヤナークは徐々にキュビズム的な曲折したファサードとインテリアの研究に移行していった。キュビズム建築が生まれた主な役割は、ヤナークに負うところが大きいと見られている。とりわけ、1911年に造形芸術家クラブが発行する『芸術月刊』に掲載された有名な論文「多角柱と角錐体」は大きな反響を呼び、キュビズム建築の誕生に大きく貢献した。「無生物の自然界におけるすべての形態は、第三の力とのコラボレーションによって、より複雑な幾何学的なかたちをとる。雨が降る時の雨脚の斜線は、風の作用で起きる。同じように雪の吹きだまり、浸食、峡谷、洞穴、欧穴、火山といったものもすべては多かれ少なかれ、外部からの侵略力を受けた無生物の物質で形成されている。侵略力は物質をデフォルメし、物質が置かれている自然の形態から異なったものにするのである。侵略力が働いたもっとも美しい実例は結晶化である」

かつてはこの論文が発表された1911年がチェコのキュビズム建築の元年とみられていた。しかし、今日ではもう少し状況は複雑だと考えられている。最近になり、やはりチェコ・キュビズムを代表する造形芸術家クラブのメンバーで、建築家、グラフィックデザイナー、舞台美術家でもあるヴラスティスラフ・ホフマン（1884–1964年）のスケッチが発見されたのである。これは、プラハにあるブラウン家の建築案の代案で、キュビズム的スピリットを持った、1909年あるいは1910年のものと見られ、ヤナークのキュビズムに先行した試みだったことがわかる。さらに、プレチュニクの〈ストルビェルクの工場〉、これは間違いなくプラハの建築家達に影響を与えたはずである。また、ウイーンの〈聖霊教会〉の面取りした柱頭の細部のスケッチ、いずれも1910年のものである。あるいは同じくワーグナーの教え子の建築家フランチシェク・ロイトの遺品から、1906年のものと見られる結晶体の接合のスケッチが発見された。結晶体のモチーフは、オルブリヒの教え子であるエミール・クラーリーチェックの1908年前後の作品にも見い出すことができる。

いずれにせよ、初めて実現したキュビズム建築は、ヤナークの手によるイチーンの〈ヤクベッツ邸〉（設計1911年、建設1911–12年）

p5: ネクラノヴァ通りの集合住宅／ヨゼフ・ホホル
キュビズム建築の最高傑作。キュビズムの論理がホホルの建築言語によって明快に表現されている

p8: チェコスロヴァキア・レジオン銀行1階エレベーター扉／ヨゼフ・ゴチャール
民族的な図柄が繰り返されるロンドキュビズム

だと考えて良いだろう。ヤナークはそのあと、南チェコのペルフジモフで、バロック様式のファサードをもつ〈ファーラ邸〉の改築設計をした。同地では他にも個人邸の設計を手がけた。実現はしなかったものの、あまたのファサードを設計した。そして、アルチェル工房*1のためにもキュビズム様式の家具、陶器、そのほかいろいろな工芸品のデザインをした。

チェコ・キュビズム建築における最も有名な建築家は、コチェラの教え子であるヨゼフ・ゴチャール（1880–1945年）である。1912年ゴチャールは、最初モダニズムで設計を始めた自分のふたつの作品をキュビズム化した。ひとつはプラハ中心に位置する〈ブラック・マドンナ〉（今日ではキュビズム建築の傑作のひとつに数えられており、最近の改装後、ここにチェコ・キュビズム美物館が移された）そして、もうひとつはプラハ城近く、ティホノバ通りの〈フラッドチャニーの2世帯住宅〉である。1913年までに、ボフダネッツ保養地の新しいパビリオンと、プラハ近郊のコリーン近くのリボドジツェに住宅を設計した。実現に至らなかった設計案の中では、1912年の学校のスケッチが目を引く。ゴチャールは、その後、他の建築家と同様、キュビズムから離れたが、第一次大戦後に彼が用いた民族的なアール・デコ様式*2の作品にもキュビズムの影響を明らかに見てとることができる。（プラハのチェコスロバキア・レジオン銀行、1922–1924年）

先に言及したプラハ工科大学の卒業生であるヴラスティスラフ・ホフマンは、プラハ郊外の〈ジャーブリッチェの墓地〉周囲の塀とその入口のパビリオンを設計した。実現せずに終ったスケッチの中では、プラハのエマウズ修道院の眼下に広がる空間の使用計画、ヴィシェフラッドの計画が出色である。彼もまたヤナークやゴチャールと同様、アルチェル工房の仕事にも携わった。

プラハ・キュビズム建築の四大建築家の最後の枠を占めるのは、ワーグナーの教え子、ヨゼフ・ホホル（1880–1956年）である。ホホルはプラハのヴィシェフラッドの岩壁下に点在するキュビズム建築の数作品〈ヴィシェフラットの3世帯住宅〉〈ネクラノヴァ通りの集合住宅〉などの設計者として名高い。ホホルの建築は非常に急進的であったが、その特徴はファサードやディテールに限られ、インテリアは一般的なものであった。

キュビズムの建築家はさらに数人の名前が挙げられる。エミール・クラーリーチェック（1877–1930年）は〈ユングマノヴォ広場のランプポスト〉、カルメリツカー通り、スパーレナー通りの〈ダイヤモンド館〉、また、〈ヴィシェフラッドの3世帯住宅〉インテリア、そしてジジュコフ地区プロコプ通りの〈フス教会ベツレヘム礼拝堂祭壇〉（すべて1912–1914年）を手がけている。ただし、クラーリーチェックの作品は、キュビズムと幾何学的な後期ゼセッション様式との境界線上に位置するものである。ヴラジミール・フルトネル、ペドジフ・フェウエルシュタイン、ペトル・クロパーチェク達は数件のファサードのスケッチを発表したが、その中で実現したのはフルトネルによるヤロムニェシュのゼセッション様式とキュービズムが混在した住宅（O. リスカ共作、1913年）のみにとどまった。ラディスラフ・マホニュはプラハのルツェルナ映画館の内装、さらに数件の建築案を提案、実現もしたが、後にすべて壊されてしまった。オルドジフ・ティルはミレフスコにあるシナゴーグのピラミッド型の曲折した正面ファサードの設計者である。キュビズム的な要素は以下のプラハの建築家達の家にも見ることができる。A. ベラダ、J. マジーク、J. コヴァジョヴィッチ、B. ホモラーチェなど。

1913年には、上述の建築家達の大半が、プラハの中心にあるビートコフ山のヤン・ジシュカ像の大規模なコンペでキュビズムのアイディアで腕を競った。優勝したのは極めてダイナミックな計画で挑戦した彫刻家ヤン・シュトウサとコチェラであった。コチェラも最終的には新しい傾向を徹底して無視することはできなかったのである。

キュビズム建築は、チェコの現象といえるのだが、わずか数名の建築家によってもたらされたものである。大半のチェコの建築家達はキュビズムに全く無関心を装うか、批判的な態度を示した。また、ケルンで開催されたチェコ作品同盟（ヴェルクブンド）の展示会でドイツの表現主義者達に若干の影響を与えることはあったにせよ、結局、キュビズム建築を国外に輸出する試みも失敗に終った。

第一次世界大戦後も、引き続き一部設計者はキュビズム建築に携わったが（オタカル・ノヴォトニー：プラハの旧市街の〈教員組合アパート〉、ルドルフ・ストカル：〈オロモウツの邸宅〉、〈プラハ、ホレショビツェ地区の工場正面〉、ヴラスティスラフ・ホフマン：〈オストラヴァの火葬場〉）、キュビズム建築のかつてのリーダー達、ヤナークとゴチャールは新たな「民族的」様式を求め、徐々に装飾主義に移行していった。若手の建築家達（B. フェウエルシュタイン、J. クロハ、E. リンハルト、J. フラグネル）は、キュビズムの影響を受けてはいたが、1920年以降は急速にル・コルビュジエ的な純粋主義や構造主義に傾倒していった。キュビズムは記憶のかなたに葬られ、長い間、単に「チェコの近代建築の袋小路」あるいは「奇妙な傾向」と評されていた。その地位を完全に回復したのはこの20年間のことである。

●Zdeněk Lukeš／大統領府（プラハ城）建築家

*1: 1908年プラハの若い建築家によって結成された協同組合。自分達がデザインした陶器、金属小品などの製作をした

*2:「ロンドキュビズム」とも呼ばれている



色褪せた西欧モダニズムからの脱却

キュビズムの再評価の契機

長谷川 章

チェコ・キュビズムを代表とする建築家の一人であるパヴェル・ヤナークは1911年にこう断言した：「建築とは形態の問題であり、目的の問題でも材料の問題でもない」。こうした彼の形態への絶対評価は、ポストモダニズム終焉以降、形態に対して憶病になっている我々にとっては心の深いところで琴線に触れるような響きを備える一方、まさに時代錯誤の蒼古たる響きとしても感じられる。

しかしこの文言だけを取り出してキュビズム全体をあげつらうのはアンフェアであろう。彼等は単に形態の正当性を主張したのではない。一連の特異な造形美を追求してやまなかった彼等の建築理念は、その前年にヤナークが『Styl』誌で語った中に読み取れる。当時チェコに影響を及ぼしていたオットー・ワーグナーが近代建築の特性として掲げた「目的・構成・素材」を援用してヤナークは「建築上の真の美は物質の構成によってのみ可能となる構成された美であり、物質の劇的な均衡装置に基づいている」とした。さらにその言葉をそのままワーグナーの作品に照らして彼の建築のファサードを覆うレリーフや詩的ディテールによる「建築の詩情化」を指摘し、「そこには真の美が存在しない」とした批判は正鵠を得たものであろう。即ちその生硬な論理展開では「物質の内部の能力から生まれてくる形」を見出すことのみを評価し、ここに素材感や情緒を払拭し精錬された純粋芸術としてのキュビズム建築が位置付けらていたのである。

当時チェコはオーストリア・ハンガリー帝国の一部としてドイツ文化圏に属していた。そして理論好きなチェコ人がキュビズム理論を構築する揺籃期である1910年頃にはウィーン工房やドイツ表現主義からの影響が否定できない。まだ未成熟の造形理念が表現主義に依存していたのは判らぬ話ではない。当時表現主義を支えた思想基盤とはヴィルヘルム・ヴォリンガーの『抽象と感情移入』(1908年)である。ヴォリンガーは表現に富んだ抽象または無機的なものによる精神表現が持つ不気味な情念や崇高な情動を「感情移入」という概念を用いて検証したのである。このゴシック様式の解釈から生まれたゲシュタルト理論はドイツでは表現主義の精神面を支えたものの、それに後続する造形理念や建築論はほとんど展開された形跡が見あたらない。第一次大戦敗戦後に鎌首をもたげたナショナリズムや政治革命の好餌となり、いつの間にかナチズムに吸収されてしまったといえば酷であろうか。理論を背景としない、あるいは具体的なスクールを持たなかった表現主義建築は単なる情動の発露として、あるいはナショナリズムの捌け口として、はたまた諧謔的な形態操作の対象としての無残な結末を見たのである。

しかし初期のチェコ・キュビズムがヴォリンガーの理論を受け入れて表現主義を軸に展開したのはそれなりの理由がある。それは彼等のモダニズムとしてのキュビズムが連綿とした歴史的造形の積み重ねの上に展開されたという事実なのだ。ボヘミア地方のゴシックが持つ「マッスの限界の超越」とバロックの持つ「劇的かつ高尚な彫刻的造形美」という歴史的精神が遺亡されることなく近代へと継承されたものとしてキュビズムは位置付けられる。即ち「分節されたエレメントによる構成」ではなく「余すところ無く充填された可塑性」そして「表情豊かな彫塑的形態」への偏愛が近代へと継承されたのだ。歴史を否定したところにではなく、歴史を首肯した延長線上に生み出されたのがキュビズムというアヴァンギャルドであったのだ。キュビズムは表現主義の兄弟のような存在でありながら、情緒的なものを排除しつつ歴史的造形美を近代へと理論展開していったという意味で独自の造形世界を構築した。よってよく引き合いに出される当時のフランスのピカソやブラックそしてグリスといった絵画のキュビズムとの共通性を見出すことは困難だ。チェコ・キュビズムは単なる時代様式ではない。

そもそもこうした言い回し自体が現在の近代建築史観の限界を物語っている。

チェコ・キュビズムを評価する視線や指標が無意識のうちに全て西欧で構築された近代史観に依拠してしまっていることに気付く。極論すればこれまで通念としてある近代建築の流れとは旧フランク王国にイギリスを加えた地域での狭隘な歴史観でしかない。我々はまずこの限定されたヨーロッパ一地方でのローカルな歴史観に訣別しなくてはなるまい。それは無数にある歴史観の一つでしかないことを再認識し、客体化していかなくてはならない。さもなければチェコ・キュビズムは未来永劫西欧の近代建築運動の単なる傍流として見下されたままになってしまうだろう。自由で豊饒な中欧の近代建築運動のアイデンティティは、この辺境に生まれた傲岸な西欧史観によって踏みにじられてしまうのだ。

北はバルト三国からポーランド、チェコ、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリアそしてトルコに至るこの中欧の近代建築における独特な展開は、どの一国、一地域、一都市をとらえてみても、それ自体が西欧の歴史に比肩する程の密度と独自の世界観を有していた。このチェコで追求され構築された構成造形美は後のロシア構成主義やオランダのデ・ステイルを準備したのであり、そのデ・ステイルは、情緒に溢れた表現主義に染まっていた初期バウハウスに大変革をもたらすこととなったのである。チェコ・キュビズムは建築から工芸、グラフィックに至る総合芸術としての先駆であり、その前衛性が西欧へと敷衍されていったと見るべきであろう。

ヨーロッパの東西を問わないダイナミックな近代史の中の一潮流としてキュビズムは新たな視座から同じ地平で語られ評価されてしかるべきではないのか。その世界観の中では西欧のモダニズムなど何とも色褪せて見えてくるのは私だけであろうか。

●はせがわ・あきら／東京造形大学助教授

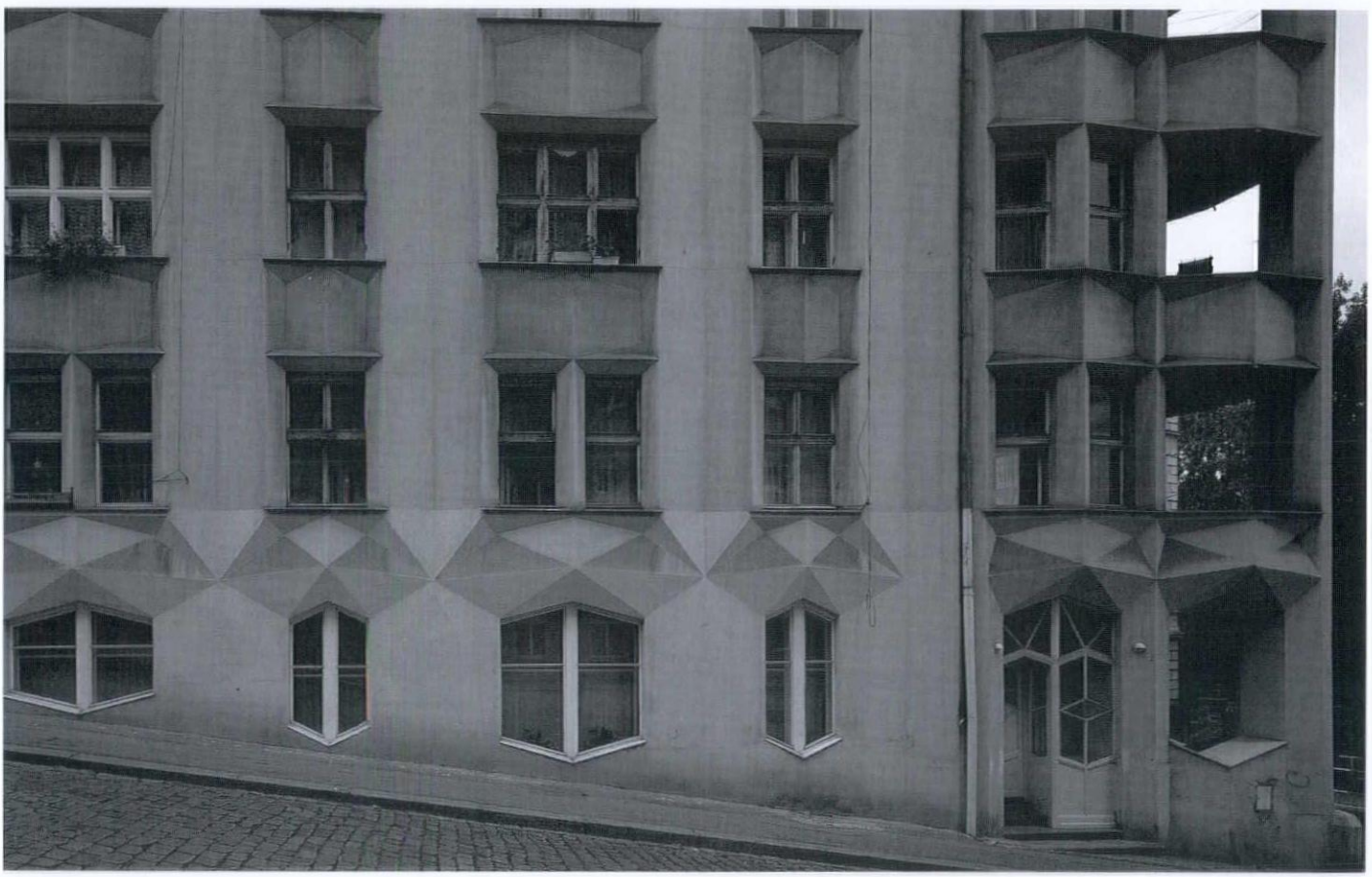
ヨゼフ・ホホル
Josef Chochol

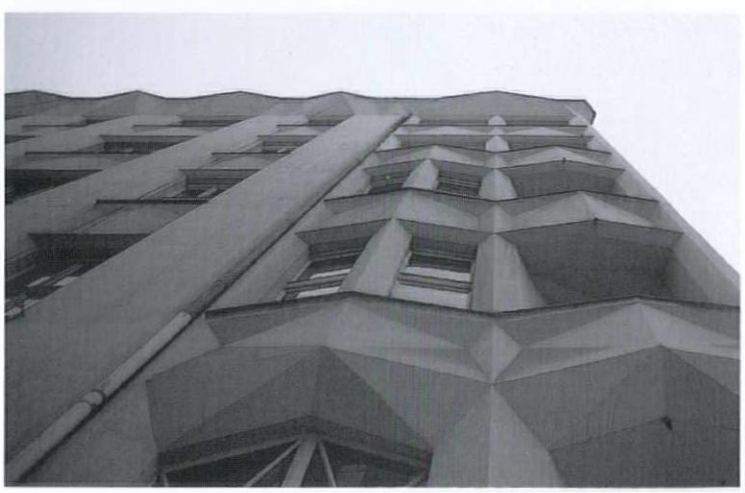
ゴチャール、ヤナークと並び、チェコ・キュビスムの代表的な建築家のひとり。プラハのヴィシェフラッド地区に現存する3つの作品は、いずれもキュビズム建築の最高傑作に数えられている。建築作品のディテールや市民会館内の英国サークルのための椅子などに洗練された彼のデザインセンスが伺われる。1920年以降は、ロンドキュビズムには組みせず、ソ連の影響の強い構成主義の道を歩んだ。

1880年　ビーセク生まれ。
プラハ工科大学卒業後、オットー・ワーグナー（ウィーン美術アカデミー）に師事
1911年　マーネス造形芸術協会脱会、造形芸術家クラブ入会
1912年　造形芸術家クラブ脱会、マーネス造形芸術協会再入会
1913年　（ネクラノヴァ通りの集合住宅）竣工
1933年　社会主義建築家協会入会
1956年　プラハにて死去

ネクラノヴァ通りの集合住宅　1913–14年
Apartment Building on Neklanova Street

所在地：Neklanova 30/98, Praha 2 Vyšehrad
主要用途：集合住宅／店舗

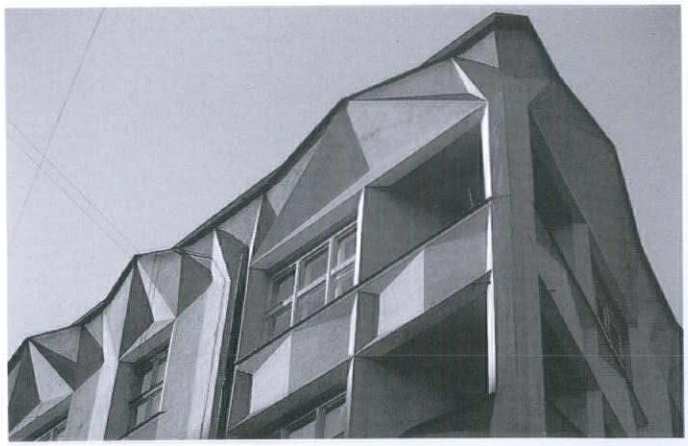


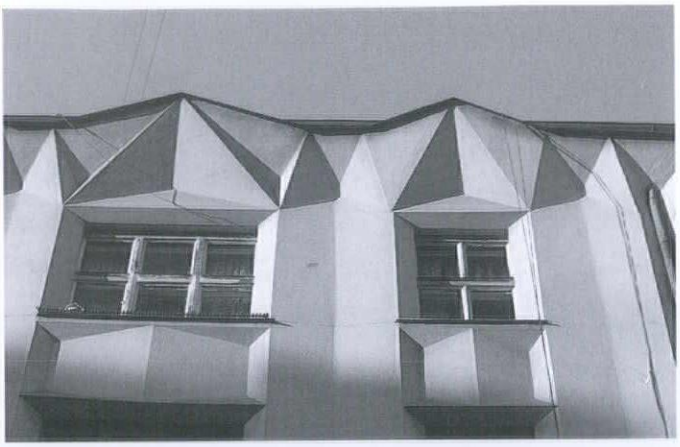


ヴィシェフラッドは、プラハの中心から少し離れた小高い丘に立つ古い城塞のことで、それがこの地域一帯の名前になった。当時は庶民的な雰囲気の地区で、ホホルは好んでヴィシェフラッドに作品を建てた。彼のキュビズム建築の3作品はすべてヴィシェフラッドにある。

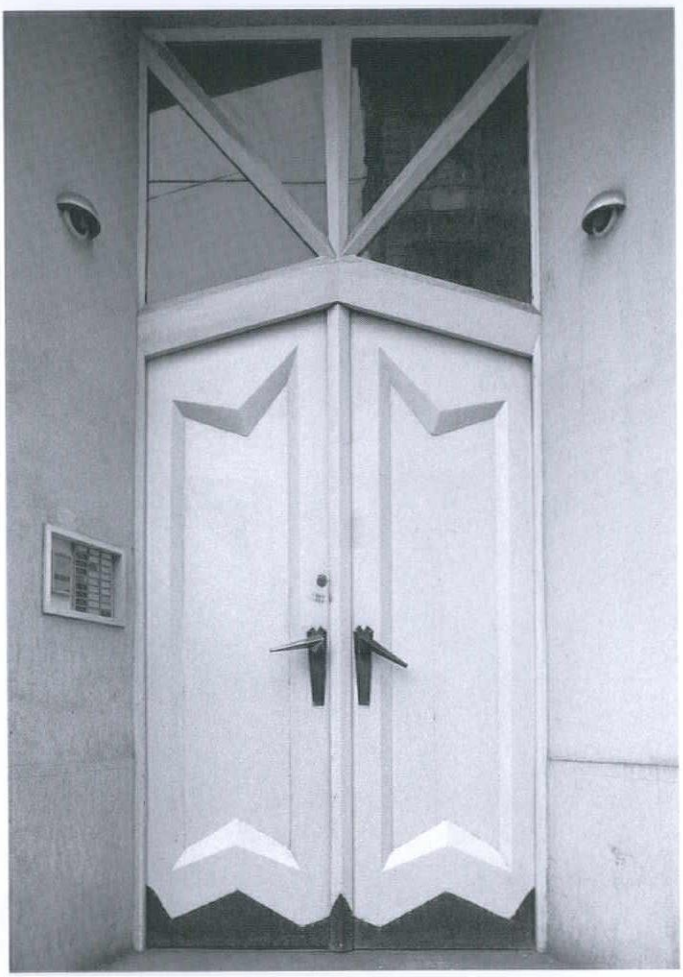
この集合住宅はチェコ・キュビズム建築の到達点に位置する作品のひとつである。

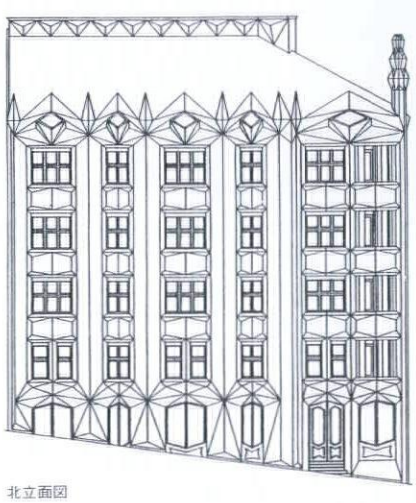
ホホルは、絶妙なバランス感覚で、ファサードのすべてにキュビストのモティーフ＝多角形を採用し、光の微妙な変化に対応して表情が刻一刻ドラマチックに変わる、彫像的な美しさを持った建築作品を実現させた。



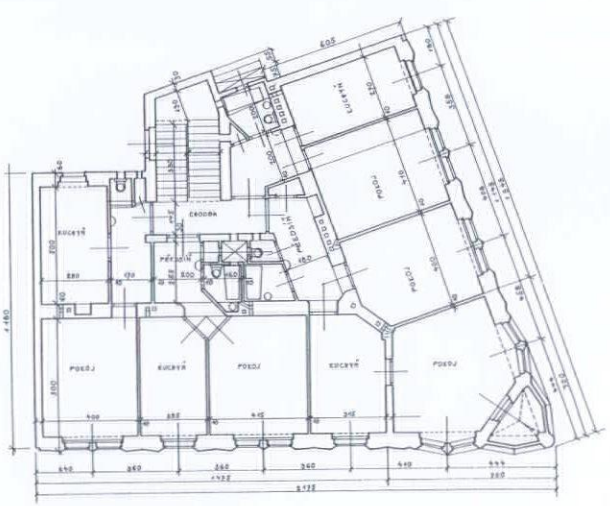








北立面図

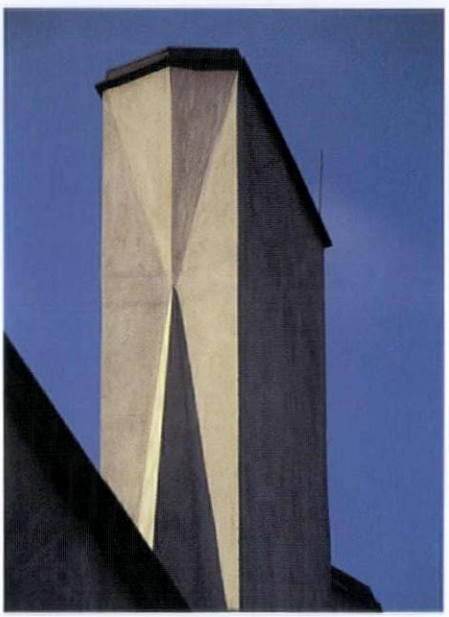


基準階平面図

コヴァジョヴィッチ邸　1912–13年
Kovařovič's Villa

所在地：Libušina 3/49, Praha 2 Vyšehrad
主要用途：住宅
現在、Lowe GGK Praha, spol. s.r.o.事務所







〈コヴァジョヴィッチ邸〉は、ホホルにとって2番目のキュビズム作品だが、完成度が非常に高い。

敷地は交差点の角地にある。背後にまた別の道路が走っている。

ホホルはそこにきわめて論理的な配置を考えた。たとえば、門とエントランスとを正対させていないため、来訪者は常に右斜めからの外観を見ながら入っていくことになる。キュビズム建築のファサードをどの角度で見るのが一番美しいのかわかっているような配置である。

作家のカレル・チャペックが〈コヴァジョヴィッチ邸〉の表層を評して「簡素な雄大さ」と呼んだが、たしかに通常キュビズムに見られる破壊のイメージはここにはない。逆に、静かなな落ち着きさえ感じさせる。

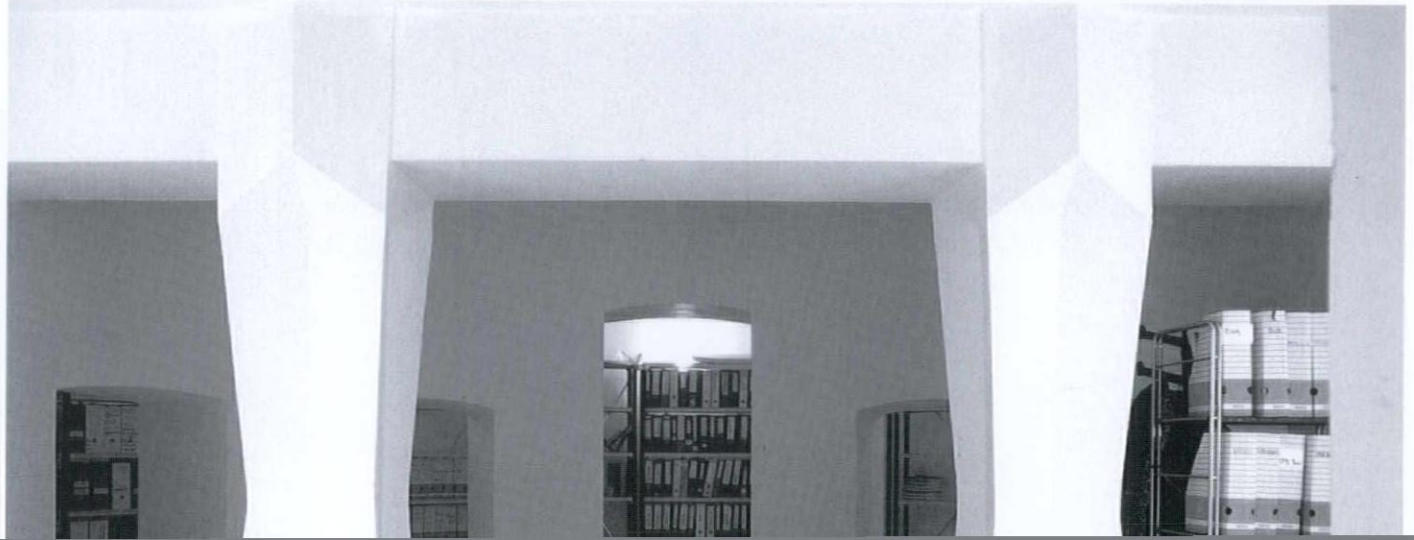
インテリアも同様である。第二次世界大戦中に少し改装を受けたというが、オリジナルの「簡素な雄大さ」というイメージは内部でも失われていない。

コヴァジョヴィッチ邸の美しさは、キュビズムの手法というより、ホホルの個人的な資質に負うところが大きい。

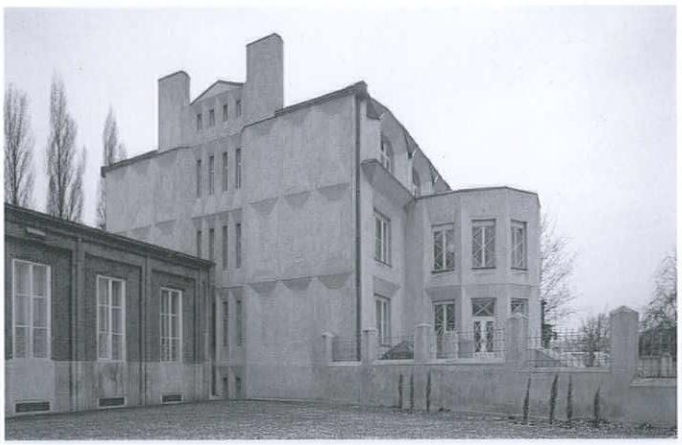
コヴァジョヴィッチ邸の左右の建物は、それぞれオタカル・ノヴォトニーとエミール・クラーリーチェックによって同時代に建てられたものだが、ホホルの優秀さを証明するために建てられたようにさえ見えてしまう。

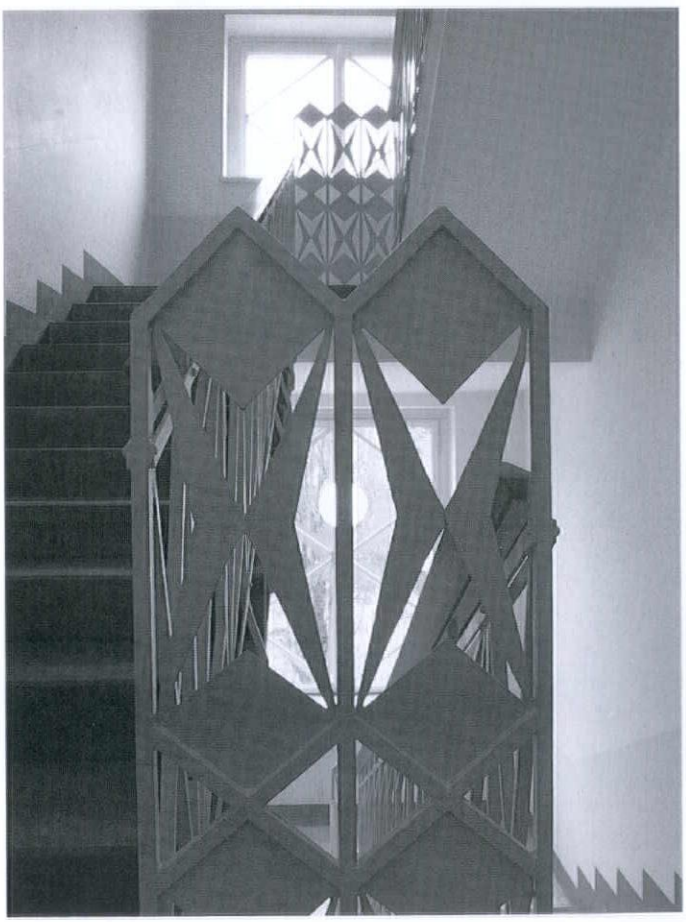


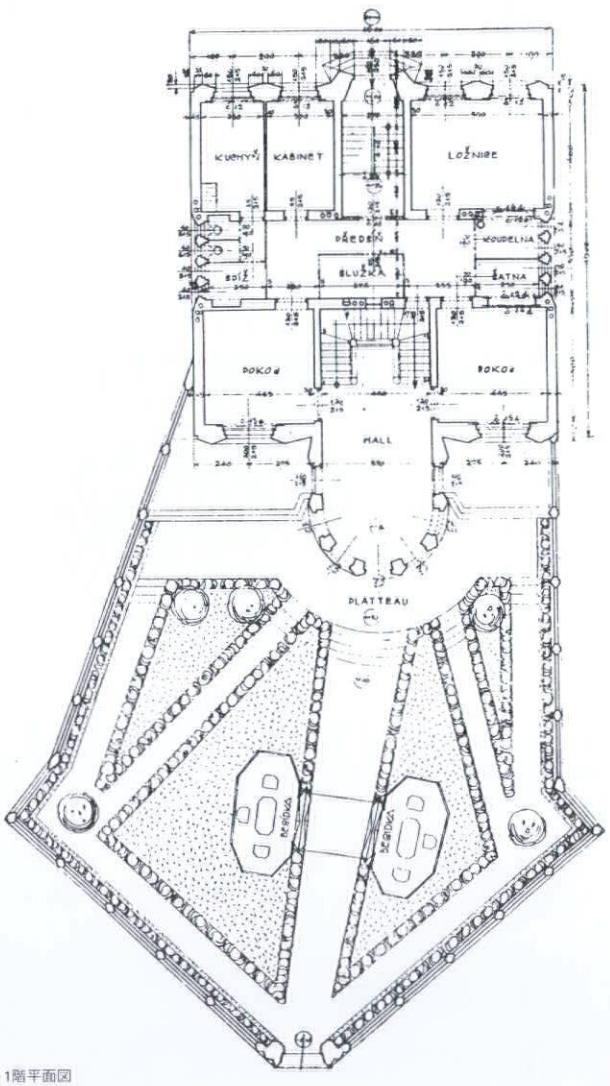








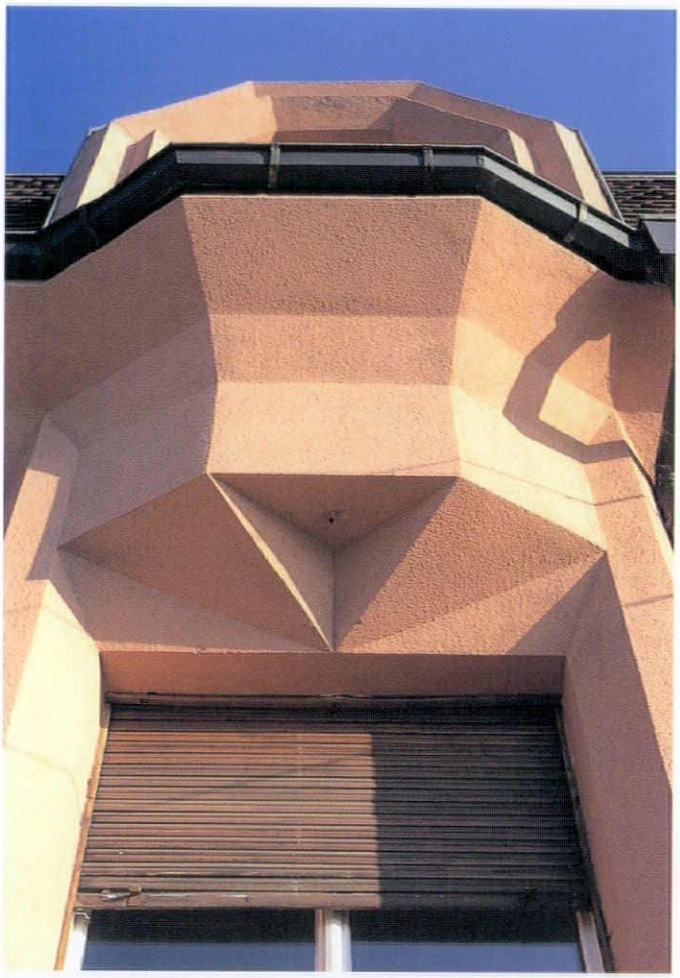



KUCHYŇ
KABINET
LOŽNICE
PŘEDSÍŇ
KOUPELNA
SPÍŽ
BLUŽNA
ŠATNA
POKOJ
POKOJ
HALL
PLATTEAU

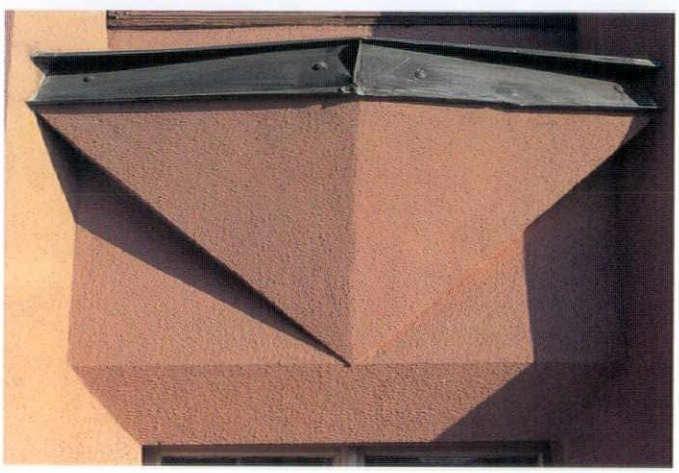
1階平面図

ヴィシェフラットの3世帯住宅　1912–13年
Triplex in Vyšehrad

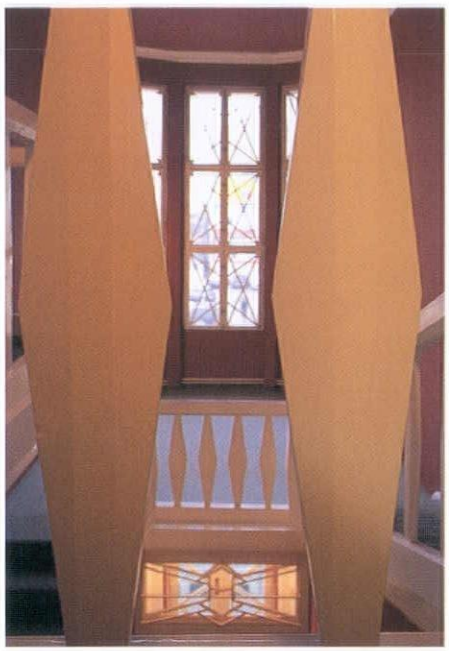
所在地：Rašinovo nábřeží 6-10/42, 47, 71, Praha 2 Vzšehrad
主要用途：3世帯住宅
現在、NACON a.s.事務所

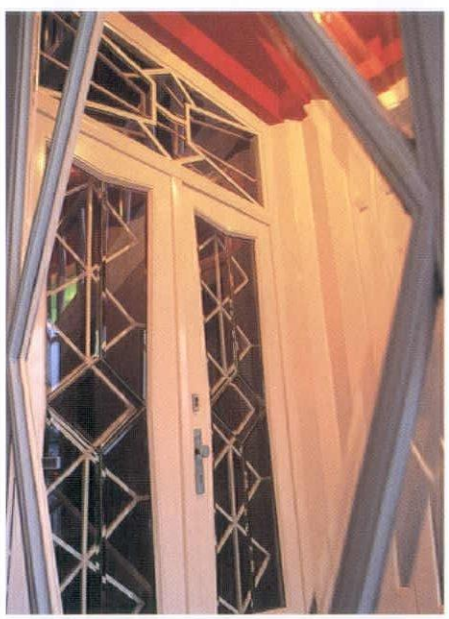


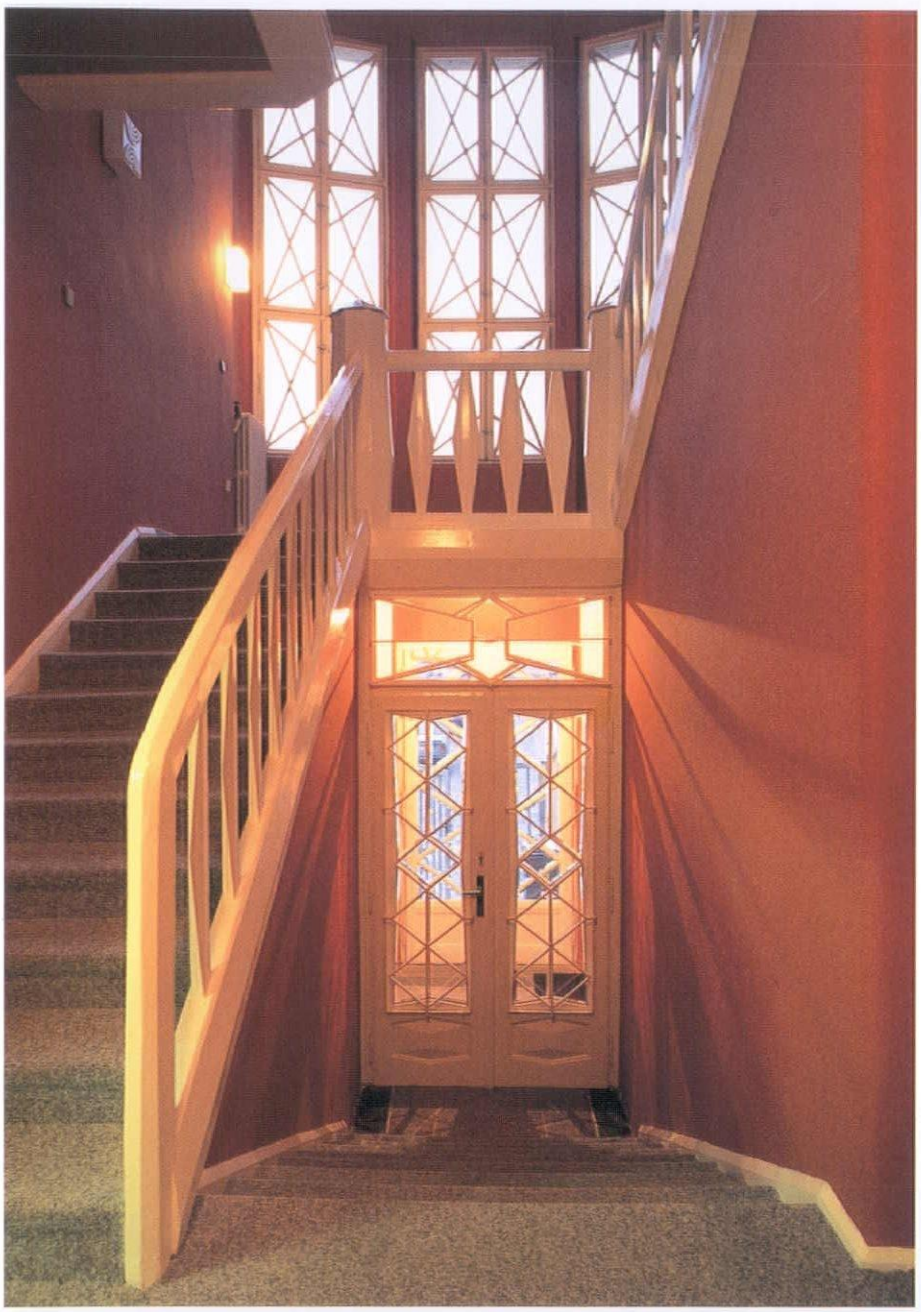
















ヴルタヴァ川とヴィシェフラッドの岩壁とに挟まれて建つこの3世帯住宅は、ホホルが手がけた最初のキュビズム建築だが、アイディアの段階では、通俗的なバロック風の建物になるはずだった。ところが、建設の時期とホホルがキュビズムに傾斜していく時期とが重なって、かなりの変更が加えられた。いくつかの部分が取り壊され、現在見られるようなフォルムになった。

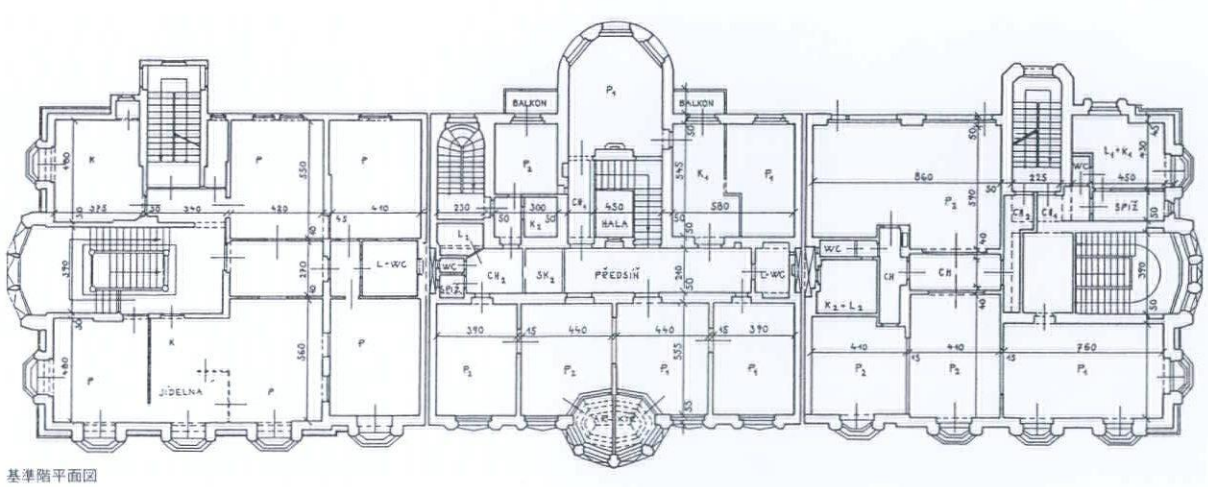
ホホルの設計に対する情熱もさることながら、彼の自由に任せた施主の方もすごい。しかも、ここは4人の施主がいた。弁護士のヤン・バイエル、市職員ヨゼフ・バイエル、建築業者のアントニン・ベラダと同じく建築業者のフランティシェック・ホデック。庶民とはいえないが、一般の人たちある。実は、キュビズム建築の謎のひとつに「施主」というのがある。当然のことながら、ほんの数年の間に、若手の建築家達が体制に逆らって、これだけのものを残すには、強力なサポートがなければできない。

キュビズム建築の特徴なのだが、外観の存在感とは反対に、内部はきわめて簡潔なつくりになっている。見るものにキュビズムを感じさせるのは、手すりの結晶形のピラーと多角形のサッシュのみである。

中央破風の彫像は、プラハ開闢物語、ヴィシェフラッド神話をモティーフに作られたものだが、不思議なことにオリジナルのデザインにはなく、どの段階で採用したのかは不明である。







基準階平面図

ヨゼフ・ゴチャール
Josef Gočár

キュビズム-ロンド・キュビズムの中心的存在のひとり。驚くべきエネルギーの持ち主で、短い期間に、数多くの建築実作を残しているだけでなく、設計案、都市計画案もまた多数発表した。同じキュビスト仲間のヤナークが理論派なら、彼は実践派である。どの作品も完成度が高く、後に内外の建築家に与えた影響は大きい。ロンドキュビズムから機能主義へと時代の荒波を乗りきった。

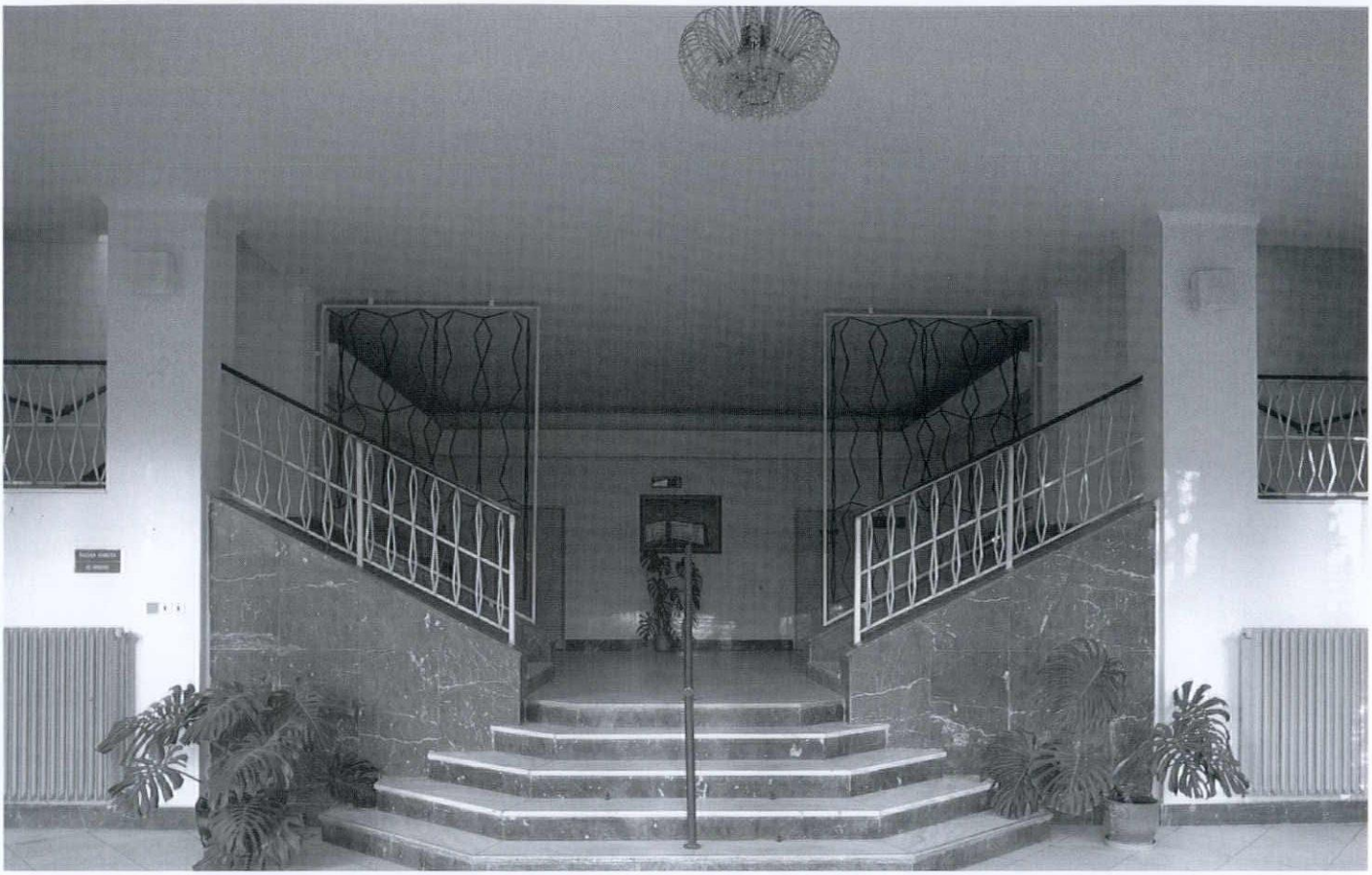
1880年　パルデュビーチ近郊で生まれる
国立高等技術学校卒業
1906-08年　ヤノーネチェラ事務所勤務
1908年　マーネス造形芸術協会入会
1911年　造形芸術家クラブ初代会長
1925年　パリ国際装飾美術展チェコスロヴァキア館のデザインでグランプリ受賞
1922-35年　プラハ美術アカデミー教授
1945年　イチーンにて死去

ボフダネッツ・スパ　1911–12年
Bohdaneč Spa

所在地：Bohdaneč
主要用途：スパ施設

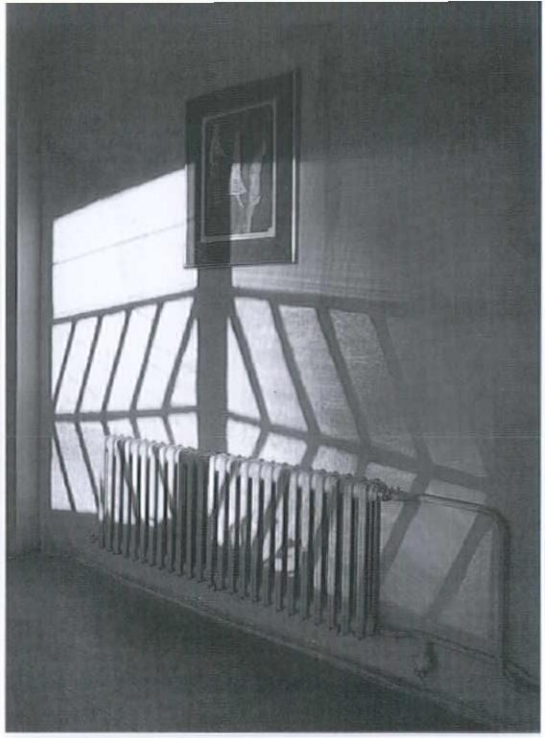


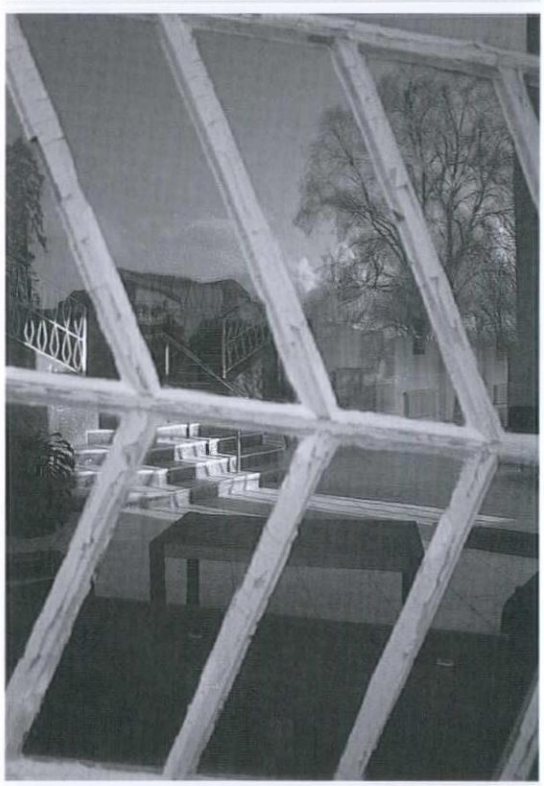
















ボフダネッツは、プラハの東、車で2時間ほどのところにある、温泉保養地として有名な街である。

広大な敷地内に各時代の建築が並ぶ。その中にあって、ゴチャールのスパ・ハウスは、キュビズム建築の初期のものだが、ひときわ目を引く建築作品となっている。

最初のコンセプトでは、何階建てかの通常施設が考えられていたが、ゴチャールはそのプランを水平に引き延ばし、さらに連続するキュビズムのモティーフをそれに加えた。

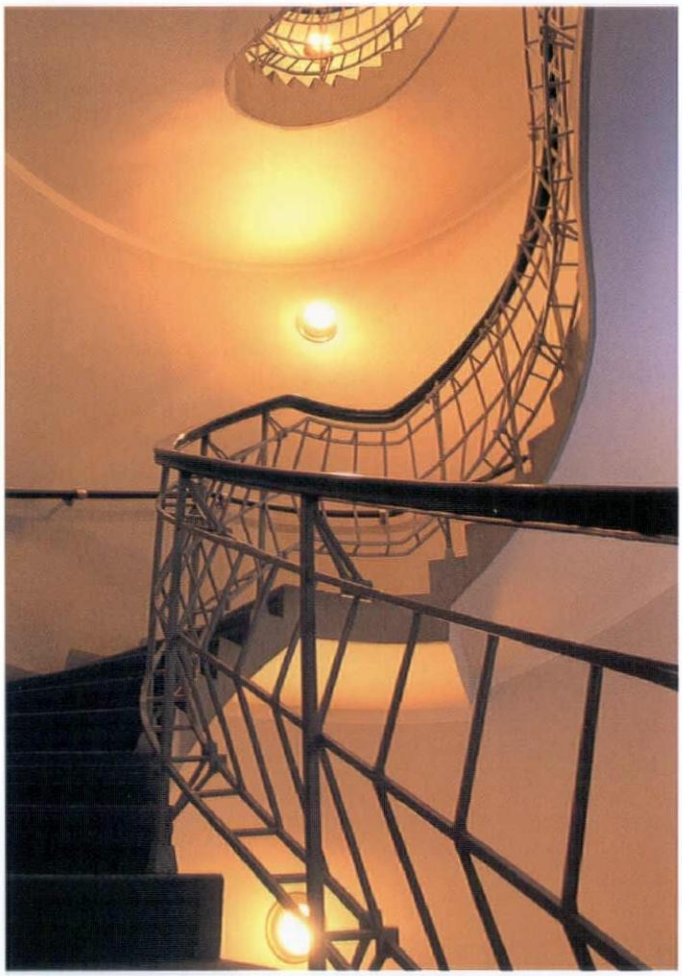
光の変化と連続する多角形の窓は、見るものを退屈させない。

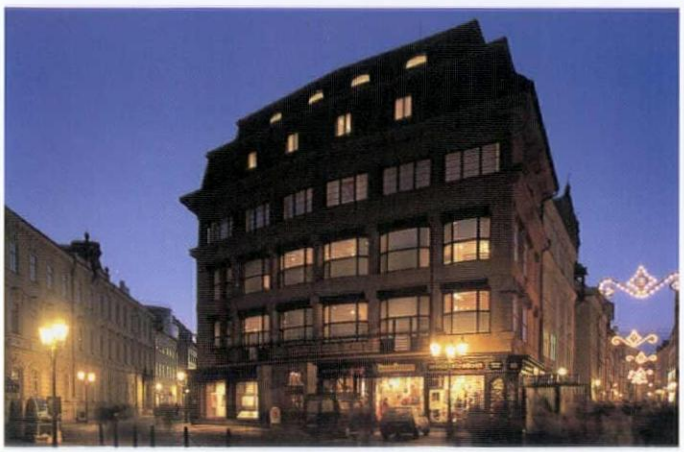
竣工当時は、ゴチャールの設計通り2層までの作品だったが、3層部分が後に増築されたため、オリジナルがもっていた広がりのある軽快感はかなり失われてしまった。

ブラック・マドンナに次いで当時の最新技術、RC工法がとられた。

ブラック・マドンナ　1912年
House At the Black Mother of God

所在地：Celetná 568, Ovocný trh 19/569, Praha 1 Staré Město
主要用途：店舗
現在、キュビズム美術館（ファイン・アート）



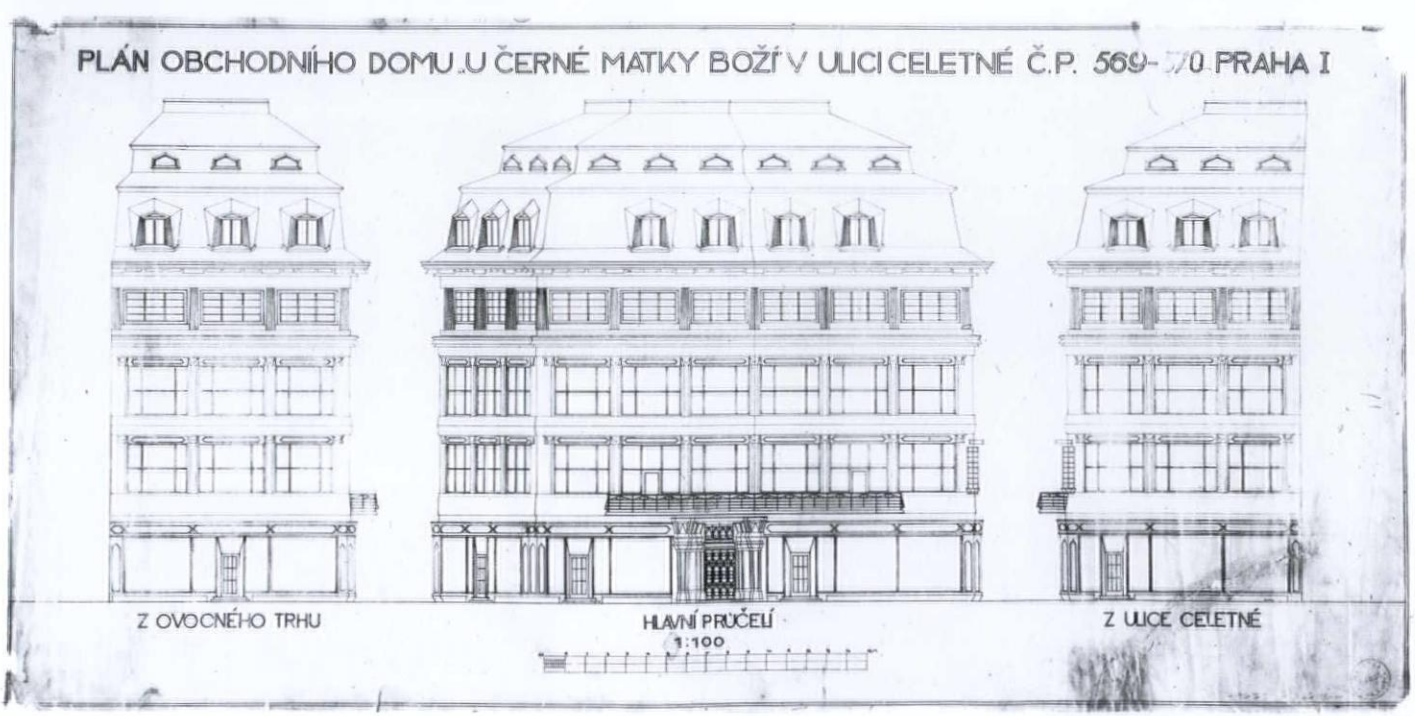


〈ブラック・マドンナ〉は、プラハの中心部、歴史的建造物が並ぶ、旧市街にある。名前の由来は、建物のコーナーに設けられた「黒い聖母像」からきているが、現在は取り除かれている。

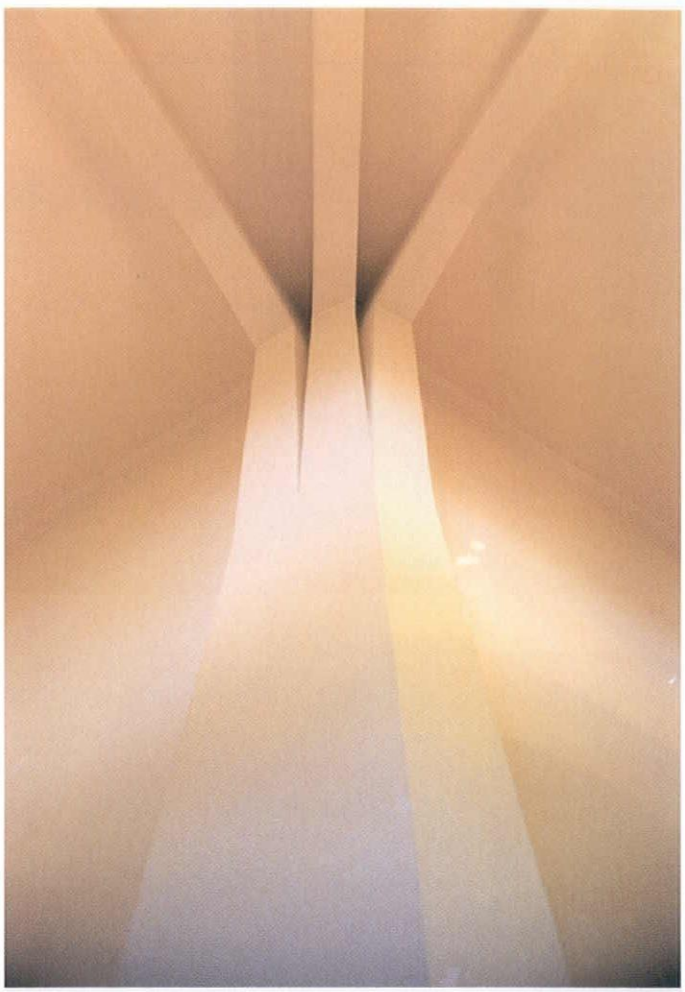
1911年の夏までに最初の図面が引かれたが、中世都市プラハの昔ながらの雰囲気を残している地区だけに、市当局から細かい設計変更、「コーニスが張り出し過ぎている」などの指示を受けた。

しかし、設計変更を強いられた最大の要因は、ゴチャール自身の内的変化、つまりキュビズムへの深化であった。調整を繰り返し、竣工を迎えたのは1912年の暮れのことである。

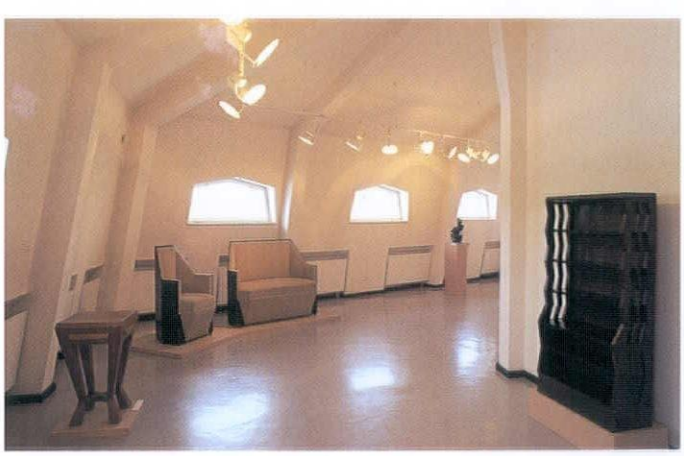
1993–94年に大規模な改修を受けた。

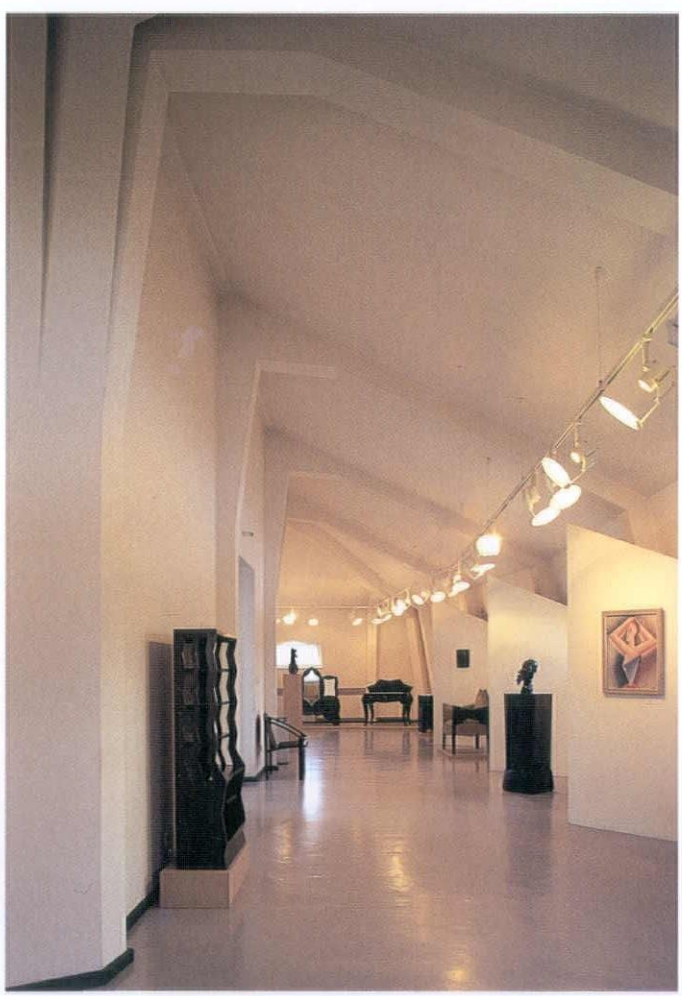


立面図





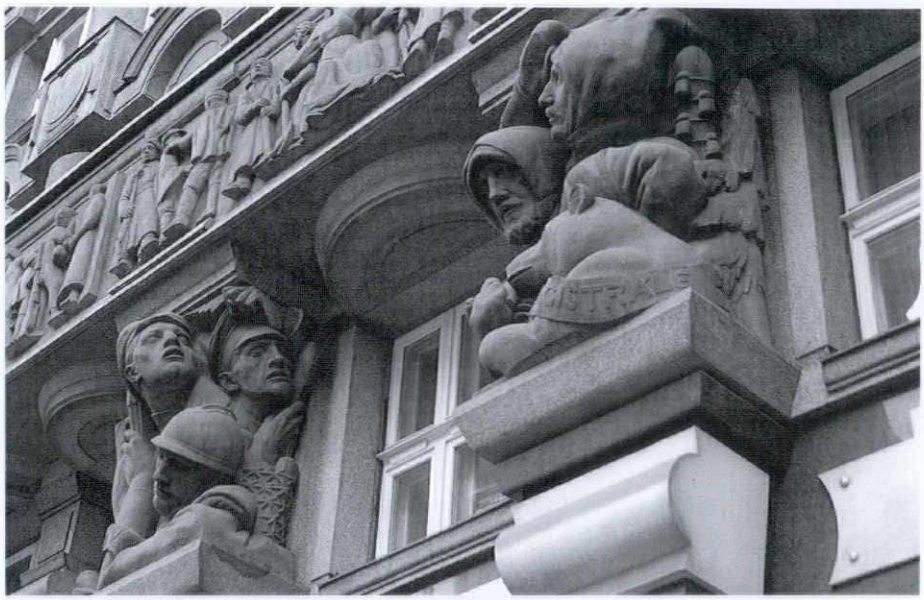




以上の写真、最上階キュビズム作品展示室

チェコスロヴァキア・レジオン銀行　1922–23年
Bank of Czechoslovak Legion

所在地：Na Poříčí 24/1046, Praha 1 Nově Město
主要用途：銀行
現在、チェコスロヴァキア・オブホドニー銀行







チェコスロヴァキア・レジオン銀行は、プラハ新市街に建つ、ゴチャールが手掛けた民族様式＝ロンドキュビズムの最初の作品である。

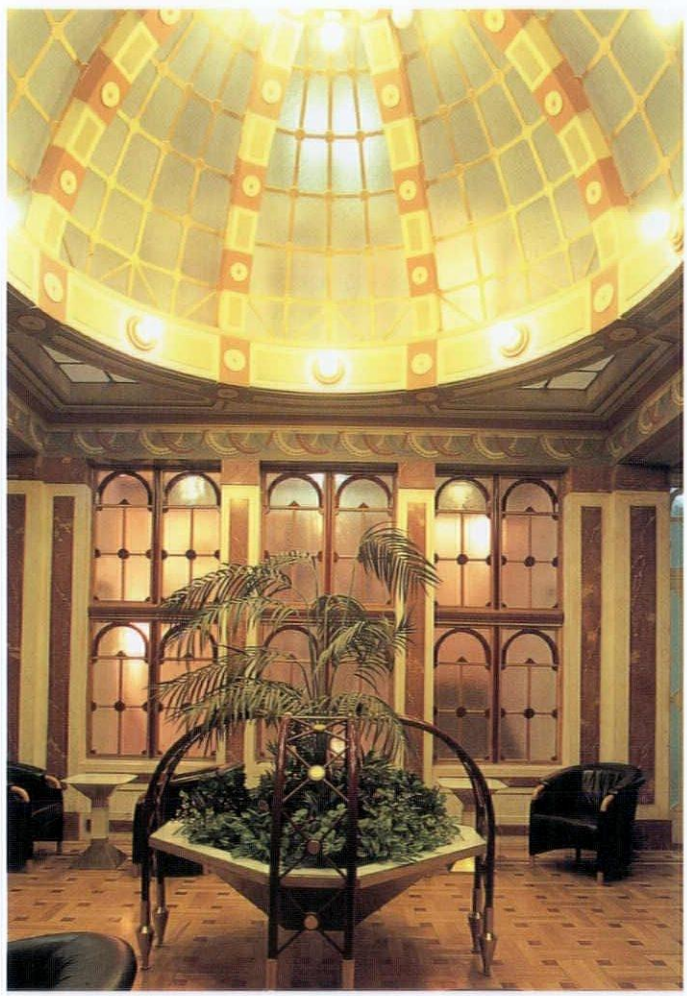
この様式はゴチャールとヤナークによって創案されたものであるが、スラブ神話から引用した円形のモティーフが繰り返し使用されることから、後世になってロンドキュビズムと名付けられた。

キュビズムとロンドキュビズムは、一見しただけでは建築家が同じということさえ、ましてや共通点など見いだすことなど不可能だ。しかし、じっくり観察すると、レジオン銀行の設計者はブラック・マドンナも設計していることがわかってくる。深読みかもしれないが、形態に対するテンションが似ているのである。

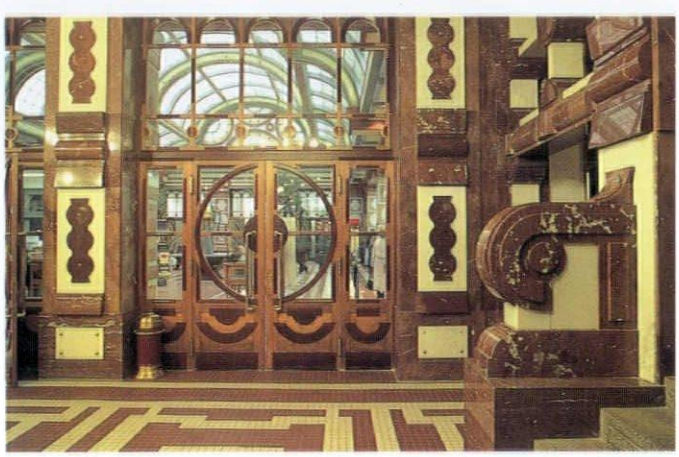


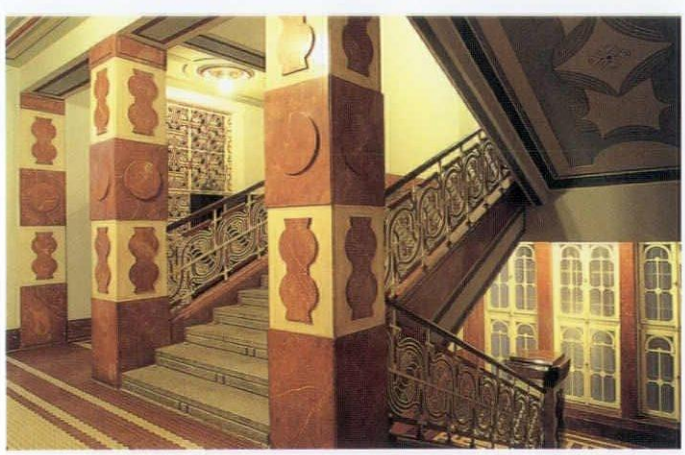


エントランスホールの鏡張りドア



2階、キューポラのあるサロン



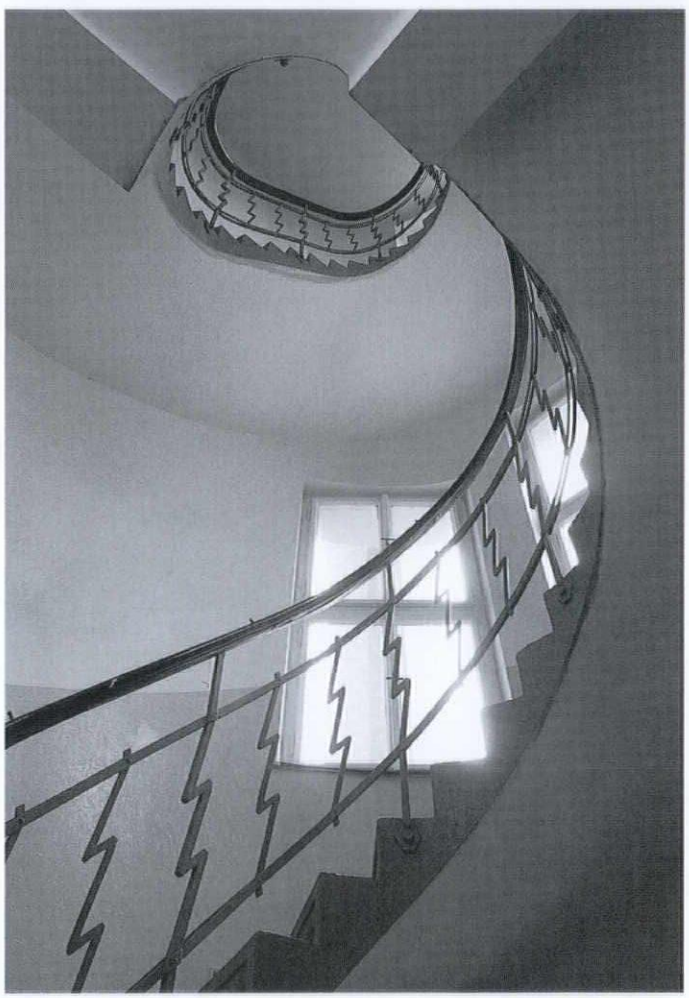



021

フラッドチャニーの2世帯住宅　1912–13年
Duplex in Hradčany

所在地：Tychonova 4, 6/268, 269, Praha 6 Hradčany
主要用途：2世帯住宅
現在、集合住宅







この2世帯住宅は、プラハ城裏手の閑静な住宅街にある。この作品もゴチャールの慣例通り、設計中に変更が加えられキュビズム建築になった。

エスキースの段階では1800年頃のチェコの伝統的な田舎のスタイルであったが、1911年10月から始まった設計の最初の図面ではアールヌーヴォー風の建物に変わった。そして、翌年3月にはキュビズムのモチーフを付加することにした。

ゴチャールは階段のデザインに優れている。〈ボフダネッツ・スパ〉、〈ブラック・マドンナ〉はもちろん、ロンドキュビズム時代の〈レジオン銀行〉でもそれを感じる。

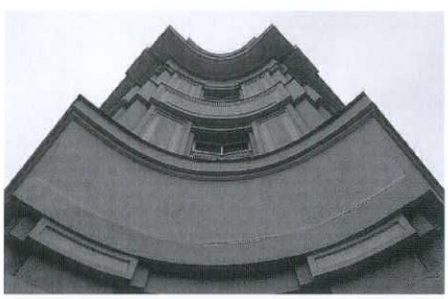
現在も右と左の住居の所有者は違うようで、改修保全のやり方もスピードも異なっている。右のほうは定期的に補修をしているようだが、左のほうはモルタルが落ちてしまっている箇所も目立つ。

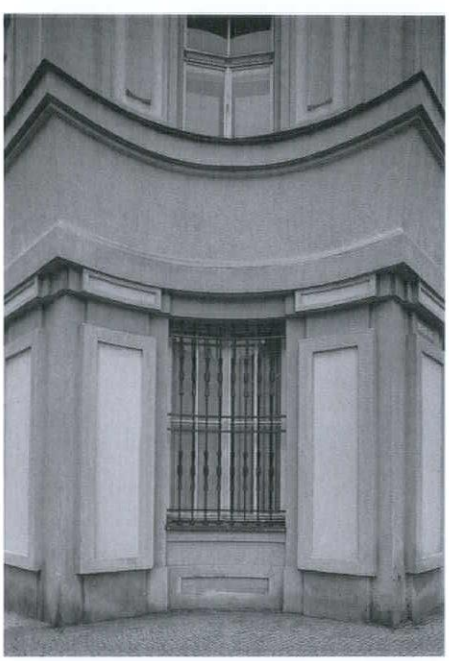
アングロ・チェコスロヴァキア銀行　1922–23年
Anglo-Czechoslovak Bank

所在地：Hradec Králové
主要用途：銀行
現在、コメルチニー銀行



マサリク広場に面したアングロ・チェコスロヴァキア銀行





フラデッツ・クラーロヴェーは、ゴチャールのスパ・ハウスがあるポフダネッツから北へ車で30分ほどのところにある街である。この街には共和国初代大統領トマーシュ・マサリクを記念した広場があり、アングロ・チェコスロヴァキア銀行はこれに面している。

ゴチャールは当初、新市街の中心部の都市計画設計に臨んだが、社会情勢の変化で、実現したのはこの銀行のみであった。

ブルノ銀行　1922–23年
Bank of Brno

所在地：Jindrišska 15/1308, Praha 1 Nové Město
主要用途：銀行
現在、商業ビル



ブルノ銀行は、キュビスト／ロンドキュビストとしてのゴチャールの終焉を告げる建築である。同じゴチャールの設計であるレジオン銀行とさほど離れていないプラハの新市街にある。設計、施工ともにレジオン銀行と同じ時期である。

ゴチャールはサービス精神が旺盛な建築家だったようだ。レジオン銀行、日本語にすれば在郷軍人銀行である。民族意識を高揚させるような建築という設計条件が付いたのかもしれない。いっぽう、ブルノ銀行はチェコ第二の工業都市ブルノに本店を置く銀行である。クライアントにふさわしい様式を選択したとようだ。

ブルノ銀行の道路をはさんで対面にパレス・ホテルがある。1913年3月、そこでアドルフ・ロースのレクチャーが開かれた。ロースはブルノ生まれである。設計中のゴチャールの頭にロースの有名な言葉がよぎったのかもしれない。

チェコ・キュビズムの家具と工芸品

ダニエラ・カラソヴァ／訳＝平野清美

キュビズム様式の建築、家具、工芸品はチェコ特有の産物であり、ヨーロッパはもちろん、世界でも類を見ないものである。チェコ・キュビズムは、第一次世界大戦による中断（1914年から1918年まで）も含め1909年から1924年という束の間の年月を駆け抜けた様式で、主にプラハ、ブルノの数名の建築家や芸術家によって推し進められた芸術であった。キュビズム様式の工芸品が製作された時代――20世紀初頭の20年間はチェコの実り豊かな成長著しい時代であった。ヨーロッパおよびチェコでもてはやされたゼセッション様式が下火になり、後にアール・デコ（1925年にパリで開催された世界的規模の装飾・産業美術展の標題からの呼称）と呼ばれた装飾的なスタイルが普及し始めた時代であった。チェコにおいては、好調な経済と文化交流に後押しされて民族再生運動が最盛期を迎え、ついに1918年、チェコスロヴァキアの独立を導いていた。

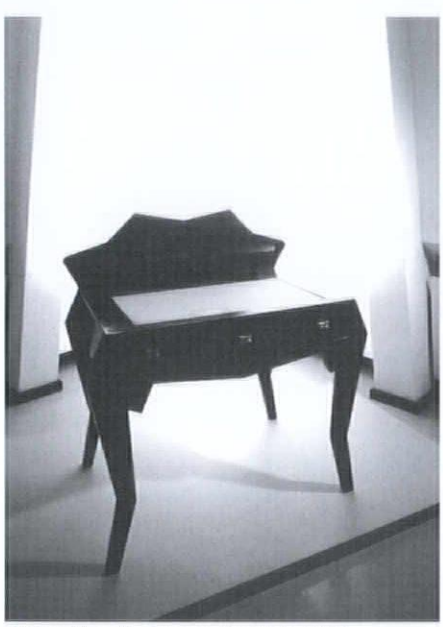
チェコのキュビズム建築、工芸品は次のような芸術の影響を受けている。第一にキュビズム（ピカソ、ブラックなど）等のフランス芸術。チャールズ・レニー・マッキントッシュの影響を受けたウイーン・ゼセッション様式の幾何学的形態、また、後のフランスの傾向となる装飾的なスタイルであるアール・デコ。一方ではまたチェコや中央ヨーロッパのビーダーマイヤー様式の家具（特にキュビズム風家具の類型論の観点から見て）などの歴史主義的な形態、また、チェコ・フォークロアからのインスピレーション（主に後期チェコ・キュビズムにおける装飾的傾向、いわゆるロンドキュビズムへの影響）などである。

キュビズムの家具、インテリア、工芸品を生み出した数名の建築家たちは、いずれも建築家ヤン・コチェラ（1871-1923年）の弟子あるいは同僚であった。コチェラはプラハ工芸美術大学の教授であり、同大学の建築部門の創設者であった。旺盛な創造意欲を持つ建築家、教育者であり（1887年発足の造形芸術協会、『マーネス』の創立メンバーの一人であり、1914年にはチェコ作品連盟を創設した）、「ヨーロッパへ窓を開くこと」を強力に奨励した20世紀のチェコ近代建築の父であり、自己の建築、工芸品に率先してヨーロッパの新しい波を採り入れる人物であった。ただし、キュビズムに関しては一貫して非常に批判的であった。

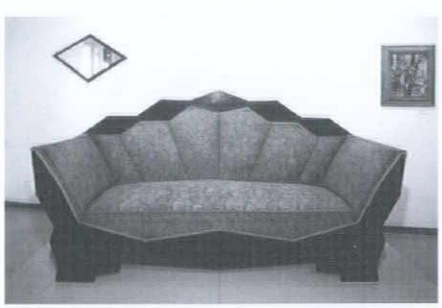
19世紀末、工芸美術大学を始めとしてプラハではまだ植物モチーフのゼセッション様式がはやっていたが、ヨゼフ・ゴチャール、パヴェル・ヤナーク、ヴラスティスラフ・ホフマン、ヨセフ・ホホル、オタカル・ノヴォトニー、遅れて加わったルドルフ・ストカルといった若手の建築家達、そしてブルノ出身の画家アントニーン・プロハースカは、その装飾性に否定的な態度を示した。彼らは、近代精神をよりクリアに表現する新しい建築様式を求め、幾何学的な形態、キュビズムに着眼した。

逆説的に聞こえるが、類型論的には保守的なフォルマリズムの流れをくみ、また、手工的な小規模な作品は、実現の容易でないものも多かった。総じて小さなキュビズム作品は1908年設立の芸術家グループ、アルチェル協同組合が手掛け、家具類は1912年に創設されたPUD（プラハ美術工房）が生産を受け持った。

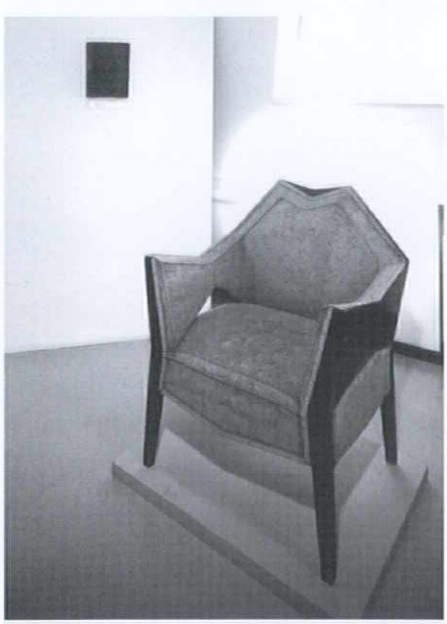
この時代、主にプラハで製作された家具類、実用的作品、一点物の作品は、建築家が自身のために制作したものか、またはチェコ人の芸術家からの依頼（ゴチャール：〈俳優O.ボレシュカのためのアトリエ〉、〈画家バーツラフ・ラバスのためのアトリエ〉、V.ホフマン：〈彫刻家J.マジャトカのための部屋〉）、医者や実業家の依頼（ゴチャール：〈デイル教授のための部屋〉、ノヴォトニー：〈医師レデチュのための部屋〉、ヤナーク：〈フラデツ・クラーロビェーのヤコベッツ家のためのインテリア〉）そして政治家の依頼（ストカ



ヨゼフ・ゴチャール、ライティング・デスク、1913年



ヨゼフ・ゴチャール、ソファ、1913年



ヨゼフ・ゴチャール、アームチェア、1913年

ル：〈チェコスロヴァキア共和国の初代大統領、トマーシュ・ガリク・マサリクの息子、ヤン・マサリクのための部屋〉）といったものであった。

チェコ・キュビズムの中心人物であり、最も大きな功績を挙げたのはヨゼフ・ゴチャールとパヴェル・ヤナークである。彼らはまた、最も長い間キュビズムに従事した建築家でもあった。パヴェル・ヤナークはチェコ・キュビズム理論の第一人者であった。当時の雑誌でチェコ・キュビズムの本質と目的の詳説に努め、住まいや調度品の理論、さらにキュビズム風インテリアの美的機能やそれに関連する哲学的問題にも言及した。

その他、キュビズムに取り組んだ建築家にはヨゼフ・ホホル（1912年に完成したプラハの壮大なゼセッション風建造物である市民会館内の「英国サークル」用の家具の設計者）、オタカル・ノヴォトニー（ヤン・コチェラについての論文の作者）、ヴラスティスラフ・ホフマンがいる。ヤナークの作品は微妙で優れたバランス感覚を持ち、アヴァンギャルドの宣言をする一方で、しばしば歴史主義的なかたちからも強くインスピレーションを受けている（引き出しの面が屈折している整理ダンスや、椅子のクラシックなかたちに現れている）。

衝撃的でオリジナル性の高い作品を生んだチェコ・キュビズムの巨匠は言うまでもなくヨゼフ・ゴチャールである。彼は理論の追求にこだわらず、その分、制作に励んだ。ゴチャールが、依頼されたのではなく自分のために制作した作品には有名な〈蝶のガラスケース〉、植物模様が入ったゼセッション様式の織物で覆った〈コウモリのソファ〉（ファブリック・デザイン：F.キセラ、M.タイニツェロバ、他）、また、造形芸術グループおよびマーネス協会のメンバーによる〈彫像の結晶形の台座〉がある。

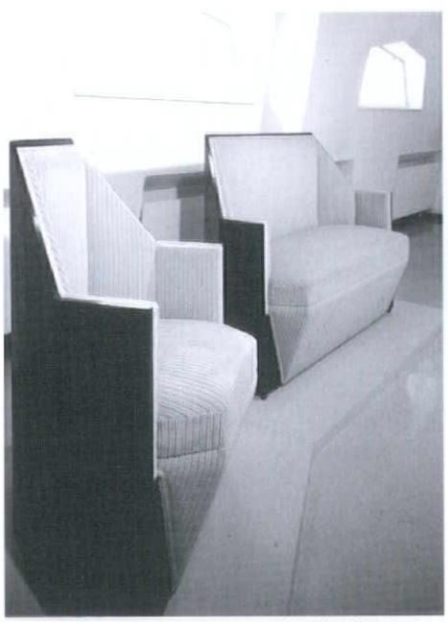
オタカル・ノヴォトニーは、1922年に制作したキュビズムと古典主義を折衷した作品の中で、既に戦後の装飾スタイルの先鞭をつけている。同じ頃、ヤナークもK.B.パルコフスキーのためにインテリアを手がけているが、そこにも同様の傾向が見られる。

1914年にゴチャールが手がけた〈V.ラバスのアトリエ〉は簡素な「田舎風」キュビズムを表現していたが、同じゴチャールの作品である〈彫刻家ヨフノバのアトリエ〉は、色を散りばめた「民族」調が強調されており、戦後に発達した円形のロンドキュビズムの萌芽が見られた。戦前のチェコ・キュビズムの色使いはモノクロが主流で、茶色や白と黒といった配色、あるいは単色のはっきりした色が好んで使用された。

ロンドキュビズムは、独立をとげたチェコスロヴァキアの「民族的スタイル」を構築しようとする試行であったが、あまりはかばかしい成功を得られなかった。壮大なために技術的にも材料的にも困難であった。ロンドキュビズムの様式は、キュビズム（ゴチャール、ヤナーク）に古典主義（ストカル、ロジェク）の要素がプラスされたものであった。この古典主義は、同期のコチェラに招かれ1911年からプラハ工芸美術大学で教鞭をとっていたスロベニア人建築家ヨージェ・プレチニックが同大学にもたらしたものだ。

1925年のパリでの装飾・産業美術の展覧会の後、ロンドキュビズムの二人のリーダー（ヤナーク、ゴチャール）はキュビズムに見切りをつけ、同世代の建築家達と足並みをそろえて他の方向に進み始める。それはチェコにおける純粋主義、ロシアの構成主義、のちに世界中に伝播した機能主義であった。

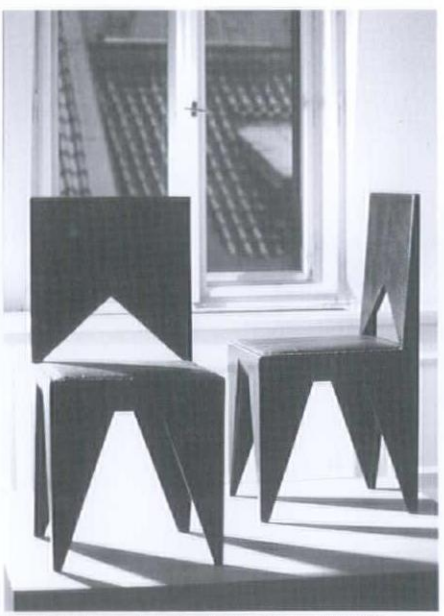
●Daniela Karasová／プラハ装飾美術館キュレーター



ヨゼフ・ホホル、アームチェア、ソファ（市民会館内英国サークル用）、1911年



パヴェル・ヤナーク、サイド・チェア、1911–12年



ヴラスティスラフ・ホフマン、サイド・チェア、1911–12年
以上の家具はすべてプラハ装飾美術館所蔵

パヴェル・ヤナーク
Pavel Janák

チェコ・キュビズム運動の理論的なリーダー。彼の作品は、自身の理論をそのまま具現化したような徹底性で、また極端から極端に振れるその振幅の大きさで、ラディカリズムに満ちあふれている。雑誌に発表した「近代建築から建築へ」(1910年)、「表層の再生」(1912–13年)などに意識の高さと大物ぶりがあらわれている。彼もまた建築だけではなく、家具、陶器までを多数デザインした。

1882年　プラハ生まれ
1899–1905年　プラハ工科大学、ドイツ工科大学(プラハ)在籍
1906–08年　オットー・ワーグナー(ウィーン美術アカデミー)に師事
1908–09年　ヤン・コチェラ事務所勤務
1911年　マーネス造形芸術協会脱会、造形芸術家クラブ入会
1912年　プラハ美術工房設立
1921–45年　プラハ装飾美術大学教授
1956年　プラハにて死去

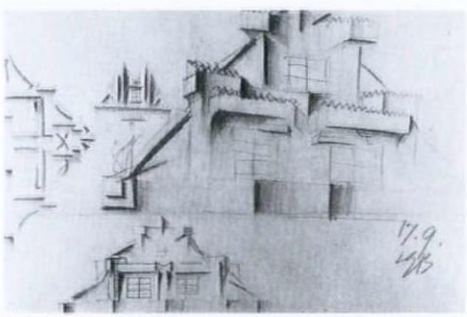
ファーラ邸改築　1913年
Reconstruction of Dr. Fára's House

所在地：Pelhřimov
主要用途：店舗住宅









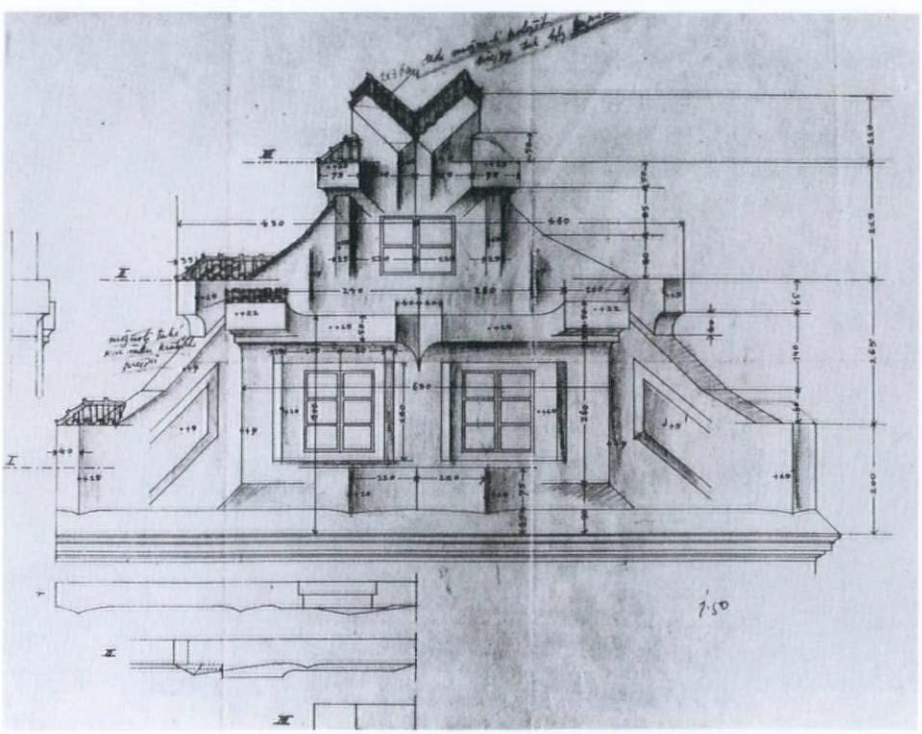
立面のスタディ、1913年

ペルフジモフの街は、プラハの南東、車で2時間ほどのところにある。ヤナークは、この街で、キュビズム建築をふたつ手がけた。ある個人邸の設計とこのファーラ邸の改築。

ファーラ邸は、もともと、広場に面した角に立つ、バロック様式の切妻を持つ建物だった。ヤナークは、バロックの基本構造には全く手を加えず、キュビズムのファサードをそれに覆い被せたのである。

バロックとかゴシックとかの範疇におさまりきらないユニークな作品を残した、サンティーニ・アイヘル（1667–1723年）という建築家がチェコにいた。ヤナークのキュビズムの手法はこのアイヘルに負うところが多い。「バロックは抽象に到達するもうひとつの方法」と、ヤナークが言う場合、それはアイヘルの手法のことを指していた。

ファーラ邸はヤナークによるアイヘルへのオマージュである。



切妻立面図、1913年





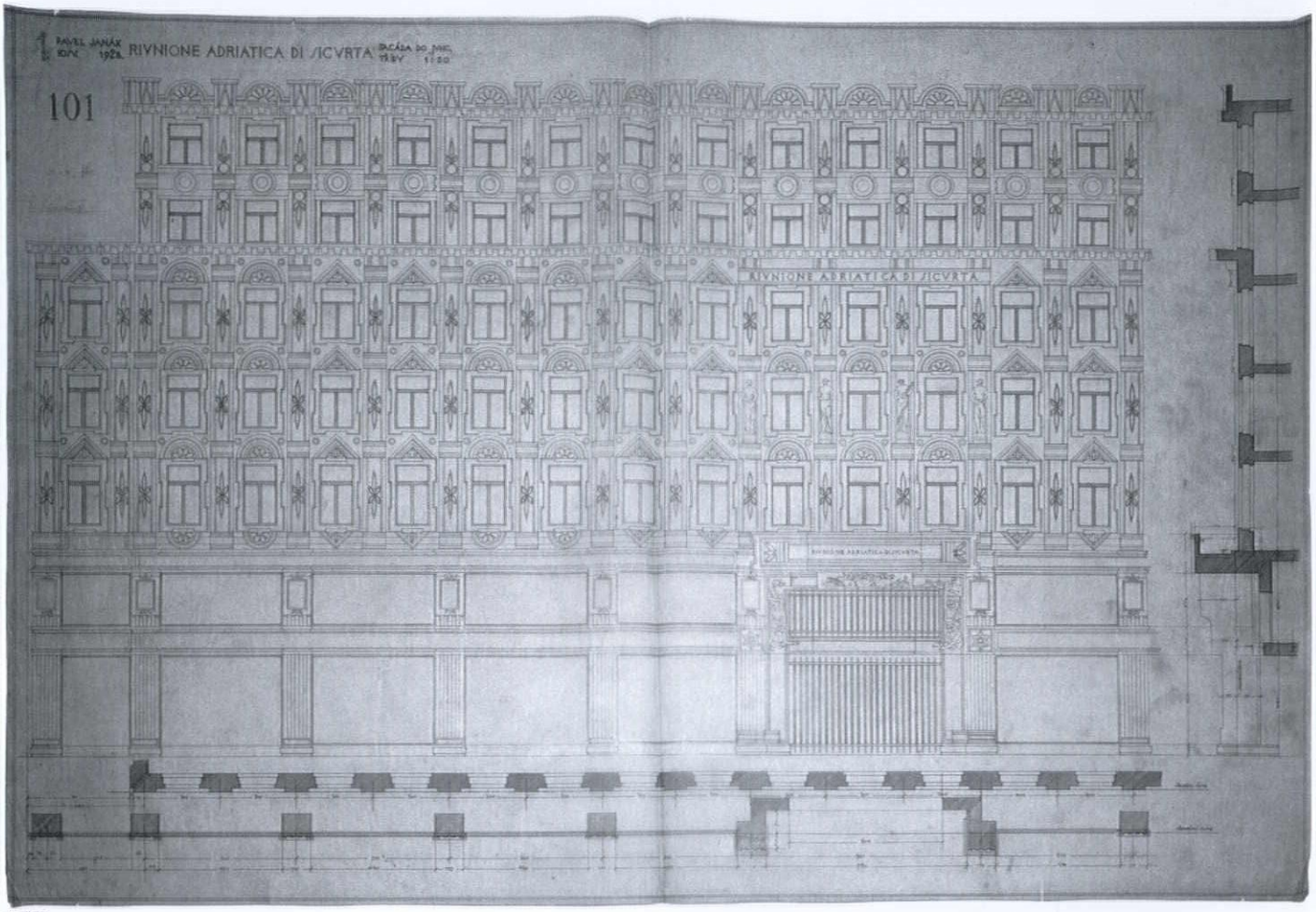
アドリア宮　1922–24年
Adria Palace

所在地：Jungmannova 31/36, Praha 1 Nové Město
主要用途：保険会社社屋
現在、商業ビル








RIVNIONE ADRIATICA DI ICVRTA
101
RIVNIONE ADRIATICA DI ICVRTA

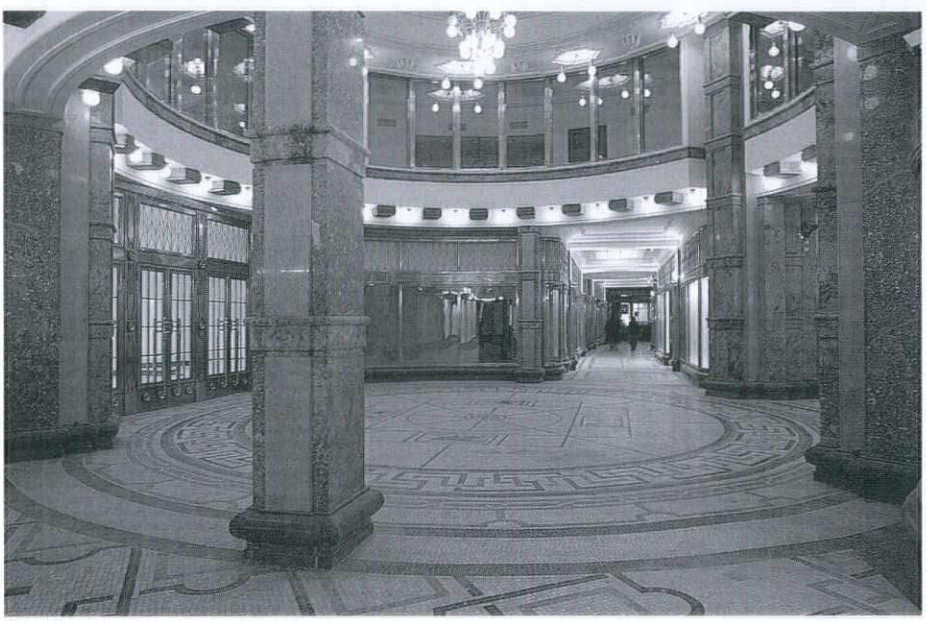
立面図



エントランスホール見上げ



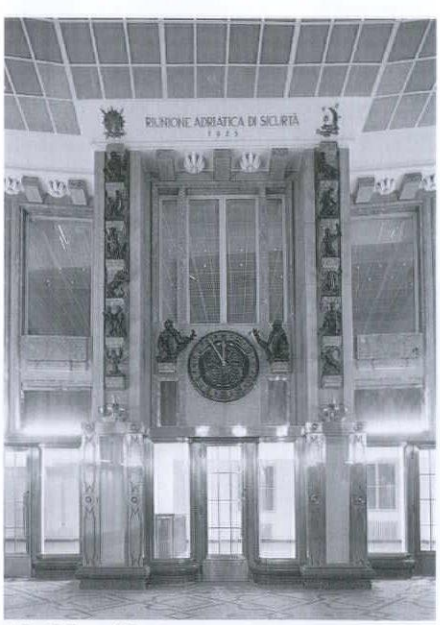
劇場ドア



エントランスホール



エレベーター・ドア



オフィスのエントランス

パヴェル・ヤナークはプラハ新市街のユングマノヴァ通りに巨大な作品をふたつ手がけた。ひとつはこのアドリア宮で、もうひとつはアドリア宮に隣接する構成主義時代のシコーダ工業ビル。

施主はイタリアの保険会社リウニオネ・アドリアチカ・ディ・シキュウルタ。この建築が竣工当時から通称アドリア宮と呼ばれている所以である。

中央エントランスの上部に4体の彫像が置かれていが、それらの彫刻家はそれぞれ異なっている。ヤン・シュトゥルサ、カレル・ドヴォジャーク、オットー・ゲートフロインド、そしてボフミール・カフカ。オットー・ゲートフロインドは「造形芸術家クラブ」の創設メンバーである。建物内には、ザ・プラノウ劇場がある。昨年、建物全体の大改修が行われた。

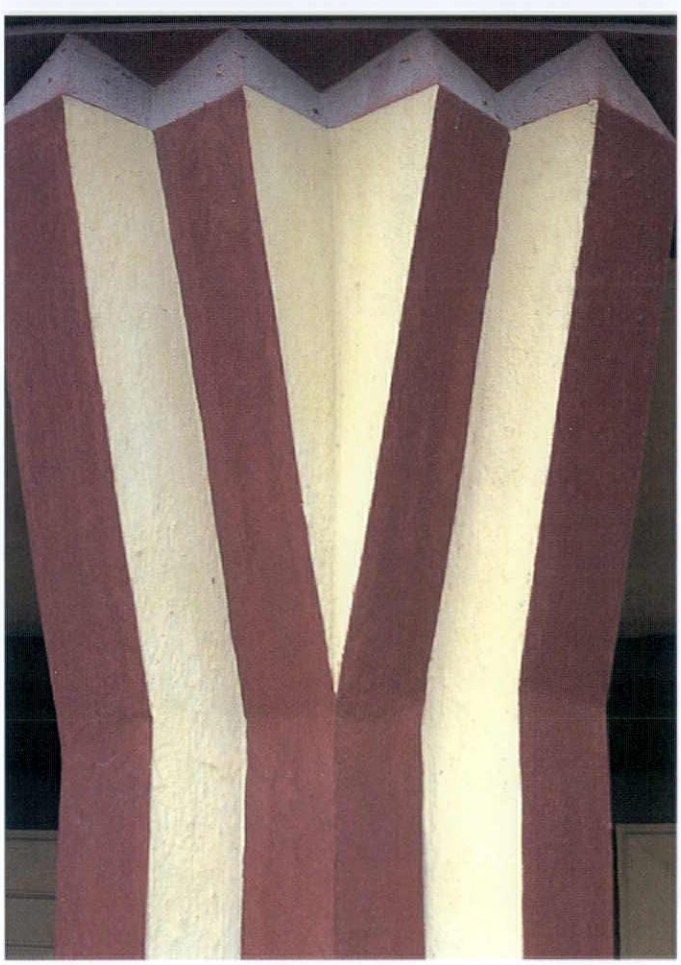
個人的な印象だが、何度行ってみてもその前で立ちすくむ。嫌悪感のようなものはない。ただ、撮影対象を理解しようという気持ちがいくぶんなくなってしまうのだった。

ペルフジモフの家　1912年
House in Pelhřimov

所在地：Pelhřimov
主要用途：住宅









ヤナークのペルフジモフの街にある2作品のうち、ファーラ邸は街の中心にあるが、この家は少しはずれたところにある。

ヤナークは、この家の設計に取りかかる直前、有名な論文『多角柱と多角錐』を発表している。キュビズム宣言といわれている論文である。ペルフジモフの家は、この論文の中に書かれていることが、建築言語に翻訳されたもののように思える。

「物質の内部の能力で生まれ出てくる形でもっとも美しい実例は結晶」

ヤナークだけでなく、すべてのキュビズム建築家が結晶形のフォルムを使ったのだが、彼がこの家で見せたものはさらにディテールまで徹底したものだった。特にエントランス列柱の柱頭部分は結晶の集合体がモティーフになっている。

パルドゥビッチェの火葬場　1921–23年
Crematorium in Pardubice

所在地：Pardubice
主要用途：火葬場









パルドゥビッチェはゴチャールのスパのあるボフダネッツの近くの街で、火葬場は街はずれの広大な霊園墓地のほぼ中央に立っている。

ヤナークらが創案したロンドキュビズムの初期の作品である。建物の大きさは幅24m、正面の階段を含めて奥行き45m、周りに何も無いせいか、実物より小さく見える。

ロンドキュビズムは、スラブの大地で語りつがれた神話をモティーフにした様式である。様式にはそれにふさわしい大地が必要なのだ、とこの火葬場は言っているようである。

正確な統計の数字ではないが、最近のチェコでは、土葬と火葬の割合は半々ということである。やはり墓地の土地不足で、火葬の割合はさらに増えるだろうとのことである。

パルドゥビッチェの火葬場は、20世紀のチェコ建築を代表する作品のひとつだが、さらに利用数も増え、エイジングも加わり、ヤナークの最高の名作として後世に残るだろう。

ヴラスティスラフ・ホフマン
Vlastislav Hofman

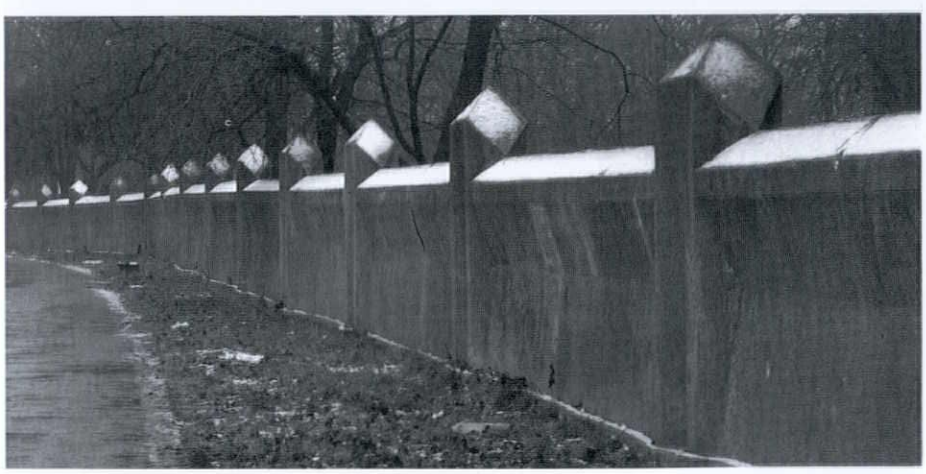
ホフマンは、建築家、画家、工芸デザイナー、舞台美術家と多才な顔を合わせ持つ。理論、建築、デザインなどで、チェコ・キュビズムの発展に寄与した功績は大きい。相当数の論文エッセイを雑誌に発表した。また、いくつものプロジェクト案を発表したが、そのほとんどは実現しなかった。

1884年　イチーン生まれ
1902–07年　チェコ工科大学在籍
1911年　マーネス造形芸術協会脱会、造形芸術クラブ入会
1913年　ジジュカ・モニュメントのコンペ案設計
1925年　国際装飾美術展金賞受賞
1964年　プラハにて死去

ジャーブリッチェの墓地入口　1912–13年
Cemetery Entrance with Gate and Kiosks in Ďáblice

所在地：Ďáblická, Praha 8 Ďáblice
主要用途：墓地入口／塀





プラハ8区、ジャーブリッチェは市のはずれに位置する。今世紀初頭プラハ中心部の人口増加に伴い、墓地の不足が深刻となったため、計画された霊園墓地である。

初期のプランでは、葬儀場、霊安室、火葬場、そして事務棟を建てる予定だったが、実現したのはキオスクのある門と周囲の塀のみである。

ホフマンは、椅子のデザインと同じく、キュビズムのモチーフを少し単純化して、親しみの増す手法をここでも見せた。

エミール・クラーリーチェック
Emil Králíček

1877年　ニェメツキーブロッド生まれ
アントニーン・バルシャーネク（プラハ工科大学教授）、ヨセフ・マリア・オルブリッヒ（ダルムシュタット）のそれぞれに師事。
後、マチェーイ・ブレハ事務所ほかに勤務
1930年　プラハにて死去

クラーリーチェックは、施工会社に所属していたため、建築家個人としてスポットライトがあてられる機会が少なかったが、最近になって、キュビズムのモチーフを最初に用いた建築家として再評価されつつある。街灯やインテリアデザインからスパ施設や水力発電所まで「職人技」を見せている。

ユングマノヴォ広場のランプポスト　1912年
Lamppost in Jungmannovo Square

所在地：Jungmannovo náměstí, Praha 1 Nové Město
共同設計者：M.ブレハ
主要用途：街灯

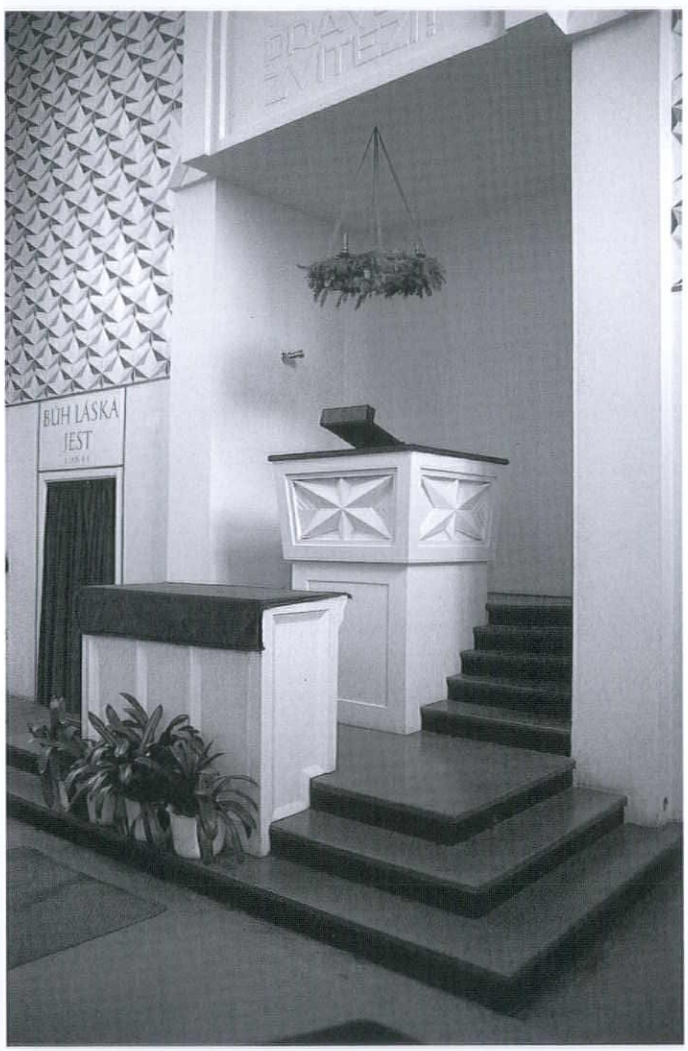


ヤナークのアドリア宮がこの広場の先にある。

この街灯は夜になっても明かりは灯らない。人々の無関心さを象徴しているが、昔も同じようなものだった。ヴラスティスラフ・ホフマンの作と考えられていたのである。真の設計者がエミール・クラーリーチェックとわかったのは、本特集でテキストを寄せているズデニェック・ルケシュ氏の地道な研究によるものだ。

フス教会ベツレヘム礼拝堂祭壇　1912–14年
Altar of Bethlehem Chapel of Hussite Church

所在地：Prokopova - ve dvoře domu čp. 216, Praha 3 Žižkov
主要用途：教会



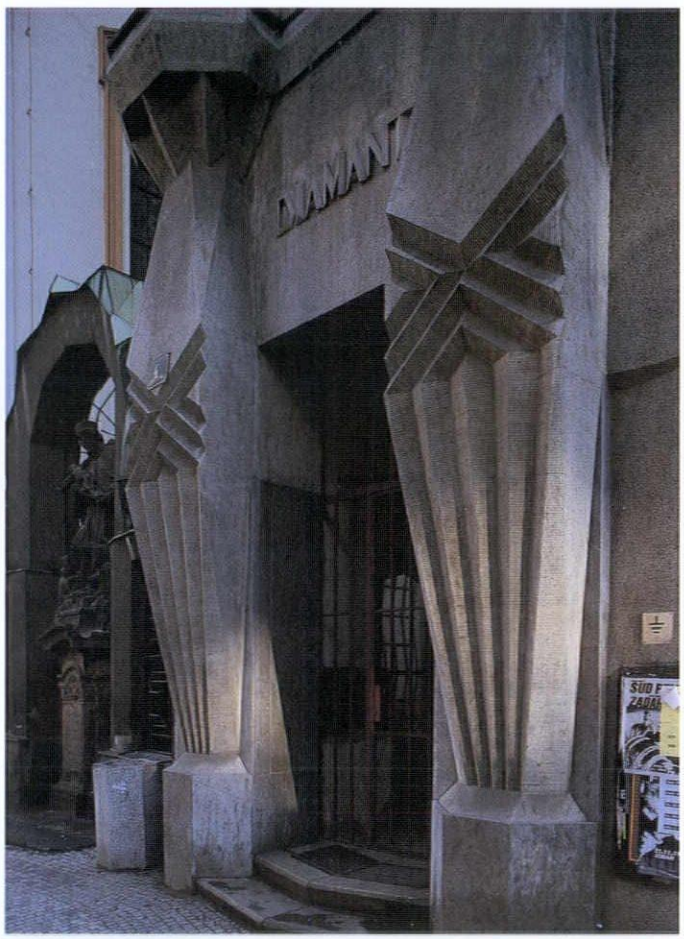
フス教会ベツレヘム礼拝堂は、通りに面した建物の中庭に隠れるように立っている。通りからは何も見えない小さな教会である。

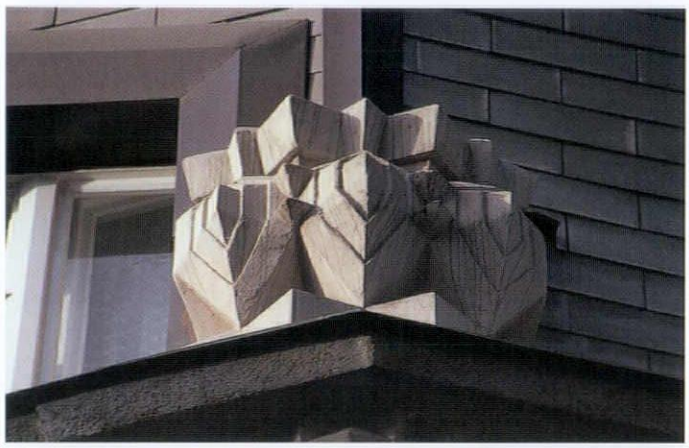
側廊一本の簡素なつくりで、エクステリアにキュビズムを感じさせるものは何も無い。

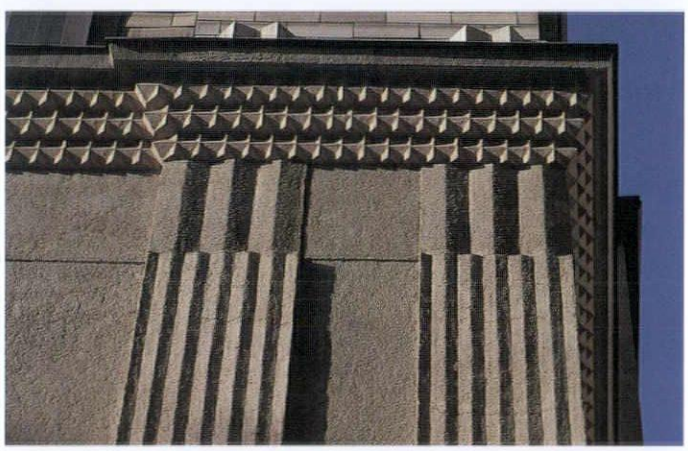
どのスタイルの教会でも星形のオーナメントは目にするが、この教会の星形は明らかにキュビズムのものであることがわかる。

ダイアモンド館　1912–13年
Diamant Commercial and Apartment Building

所在地：Spálená 4/82, Praha 1 Nové Město
共同設計者：M. プレハ
主要用途：商業ビル











ダイヤモンド館は、デパートと住居の複合施設として建設された。

エントランス部分が無ければ、キュビズム建築ではなく、幾何的アール・ヌーヴォーといった建築物である。そのエントランスを飾るキュビズムのポーチは、建物全体のイメージを決定させるほどインパクトがある。

ダイヤモンド館の隣はバロックの教会で、その間に挟まれるように聖人像が置かれている。その像を飾るキュビズムのアーチもクラーリーチェックによるものである。

オタカル・ノヴォトニー
Otakar Novotný

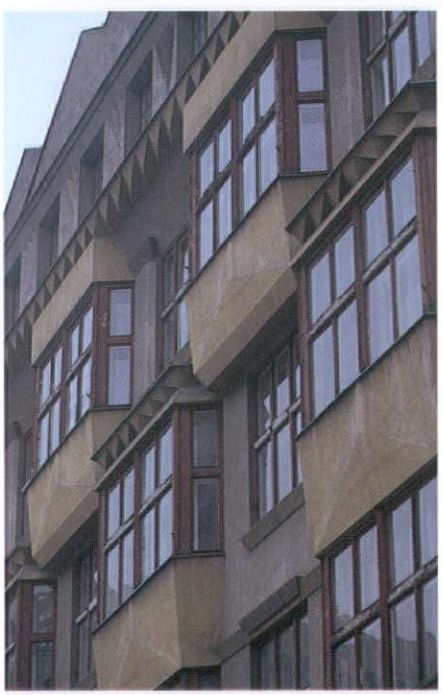
ノヴォトニーは、その経歴の当初、フランク・ロイド・ライトやオランダの建築家ヘンドリクス・P.ベルラーへの影響が色濃く出た作品を発表していたが、後にはキュビズム、機能主義の建築家を代表するひとりに数えられるまでになった。文筆活動でも優れた力を発揮し、いろいろな雑誌に研究論文を発表、また1958年には『ヤン・コチェラとその時代』を著した。

1880年　ベネショフ生まれ
1903年　プラハ装飾美術大学卒業（ヤン・コチェラ教授）
1902年　マーネス造形芸術協会入会（1913–15年および1920–32年会長）
1929–54年　プラハ装飾美術大学教授
1959年　プラハにて死去

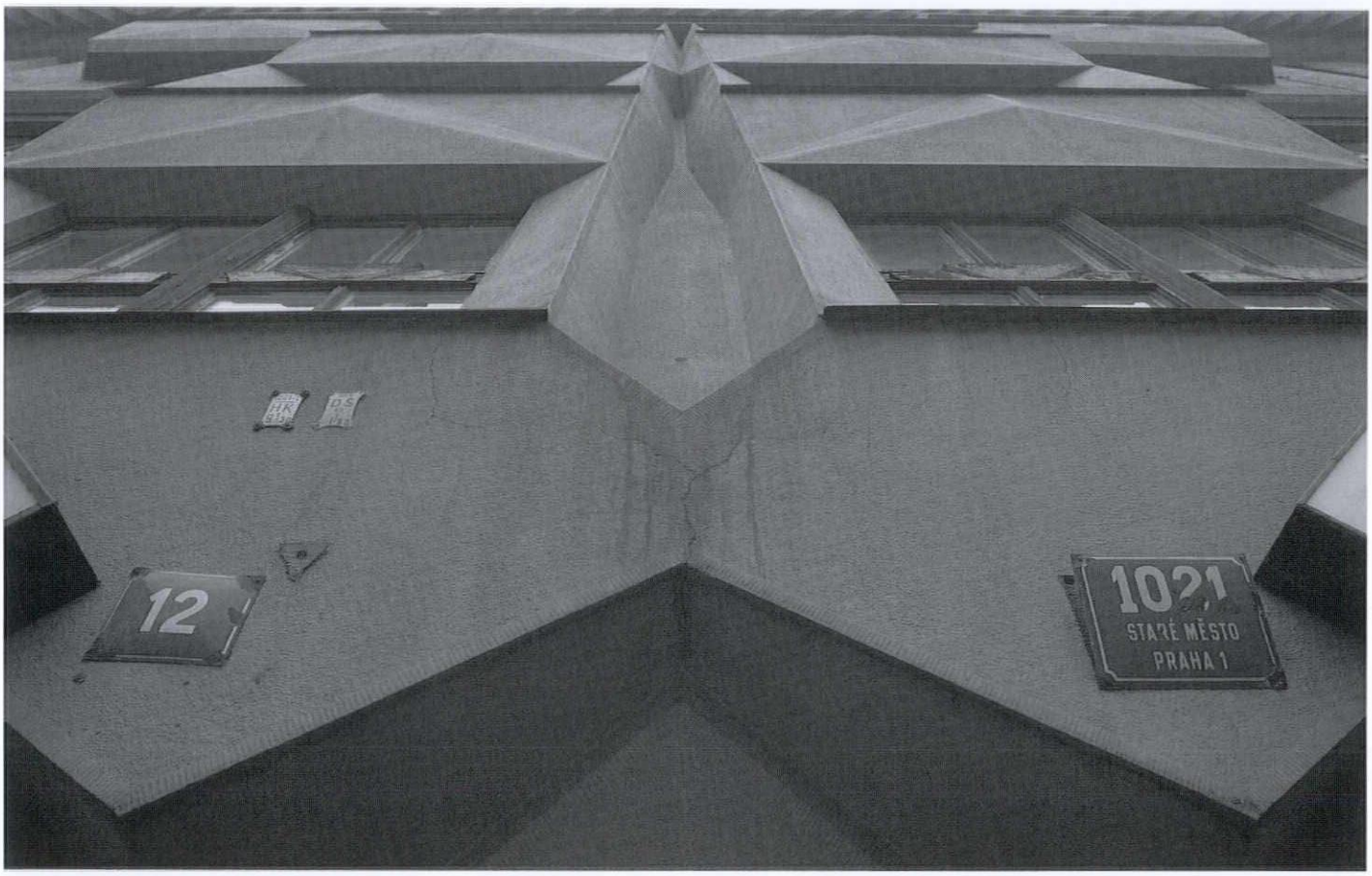
教員住宅組合アパート　1917–19年
Teachers' Housing Co-operative Building

所在地：Elišky Krásnohorské 10-14/123, 1021, 1037, Praha 1 Staré Město
主要用途：集合住宅









オタカル・ノヴォトニーは、ヤナークやゴチャールらのキュビストとは一線を画した建築家である。事実、ノヴォトニーがキュビズムに関心を持ち始めたのは第一次世界大戦が始まろうとする1914年のことである。ケルンで開催された「ヴェルクブント展覧会」用に設計した芸術作家同盟のパビリオンで用いた多角形が、彼にとって初めてのキュビズム経験だった。

いずれにしろ、ノヴォトニーのキュビズム建築の代表作は、この〈教員住宅アパート〉である。設計した時期は、ゴチャールやヤナークがロンドキュビズムをまさに始めようとする時である。戦前のキュビズム建築に比べて、遅れてきた分、完成度が高くなっている。

ノヴォトニーは、ホホル、ゴチャール、ヤナークが用いた手法とは正反対の手法をこの〈教員住宅組合アパート〉で試みたようである。それが如実に現れているのがファサードの大胆な色彩である。

教員組合アパート　1923–24年
Teacher's Co-operative Apartment Building

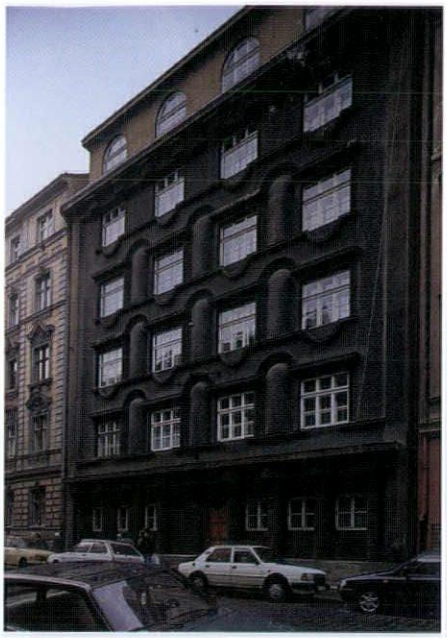
所在地：Kamenická 35/811, Praha 7 Holešovice
主要用途：集合住宅



〈教員組合アパート〉は、ノヴォトニーがキュビズムに留まりながら、ヤナークやゴチャールと距離を置いていたからこそできた作品である。

キュビズムを突き詰めると、必然的にロンドキュビズムに向かわざるを得ないことをこの作品は教えてくれる。しかしノヴォトニーはヤナークやゴチャールとは違った独自なロンドキュビズム・スタイルを完成させた。彼らのように理論に縛られることのないノヴォトニーは、サッシュなどを自由に選択できたのだ。その結果、〈レジオン銀行〉などと違ったもうひとつのロンドキュビズム建築が登場した。

ノヴォトニーのロンドキュビズムは印象深さと中庸さを兼ね備えた名作である。彼は〈教員組合アパート〉でも、色彩に関してゴチャールやヤナークらと正反対な手法を採った。彼らの使った色彩が鮮やかな赤茶やベージュであるのに対して、ノヴォトニーは黒に近い無彩色を選んだのである。











ヤン・ペトラーク〈ブベネッツの集合住宅〉1914年――アール・ヌーヴォーからキュビズムへ



ボフスラフ・ホモラーチェ〈ブベネッツの集合住宅〉1913-14年――キュビズム影響下のアール・ヌーヴォー



ルドルフ・ストカル〈ユングマノヴォ広場の店舗住宅〉1920-23年――初期ロンドキュビズム



アントニン・ベラダ〈ヴィシェフラッドの集合住宅〉1913年――ヨゼフ・ホホルの影響

チェコ・キュビズム 前後左右

キュビズム建築運動は、数名の建築家による革命的な試みであったが、同時代の建築家に与えた影響は大きい。

その運動に無関心な、あるいは批判的な建築家でさえ、その興隆の前後、また最盛期においては、キュビズムのモティーフを自分の作品に取り入れるほどであった。



レオポルド・エールマン〈カフカの墓石〉(ジジュコフのユダヤ人墓地) 1924年



ボフスラフ・ホモラーチェ〈ホレショヴィッチェの集合住宅〉1913-14年――キュビズム影響下のアール・ヌーヴォー



カレル・ハナウエル〈ヌスレの集合住宅〉1913-14年――キュビズム影響下のアール・ヌーヴォー



ヤロスラフ・ヴォンドラーク〈ブベネッツの集合住宅〉1922年――ロンドキュビズムからアール・デコへ



ヤン・コチェラ〈ウルバーネック邸〉1912-13年――反キュビズム

建築に見るチェコ・キュビズム

ヴラジミール・シュラペタ／訳＝平野清美

今世紀初頭、チェコの建築界ではウイーン・アカデミーのオットー・ワーグナーの建築思想の信奉者であり、チェコの建築をウイーンのゼセッション派から離脱させ、合理的な近代概念を植え付けたヤン・コチェラ（1871–1923年）が盛名を馳せていた。一方で、1880年前後から活動を始めた次代の建築家達は、1910年にマーネス造形芸術協会を脱退し、新たなプログラムを携えて「造形芸術家クラブ」を設立し、同時に『芸術月刊』（1911–15年）を発行し始めた。

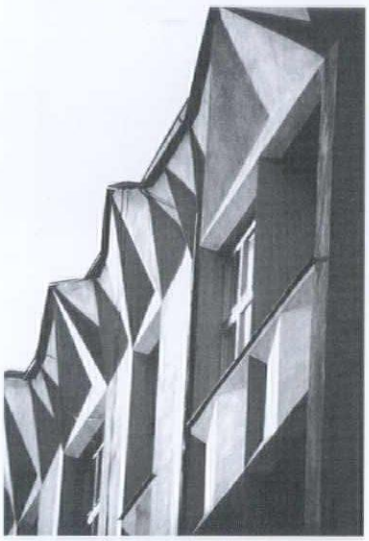
この若手の建築家達は、建築家パヴェル・ヤナークの理論的な指導の元に、従来のコチェラの合理主義――目的と構造と形態の間の因果関係に縛られている合理主義――の超克、そして造形的な形態とそのための基本的な要素、多角柱と角錐体を用いて、建築の抽象化、精神化を目指した。この新しい概念を最初に実践したのはヨゼフ・ゴチャールで、プラハの旧市街広場の市庁舎の革命的な設計案を発表した。ゴチャールは、市庁舎のゴシック様式の塔とバロック様式の聖ニコライ教会に挟まれた空間に、力強いピラミッド型の斬新な役所を置いたのである。この提案は、大胆さ、見たこともない都会の新基準、珍しい形態で世間の度肝を抜いた。およそ15年間続いたチェコのキュビズム建築のエピソードは、この瞬間から始まった。キュビスト達はチェコの歴史的伝統に目を配る一方、同時に国外の芸術傾向、理論的概念にインスピレーションのソースを捜し求めた。彼らはチェコの歴史的伝統からは、とりわけチェコ南部、およびモラビア地方に15、16世紀の境目に発達した後期ゴシック様式の貯蔵庫式アーチ型天井（ダイヤモンド・アーチ型天井とも言う）、さらに、18世紀初頭のジョバンニ・サンチーニ・アイヘルのゴシック／バロック建築、中でもジュジャール・ナト・サーザビォウの聖ヤン・ネポムツキー巡礼教会堂建築に注目していた。そしてまた、国立博物館の水晶のコレクションやドイツ誌に掲載されたインド建築などが彼らの関心事であった。

パリのピカソやブラックのキュビズム絵画の影響については、当時、多数のチェコ人芸術家がパリに滞在していたこと、プラハの収集家、ビンセンツ・クラマーシュの先見の明のある作品購入のお陰で、フランスの作品が時をおかずにプラハの芸術家達の知るところとなった経過が挙げられる。プラハの建築家達は、これらの絵画を二次元の平面的な絵画から三次元の、造形の自由な建築に変換しようとした。また、ドイツの芸術では、テオドル・リップスとウィルヘルム・ヴォーリンゲルの『感情移入理論』、アドルフ・ヒルデブラントの作品、ベルリンの芸術雑誌『デル・シュトルム』の活動に注目し、その結果、『デル・シュトルム』誌の社長、ヘルヴェルト・バルデンは、早速チェコの芸術家達と接触を持ち、1913年からはベルリンで彼らの作品を出版し、展示し始めた。

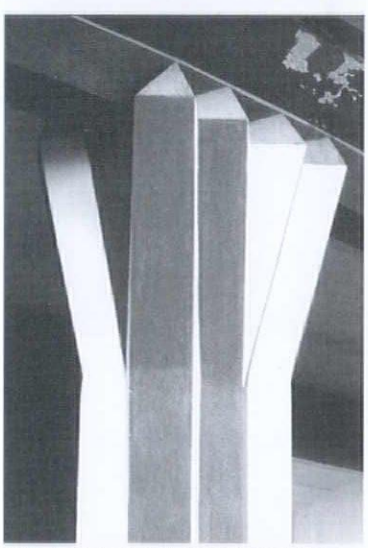
プラハの建築家達はいずれも敏感な歴史的感覚を持ち合わせており、キュビズム建築をチェコの都市の歴史的環境に順応させることにいかんなく才能を発揮、新形態の都会的構造が中世とバロックの街と調和するよう配慮した。これを集約的に示している作品が、例えば、パヴェル・ヤナークが手がけたペルフジモフにある〈ファーラ邸〉、あるいはヨセフ・ゴチャールの代表作品のひとつであるプラハ旧市街に建つ〈ブラック・マドンナ〉である。この建物は果物市場広場とツェレトナー通りが一本に交わるその頂角に歴史的建物群を従えるように建っているが、近代的な言葉で対話を呼びかけ、みごとに周囲の景観に溶け込んでいる。かつてはコーヒーショップであったガラス張りのピアノノビーレ（2階）は街を意識した大胆な開放的な造りで、ドアノブや灰皿といった細部に至るまで精妙にキュビズムのコンセプトが駆使されたこの階は、まさに完璧な総合芸術作品（ゲザームト・クンストビェルク）である。

グループの理論的スポークスマンであるパヴェル・ヤナーク（1882–1956年）、そして抜群の創造性を誇るヨゼフ・ゴチャールと共に、この建築家サークルの要をなしていたのは、ヨゼフ・ホホル（1880–1956年）、オタカル・ノヴォトニー（1880–1959年）、そしてヴラスティスラフ・ホフマン（1884–1964年）であった。

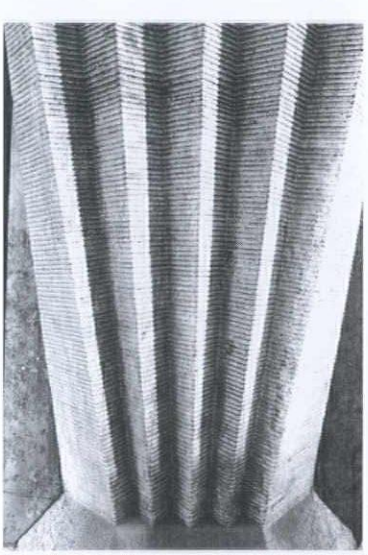
ホホルのキュビズム作品中では、結晶的で純粋でありバランスのとれた造形的なファサードを持つプラハ、ヴィシェフラット地区の



ヨゼフ・ホホル〈ネクラノヴァ通りの集合住宅〉1913–14年



パヴェル・ヤナーク〈ペルフジモフの家〉1912年



エミール・クラーリーチェック〈ダイヤモンド館〉1912–13年

下に建つ三軒の建造物が白眉である。ネクラノヴァ通りの坂に立つ邸宅の角柱は、力強く造形性に優れ、建物のすみずみに張り巡らされたキュビズム状の花のコーニスような印象を受ける。

ヴラスティスラフ・ホフマンは、『デル・シュトルム』誌のためにリノリウム印刻版版画を用いて動的な瞬間と表現主義的なダイナミズムを導入した。例えば、彼が手がけたプラハ郊外の〈ジャーブリッチェ墓地〉のコンクリートの壁にそのダイナミズムの片鱗を見ることが出来る。この提案は1912年になされたが、実現したのはようやく第一次世界大戦後であった。

オタカル・ノヴォトニーは、もともとオランダの煉瓦建築に魅了されていた建築家で、キュビズム運動に加わったのは1912年以降であった。

1914年、チェコ・キュビズムはケルンのヴェルクブント展覧会で紹介されたが、同年に第一次世界大戦が勃発したため、同時に戦前のプラハ・キュビズムは終了を告げた。ベルリンの批評家バルター・クルト・ベーレントは、当時チェコ・キュビズムを称揚している。「スラブ民族はドイツの芸術産業の『血液循環』を活性化し、巡りを良くすることができるかもしれない」。しかし、『デル・シュトルム』誌やヴェルクブント展覧会で得られたこの国外での好意的な反応は、無残にも第一次世界大戦により中断してしまったのである。

1913年から1914年にかけてのプラハのキュビズムとベルリンの表現主義の緊密な絆については、もう一点留意しておくべきことがある。1913年にヘルバルト・バルデンは、所有のギャラリーでプラハのキュビスト達の展覧会を企画し、同年の秋にはイタリアの未来派の展覧会と共に秋のサロンに組み込んだ。このサロンで、後にベルリンの表現主義グループを形成することになる建築家達、ブルーノ・タウト、パウル・シェルバルト、ハンス・シャロウンといった面々がプラハのキュビズム作品を目にしたことは疑いがないだろう。彼らは当時既にデル・シュトルム・ギャラリーの友人の輪に加わっている。たしかにベルリンの表現主義グループの幻想的なスケッチの中には、キュビズムの形態と類似のものが見受けられる。しかし双方のグループの主眼は全く相容れない性格の物であった。

プラハのキュビスト達は、第一に「建物の外観の造形による建築の精神化」（ヤナーク）を目指し、ファサードの改築に専念したのに対し、シェルバルトの建築概念である「ガラス建築」の影響を受けたベルリンの建築家達は、内装と外観の関係の透明度を重視し、プランを基盤からくつがえすダイナミックな変化もいとわない「内から外へ」の建築を目指した。そのため、例えばヨゼフ・ホホルの〈ヴィシェフラットの3世帯住宅〉は、平面図がシンメトリーで静的な草案を残したままであるのに対し、実現に至らなかったベルリンの建築家達のスケッチ、ブルーノ・タウト、マックス・タウト、バシリー・ルクハルト、ハンス・ルクハルト、ハンス・シャロウンそしてとりわけ、エーリヒ・メンデルゾーンの案は、ダイナミズムと機能性の新しい関連性を示そうと、物質にも空間にも動きをふんだんに採り入れた。

プラハのキュビズム建築家達はこの一歩を踏み出せなかった。まさにこの足踏みが、第一次世界大戦中、戦後以降、運動全体が行き詰まった所以となったのである。

第一次世界大戦時、ヤナークとゴチャールは強大になりつつあるチェコとチェコスロバキア国家概念に支持され、より華麗で壮大な建築形態の創造に腐心し、1918年のチェコスロバキア国家の成立後に、「民族的スタイル」と銘打ったロンドキュビズムを作り出した。このスタイルの建築は、プラハの〈チェコスロヴァキア・レジオン銀行〉（ヨゼフ・ゴチャール）、〈アドリア宮〉、あるいは〈パルドゥビッチェの火葬場〉（パヴェル・ヤナーク）などに見られる。非常にクラシックな造りで、造形的で豊かな装飾的ファサードを持った壮麗な塊ともいうべきこの建築様式は、その色彩も含めて、もはや近代建築の目的からは遠くかけ離れていた。

建築を芸術、抽象として把握したキュビズム建築の初期の段階に比べ、この戦後のロンドキュビズムは、社会的要請を踏まえ、広い階層のための文化的な住まいと近代的な都市計画の解決を目指していた。ロンドキュビズムの主な表現者は再びヨゼフ・ゴチャールで、1920年代前半にはフラデツ・クラーロベー市の新市街中心部の構想を提案した。しかし、それが実現した時にチェコ・キュビズムのエピソードは象徴的に幕を閉じたのである。

次の世代の建築家達は、既に異なる目的を持っていた。ル・コルビュジエやオランダの近代建築、バウハウスなどにインスピレーションを受けていた彼らが追求したものは構造主義や機能主義であった。

●Vladimír Šlapeta／プラハ工科大学副学長



プラハ旧市街

プラハでの夢想

新見 隆

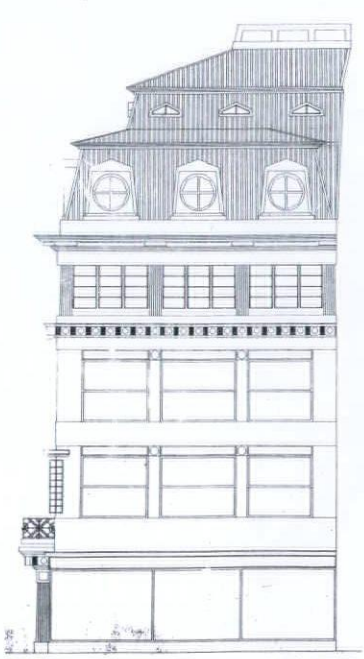
もう5年ほど前の初夏、バウハウス・アルヒーフの収蔵庫であれこれと作品を選んでいた蒸し暑いベルリンを抜け出して、週末をプラハに遊んだ。(と言いたいところだが、これも実は出品交渉である) 前々から気鋭の建築家である畏友ボジェク・シペックに誘われていた、彼の叔父さんの農園でのブタ・パーティー (小豚の丸焼き) の魅力にとうとう抗いきれなかったのだ。屠りたての豚のほくほくした内蔵が湯気を立てるこっくりしたグラッシュとピルスナーの泡にまみれたあの夏の一夜は、炬り火のはぜる向こうに、白樺の大きな闇の香る忘れ難いものだった。ミュシャが晩年にチェコに帰ってさかんに描いた、民族高揚のスコタイ祭りの神秘的な躍動感を想わせもした。もちろん自由化の英雄である、劇作家大統領ハヴェル氏に呼び戻されて改装を任されたボジェクの王宮 (大統領官邸) の仕事も見たかったし、プレチュニクのデザインした王宮の庭の涯の下に今もそのままの形でのこされているというミュシャのアトリエにも期待にわくわく胸を踊らせもした (ベル・エポックのパリに活躍したミュシャを、甘美で女性的なポスター作家としてしか見ないのは間違いだ。ドヴォルザークと同じように新天地アメリカで覚醒した彼の壮烈なスラブ回帰は、晩年20年余点の「スラブ叙事詩」の底知れない凄みを持った圧倒的な大画面に結実する)。

そしてもうひとつ、カフカやリルケや、チャペックを輩出した、シナゴーグからの闇の風が夢魔のように古くて黴臭い迷宮を通り抜けて王宮の坂を登ぼってくる、この魅力的な美しい都、この地に意外にも飛び火したキュビズムをこの眼で見ておこうという気持ちが強くあった。ちょっと前にプラハの工芸美術館から始まって、バーゼルのヴィトラ、そしてニューヨークのクーパー・ヒューイットと巡回した初めての抱括的な展覧会「チェコのキュビズム」によってその全貌を私たちの前に現わした、この知られざる水脈に私は正直言って瞠目した。ニューヨークでやっと展覧会を摑えて、その異形の形態群を前にして少々たじろぎながらも、私はクーパー・ヒューイット美術館の埃っぽい床の上を行ったり来たりしながら、首を捻った。世界を原理の中に還元させようとした求心的な志向が、見事に裏返って、増殖する装飾の道具になっている。これはまるでこの上なく魅惑的なモダニズムの背理を見るようではないか。

キュビズムのデザインと言って、真っ先に思い浮かべるのは、バウハウスの初代校長グロピウスがワイマールの墓地にデザインした、労働者蜂起の犠牲者のための記念碑だろう。1920年のものだが、地から這うように頭をもたげた、雷のような不思議な幾何学的生命のダイナミズムを見事に表現した、圧倒的なものだった。この辺りはバウハウスも表現主義のいまだ色濃い時代で、木造で校倉造りの、中部ヨーロッパのシャレーか東欧の穀物倉を想わせる土着的なゾマーフェルト邸などといった建築がつくられていた。表現主義に三角形のギザギザ模様は付きもので、それが内装では針葉樹の葉形を模した壁面パネルや、幾何学的ではあるけれど、神経を逆撫でするような、妙な高揚感に富んだ装飾を生み出していた。

そんな風に見ると、キュビズムはドイツの表現主義と地続きのものでもある。けれどもこの場合、私の夢想は地続きの影響よりは、飛び火するスタイルの方に傾いた。

キュビズムは、プラハというモダン・デザインの辺境にいち早く飛び火した、アール・デコの一変種と見ることができるのではないか。そう考えると、確かにゴチャールやヴラスティスラフ・ホフマンの、鋭角的にカクカクと面取りされた食器棚や書斎机、それに幾何学的なくびれによって構成された陶器の類は、ウィーン工房のホフマンの、それもストックレー邸の仕事を始めるあたりの中期以降の、装飾的雰囲気の残響にも見える。あるい



ヨゼフ・ゴチャール〈ブラック・マドンナ〉立面図

は同時代性と言ってもいい。アール・デコはもちろん、1925年のパリの装飾万博あたりのことに限れば、しかもリュルマンやデュナンなどのフランスの装飾家の仕事ばかりを見れば、スタイルと見えなくもないけれど、むしろ原理的、生産的なデザインの形態だけが捉えられ、横滑りして流通する現象と見た方が妥当に思える。もちろん、だからと言ってそれがモダニズムの本道より見劣りするというわけでは決してない。今日の私たちの眼から見れば、結局いろいろと話の辻褄を合わせて自己演出に躍起だった機能主義の本道よりは、表層を上滑りしていったアール・デコの方がより時代とデザイン自身の欲望を匂わせていることだってある。アール・デコのデザインでキュビズムのものといえば、私は、あの面取りの斜面だらけでいかにも仕事のしにくそうなピエール・シャローの豪奢なピュローを想い出す。

キュビズムは、ピカソからタトリンへという、空間構成における原理的な道筋を辿っていけば、それはロシアの、クーボ・フトゥリズム張りの、空間の軸線の方向が絡みあった、多次元的な造形となる。けれどモスクワまで飛び火したキュビズムが至極泥臭くてまっとうなのに対して、途中のプラハで着地した方は、装飾化して、民族の暗い炎のようなパッションを吸い込んだのだろう。

ホホルのヴィラやアパートを見て回った夜、王宮下の真暗なビアホールで泥酔直前のボジェクに、私はチェコのキュビズム・デザインへの興味は、そうした形態だけが横滑りする面白さ、その現象を支える底の情念への興味に他ならないと言った。ボジェクは、キュビズム確かに面白い、でもただそれだけさ、と言った。彼の説によるとチェコ人の祖先はケルト人だそうだ。それで私は装飾的なものへの民族的喝きの血脈なのだなと納得がいった。ステデリック美術館で、自作の、燃え立つ焔のようなガラス作品の後ろに、山岳部のジプシーたちを立たせた男のことだ。アール・デコと東方神秘主義は、今世紀の初めに、東からきてヨーロッパを突き抜けて西に走り去った、同根のものだという私の珍説に同意してくれるに違いない。

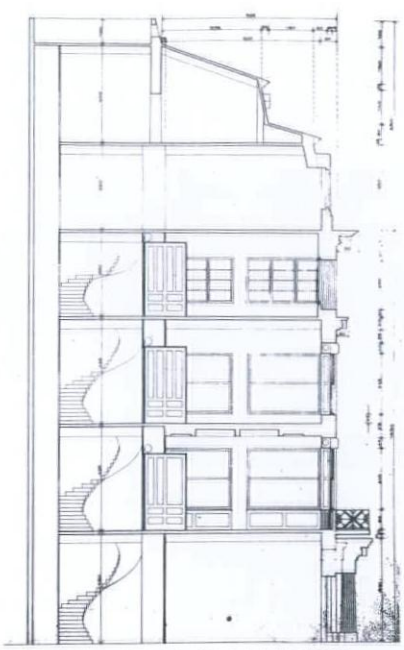
ボジェクの個展も、チェコのキュビズムと同様に自らの美術館で企画した私たちの友人、アレクサンダー（ヴィトラ美術館の館長）は、私たちに、チェコ・キュビズムの影響力の大きさを力説したことがある。ちょっと理屈っぽい使命観に燃える男なのだ（だから、彼の有名な椅子のコレクションは、生産主義の文脈のモダン・デザインに偏っていて、アール・デコはほとんどない）。ヴィトラ本館の、フランク・ゲーリーの設計。あのボコボコしたデコンストラクティヴィズムや、新館（元は消防車の収納庫だった）をデザインしたザハ・ハディドなどにも、チェコ・キュビズムの遠い残響はあると彼は言う。

もう良い加減酔っていた私とボジェクは顔を見合わせて、じゃああいつらも、アール・デコだ！とゲラゲラ大笑いした。

私はその後、しばらくしてヴィトラ美術館を訪ねた際、寄り道をしてバーゼル郊外のドルナハにゲーテアヌム詣でをした。ほお、なるほどルドルフ・シュタイナーもキュビズム建築家であったかと感嘆し、後で人に聞いたところ、設計の直前、彼はプラハで講演したのだという。

世界を幾何学的形態原理に還元しようとしたキュビズムは、原理さえも消費されればスタイルになってしまうという、そんな危険で魅惑的な時代がモダニズムだと知らなかったのだろう。そんなことを考えながら、私は最近実現したケルト人ボジェクのデザインしたギンザ・コマツのファサードを想い浮かべていた。

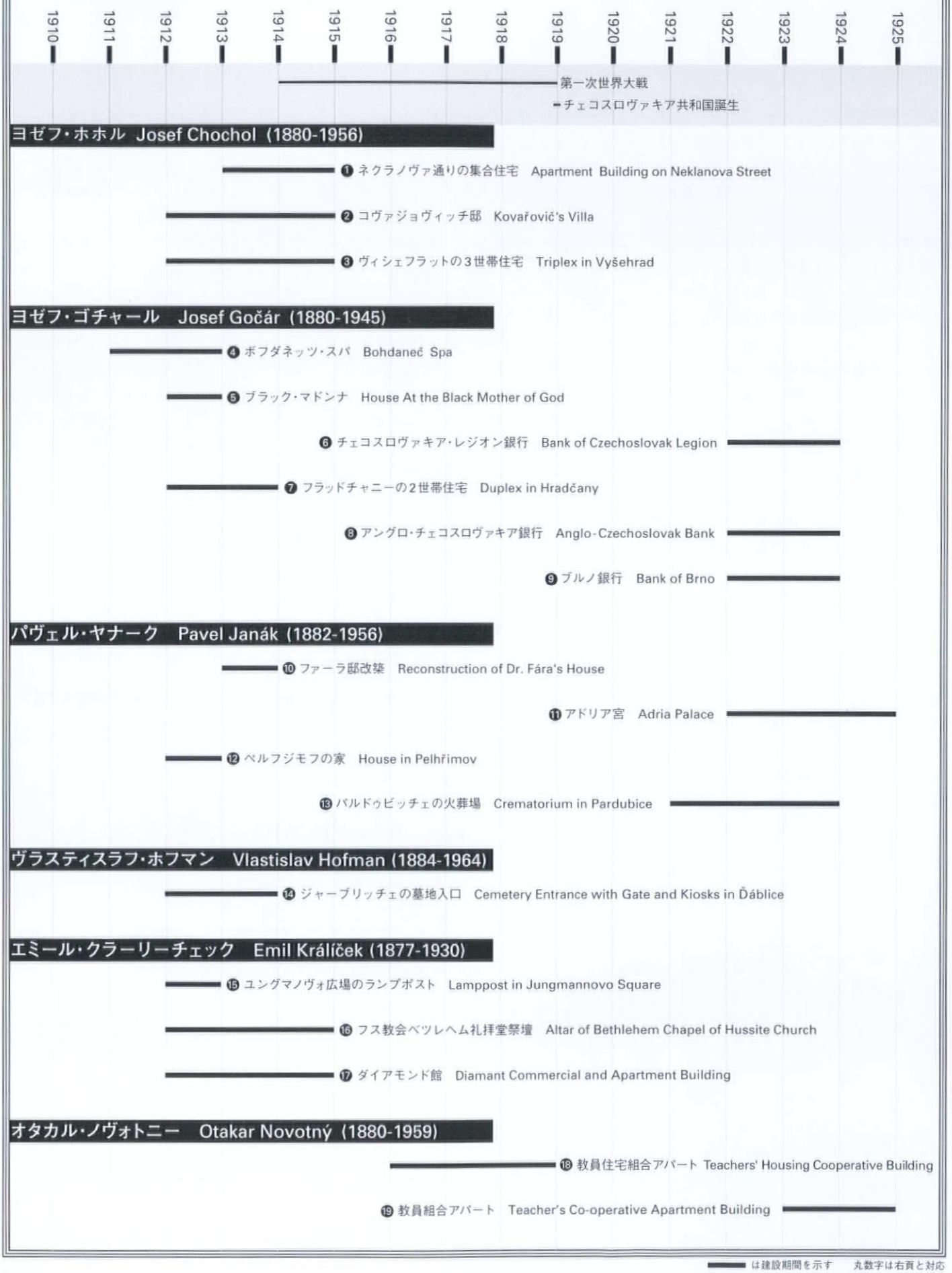
●にいみ・りゅう／ゼゾン美術館学芸員



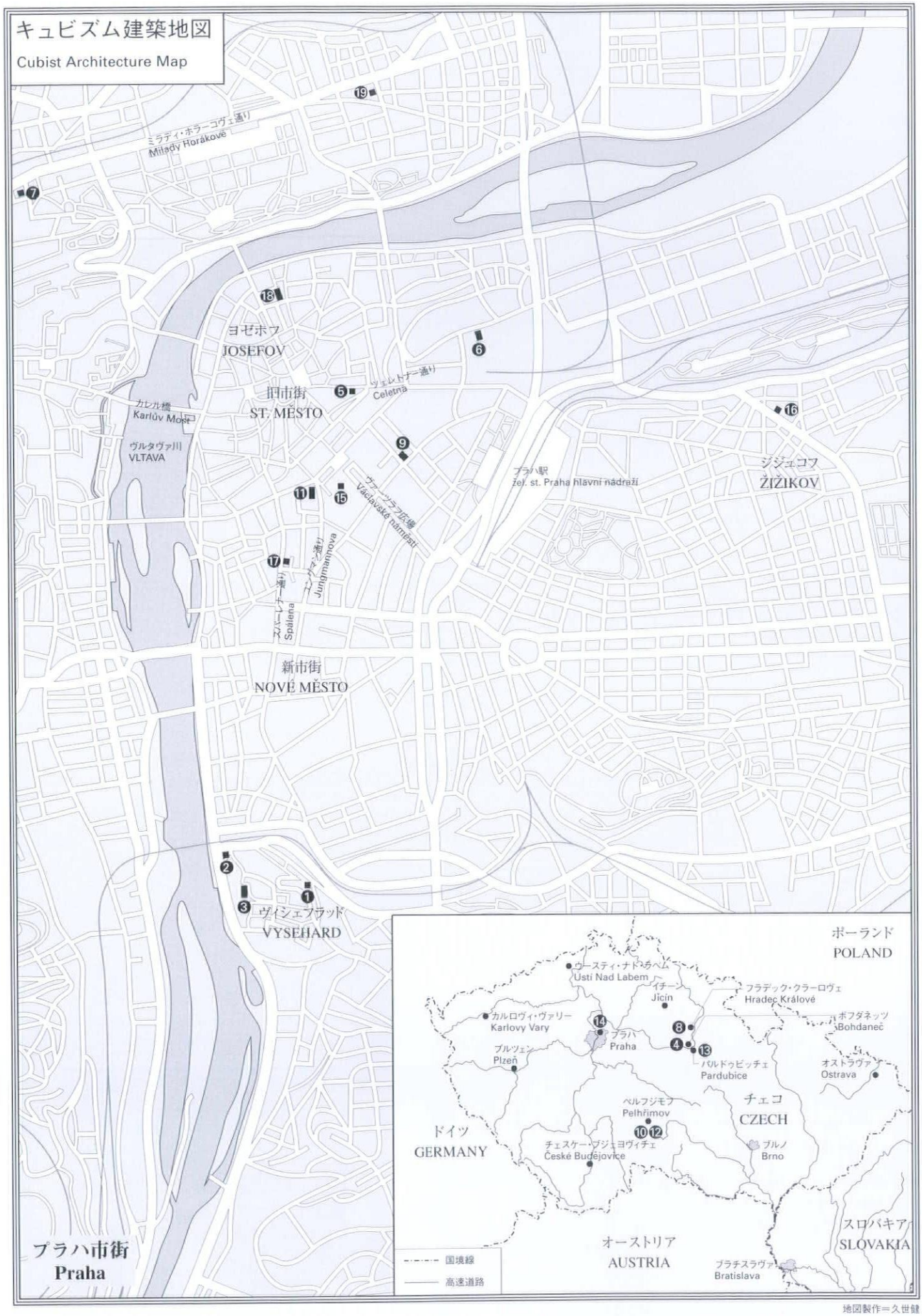
ヨゼフ・ゴチャール（ブラック・マドンナ）断面図

チェコ・キュビズム建築年表

Chronology of Czech Cubist and Rondocubist Architecture



━ は建設期間を示す　丸数字は右頁と対応


キュビズム建築地図
Cubist Architecture Map
ミラディ・ホラーコヴェ通り
Milady Horákové
ヨゼホフ
JOSEFOV
旧市街
ST. MĚSTO
カレル橋
Karlův Most
ヴルタヴァ川
VLTAVA
ツェレトナー通り
Celetná
ヴァーツラフ広場
Václavská náměstí
ユングマン通り
Jungmannova
スパーレナー通り
Spálena
新市街
NOVÉ MĚSTO
プラハ駅
žel. st. Praha hlavní nádraží
ジジェコフ
ŽIŽKOV
ヴィシェフラッド
VYSEHARD
プラハ市街
Praha
ポーランド
POLAND
ウースティ・ナド・ラベム
Ústí Nad Labem
イチーン
Jičín
フラデック・クラーロヴェ
Hradec Králové
カルロヴィ・ヴァリー
Karlovy Vary
プラハ
Praha
ボフダネッツ
Bohdaneč
プルゼン
Plzeň
パルドゥビッチェ
Pardubice
オストラヴァ
Ostrava
ペルフジモフ
Pelhřimov
チェコ
CZECH
ドイツ
GERMANY
チェスケー・ブジェヨヴィチェ
České Budějovice
ブルノ
Brno
スロバキア
SLOVAKIA
オーストリア
AUSTRIA
ブラチスラヴァ
Bratislava
国境線
高速道路

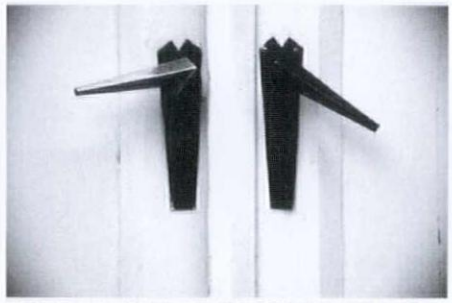
地図製作＝久世健

協力　Supported by

ヤン・セケラ：チェコ・ファイン・アート美術館ブラック・マドンナ館　Jan Sekera: The House At the Black Madonna, The Czech Museum of Fine Arts（ブラック・マドンナ）
ローウェGGK　LOWE GGK, spol.s.r.o（コヴァジョヴィッチ邸）
ピーター・カピュスタ：ナツォン　Peter Kapusta: NACON a.s.（ヴィシェフラッドの3世帯住宅）
イリ・スヴェストカ・ギャラリー　Jiri Svestka Gallery（ウルヴァーネック邸）
チェコスロヴェンスカー・オブボドニー銀行　Československá Obchodní Banka a.s.（チェコスロヴァキア・レジオン銀行）
プラハ装飾美術館　Museum of Decorative Arts in Prague
チェコ共和国大統領府（プラハ城）　Office of the President of the Czech Republic
ペトル・クライチ：国立技術博物館アーキテクチュラル・アーカイヴ　Petr Krajči: National Technical Museum Architectural Archive
ペトル・チルカ：トゥリアート　Petr Cilka: Triart

図面提供　Drawings

国立技術博物館アーキテクチュラル・アーカイヴ　National Technical Museum Architectural Archive
（p11, p19, p24, p34, p38, p52, p53）


ヨゼフ・ホホル〈ネクラノヴァ通りの集合住宅〉正面入口扉

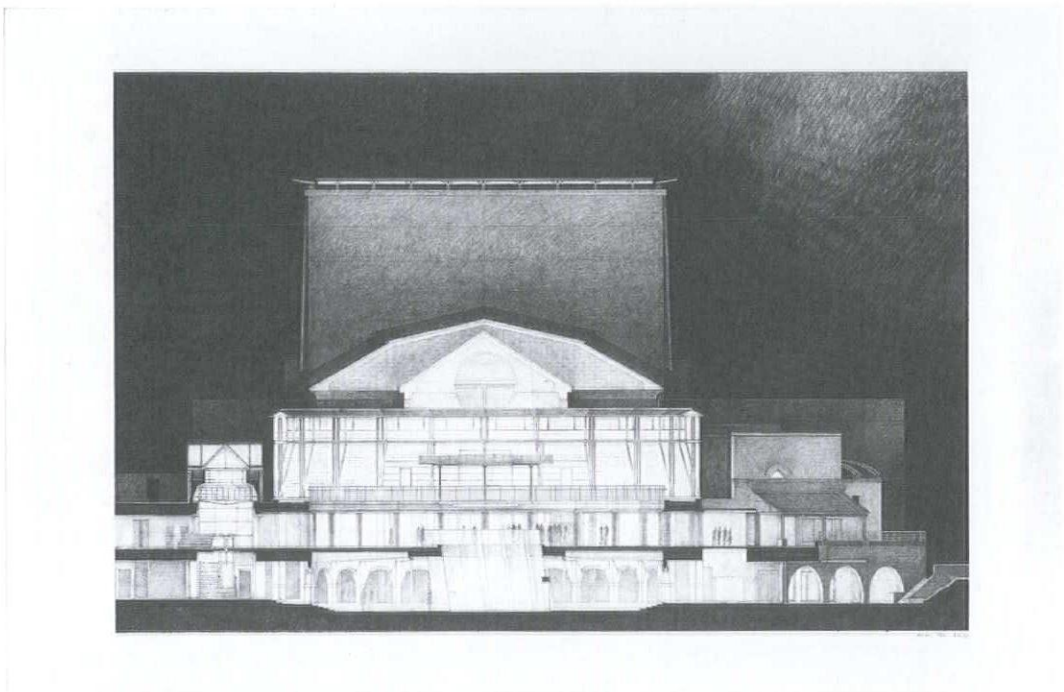
---

p24–25で紹介したブラック・マドンナは現在、チェコ・キュビズム作品を常設しているファイン・アート美術館として使用されている。

［チェコ・ファイン・アート美術館ブラック・マドンナ館（キュビズム美術館）The House At the Black Madonna, The Czech Museum of Fine Arts (Czech Cubism Museum)］
開館時間：10:00–12:00, 13:00–18:00　月曜休館
住所：プラハ1区旧市街、ツェレトナー通り34
Celetná 34, Praha 1 Staré Město



香山壽夫のドローイングと空間



〈彩の国さいたま芸術劇場〉ロトンダ中央断面図　990×645mm

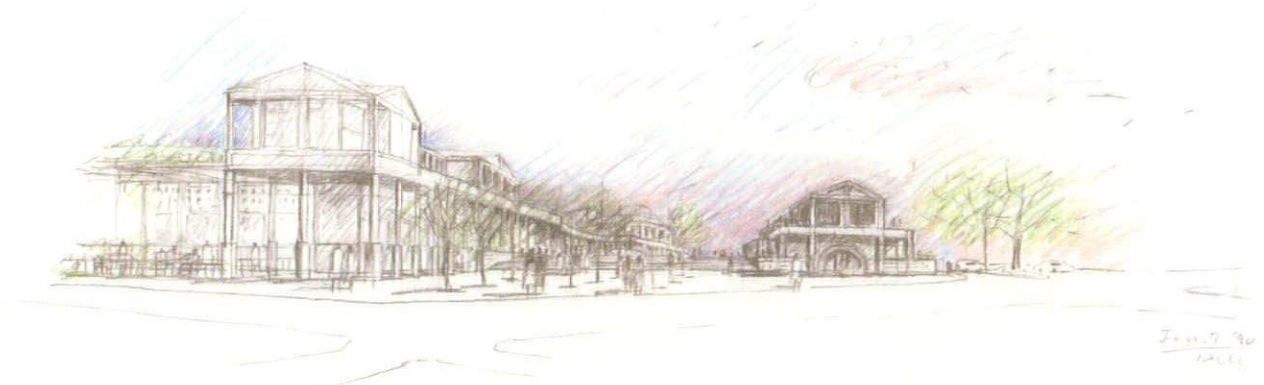
彩の国さいたま劇場
東京大学工学部建築学科・土木工学科
関川村資料館
東京大学農学21世紀館
聖学院大学礼拝堂
長久手町文化の家
瀬高町立図書館

彩の国さいたま芸術劇場

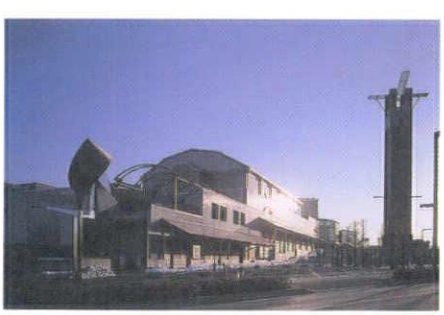
埼玉県与野市　1994年

正面広場からの全景スタディ・スケール。トレース紙に鉛筆と色鉛筆　2点とも420×297mm

コンペ応募案においては、全体は大きい屋根で覆っていたが、それをもう一度組み替えて、中央に広場を持つ小さな町のような構成はないかと探っている。

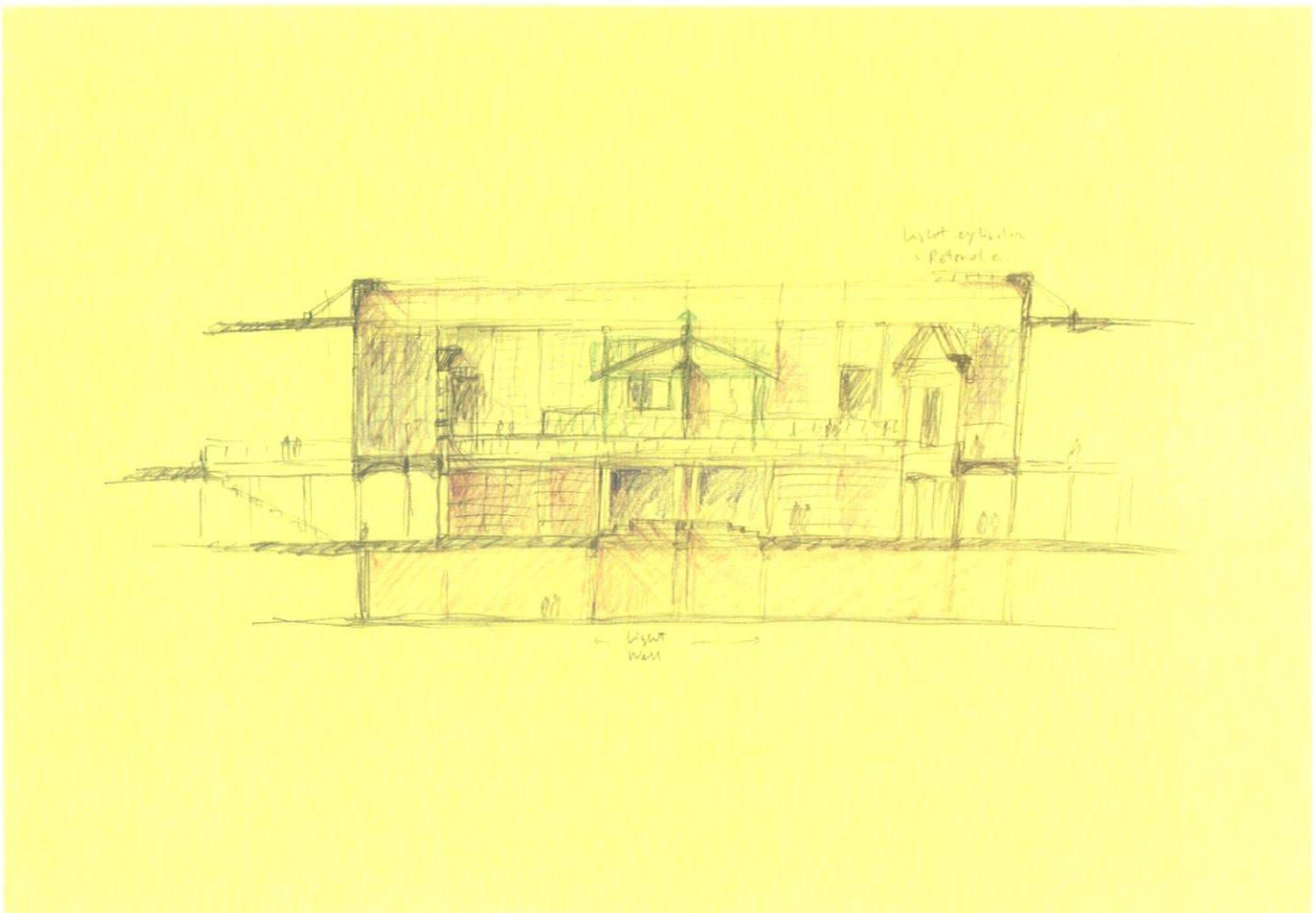






ロトンダ断面スタディ図。黄トレース紙に鉛筆と色鉛筆　420×297mm

群の中心をつくる円形の空間。屋根は無く、光の壁のみで包まれる。その壁の陰に隠れて消えた劇場のファサードを、引き剥がしてはりつけたらどうなるか。

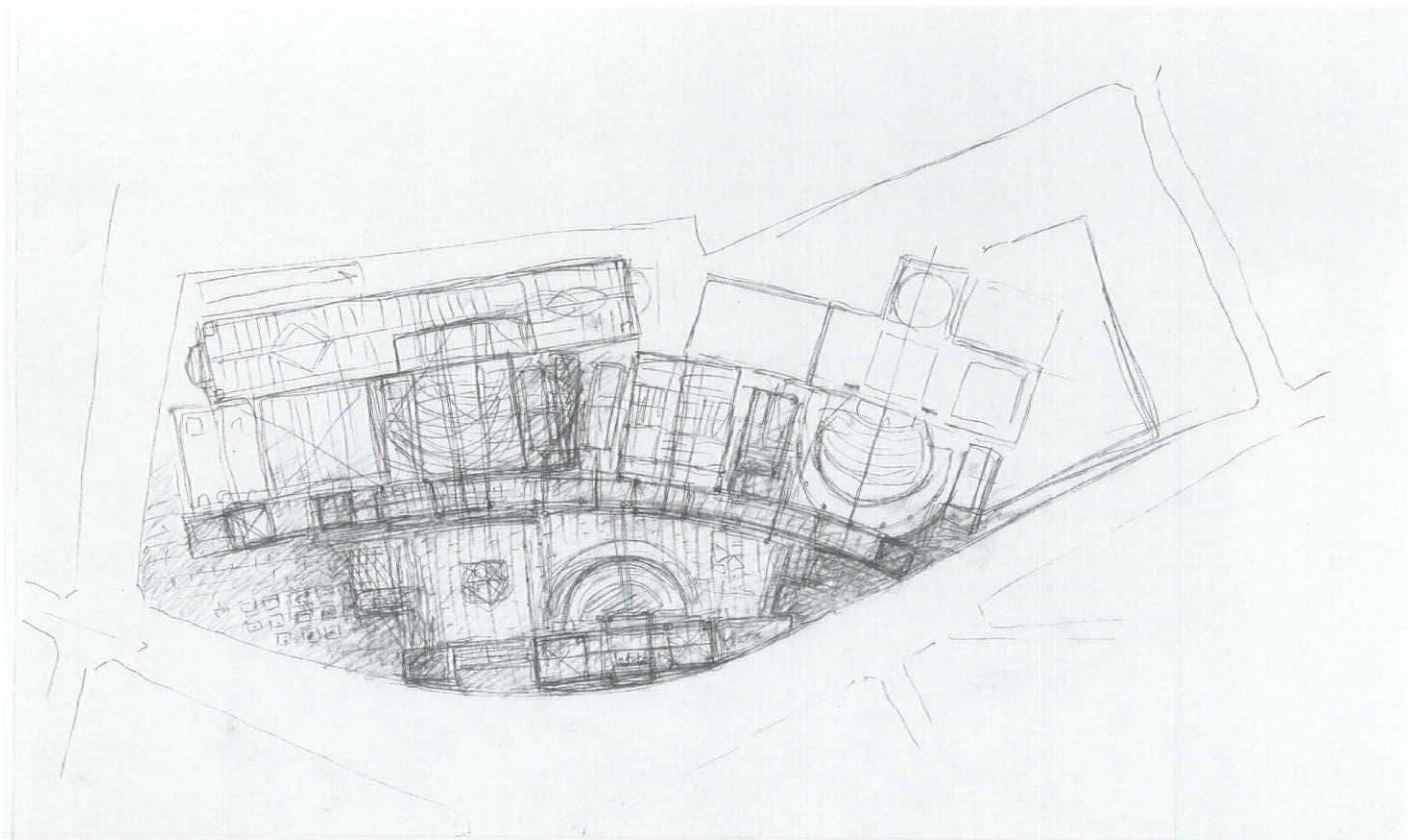


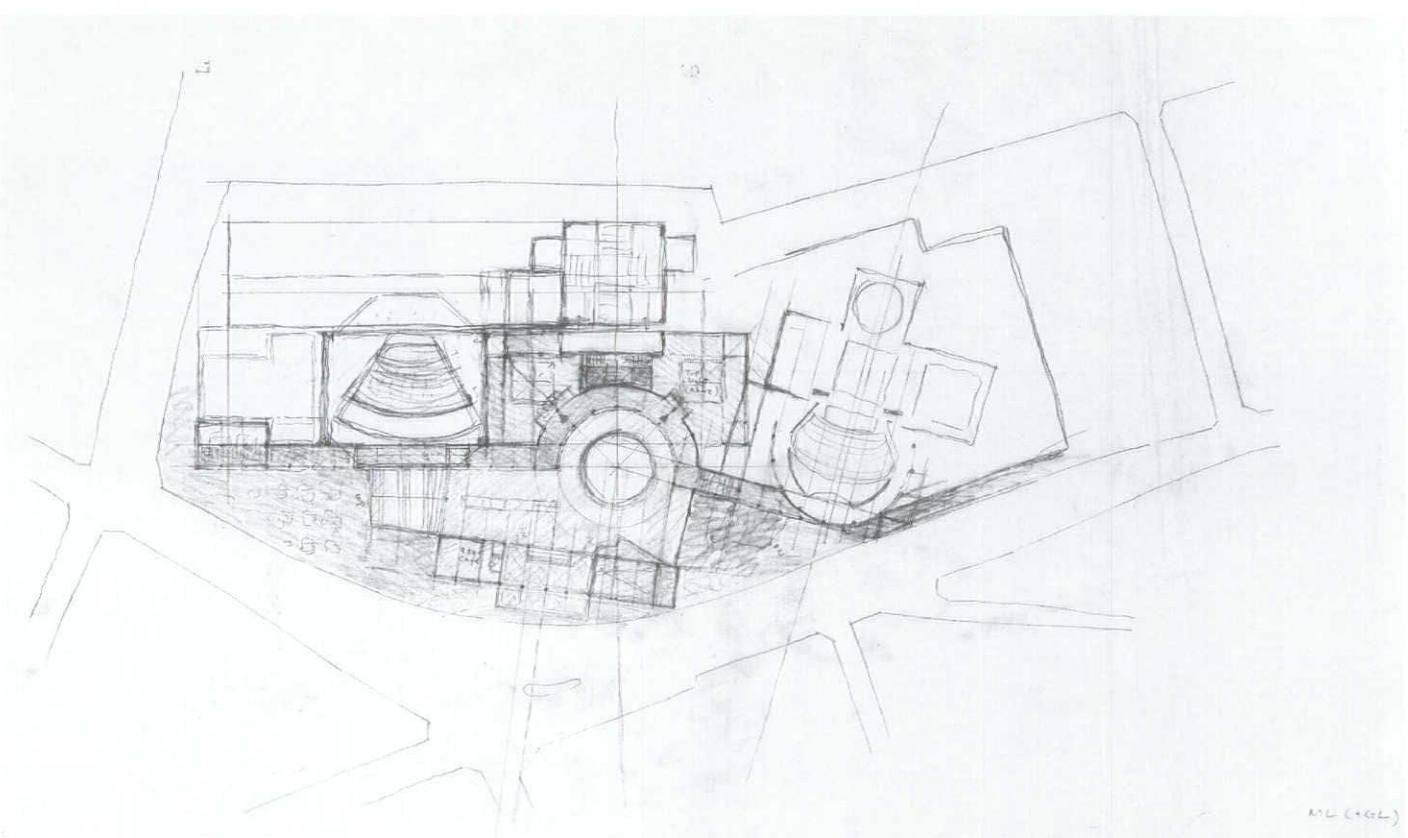


全体配置スタディ図4枚。すべてトレース紙に鉛筆と色鉛筆
P.60上590×445mm　下645×440mm　P.61上630×420mm
下610×420mm

上：湾曲するコロネードで、4つの劇場と練習場群は統合できるか。

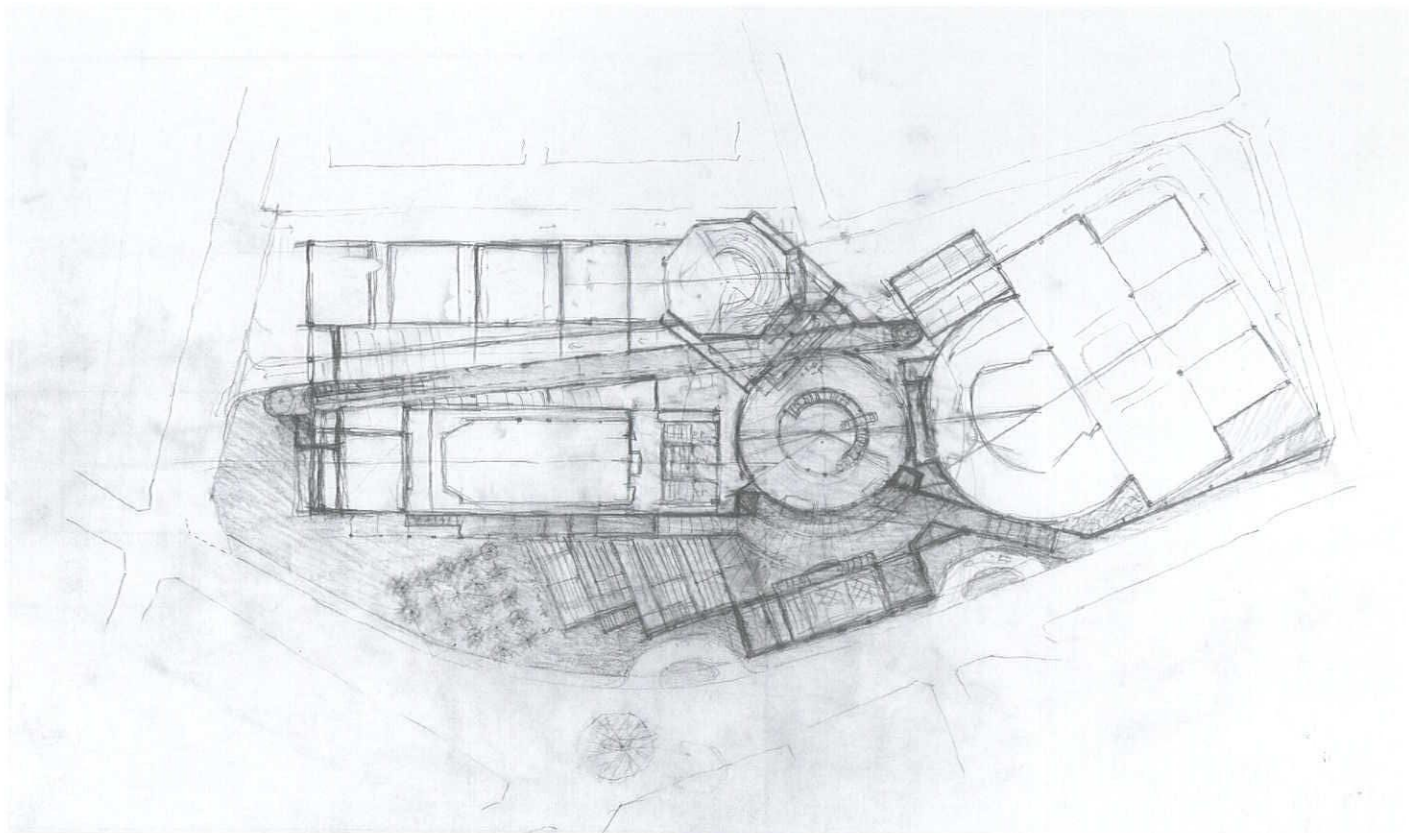
下：コロネードをさらに半円形につくると、群の中心の空間はより強化されるのではないか。

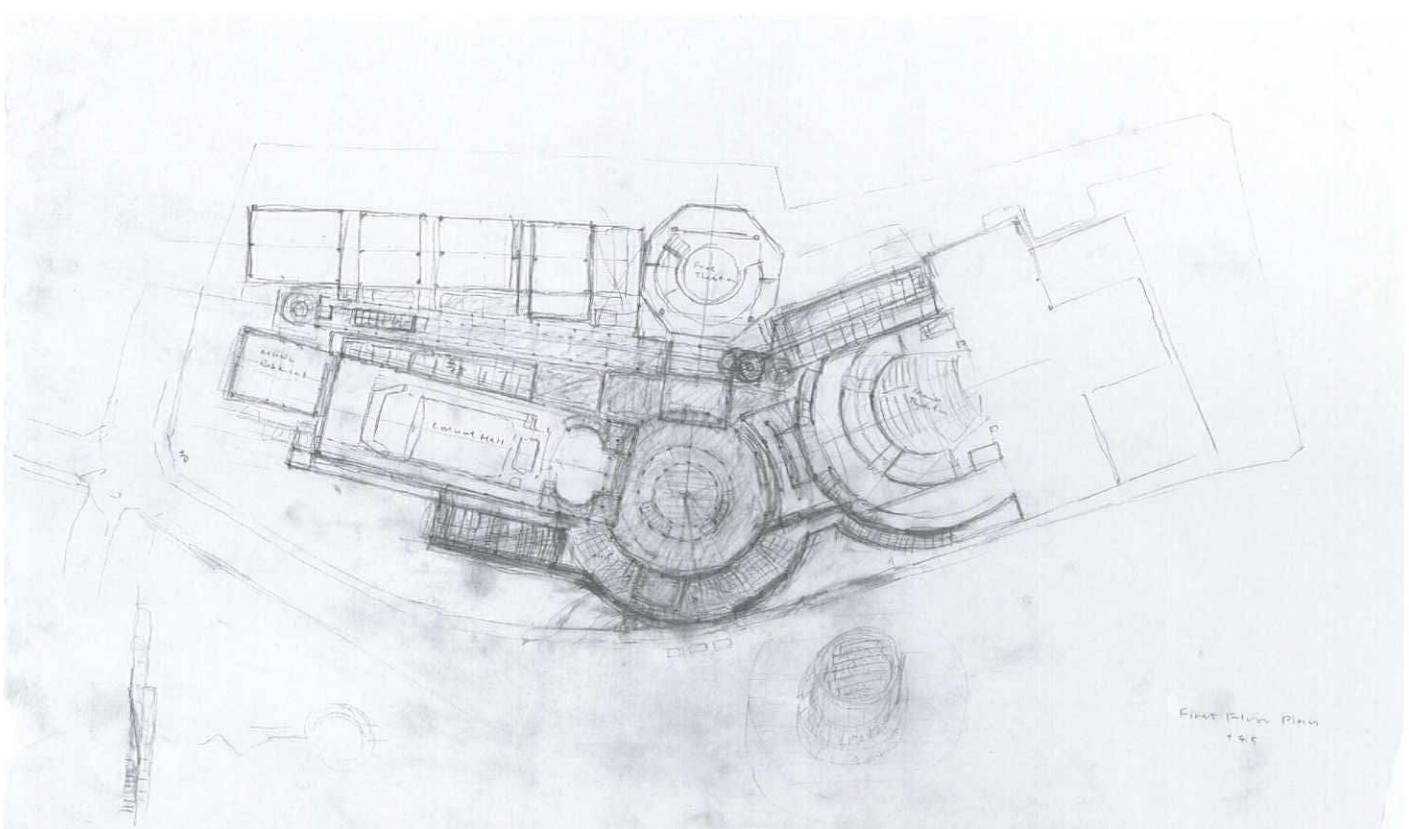


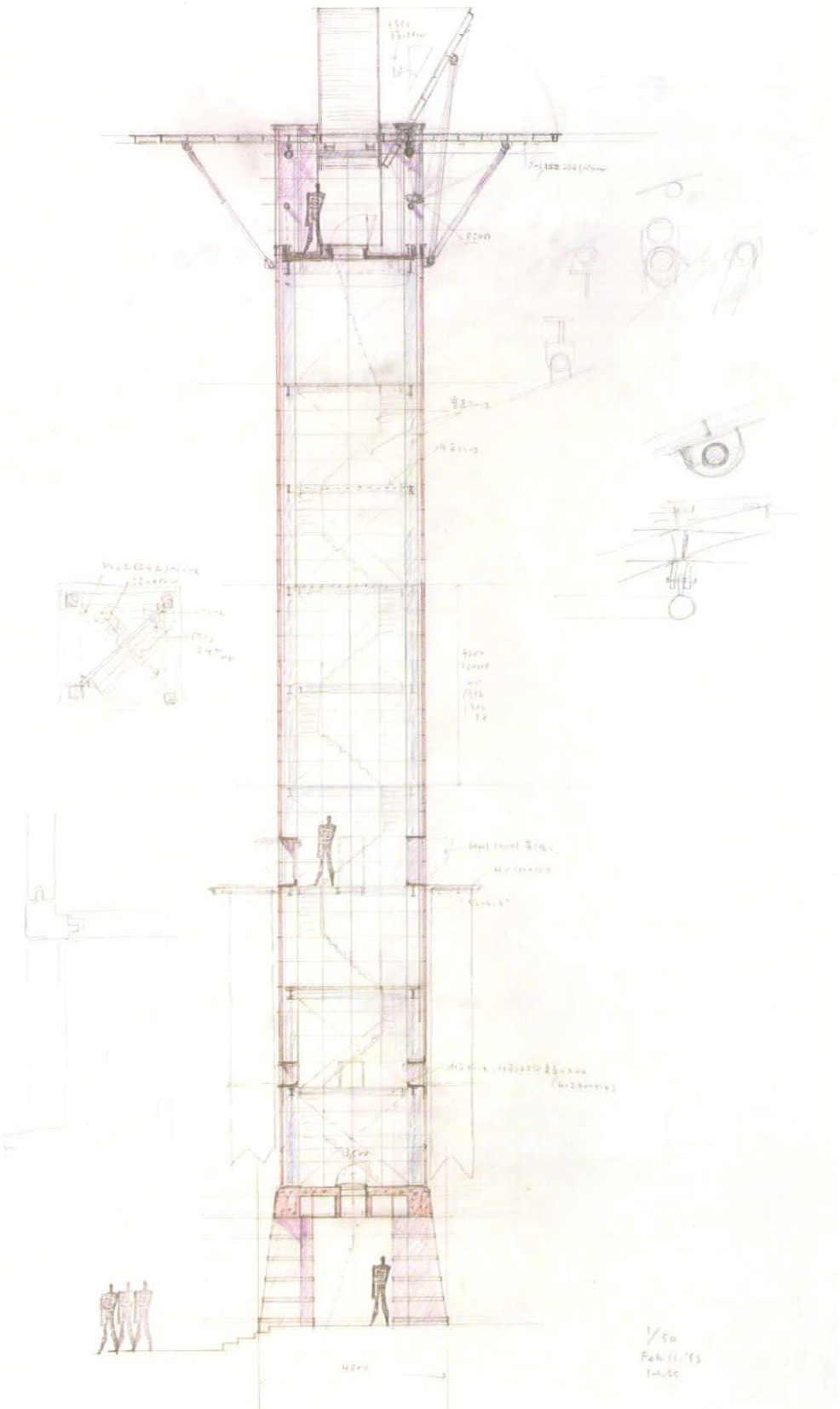


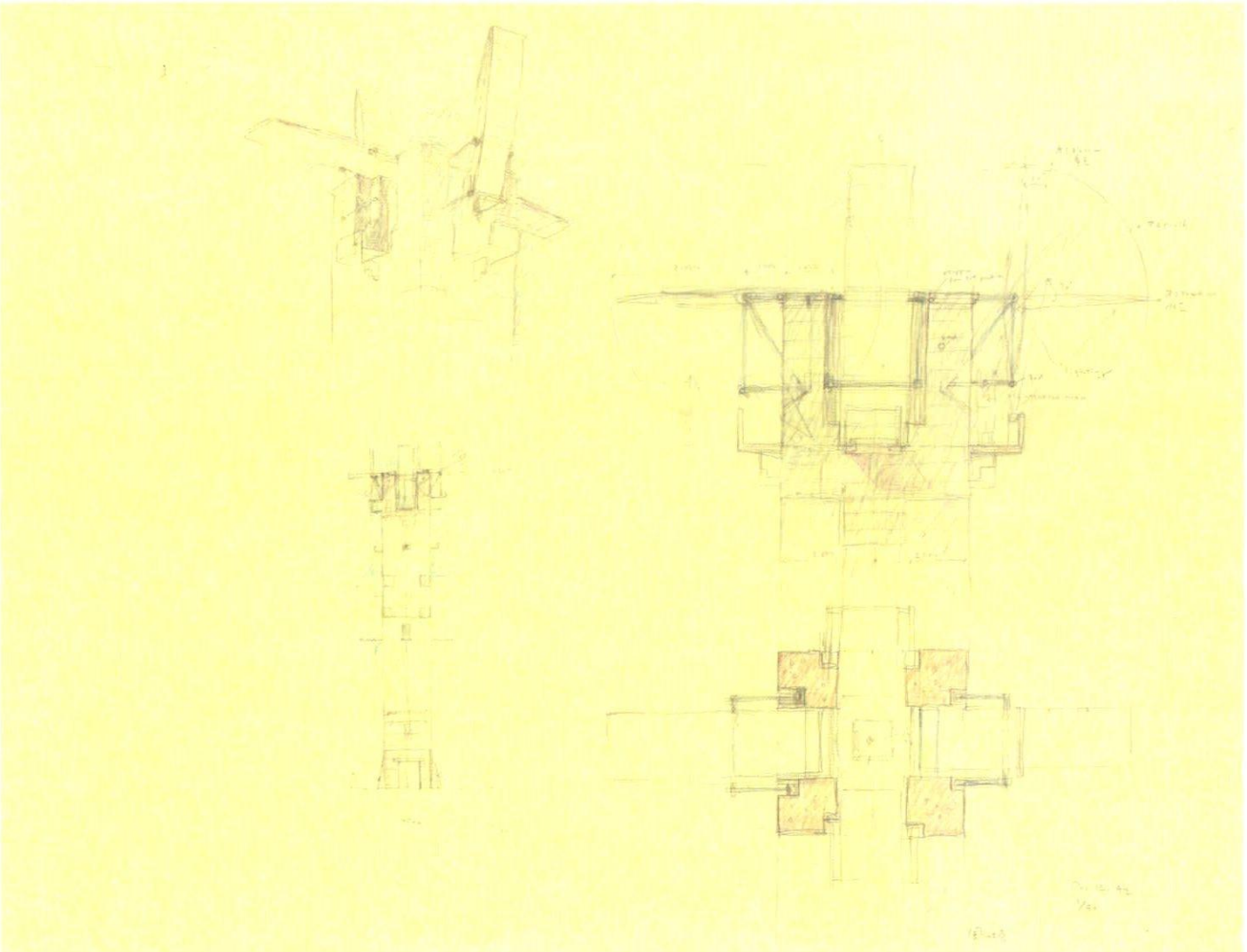
上：さらに中心を強調して円形の空間（ロトンダ）をつくり、一方全体を貫く縦の空間（ガレリア）を導入したらどうか。

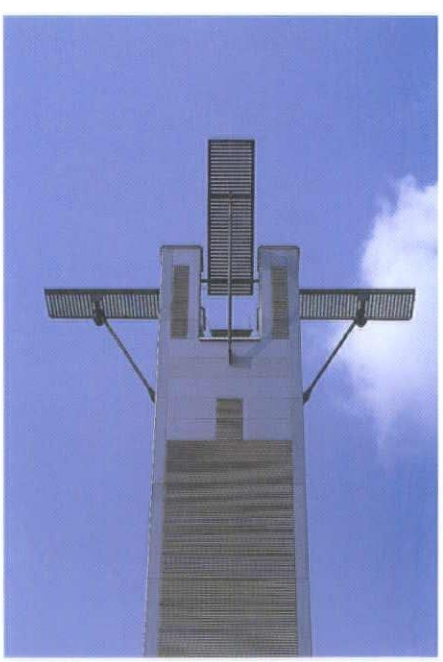
下：大階段は、もっと広くゆるくし、広場そのものにした方がいいだろう。そして強められた中心に錯綜する様々の動きをからめること。





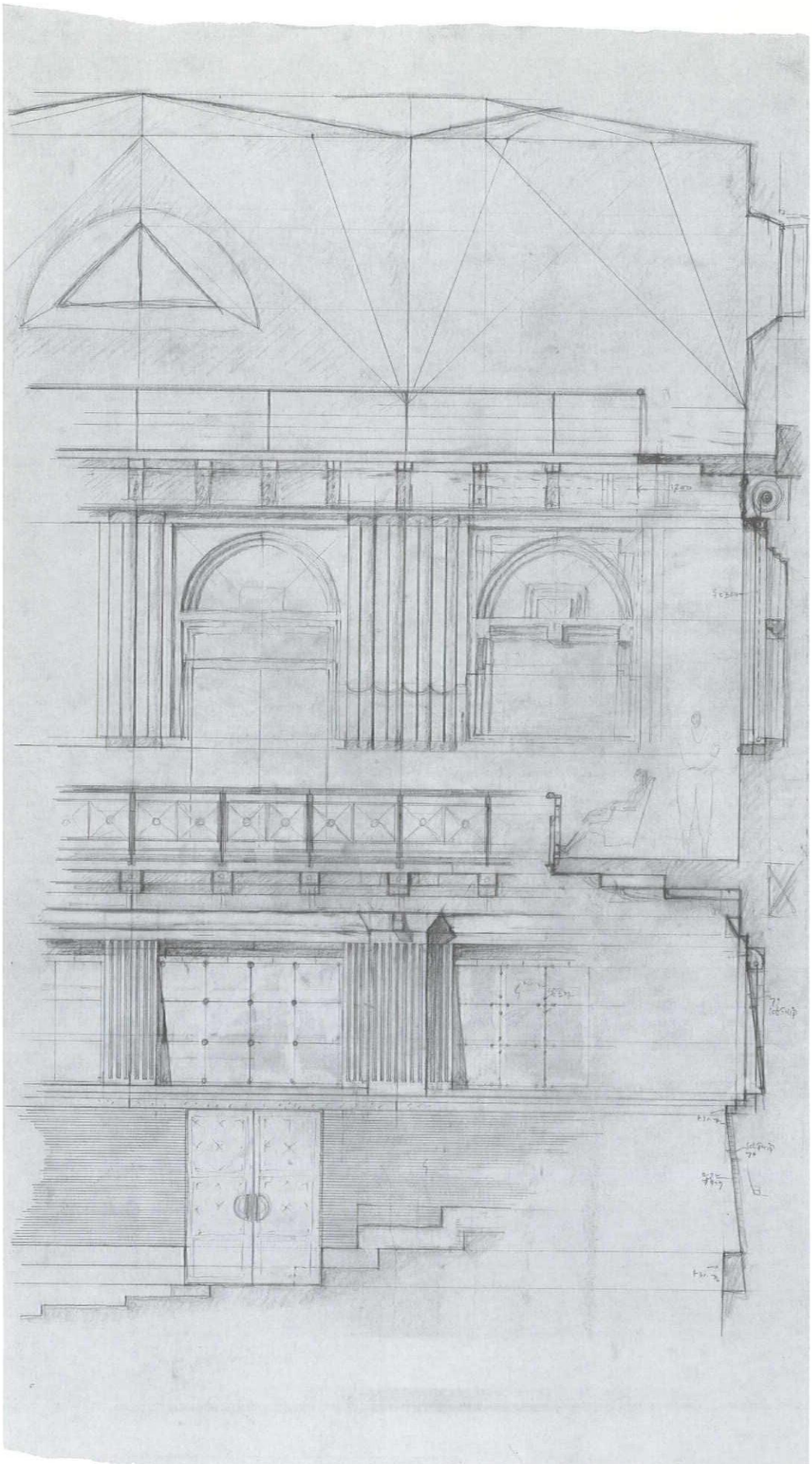






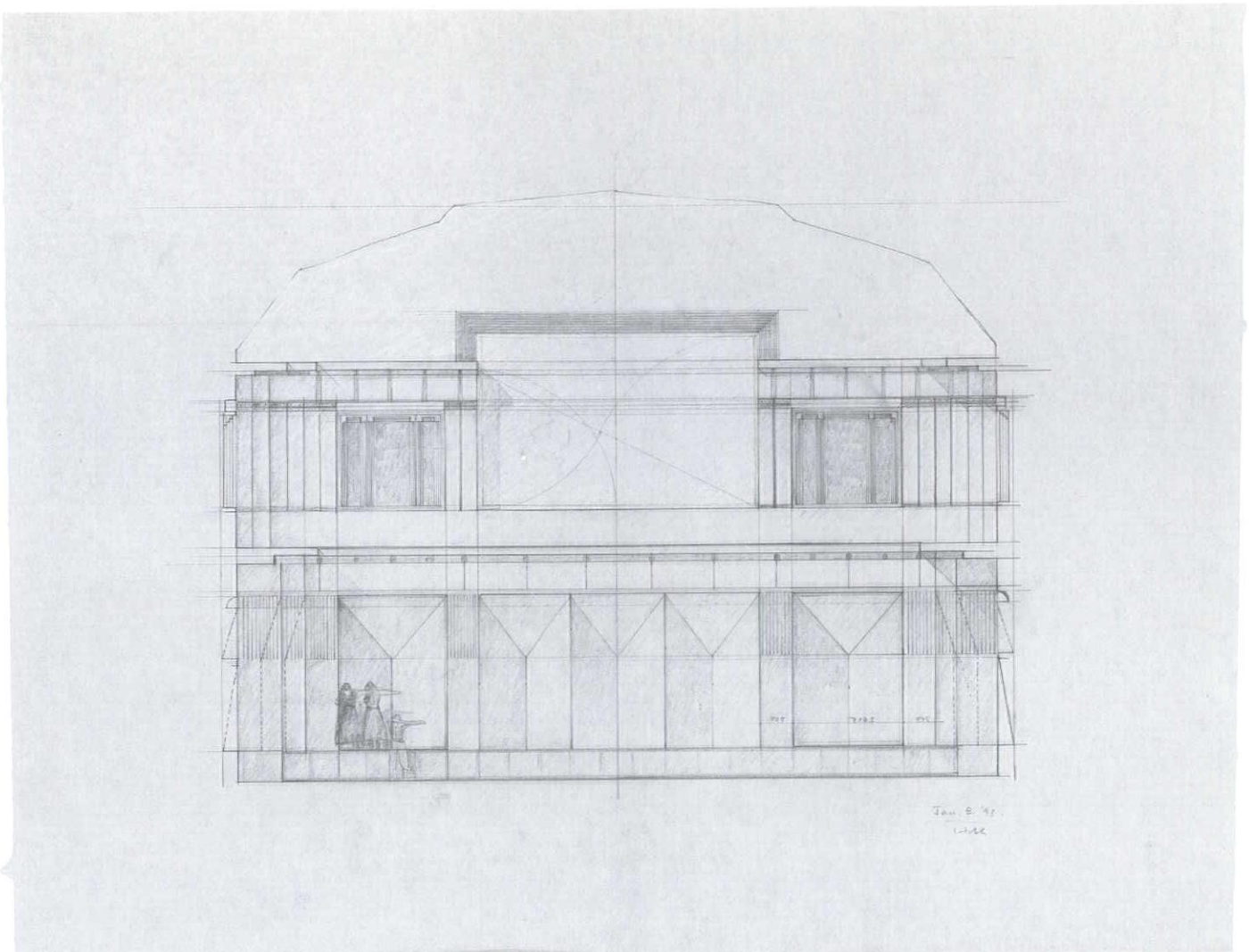
左ページ、塔断面スタディ図。黄トレース紙に鉛筆と色鉛筆
832×455mm
塔頂部スタディスケッチ。黄トレース紙に鉛筆と色鉛筆
605×457mm

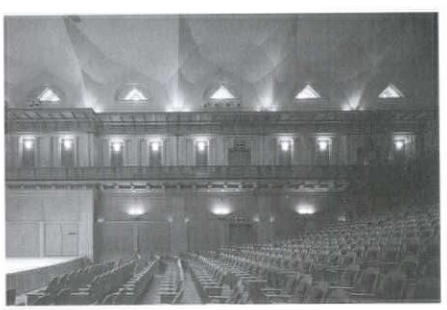
塔の頂部に取り付けられる4枚の羽は、風を受けて回転するように構想され、長い間、その検討が続けられていた。



音楽ホール側壁スタディ図。黄トレース紙に鉛筆と色鉛筆　456×820mm

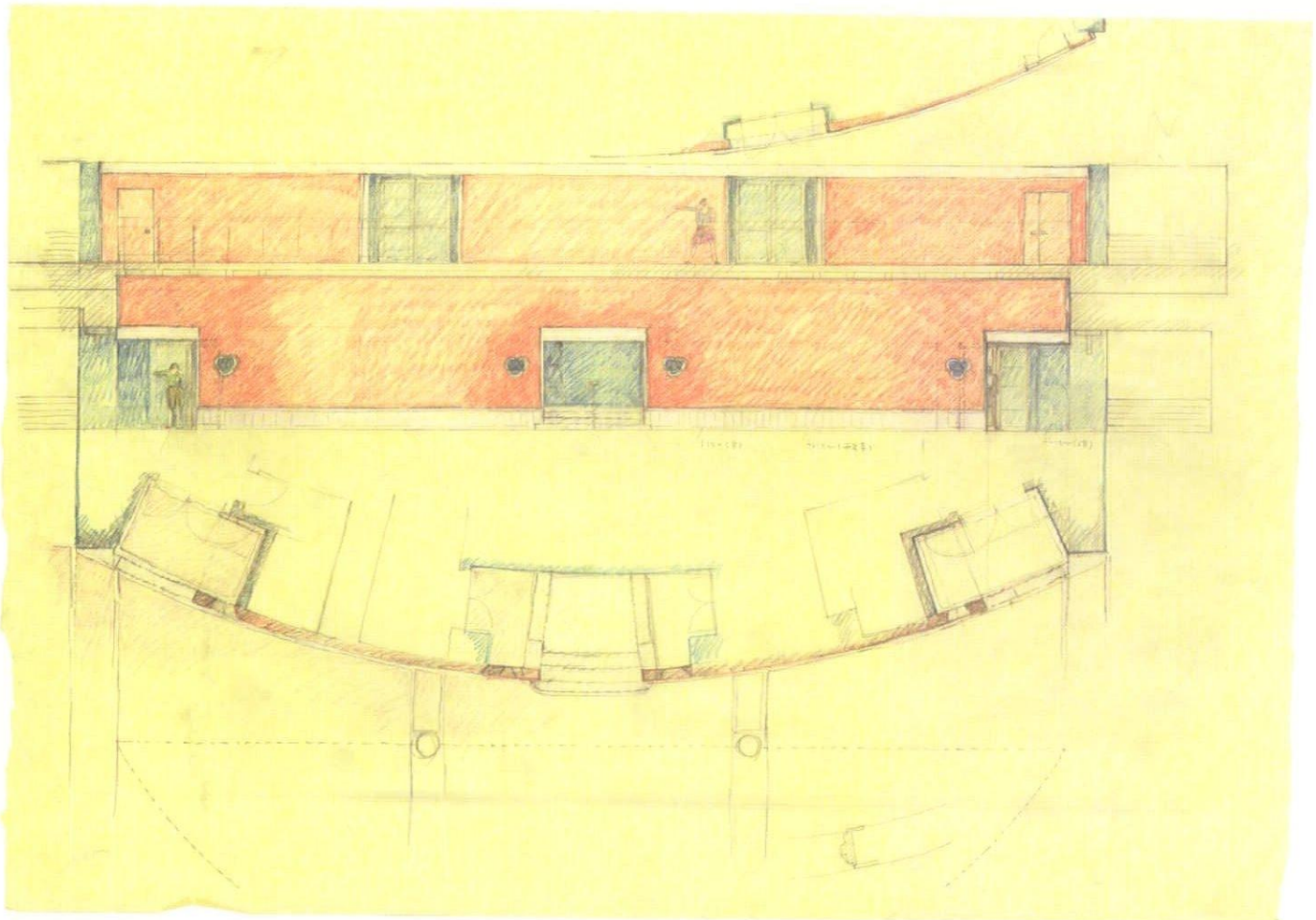
典型的なシュー・ボックス形式の音楽ホールの側壁を三層構成で扱う。音の反射、光の反射を生むものとして、重厚な下層、華やかな中層、浮かぶような上層を、どう組み立てるか。

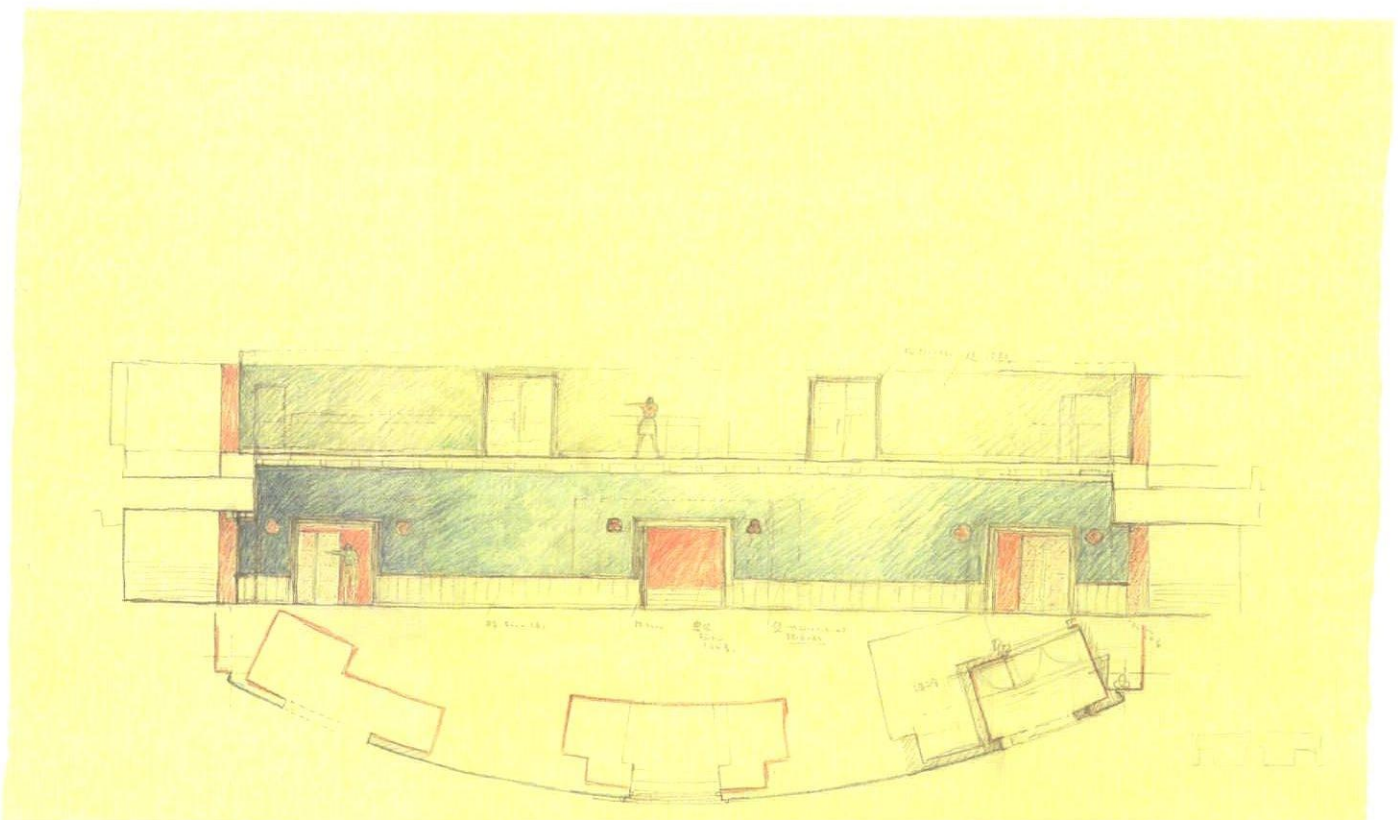




音楽ホール正面スタディ図。黄トレース紙に鉛筆と色鉛筆
585×457mm

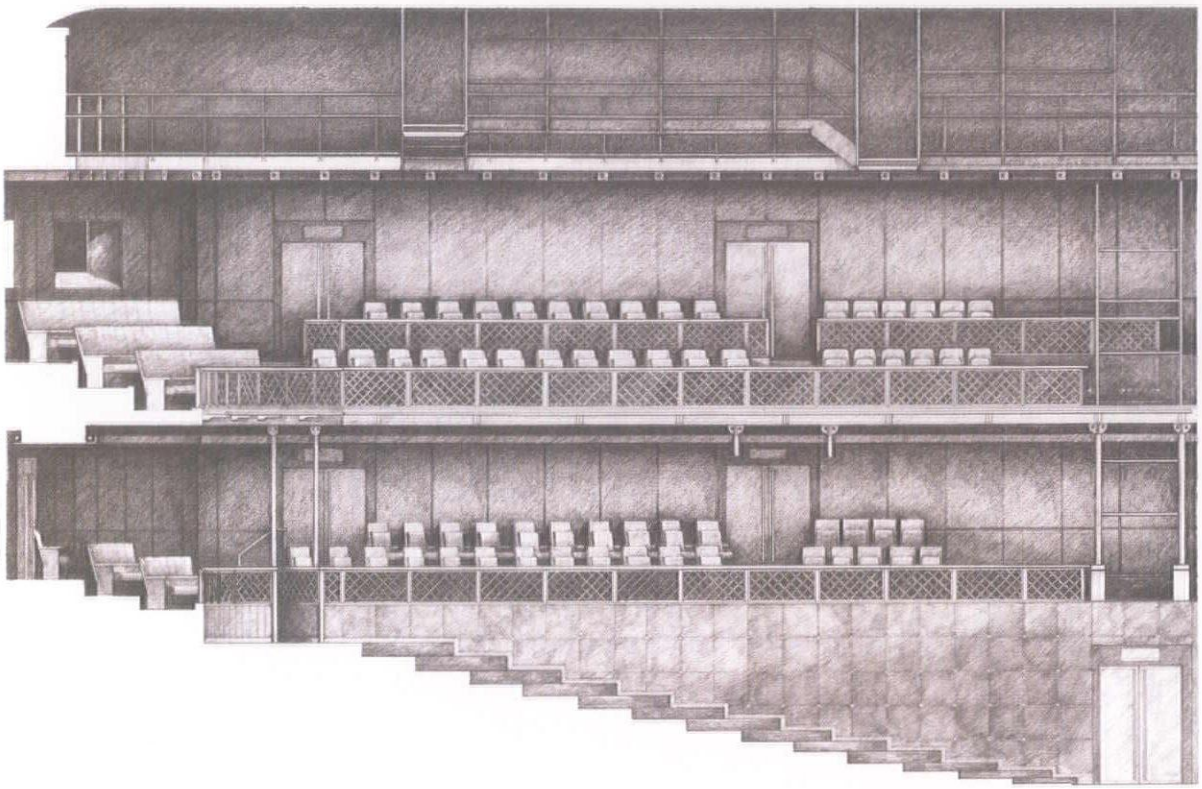
正面にパイプオルガンは付けたくない。教会堂のための楽器を壁の装飾にしたくない。音の反射のための要求を、どのようにして控えめでかつ奥深い目の悦びにつくり変えることができるか。





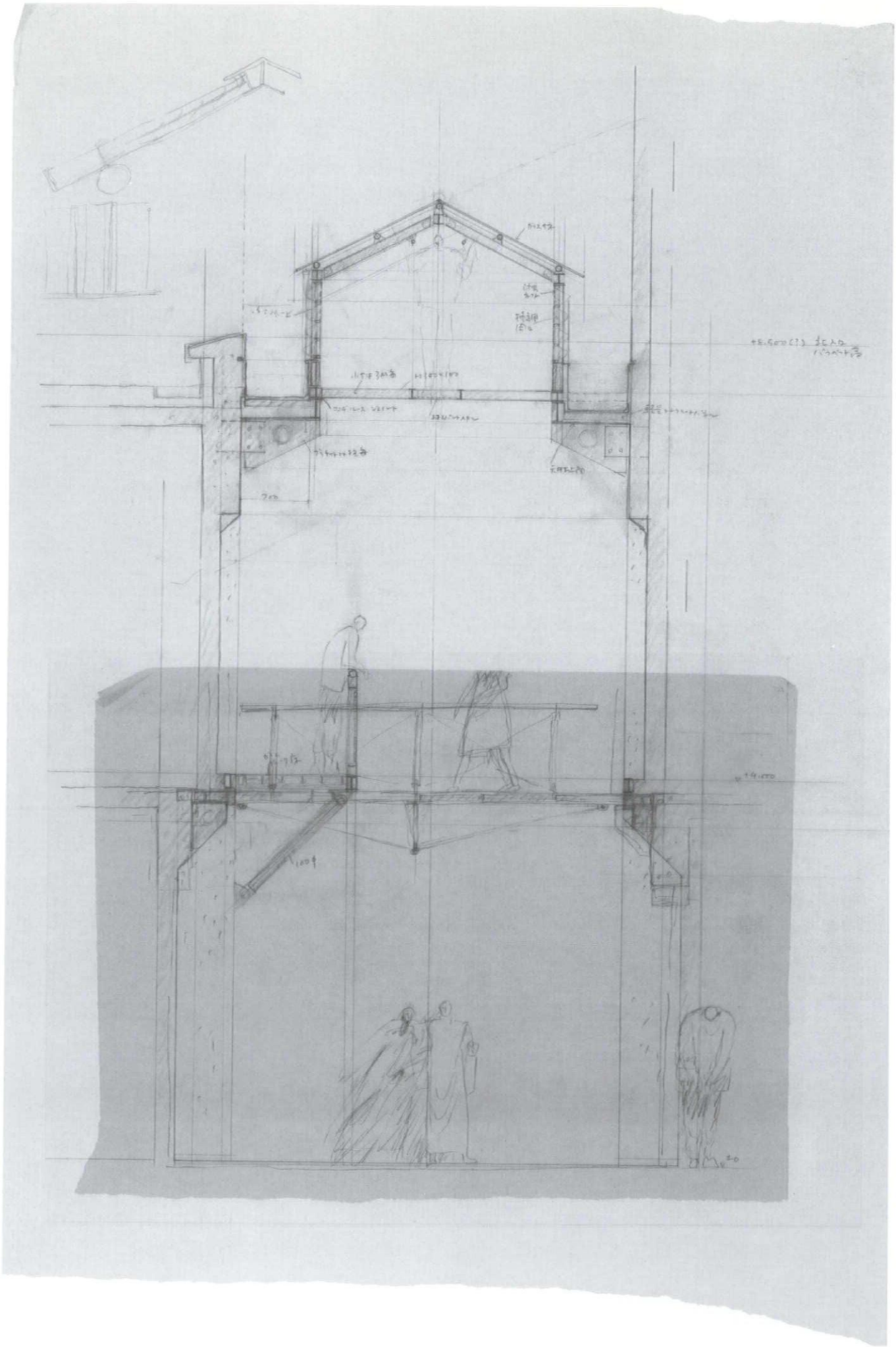
大ホールホワイエ正面スタディ図。黄トレース紙に鉛筆と色鉛筆
上650×457mm　下760×455mm

建築の内部に包まれ、もう一度膨れ上がるホールの空間の強さは、ホワイエの正面ではっきりと提示する必要がある。それを確定するための石のボーダーの扱い、爆発するような色彩と開口。



大ホール側面プレゼンテーション図。イラスト紙に鉛筆　480×330mm

劇場において、人は舞台を見つめるだけでなくて、互いに見つめ見つめられる。その関係は正しくつくられているか。演目によって、日本的にもまた西欧的にも解読されるような細部の意匠は可能か。

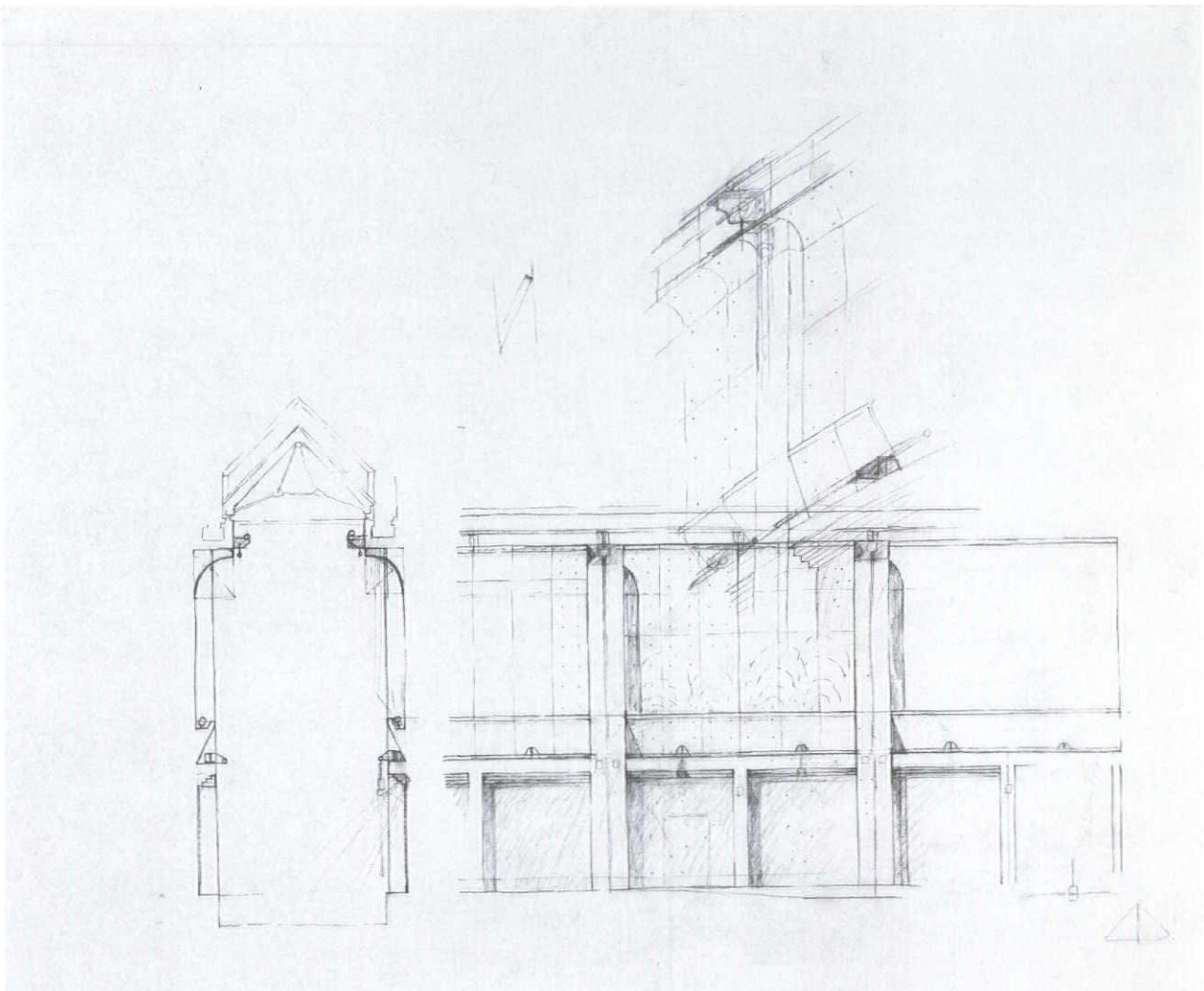


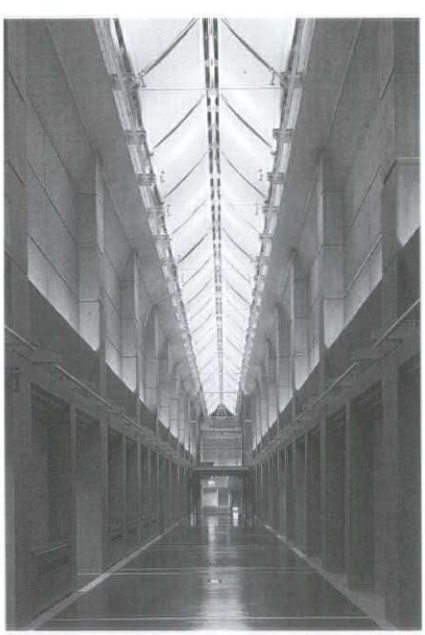
左ページ、ガレリア断面スタディ図。黄トレース紙を2枚重ねている。鉛筆と色鉛筆　665×455mm

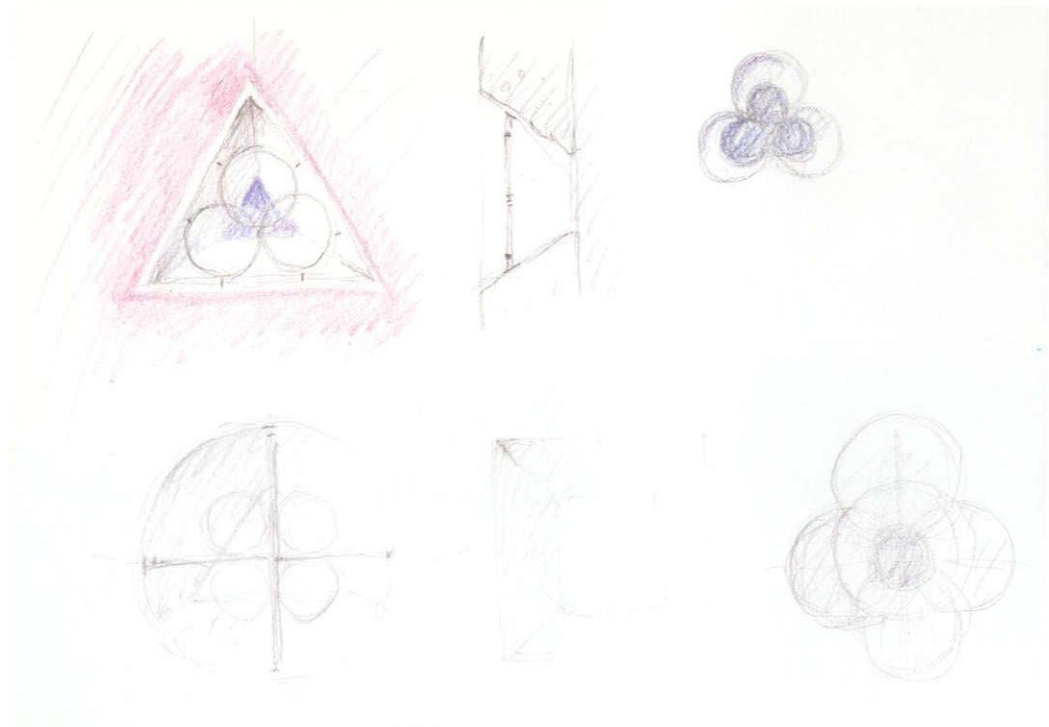
採光と通風のための長大なガラス屋根。それを対比的に示すためにその下を横切るブリッジと、張り出すギャラリーが要る。

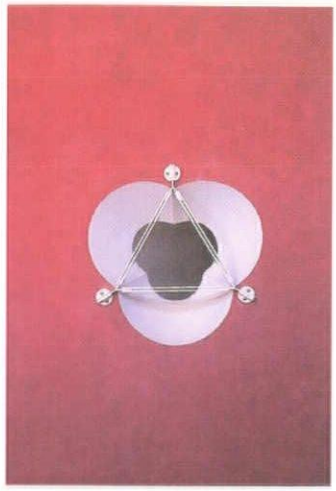
ガレリア側壁スタディ図。黄トレース紙に鉛筆と色鉛筆　586×457mm

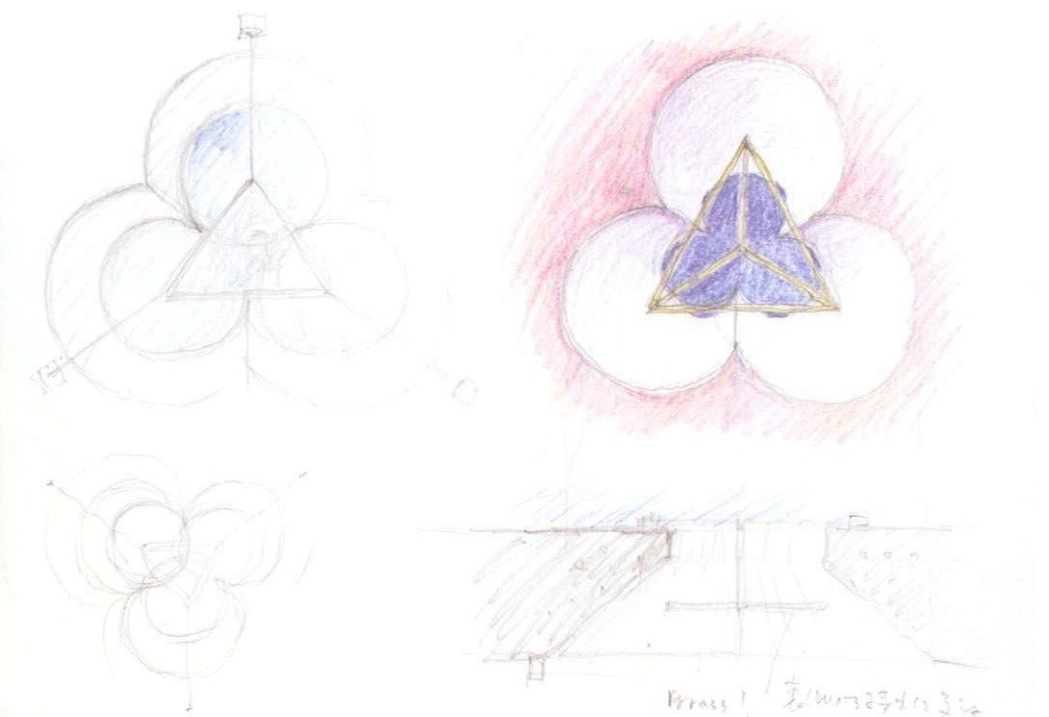
空間を包み込む力を、壁が獲得するための決定的要素は、その頂部の扱い方だ。それを照明、展示のシステムとからめて決定できるか。

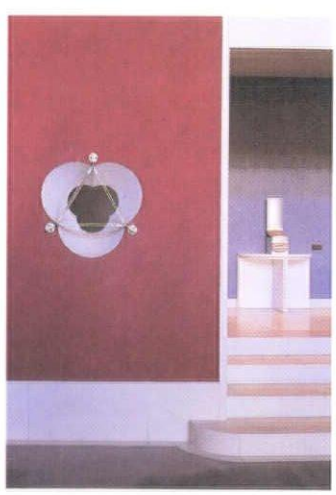






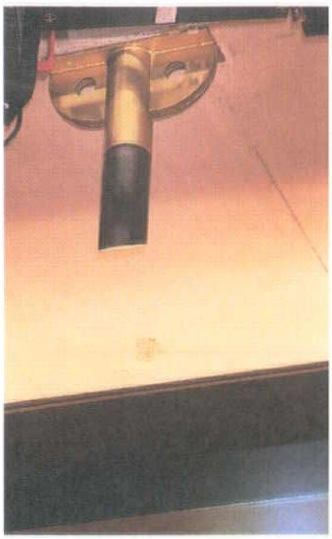


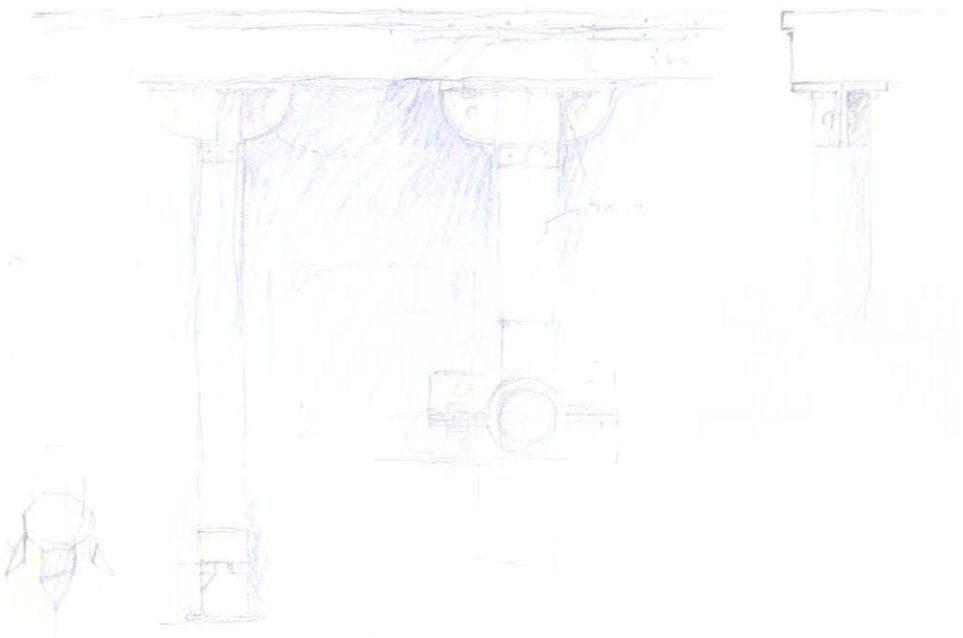




大ホール、ホワイエ正面細部スタディ・スケッチ。B5判スケッチブックに鉛筆と色鉛筆

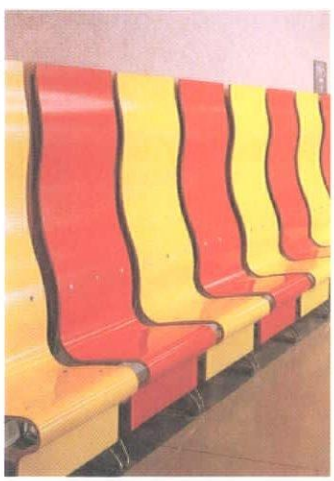
劇場空間は、建物の内部において再度包まれることになる。そのことを集約して示す、ひとつの細部が欲しい。この小さな壁の穴はその力を持ち得るのではないか。

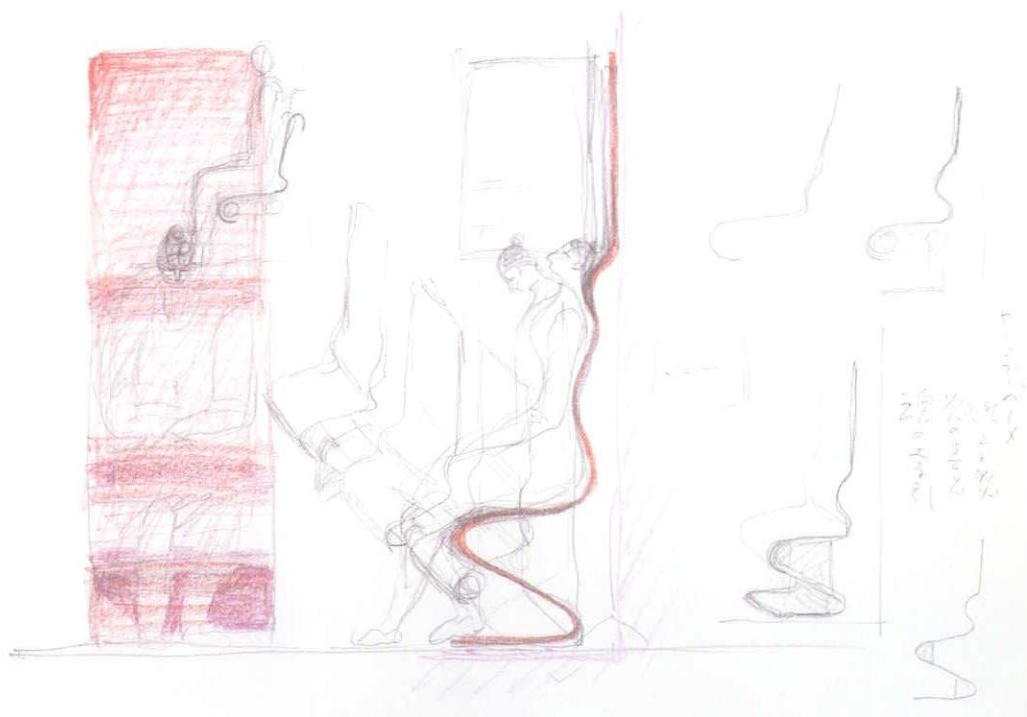




大ホール内部、柱頭スタディ・スケッチ。B5判
スケッチブックに鉛筆と色鉛筆

劇場内部の柱は、舞台を囲む人々の集まりに参加し、それを強める。演目によって、西欧的にも、日本的にも受け取り得るような意匠は可能か。





共通ロビーの椅子、スタディ・スケッチ。B5判
スケッチブックに鉛筆と色鉛筆

劇場ロビーの椅子は、人のいない時にも、公演中の人の集まりの賑やかさを保持しているのものでありたい。板を体に合わせて曲げるだけの形。ヤーコブ・ベーメの燃える炎。

対談

アーティストにも観客にも理想的な劇場

諸井 誠×香山壽夫

香山　いまの日本の劇場というのは、よく箱だけをつくって中味がないと批判されますが、〈彩の国さいたま芸術劇場〉は、世界的なアーチストを次々に呼ばれ素晴らしい盛況で、他の劇場を圧倒する定評を確立しました。

諸井　まず、香山さんがつくってくださった4つの劇場をどう活かすかを基本的な課題としました。音楽ホールは音楽専用ですが、その他のホールの使用目的を固定しないように、映像ホールをシンポジウムの会場に使うとか、レクチャーの会場に使うとか。

香山　とにかく扱うジャンルが広範ですよね。彫刻の新宮晋さんまで登場するとか。

諸井　トータルシアターというアイデアですね。フェンスを越えた企画をいろいろやっているんで、劇場全部を包括するような形で、新宮さんと何かやろうって提案したんですよ。「劇場で作品を展示しろ。劇場は、人間が演劇するところではなくて、彫刻だって演じられるところなんだから、劇場でやれ」と。もうひとつは、ガレリアとか情報プラザとかあそこの周辺の空間を使おうと。

香山　あの中心にある光庭もそうでしたね。

諸井　劇場の展示空間を活かして、あなたの作品の写真を並べようと言ったんです。ちょうど新宮さんが自分の作品集を作られたんで、それを1ページずつ飾っちゃおうって。それで、新宮さんが乗ってきて、同時に行ったイベントの方も、役者の卵を使って体操をさせたり、球をつかせたり、いろいろと変なことをやりました。宇宙船みたいなのがふらふら劇場の中をさまよったり。とても評判良かったですね。

香山　新宮さんの作品は、もともと動く彫刻でしょう。普通は野外で見ているけど、あれが劇場の舞台の上で、しかも映像とか人間が絡んで見るのは驚きだった。ああいう劇場の使い方は初めてじゃないですか。面白かったなあ。小劇場の中にも、誰もいなくて、彫刻だけ動いていたでしょう。暗い中で。

諸井　ここまでやれるとなると、劇場の概念というのは、無限に広がるわけです。劇場は閉ざされた空間なんだけど、その閉鎖空間をいかに破るかという、破る方法論ですよね。

香山　まず取り込むジャンルが新しい。総合的ですね。

諸井　今度は、「やっぱり文学も取り入れなきゃ」というんで、与野在住で短歌の加藤克己さん、熊谷の前衛の俳人で金子兜太らを招いて、年3回やっている芸術・文化フォーラムという企画に登場してもらう。これで、詩歌・文学が取り込めますから、非常に広い範囲を取り込んだ劇場になる。

香山　舞踊も活発に招聘していますが、特に96年はダンス界が沸きましたね。ピナ・ヴァウシュに、カナダのラララヒューマンステップス、連続した際は一大ニュースでした。

諸井　他にもNDT3などを呼んできて、皆、ものすごく当たりました。そのほとぼりが冷めないうちに、今年10月ごろに、ラララヒューマンステップスを再招聘しまして、今度は1ヶ月滞在させて、その間に作品を仕上げて上演する。それで世界公演に旅立つという、プロダクションをやってみようと。

香山　制作を埼玉でやるということですか。

諸井　ええ。うちのために作品を作って、うちで初演をして、エドワード・ロックがそれを持って、ヨーロッパに出かけて行くようにする。その次は、ピナ・ヴァウシュの1ヶ月公演が決まっているんです。平成11年度。やっぱり1ヶ月滞在して、毎週1本ずつ、4本作品を紹介します。

再来日ばかりでなく、イリ・キリアンのネザーランド・ダンス・シアター（NDT）を呼びます。2000年過ぎにキリアン・フェスティバルも予定しています。その後、キリアンを総監督にして、世界ダンスフェスティバルをやろう、などといった具合に、10年先くらいまで決まっているんです。

香山　埼玉で制作してくれるというのが素晴らしいですね。

諸井　それから、クラシックバレエがちょっと弱かったんですが、今年プロコフィエフの「シンデレラ」を森下洋子に頼みまして。松山バレエ団をこれからだんだんと丸抱えみたいにしていきたいと思っています。それで、年1本ずつ、森下さんのメジャーワークをずっと上演していく。予算が許せば、年2本でも3本でもやっていきます。

香山　森下さんは、計画しているころに、たまたまある雑誌の対談で会って、これ、つくりますよと言ったら、そこで踊りたいなんて話してたんですが、実際に劇場で会えた時は嬉しかった。

諸井　その「シンデレラ」をシリーズ第1弾にして、第2弾は「ジゼル」をやりたいんです。その「ジゼル」をやる時に、情報プラザとインフォプラザとガレリアで、大々的に森下さんの写真展をやろうと。3歳から踊っているというから、そのころからの写真を集めて、それで飾っちゃおうと思っています。

1999年に、映像のフェスティバルも企画しています。今まで映像が低調でしたから、1年かけて、映画100本やっちゃうんです。これは、高野悦子さんに総合プロデューサを頼みまして、1年中映画をやる。

香山　設計に入る前の構想段階でのポイントのひとつが内部で制作できる施設をつくるということ。外から持ってきて上演するだけでなく、あそこで作るということです。これも、口ではよく言われますけど、本当にできるところはほとんど無いわけで、いよいよここでもそういう国際的なレベルでのクリエーションがスタートする。館長の構想では、他にも埼玉で作って世界に出そうとしているものがあるんですか。

諸井　ええ。うちは確かに、「彩の国シェイクスピアカンパニー（SSC）」というのを作って、それでその総帥に蜷川さんを据えてるんですけど、同時に、イギリスのロイヤルシェイクスピアカンパニーと組んで、蜷川さんにロイヤルシェイクスピアの演出をさせちゃう。それをうちに持ってくる。ひょっとすると、ロイヤルシェイクスピアカンパニーが日本に滞在して、うちの劇場で、何か作って、それをイギリスに輸出するようになるんじゃないかと思うんですね。

香山　埼玉をコアにして世界を使うということですね。

諸井　というのも、よく向こうへ行って見たり聞いたりして来なきゃ、しょうがないって言うけれど、僕は全部こっちへ引っ張る。よその劇場で見たって、ろくなもんじゃないと。ここへ持って来なきゃ真価はわからない。なぜって、香山さんのつくってくださった劇場は素晴らしいんですよ。だから世界中の人が皆「自分の国の劇場で見るより、こっちの方



香山壽夫

もろい・まこと
1930年東京都生まれ。東京音楽学校（現東京芸術大学音楽部）卒業。現在、〈彩の国さいたま芸術劇場〉館長



がいい」と言う。その一人が、オハッド・ナハリンって、去年9月に呼んだ、イスラエルの振り付け師。この人もイリ・キリアンの系列に入るんだけども、カニンガムの所にもいたことがあって、その人の劇場にうちのスタッフを派遣して、見て来させたんですよ。そうしたら、「あんまり面白くない」って。ところがうちでやったら素晴らしい。スタッフは自分達には見る目がなかったと嘆いていましたが……。

香山　ピナ・ヴァウシュもあそこでやるのを大変喜んだって聞きますけど。

諸井　彼女は「劇場を持って帰りたい」と言うぐらいの気に入りようです。ラララ・ヒューマンステップスも、長期滞在して作品をつくりたいって言ってました。やっぱり稽古場がいいですからね。あの稽古場は垂涎の的じゃないですか。大成功だった。

香山　そうですね。あれも構想からのものなんですが、実際の設計については大議論をしましたね。

諸井　当初香山先生は、舞台の広さがあればいいと思った。ところが僕が、それに額縁がないと意味がない、広大な稽古場をつくってと無理を言って、付帯設備を全部外して、スペースをとってもらった。走ってて飛ぶわけですから、袖を走るという発想がまず必要です。それから監督やそのスタッフが見る場所も要ります。舞台の中に入ってではなく外で見られなくては駄目です。それを全部やっていただいた。蜷川さんも天にも昇る気持ちですよ。皆好きですね、あの稽古場が。

香山　練習を終わった人、待っている人がガレリアを動いている風景もいいですよね。舞踊家がさっと駆けぬけたりする。普通そういう部分は見えない。閉じてもいいような仕掛けにはしていたんだけども、実際に全部オープンにして、市民も歩いていれば、名優も駆けて行くという、あれは素晴らしいですね。ああいう使い方をやっていただくとは思わなかった。

諸井　それからオペラの劇場についても、途中で変更した。僕は当初、日本でオペラというのは反対だったんですが、劇場の実現までにブランクがあって、その間に日本のオペラ事情がすっかり変わってまして。それで一転、オペラ年というのを2年間設けて、そこで、「オペラの日常化」っていう思想を実現しようと。つまり、1億何千万円もかけないで安くやる。そのかわり頻繁にやる。あるとき、集中的にオペラをやって、あとずっと10ヶ月オペラがないというような、そういうのではなくて、毎月できる劇場をつくると、そういうのをやってみようと思っているんですよね。でも突然の計画変更だから、香山先生に、オケピットをつくってくださいとまたお願いして。でも急だから予算がないわけですよ。それで、素晴らしいきれいな劇場になるはずだったのを、全部舞台に投入していただいた。こんなこと、普通の建築家だったら断わりますね。絶対に。途中であんな大きな計画変更をやって、大体、あなたは、オペラ劇場をつくるの反対されていたじゃないかって言われるはずなんだけど、誰も言わなかったですよ。そのへんがやはり、建築家とアーチストの息が合っていたということだと思うんです。

諸井　舞踊をやって、演劇2年、映画1年、オペラは2年。これが成功すれば、全部門にわたって完走したことになる。でも、それだけではなくて、僕は200公演やるつもりなんです。1年間に。これは大変ですよ。

香山　1年間に200公演って、それは考えられない。それを既に3年間やっている。

諸井　結局600事業やっちゃった。もうじき700公演。

香山　信じられないな。

諸井　いやいや、本当に。全く日常としてやっています。スタッフも、すっかり落ち着いてやっていますよ。最初は、相当ばたばたしました。1日に4公演ぶつかったりしたんです。スタッフは皆、それをやりこなしましたね。結局どう効率を良くするかということと、その時の人々の動線ですね。

香山　劇場って、人の動きや溜まり、それにオープンスペースをどう使うか等、そういうのが一番大事なことだと改めて思いますね。

諸井　もうひとつは、これは僕は埼玉県に対して抗議をしたんだけれども、どこの県でも、つくるところまでは建築家の先生でやるんだけど、つくった途端に設計者を閉め出しちゃう。それが普通なんですね。それをさせないというのが僕の思想で、要するに、関わりをずっと持っていただく。ということは逆に言えば、責任を持っていただくということだ。絶対に、香山先生を手放さないぞ、と言ったわけですよ。それでこの間、一大ドローイングイベントをやりまして、6回も講演をしていただいて、全回満員です。切符は前売りで全部ソールドアウト。

香山　そうです。皆喜んでくれて。あれも皆、諸井館長の企画ですからね。しかもあれだけのスペースがある建築の展覧会ってないんですよね。建築学会の展示スペースと言ったって、あの10分の1でしょう。

諸井　そこまでもっていくのに、いろいろな人にいろいろなことをやってもらって、要するに展示空間というものの極限まで広げようと。うわっと皆の意識が広がったところで、香山先生を連れてきても全然目立たないわけよ。だから、全く抵抗がなかったですよ。建築だから、そんなもの、関係ないでしょうなんて言えないですよ、もう。

香山　まったくその通りで、この前のドローイング展については、建築以外の人からたくさんを手紙もらった。文学やっている人、美術の人間、あるいは全く別のジャンルのお医者さんとかから面白かったと言って。

諸井　上手くいきましたよね。

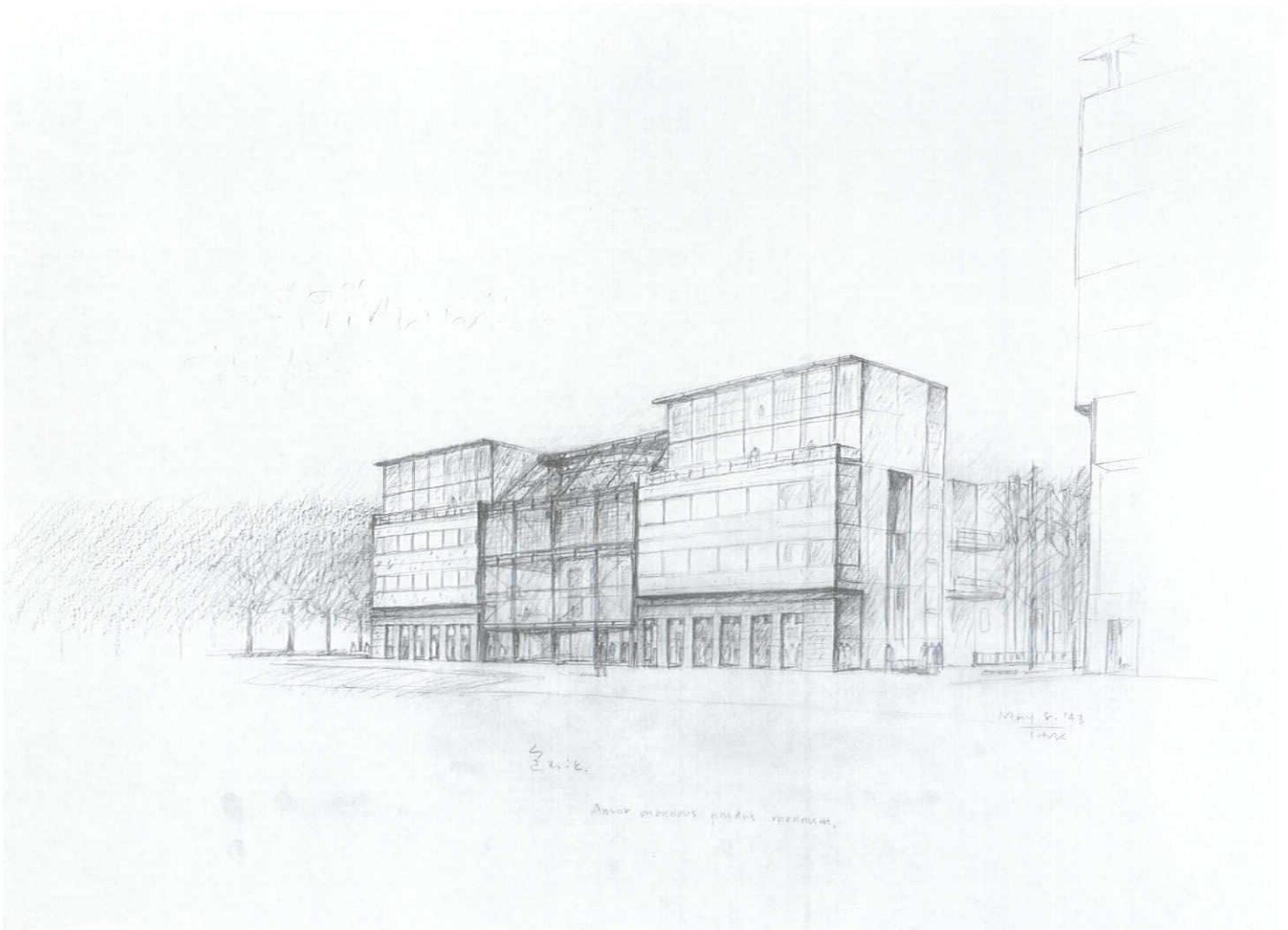
香山　ありがとうございました。本当に。

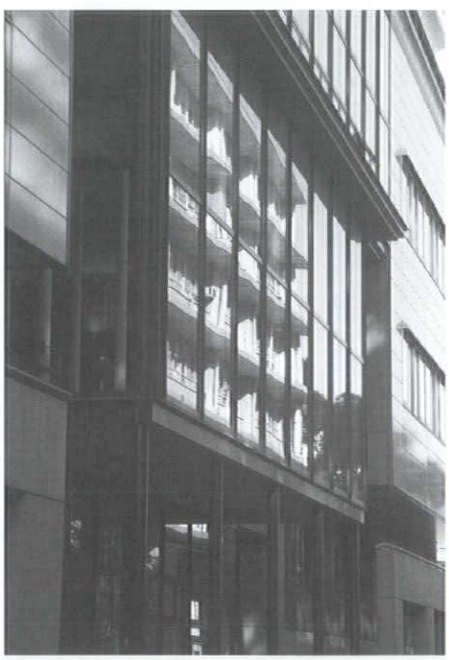
諸井　とにかく、この劇場は建築の深部に至るまで、アーチストが干渉しているんです。香山先生の度量なんですが、普通、突っ張っちゃいます、建築家が。これは俺の象徴だからとか言って、柱なんか立てて見にくくしちゃう。そういうのが多いんですよ。ところが香山先生のは、本当に、素直に芸術家と観客の要求に応えるという劇場なんです。だからもう世界中の人が喜ぶ。劇場の中に何の邪魔物もないわけですよ。建築家の自己主張みたいな、そういう嫌ったらしいものはない。ただ全体として、香山思想というのは浸透しているわけなんで、これはやっぱり劇場の理想型のひとつじゃないですか。

（於：鹿島出版会　1998年1月16日）

東京大学工学部建築学科・土木工学科棟

東京都文京区　1994年



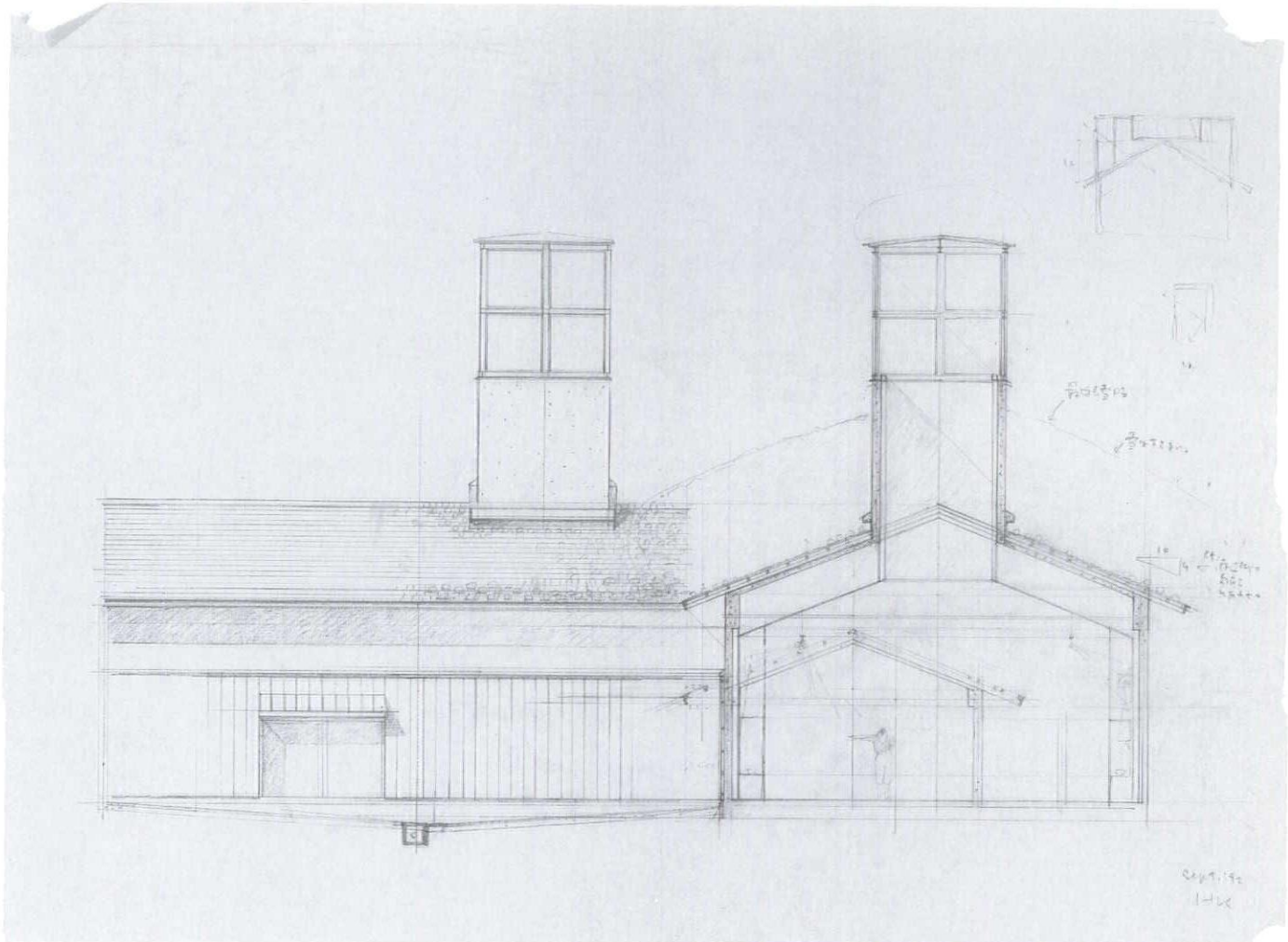


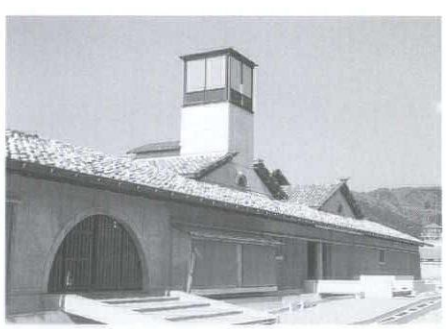
スタディ・スケッチ。黄トレース紙に鉛筆と色鉛筆
517×457mm

既存の擬ゴシック様式の建物に、半ばかぶさって建つ新しい建物。重なりがどれだけの新しい意味を生み出し得るか。

関川村歴史資料館

新潟県岩船郡　1994年





矩形スタディ図。黄トレース紙に鉛筆と色鉛筆　620×455mm

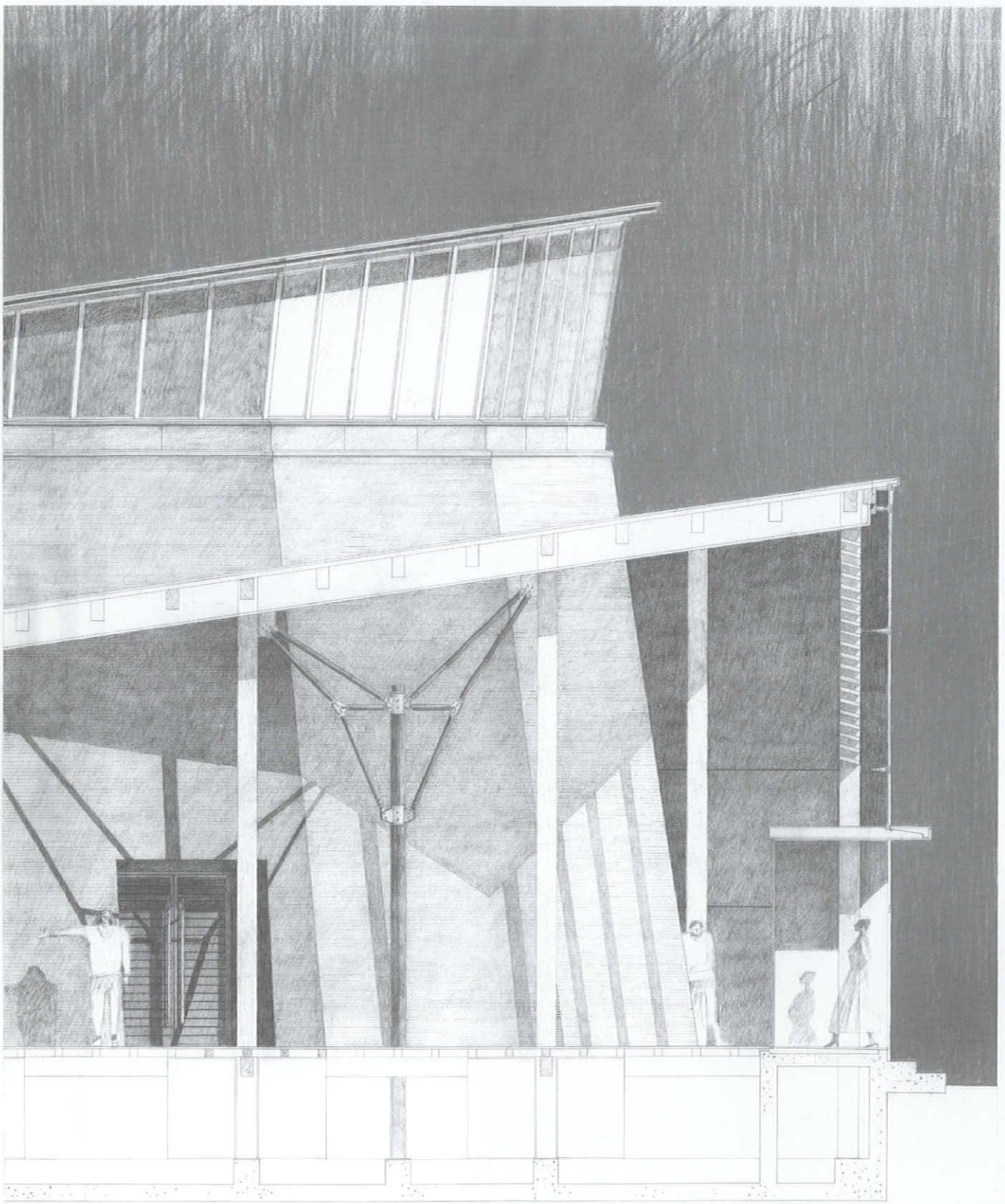
コンクリート造の建物の上に置かれた、木造の石置き屋根。それを貫いて立ち上げる光の塔。下見板張りの壁も、現代的な素材で捉え直すことはできないか。

東京大学農学21世紀館

東京都文京区

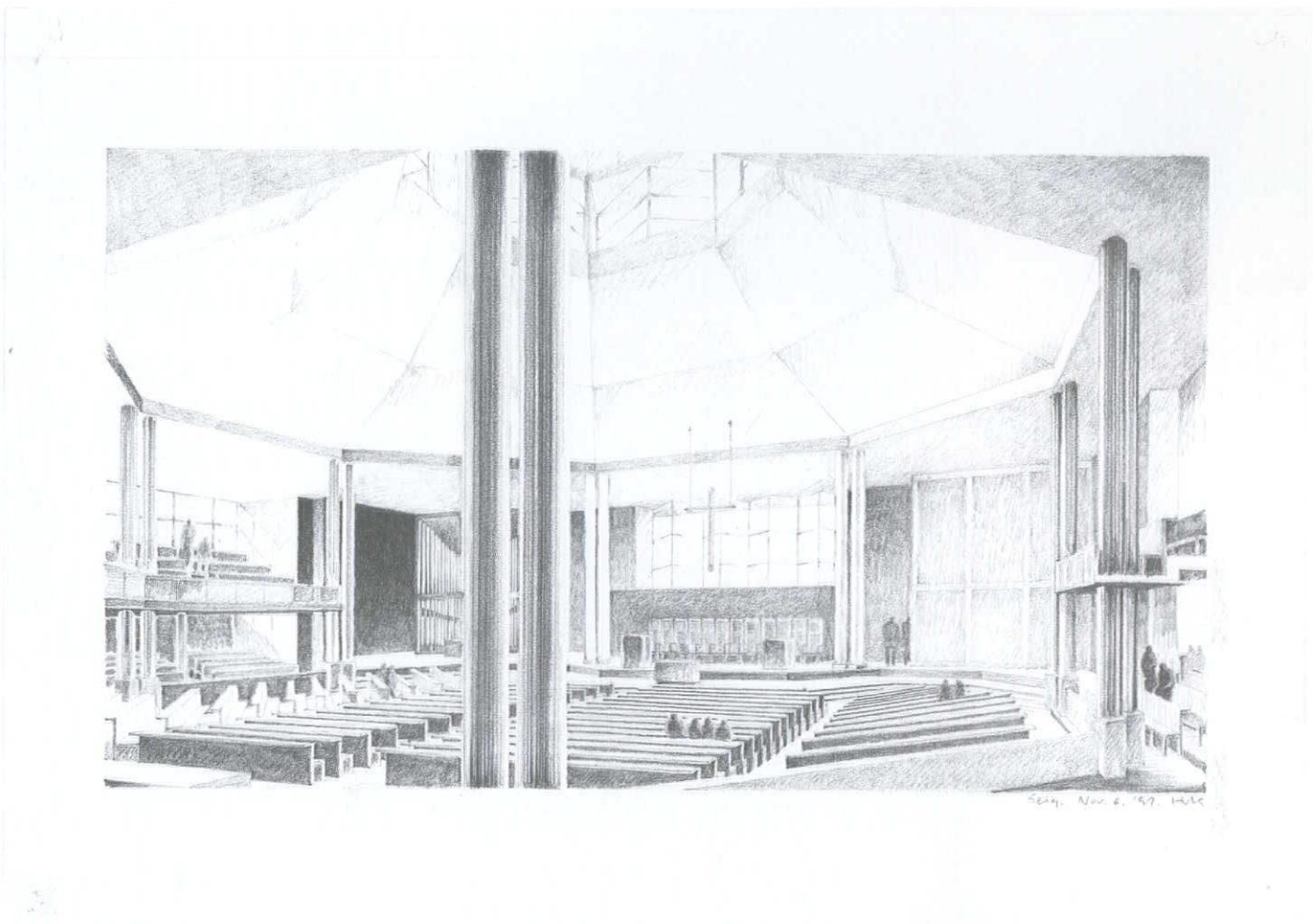
矩形スタディ図。イラスト紙に鉛筆、色鉛筆とコンテナ　594×720mm

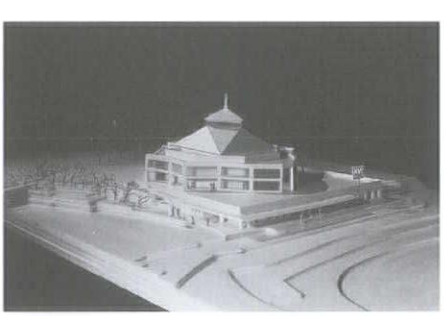
林立する集成材の柱。それらの支える大きい一枚の屋根。その中に包まれる漆喰塗りの楕円構造の建築が、どこまで周辺の木立ちと呼応し得るか。



聖学院大学礼拝堂

埼玉県上尾市



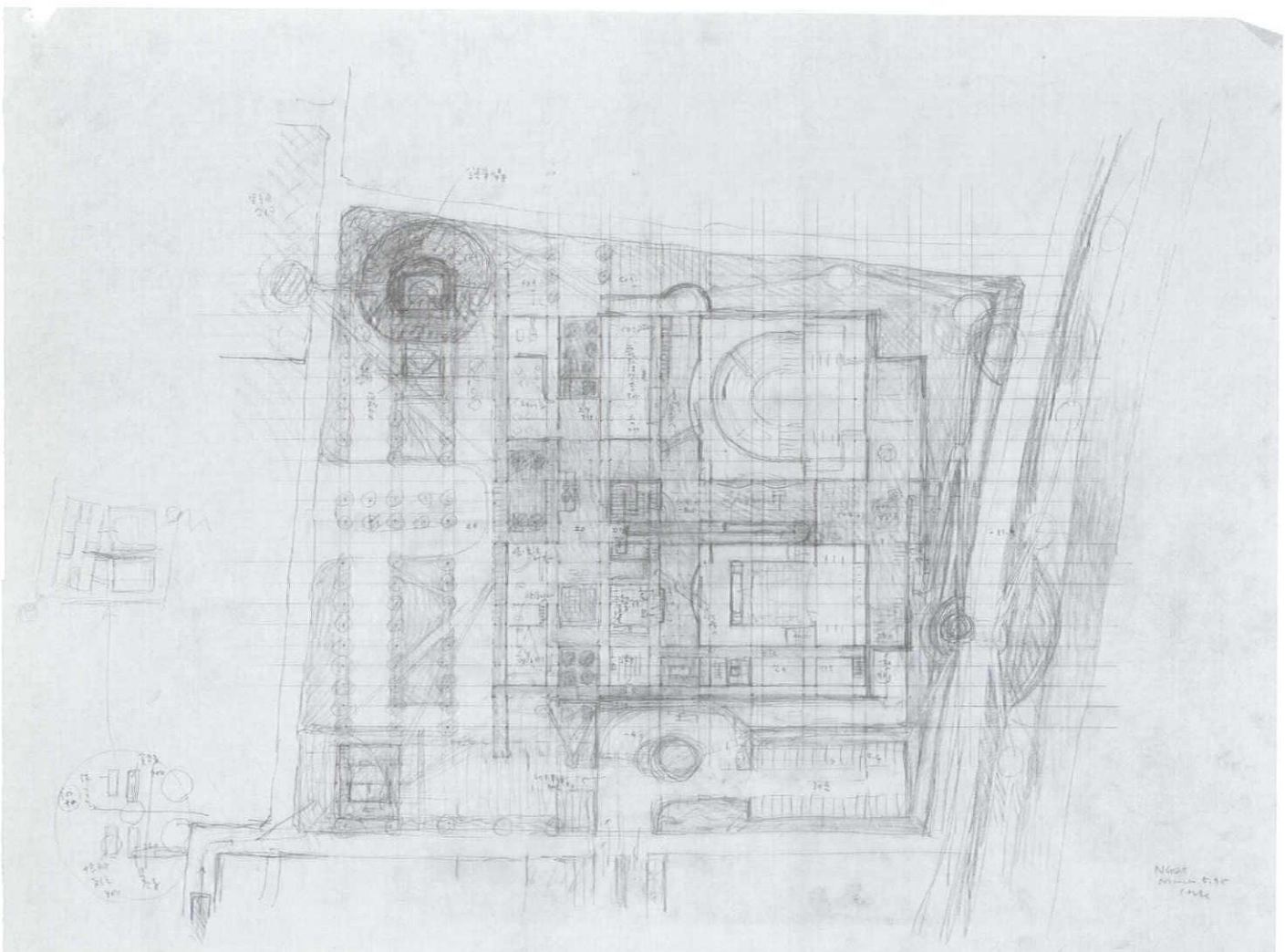


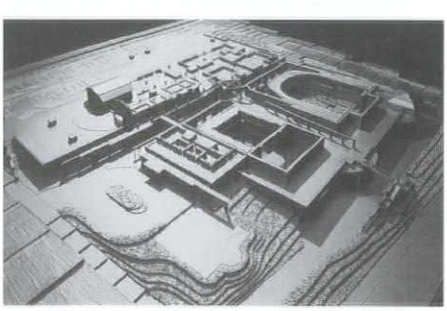
内部スタディ・スケッチ。イラスト紙に鉛筆　540×385mm

礼拝の空間は、八角形を成す列柱と外周のギャラリーによって二重に包まれる。光がどれだけ静かに深く、空間を満たし得るか。集まる人の多少に、空間がどのように柔軟に対応し得るか。

長久手町文化の家

愛知県愛知郡　1998年竣工予定



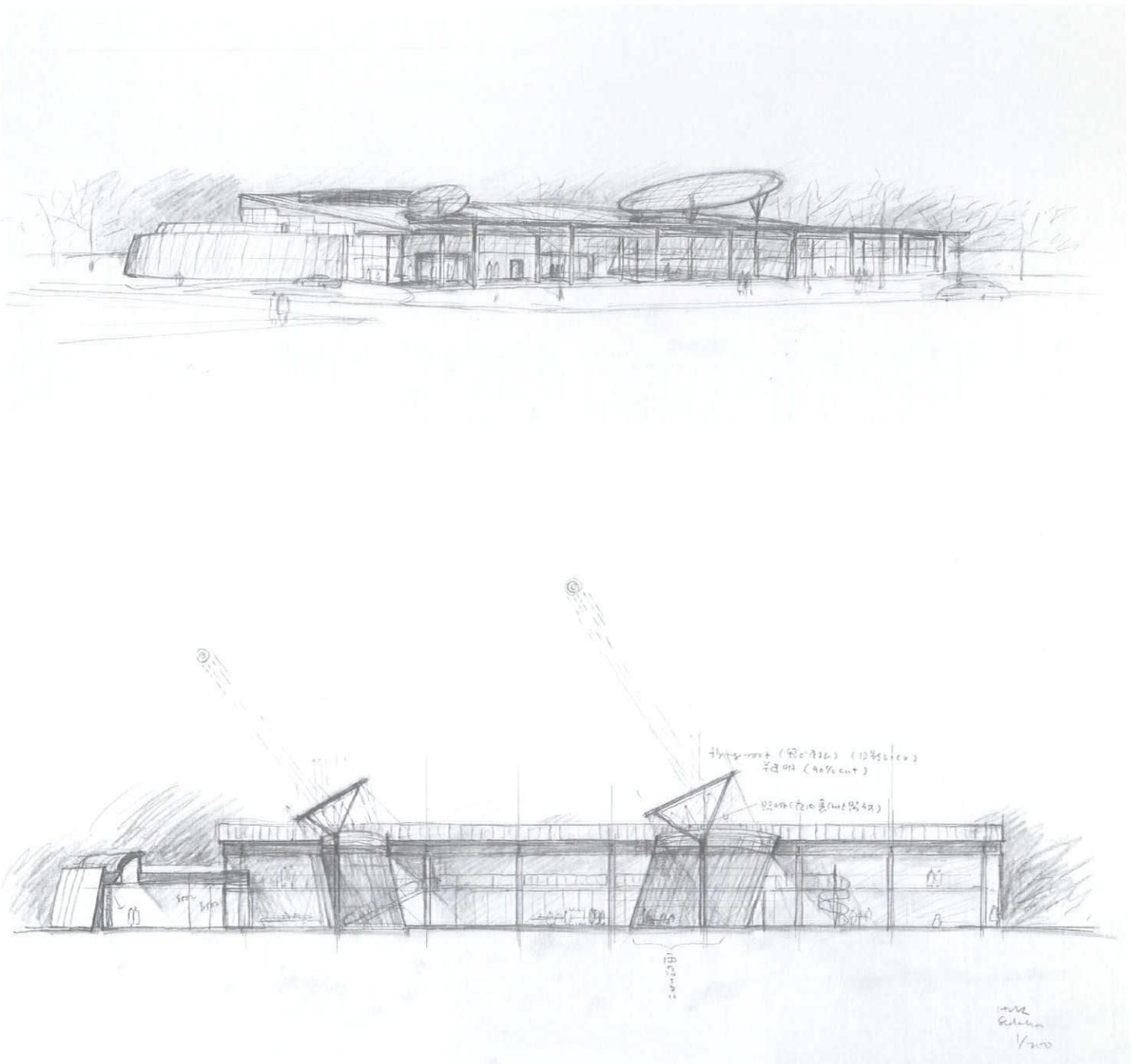


配置スタディ図。黄トレース紙に鉛筆と色鉛筆　615×46mm

ふたつの劇場と多数のアトリエを持つ施設を、川にむかって下る大きな斜面に、どのように配すべきか。全体を緊密に統合しつつ、屋外の空間をどのように内部に導き入れるか。

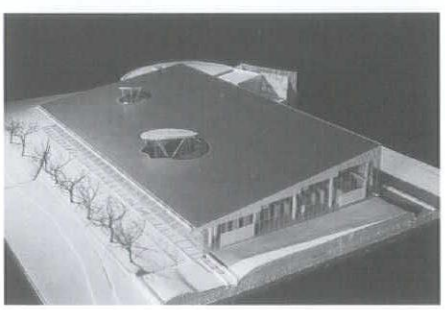
瀬高町立図書館

福岡県山門郡　1998年竣工予定

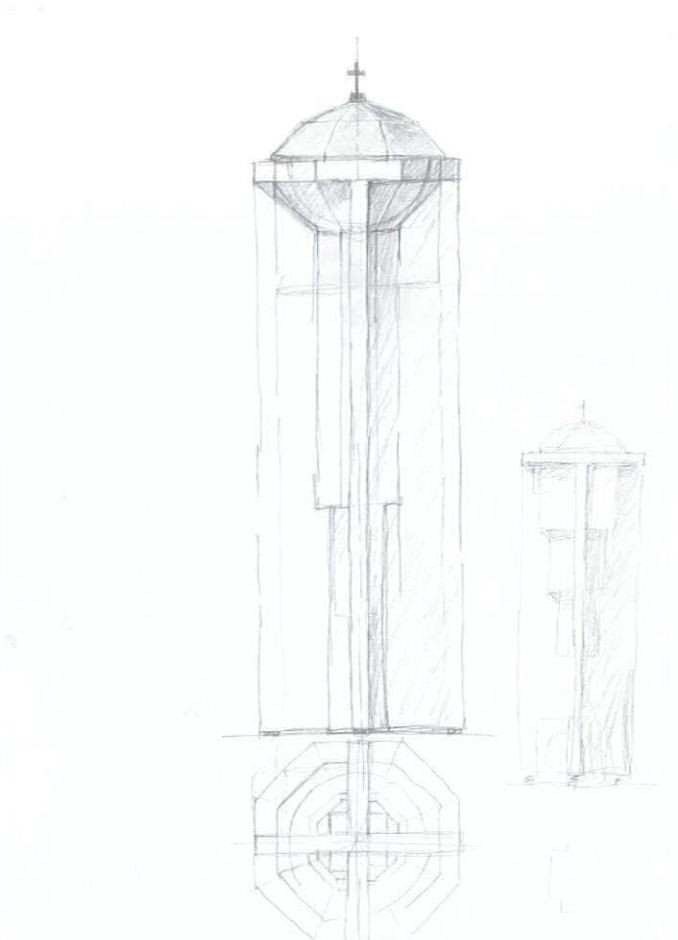


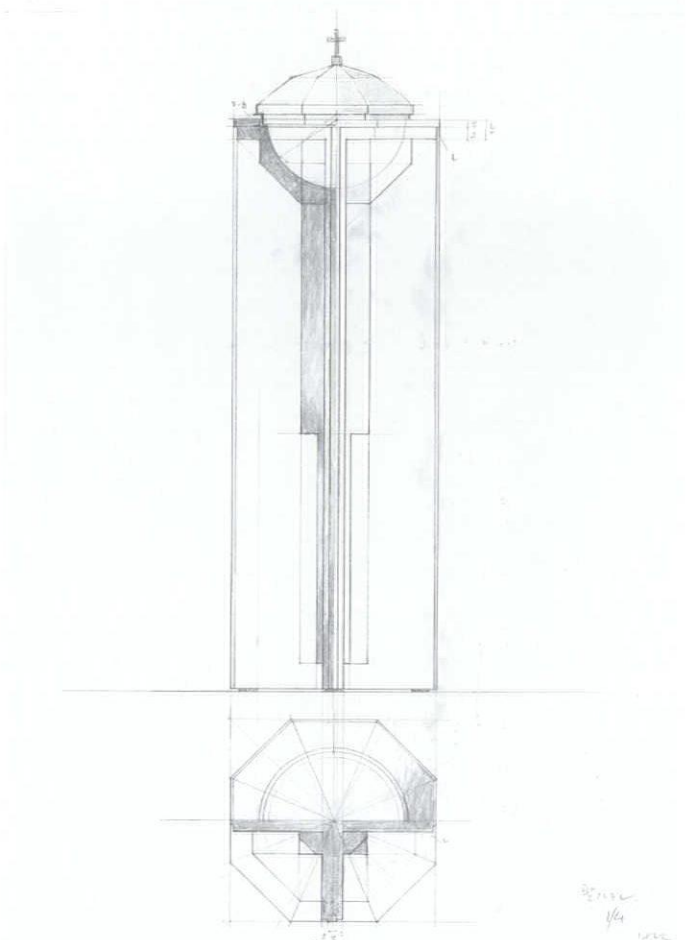
光庭と浮かび上がる屋根のスタディ・スケッチ。黄トレース紙に鉛筆と色鉛筆　上455×308mm　下456×310mm

片流れの大きな一枚屋根の中にえぐられた光庭の空間とその上に浮かぶ屋根。日中は日光を制御し、夜は照明を受けて浮遊するように。

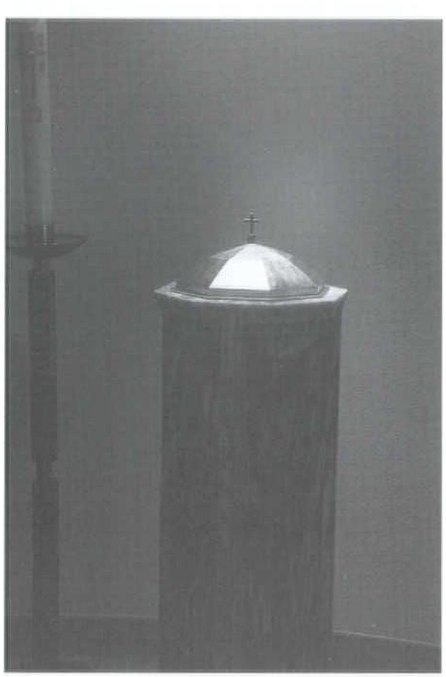


洗礼盤



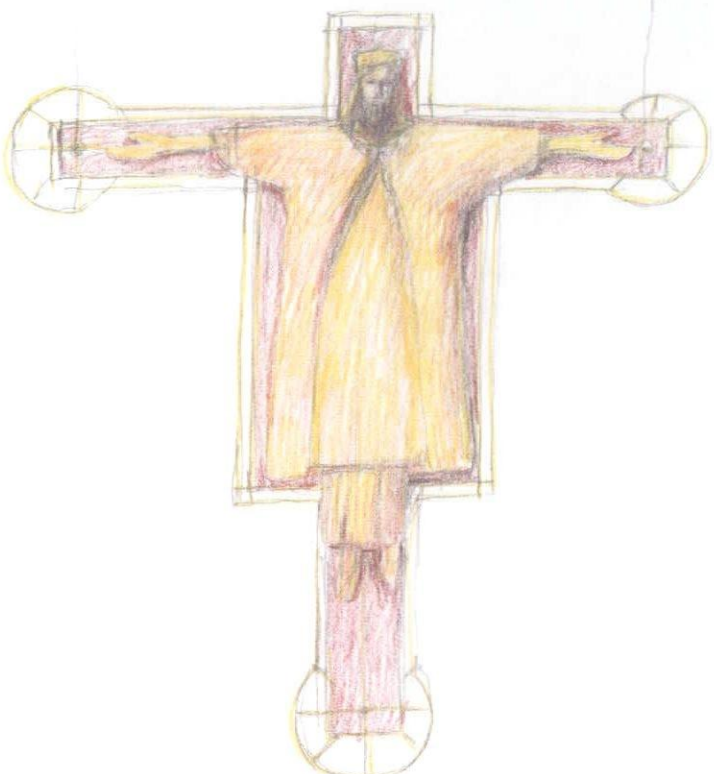


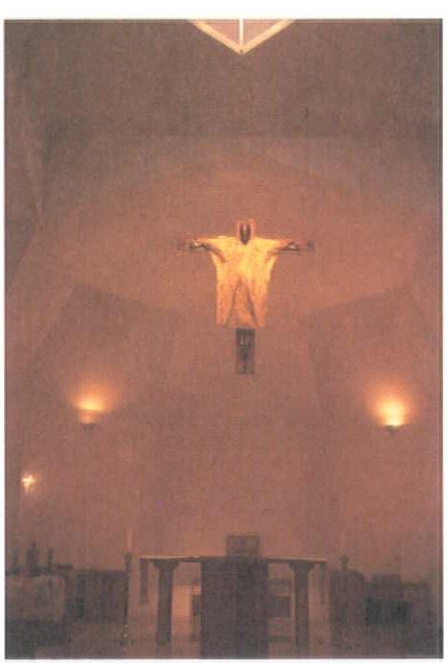
聖アンデレ教会、洗礼盤スタディ図。トレース紙に鉛筆と色鉛筆　2点とも296×420mm



洗礼はキリスト教の信仰において、また典礼において、もっとも重要なもののひとつである。それがいつも会衆の目に見えるように、入口近くの壁の膨らみの中に置く。輝く洗礼盤が大地にしっかり支えられ、また大地に持ち上げられていることが示されるように。

十字架

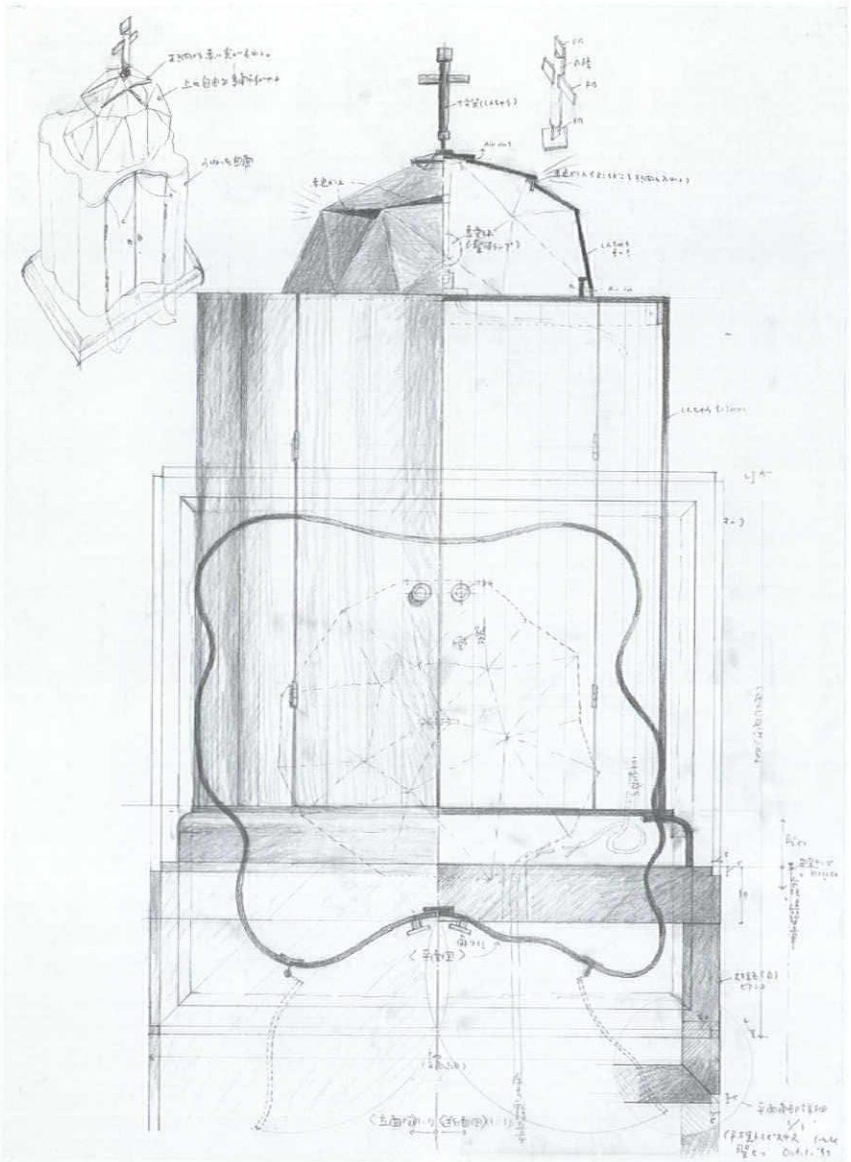


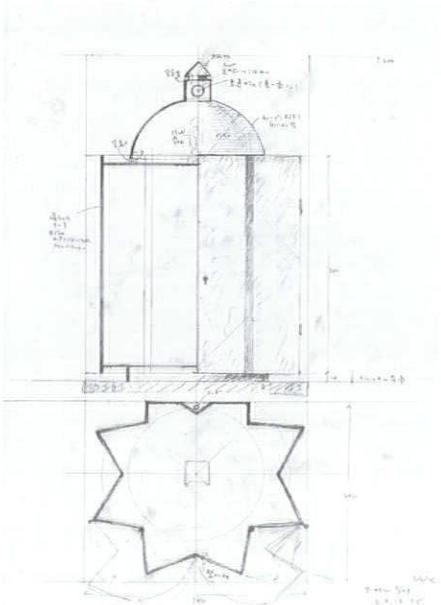


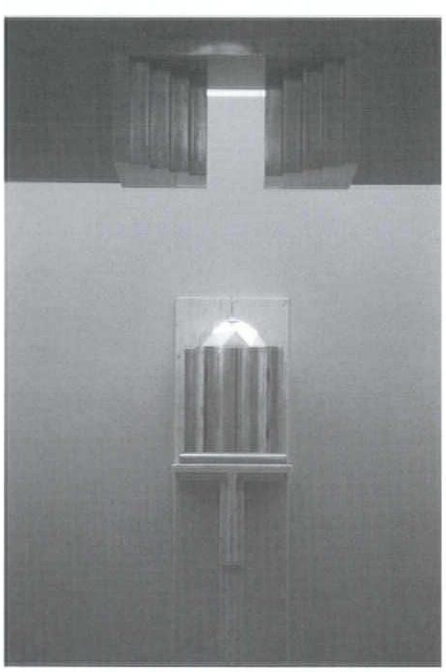
聖アンデレ教会、十字架スタディ・スケッチ。トレース紙に鉛筆と色鉛筆　296×420mm

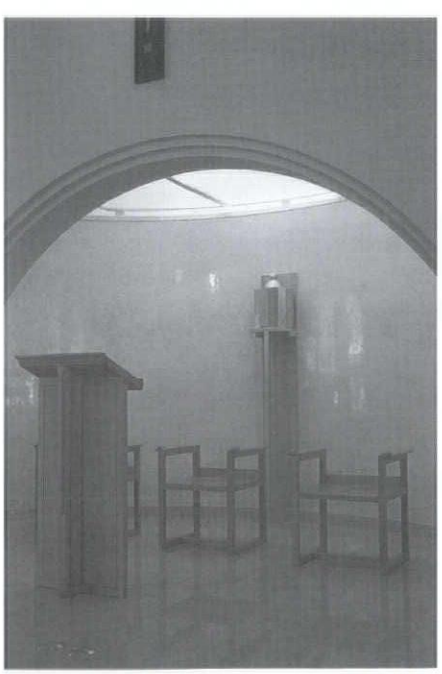
光の衣を身に纏い、栄光に包まれた「王であるキリスト」の像と十字架。一般には十字架につけられて苦しむ「受難のキリスト」像の方がなじみ深いかもしれぬが、美術史的には、むしろこの形式の方が古い。そして私いとっては、光で造形する、絶好の機会が与えられたことになった。顔や手足は銅板の鍛金打ち出し、衣は真鍮メッシュ3枚重ね。十字架は、聖堂中央、祭壇の上の空間に上部から降り注ぐ光の中を上昇する。

聖櫃





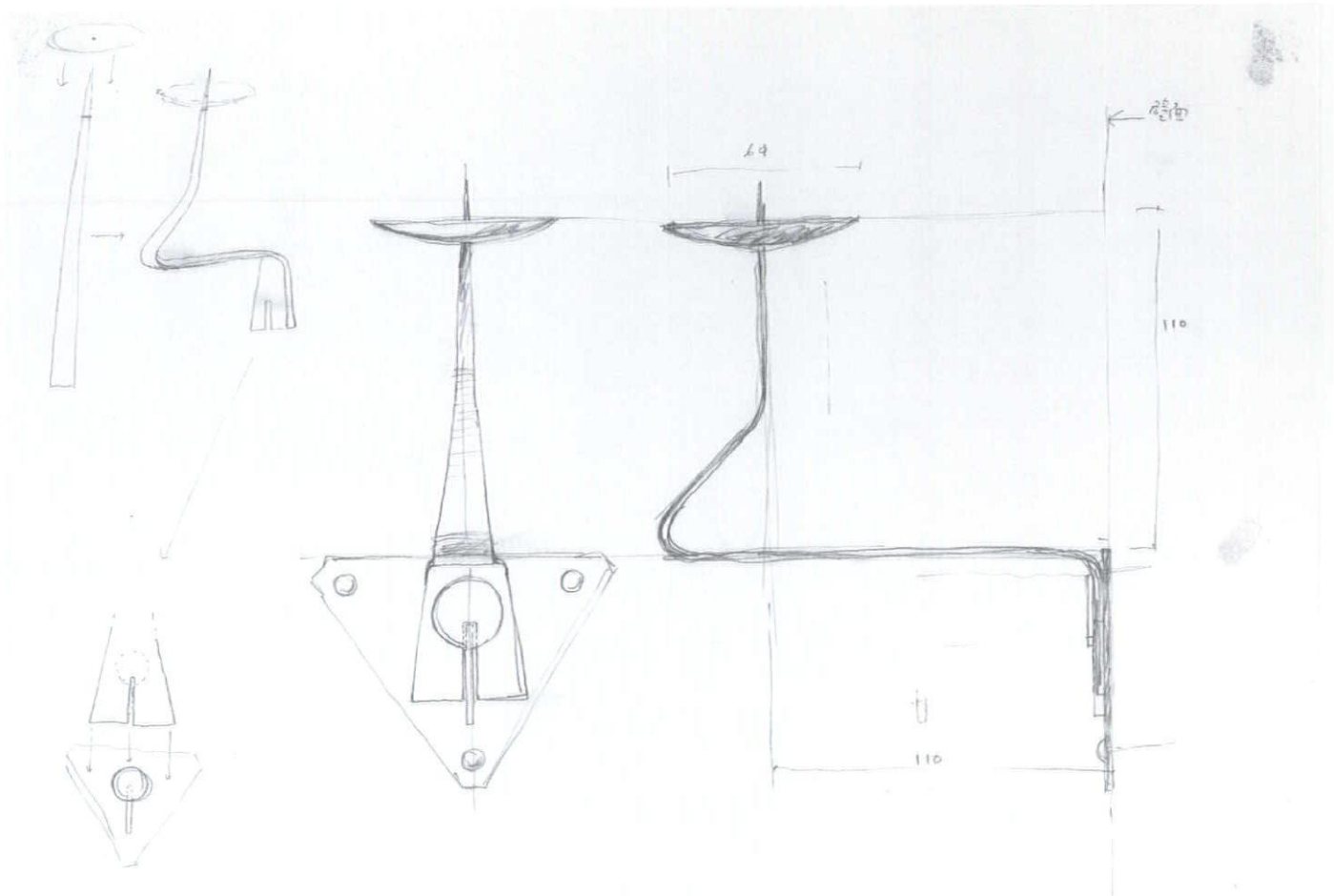




トレース紙に色鉛筆と鉛筆　左：シトー会伊万里の聖母修道院聖堂 440×610mm　右：カトリック聖リタ会堂　297×420mm

聖櫃とは、カトリックの典礼の中心である「聖体(Corups Christi)」の入っているもので聖堂の中心を成す。それが常に光を受けて輝くように、またその光が時刻、季節に応じて変化するさまが目に見えるように輪郭が定められる。

燭台





シトー会伊万里の聖母修道院聖堂。トレース紙に鉛筆と色鉛筆
420×300mm

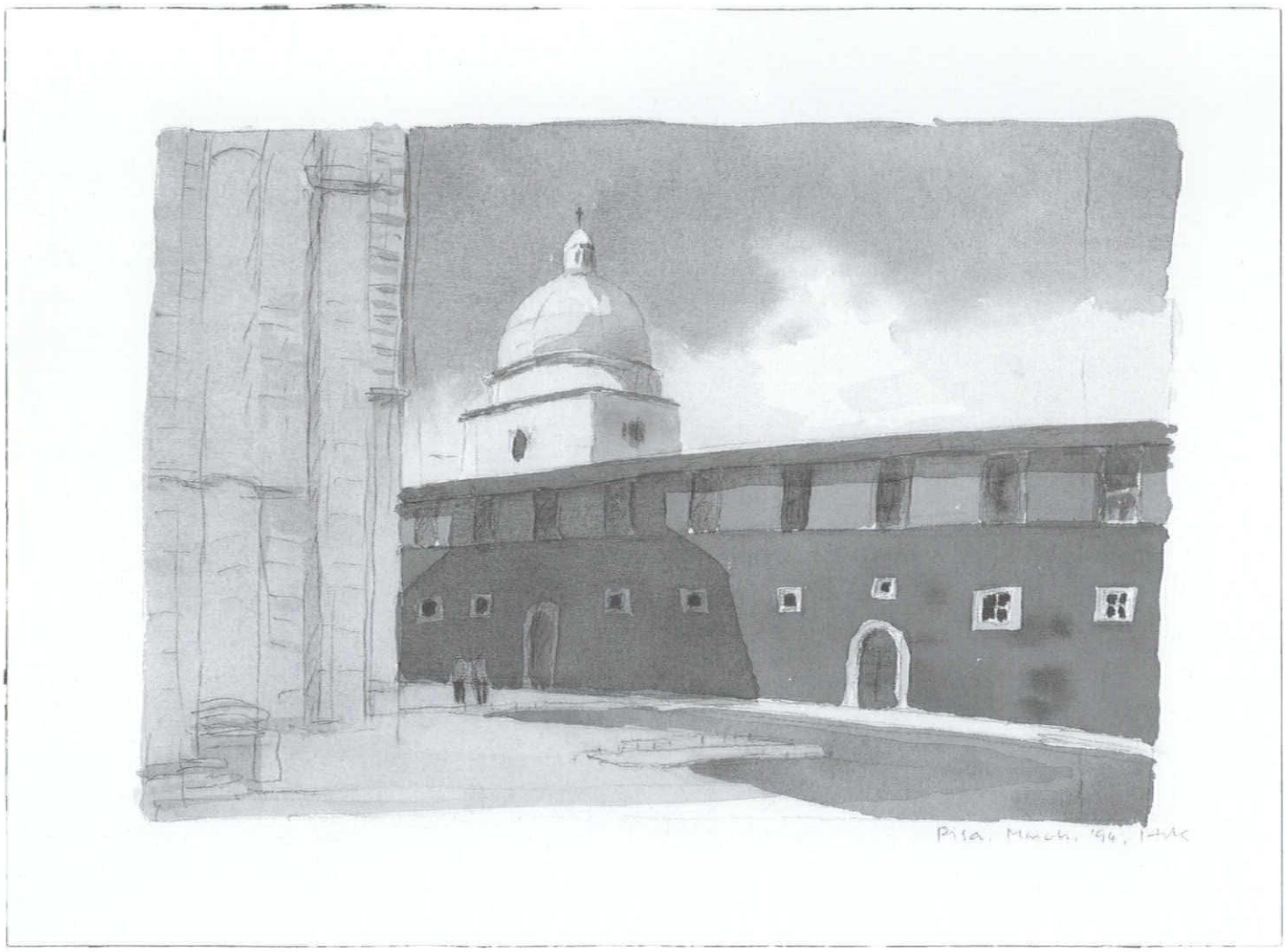
聖別される聖堂には、キリストの12人の使徒を示す12本の柱に燭台が付けられる定めとなっている。蝋燭は特別な時のみ灯されるが、それ以外の時にも、ゆらめく炎が目に見える形はないか。



1994年3月12日フィレンツェ、サンタ・クローチェ広場



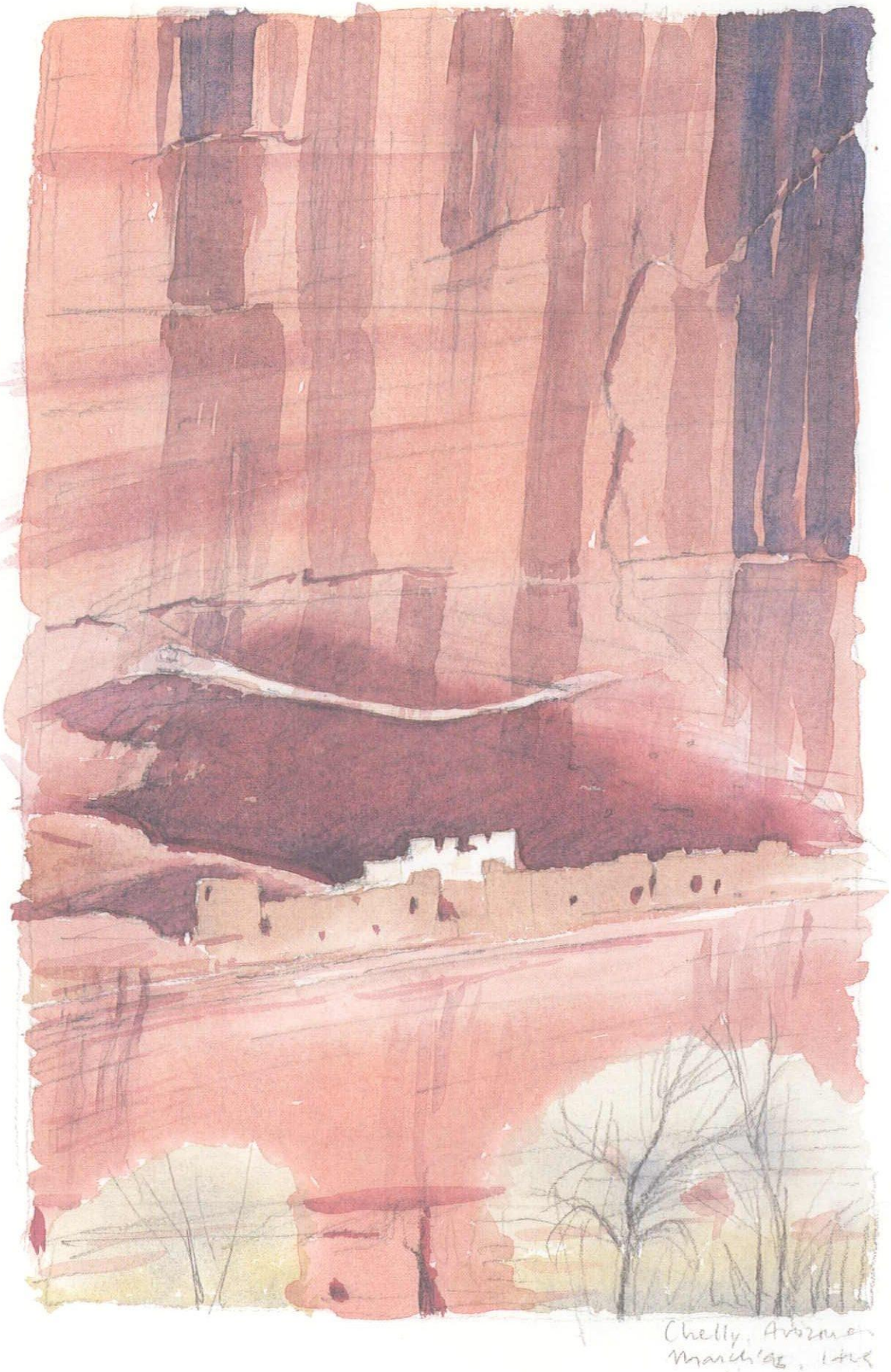
1994年3月12日フィレンツェ、シニヨリア広場



1994年3月ピサにて



1996年3月21日アリゾナ、トマカ・ユーリ・ミッション



1996年3月アリゾナ、チンレの谷のホービ族住居跡

描くということ

香山壽夫

いつも、絶えず何か描いている。模型や図面と向かい合いながら、必死に描いている時もあれば、とめどもない想念を追って半ば眠っているように描いているときもある。これは建築家と言える人は、私だけでなく皆同じだろう。

見ることは描くことと結びついている。また考えることも、描くことと結びついている。考えるためには描かねばならず、描かねば考えることもできない。従って、絶えず描いていることになるのである。

何時も肌身はなさず持ち歩いているのは布表紙の小さなB5判のスケッチブックと鉛筆である。持つのを忘れて出た時は、一日何か落ち着かない。このスケッチブックに何もかも描く。設計の初期の構想や、進行中の現場で思いついた細部のほとんど全ては、このスケッチブックの中で、最初のかたちをとる。しかし、この段階のスケッチは場所を選んでいる余裕などなく、構想が浮かんだ時、即座に描かねばならないから、手元にたまたまある用箋の上や、コピー用紙の裏でも、何でも手あたり次第あるものの上に描く。

この段階の構想は、まだひ弱で柔らかく、すぐにでも消えそうなものが多いから、優しく両の手のひらで包むように描く必要があると私は感じている。力を入れた線でぐいぐい描いてあるスケッチを見かける時もあるが、私にはとてもそれはできない。従って描く紙の大きさは両の手のひらを合わせた程の大きさ、すなわちB5かA4の大きさということになる。あまり早く大きい紙に描くと、アイディアが育たず死んでしまう。そして描く道具は、鉛筆と色鉛筆がいい。私にはこれしかない。おぼろげなかたちは、その通りのおぼろげなかすかな線で描けるし、考えの発展に応じて、線を重ねて濃くしていくことができる。また、時には消しゴムで消すこともできる。線で輪郭を描いている段階から、濃淡で影をつける段階に至れば、かたちは急に新たなる生命を得て、動き始める。こうした力（あるいは楽しみと言った方がいいのだが）は、鉛筆において極まっている。言い換えれば、鉛筆で描く線は、動く指先を通じて、頭の中とつながっている。人間の思考の働きと自然に呼応しているように思われるのだ。

建築の初期に、自らフリーハンドのスケッチを描くことは、どの建築家もやっていることである。この図に基づいて、ハードラインの図面が描かれ、そしてその上にまたトレーシングペーパーが重ねられたり、青図の上に色鉛筆の線が重ねられたりして、設計が進行していくのは、すべての設計において共通するといっていいだろう。ただ、それだけでなく、私にとっては、この段階の比較的早い時期に、ハードラインの線を基本にしながら、細部やテクスチュアを追うフリーハンドの線によるスタディをすることがとても重要なことだと感じている。それはおおくの場合、矩計図や断面詳細図であるのだが、これらのスケッチ図を描いている時こそ、自分が物質と一体になって動き、格闘し、光を操作し、空間を形造っている手ごたえを感じるのである。言い換えれば、初期のなぐり描きするスケッチは、素人でもやることだが、この段階のスケッチこそが、建築の専門の熟達が問われ、また報いられるように感じる。

ひとつの設計がまとまった時に、その考えを他人に示すためのドローイングが描かれるのは、これも全ての設計において変わりない。すなわちプレゼンテーション図である。最近では、精密な図をコンピュータが描いてくれる。私たちももちろんそのお世話にもなっているが、しかし一方で、昔ながらの手描きのドローイングも捨てるわけにはいかない。どういう精神を内に包んでいる建物であるかを人に示すには、これしかない（あるいはそれも決して充分ではないのが常であるが）ということが第一の理由だが、それよりも先に自分で、作ろうとしている建物を理解し納得するには、一度すべての壁、すべての床を鉛筆で、ていねいになぞってみるのが必要だという気がするのである。そしてこれも正直なところ、義務で描くのではなく楽しいから描いているのであるが。

旅に出る時は、いつものスケッチブックの他に、水彩画専用のスケッチブックと道具一式を持っていく。私にとって最大の旅の楽しみは水彩画を描くことだ。風に吹かれ、陽にあたりながら、気に入ったところに坐って描く。あまり時間をかけないで、勢い良く一気に描く。水彩画の面白さは、早く描けることと、いくら自分が描くといっても、あるところから先は、絵の具の流れにおまかせで、あとはどうなるかお楽しみというところにある。幾何学的な線、厳密な寸法といった枠にいつも縛られている建築家にとって、何とも言えない解放感があるのだ。「マルタよ、思いわずらうな、大切なことはひとつしかない」といった心持ちで、余計なことを省くことができると、下手でも気持ちの良い絵ができて、その時、その見知らぬ町や風景と自分の心がひとつになったような気がする。カメラでは決してそうはならない。

今回、ここに集められた私のドローイングやスケッチは、昨年10月から11月にかけて〈彩の国さいたま芸術劇場〉のガレリアとロトンダを全部使って開いた私のドローイングの展覧会をもとにして編集していただいたものである。それは、還暦の記念として私の展覧会を企画してくださっていた東京大学の大野秀敏先生の考えと、それとはまた別に、私の設計した建物において、私の建築展を開くという諸井誠館長の考えが重なって実現したものである。最近よく行われる建築展のような、展覧会そのもののためのプレゼンテーションとは異なり、自分の設計過程のドローイングやスケッチブックをそのまま示すのは、日記帳を人に見せるような恥ずかしい思いであったが、それも人生のひとつの区切りと考え、思い切って開かせていただいた。この特集も、自分の未熟さを改めて思い知り、次の新たなる精進のための良い機会を与えていただいたと、心から感謝している。

●こうやま・ひさお／建築家、東京大学名誉教授、明治大学教授

ドローイングによる建築意匠講義

八木幸二

描かれたかたち

創立120周年記念の東京大学展で、伊東忠太が世界建築調査行の際、中国、インド、トルコ、ヨーロッパなどから送った絵はがきや日記を見て、そのスケッチの巧みさに魅了されるとともに、旺盛な好奇心に明治の人を感じた。その足で〈彩の国さいたま芸術劇場〉へ行き、「香山壽夫建築スケッチ・ドローイング展」を見た。同じ旅先のスケッチでも、こちらは単純な構成と洗練された色使いがまさに現代的であり、好奇心というよりは対象となっている建物や町並みの空間構成を読みとろうという姿勢が感じられる。1本の鉛筆を持ち、白いスケッチ・ブックを前にしてものを観るのは、単に見るのとは違い、描くことによって自分の感性を引き出すのであろう。観て、感じて、考えることが創造の源になっていることを強く感じた。

旅のスケッチはこの展覧会のほんの一部であり、香山作品の設計過程をたくさんのドローイングと模型で示すのが主であった。〈王立製塩所〉でルドゥーの図面や模型を見るように、会場自体が、香山作品であり、展示中のドローイングと模型を具現したものであるから、一般の人々に建築設計の楽しさや大変さを知ってもらい、その芸術性を理解してもらおうという企画者側の意図は大成功であった。

香山氏は著書『建築家のドローイング』で、歴史上のさまざまな建築家がどのように描いてきたのか、何のために描くのかを語り、自身のドローイング論を展開している。その中で、「描かれたかたちは、未だ描かれていないかたちを、次に描かれるべきかたちを示している」と述べているように、この後どんなかたちが生み出されるのかが楽しみである。

ガウディなどは別としても、建築家の意図は完成した作品よりもドローイングによく表れていることが多い。2月末からニューヨークの近代美術館でアアルト生誕100年展が開かれるが、6~7年前にフィンランドへ留学してアアルトの図面を研究した大学院生が、大量のエスキス図面を分析したことがある。それによるとアルベルティの『建築十書』ではかたちを作る線と角度が、セルリオの『建築五書』では、点、直線、円弧が建築を構成する基本的要素として扱われているように、幾重にも線が重なったりずれたりしているアアルトのエスキスから形態や軸、角度などの特徴を抽出することが可能であった。香山氏のドローイングについても、いずれ誰かが研究することになるであろう。幸い、日付が入っているので、日付のないアアルトのエスキスより、思考のプロセスを追いやすい。

未だ描かれていないかたち

描かれたかたちを見ていると、描かれなかった多くの可能性が気になってくる。ミッチェルが『建築の形態言語』で展開している論理では、かたちはプリミティブの集合であり、空間、プリミティブ、かたち、属性、関係などには公理と言える体系が存在し、複雑なツリー構造の選択肢を設計者が選んでいると説く。行きつ戻りつする思考は、ネズミ構よりも複雑で多岐な可能性を生み出すわけで、思考過程における設計者独自の文法のようなものがどうなっているのかが焦点となる。

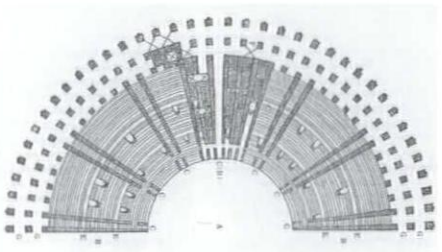
香山氏の場合は多くのドローイングに加えて、『建築意匠講義』という素晴らしい講義録がある。10年以上に亘って、講義をしたり図やスライドを見せたりしたものの集大成であるから、脳ミソの中をのぞき込むような面白さがある。豊富な体験、具体的事例、さまざまな建築家の言説、自身の設計術などを駆使しての意匠論は、未だ描かれていないかたちを提示しているように思える。

次に描かれるべきかたち

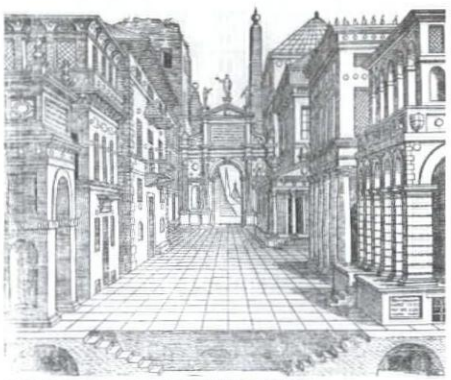
描かれたかたちがはっきりしており、描かれていないかたちは推論できたとしても、次に描かれるべきかたちは予測できない。何枚も何枚も描いている過程では、常に前のものを壊したいという願望が働くと同時に、変えることのできない与条件も多くある。

他人にとっては参考となったり鑑賞の対象となるドローイングも、本人にとっては次の混沌へ飛び出すジャンプ台のようなものであろう。それにしても、色鮮やかな水彩のスケッチから、イエロートレペの平・立・断面図、ディテール図に至るまで、香山ドローイングには描くことの喜びがみなぎっている。

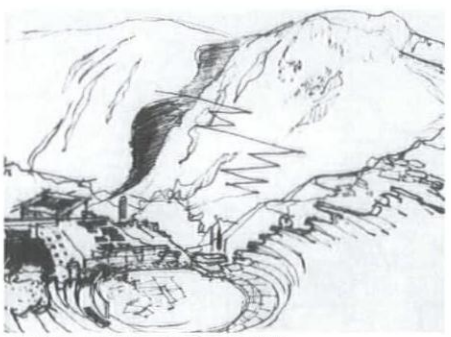
●やぎ・こうじ／建築家、東京工業大学教授



レオン・バティスタ・アルベルティ、ローマ劇場客席平面図



セバスティアノ・セルリオ、仮想都市街路図



アルヴァ・アアルト、デルフォイの劇場

過程の輝き

鈴木 恂

埼玉芸術劇場のロトンダとガレリアを舞台にした香山さんのドローイング展が、近来まれにみる建築展の圧巻であった。なぜそうなのかというと、ひとつにこの場所を選んだ幸せがある。ついで、こけおどしがなく、一直線にドローイングと実現した建築が繋がっている緊迫感。つまり表現の劇的な連続という見せ場の記録のもつ力。そして、香山という個性が、どこに根差しているのか、その源を惜しげもなく見せてくれるドラマによってである。

それはほとんど厳選されたドローイングとはいえ、迷いがなく、すがすがしい創造の過程は、憎いくらいに、きちんとして潔癖であった。

それで、ドローイングの重要性をもし説くのであれば、この空間のなかでのこの展覧会こそを見るべきであって、言葉に直してあまりいいたくはないのである。この展覧会はすでに終わってしまったが、特に全学生諸君にそう呼びかけたい気持ちでいっぱいなのであった。その場で、これぞ本当のドローイングなのであると説明するだけでよい。いまそれは、この本のなかにうまく閉じ込められているかどうか。

なぜそのドローイング展が、鮮やかであったかというと、次にように説明できる。

ドローイングには、ふたつの特徴を認める。本来ドローイングは過程の輝きであるということ。結果である作品を描くものではない。外見で見えるものの表現ではなく、もっと中味の表現に近い。如何なる時を刻んできたか、さらさらと流れて、たどり着いたのではない、建築創造の旅程がそこに描かれる。それは光跡のようなものである。

つぎにドローイングとは、対象を見据える意志の表れであることだ。こうしたいという意気込みが結果に向かって倒れかかる勢いに満たされた意志の表れである。迷いに迷って、たどたどしい進み具合のときも、確実にその意志は刻まれるのだ。つまりそのときの眼の方向が表れているといってよい。だからイメージの高まりが伝わるのである。それはどう表現するかという思案を拒否する表現であって、多くの展覧会でみる、表現のため表現とは違うのである。そうあってもよいが、その緊張の差異は一目瞭然なのである。

そのための技法とは何か、多分どんな説明よりも展覧会が明らかな技法の存在を伝えてくれる。スケッチはやや思いつきや、感覚で描けるが、ドローイングには技術が要る。結果として、その技法は各自のものであるかが。しかし、普通の設計の訓練だけからそれを獲得することはできない。特別なトレーニングが必要なのだ。展覧会では、ルイス・カーン譲りの水彩による素描の秀作も併せて展示されていたので、なおのこと説得力があった。描くトレーニングがないがしろにされているのは、日本の現状である。建築教育で今忘れられているのは、明らかに描法の、それもオーソドックスな技術の訓練だろう。ドローイングをいいかげんにしてはいけない。香山さんの展覧会を展覧会を観てつくづくそう思うのである。

●すずき・まこと／建築家、早稲田大学教授

ドローイング・光・イメージ

青木 淳

どこの空港でもよい。空港の上空には、どの方向のどの角度から着陸し、どこを通って高度を挙げることができるか、そんな目に見えない航路が複雑に入り組み、絡み合っている。

飛行機が飛ぶ。そのとき、この透明な航路が、一瞬、視覚化される。本来は見えないものの存在が、飛行機という物質の飛行を通して、そのときだけ現われてくる。

飛行場でずっと離着陸を目で追っていると、ふと不思議な感じに襲われる。もし実際の飛行がなければ、果たして航路は存在していると言えるのか、言えないのか。

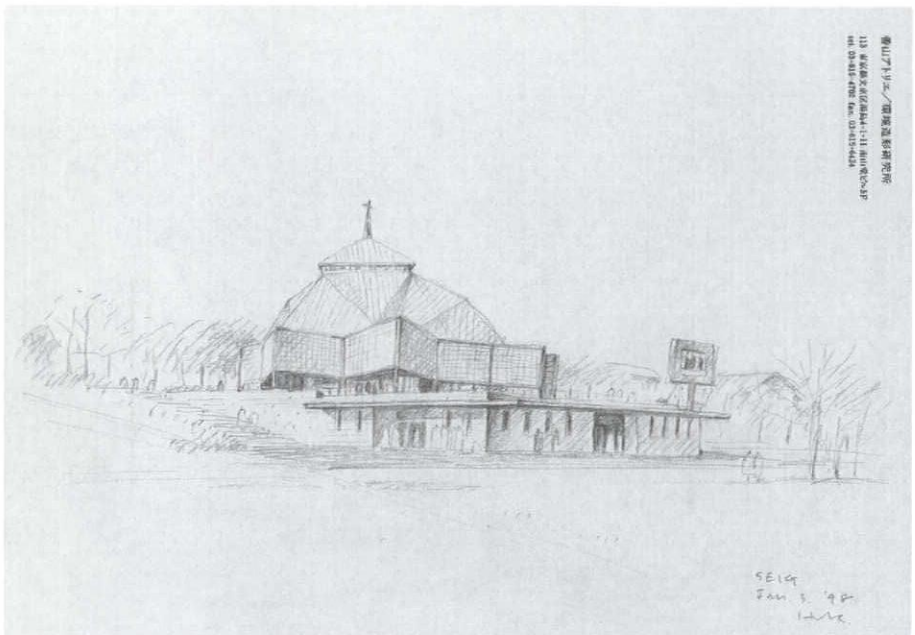
これは、優れたドローイングに触れたときの私たちの感情でもある。

多くの建築家にとって、ドローイングは未知のイメージを手元に手繰り寄せるための作業である。イメージはいつだって現実化することができない。というより、現実化できないからこそ、それはイメージなのである。私たちにできるのはそれを喚起する手筈を発見することだけだ。多くの建築家は、だからドローイングを描き、極端に言えば、だから建築をつくる。ドローイングは、つくられる建築を「表現」しているのではない。そうではなく、つねに辿り着くことのできないイメージをrepresentしているのである。現実の建築でさえ事情は変わらない。私たちは、イメージという目に見えない航路の存在を指し示すのに、建築やドローイングという間接であると同時に具体のものを必要とする。

光がイメージをrepresentする。私たちが香山壽夫のドローイングをゆっくり見ながら気づかされるのはこのことである。壁の隙間を通して導かれた自然の光が、うねる聖櫃の曲面に、どのように反射し、どのように外に漏れていくのか。月の光りが幾何学形態をどのように浮かびあがらせるのか。壁の凹凸がどのような陰影を生みだすのか。光を発する灯具がどんな放射を起こすのか。空気中にどんな光が充満しているのか。ドローイングは、彼の視線が光の状態や挙動をどのように観察し、愛撫し、熟成させてきたかを私たちに着実に送りとどけている。

直接、イメージを表すことはできない。だから間接を必要とする。しかし、ここにあるのは、確かに「目的」そのものではないが、だからと言って「手段」でもない、第三の価値を持ったものである。それをどう言ったらよいか、私はやはりわからないのであるが、ほとんど、私たちの目に見え、また目で追える具体的なものが結果として無限遠で結ぶ仮想の焦点、それをイメージと呼ぶのではないか、と言ってしまいたい誘惑に駆られるのである。

●あおき・じゅん／建築家



聖学院大学礼拝堂外観スタディ・スケッチ。A4用箋に鉛筆

写真

松岡満男　pp.58〜71、pp.77〜79

香山壽夫　pp.74〜75、pp.80〜83

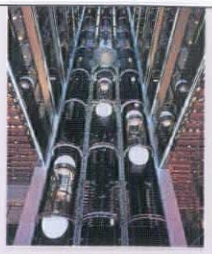
HITACHI

超高速エレベーターから、ホームエレベーターまで。

広がる生活空間を、
やさしく、
速やかに結びます。

日立エレベーター・エスカレーター

地上数百メートルの超高層ビルから一戸建ての住宅まで。日立は、ますます多層化する暮らしを、より快適にするエレベーター・エスカレーターの研究・開発を続けています。たとえば、定格速度810m/分の〝超高速エレベーター〟や、身近な暮らしの中で利用される〝車いす用ステップ付きエスカレーター〟、〝ホームエレベーター〟など、施設に応じた設備で、誰もが住みやすい街づくりをサポートします。



Office Building













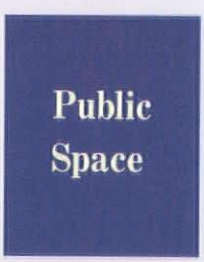
Hotel & Residence







Public Space





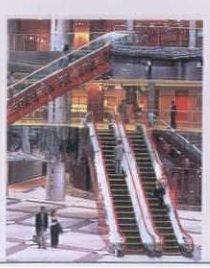




Shopping Center







株式会社 日立製作所
お問い合わせは＝電機システム事業本部 昇降機事業部/電機システム統括営業本部 〒101-8010 東京都千代田区神田駿河台四丁目6番地
電話/(03)3258-1111〈代表〉 または最寄りの支社へ 北海道(011)261-3131・東北(022)223-0121・横浜(045)451-5000
北陸(0764)33-8511・中部(052)243-3111・関西(06)616-1111・中国(082)223-4111・四国(0878)31-2111・九州(092)852-1111



連載❸森島紘史の起こし絵図

日本のかたち紙考

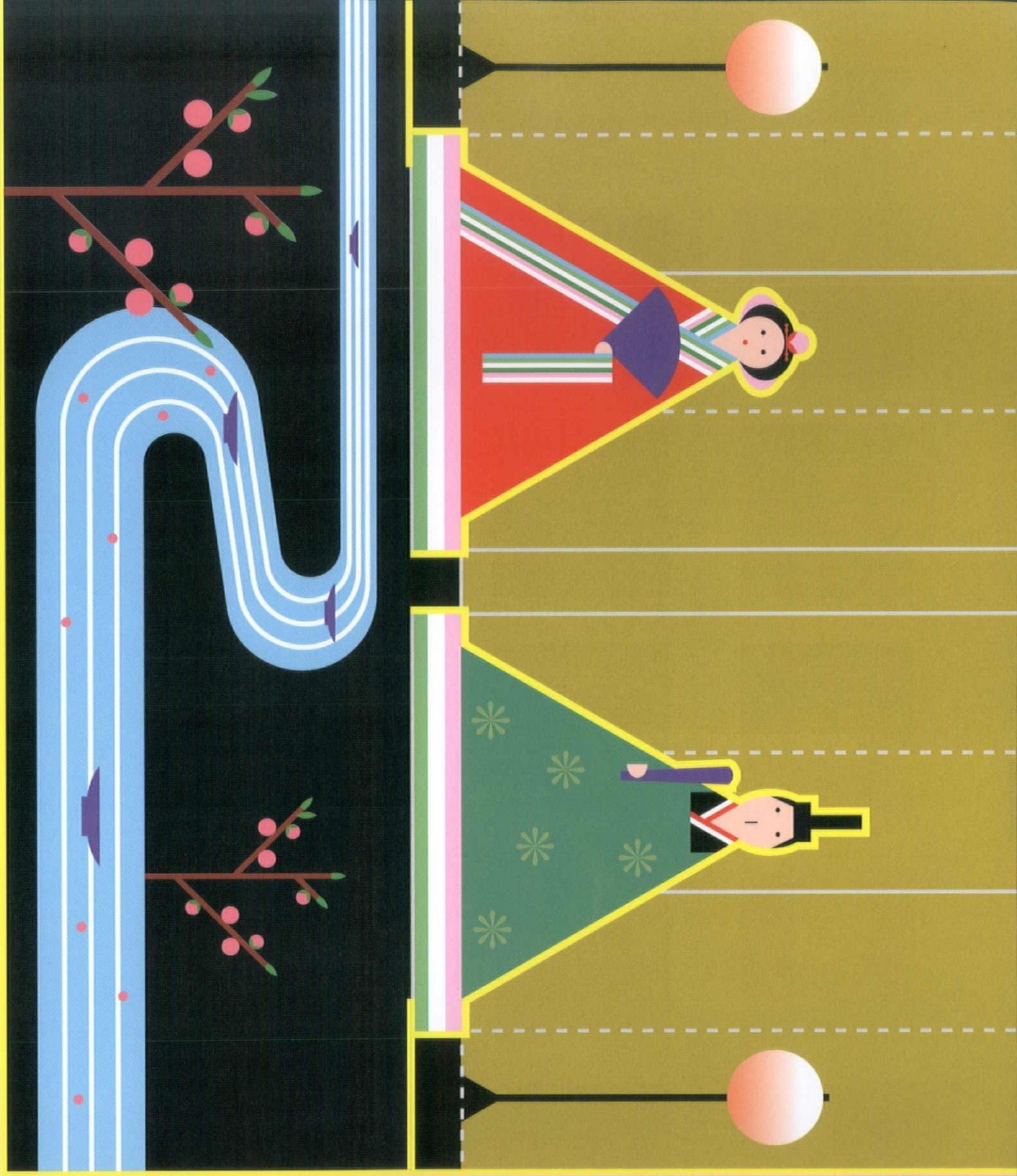
雛祭

雛は「ひひな」「ひいな」とも読み、もとは紙でつくった小さな人形のことであった。平安時代には紙人形のままごと遊び「ひひな遊び」が女子の間で流行している。

日常の遊びであった雛遊びに、やがて中国から伝来した三月上巳（じょうし）の節供と日本古来の人形（ひとがた）で穢れを祓う風習が加わり、室町時代に三月三日の行事として雛祭が定着した。

さらに現代のように雛人形を雛段に飾るようになったのは、江戸中期に入ってからである。

SD9803
94



三月上巳（みの）の節供は、陰暦三月の最初の巳の日、宮廷の人々が季節の変わり目に水浴をして身体を清めた後、神に供物を捧げ神と共食することによって霊力を身につけ身の安泰を願った古代中国の行事である。

水浴など水辺の習俗は曲水の宴にも発展する。これは細流の上手から杯を浮かべて流し、人々が杯が自分の前を行き過ぎないうちに歌を詠み、間にあわないと罰杯を呑まされる宴遊のひとつ。やはり三月三日に宮廷で催された。

共食の祝膳に欠かせないのが、百病を除く仙木とされる桃の花を浸した酒と、みりんに麹（こうじ）をまぜあわせ白濁した山川酒である。さらに心臓の形を表した菱餅も欠かせない。菱餅に使われている赤は解毒剤の山梔子（くちなし）、餅米は血圧低下剤、緑は蓬（よもぎ）で増血剤とされている。

人形（ひとがた）で穢れを祓うのは、飛鳥時代に中国から伝わった呪術の儀式で、人形で身体を撫で自分の罪穢や病気などを人形に移して川へ流す流し雛の原形である。

●もりしま・ひろし／名古屋市立大学芸術工学部教授

●世界のロックメーカー

MIWA


410 TYPE


415 TYPE


430 TYPE


441 TYPE


411 TYPE


420 TYPE


431 TYPE


442 TYPE


412 TYPE

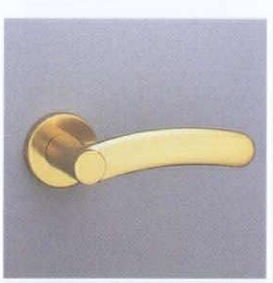

421 TYPE

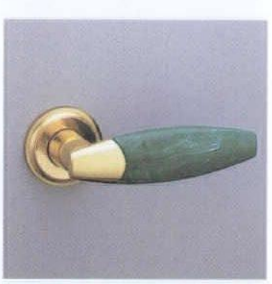

432 TYPE


443 TYPE


413 TYPE


422 TYPE


433 TYPE


444 TYPE


414 TYPE


423 TYPE


440 TYPE

◆
NEW
DESIGN

デザインで選んでもMIWA。

堅牢・安心・使いやすさなどを追求した品質第一の製品をお届けしているMIWAから、建物全体とのトータルコーディネイトにお応えする新作レバーハンドルが登場。建築空間の中に心地好さや安らぎを生み出す19モデルでバリエーションがさらにワイドになりました。

美和ロック株式会社 〒105-8510 東京都港区芝3丁目1番12号 TEL.03(3452)5551㈹ FAX.03(3455)2437●カタログをご希望の方は、当社まで。

美和ロックについてはホームページでもご案内しています。http://www.miwa-lock.co.jp/

連載：世界の現代美術館探訪

美術館は生まれ変わる

第8回

旅への誘い—ベルリンの新現代美術館／水沢勁

ハンブルガー・バーンホーフ

■W. O. M²（21世紀美術館調査隊）
太田泰人／神奈川県立近代美術館学芸員
水沢 勁／神奈川県立近代美術館学芸員
渡辺真理／建築家、法政大学教授
松岡智子／倉敷芸術大学芸術学部講師





正面ファサード。2階ロッジアには、ダン・フラヴィンのネオンによる作品が青く輝き、壁面には、ニエル・トローニの橙色と緑色の点による「壁画」がある。旗は本来、ゲルハルト・メルツの作品の一部であるが、写真では、開催中の『ジグマール・ポルケ』展の宣伝用のものに変えられている

今となっては少しセンチメンタルに思えるようになってしまったヴィム・ヴェンダースの『ベルリンの空』（邦題『ベルリン天使の歌』）には、それでもときどき鮮烈に蘇ってくる場面がいくつかある。ロケ現場の、いかにもユダヤ人的な翳りを帯びた表情のピーター・フォーク、ハンス・シャロウン設計の国立図書館の閲覧室で読書する人々の肩に手を当てて静かにたたずむ何人もの天使の影、その図書館の机の上に置かれたアウグスト・ザンダーのシルマー&モーゼル社版『20世紀の人間たち』の大冊。しかし、とりわけ忘れがたいのは、歴史の生き証人とでも言うべき老詩人役を演じている俳優が、粗大ゴミ置場と化したポツダム広場をよろけながら、20年代のベルリンの輝きを回想し、賛美し、そして、現在の姿を呪咀する場面ではなかろうか。年老いた人たちのなかにだけ息づいている、痛ましい戦争の記憶が、不自由な体の動きそのものの不規則なリズムによって、生々しく、痛切に観衆に伝わってくる。ベルリンという町には、なにかとんでもないことが近い過去にあったのだ、という思いに、仮にベルリンの歴史をまったく知らなかったとしても、この場面だけでもどうしようもなく駆られるにちがいない。

もちろん、ヴェンダースがメガホンを取った時、ポツダム広場の老人の姿の背後には「壁」があった。「壁」が取り払われた今、その老人の居た場所を眺めることができる一種の物見の塔のような〈インフォボックス〉が、旧東ベルリン側に建っている。設計はフランクフルト・アム・マインの建築家ボリガーとグローマン。ちょうど鋼管によってせり上げられたようなかたちで真っ赤なキューブが中空に浮かんでいる。絶対にいたずらすることのできない位置に意図的に乱雑に「Infobox」と黒く書かれている。設計者の若さを感じさせるウィットというべきだろう。実際、ここには多くの若者たちがいつでもたむろしている。CG、立体音響、液晶モニター、インターネットなどを駆使して、1999年の遷都のあと、ベルリンがどのようになっているかがヴァーチャルに体験できる施設なのである。そのなかでも力を入れて紹介されているのが、いわゆる〈ポツダム広場プロジェクト〉である。屋上に登ればそのプロジェクトが遷都に向けて急ピッチで実現されつつある様子をまのあたりにすることができる。老詩人がよろけ、嘆いた、雑草の茂る荒涼たる広場跡には、今やレンゾ・ピアノ、磯崎新、リチャード・ロジャースら世界的な建築家たちによる大規模な建築群が居並ぶ大商業地区が出現しつつある。

この遷都までの期間に限定された小さな〈インフォボックス〉にかえって人気が集まり、保存運動さえ起こっていることはとても象徴的であるように思える。今まさにベルリンは「壁」によって分断されていた南北の軸にそって大規模な復興を遂げつつあるのだ。西はずれに位置するダーレムの森は、やがてますます都市中央の喧騒から離れていくにちがいない。事実、ダーレムの国立美術館の所蔵作品のうち、版画素描類は、すでにポツダム広場近くのフィルハーモニーなどがある〈クルトゥーア・フォールム（文化広場）〉に移っているし、今年の6月には、あの信じがたい規模と質を誇る絵画類もそこに展示されることになる。ドイツ・グッゲンハイム美術館は、ドイチェ・バンクの資金によって、ウンター・デン・リンデンの目抜き通りに300m²という小さな展示面積とはいえ、きわめて美しい空間をドイチェ・バンクの建物の中に間借りしてオープンしたばかりであり、『ドローネー、パリのシリーズ』展は、グッゲンハイム・コレクションを存分に利用しつつ、世界各地から秀作を集め、ため息をつかせるようなみごとな展示となった。グロピウス・バウ内にあったベルリーニシェ・ガレリーもミッテ地区に引っ越し中であり、すでに多くの画廊が集まっている「美術館島」の北側のシナゴーグ周辺は、美術マーケットとして確実に今後もっとも活力のある地域になるにちがいない。そして、〈インフォボックス〉から北を眺めやるとき、こうした文化の南北の軸線にとって決定的となる施設が、全面改修中の議事堂のかなたに見えてくる。〈ハンブルガー・バーンホーフ〉。ちょうど東京の場合の上野駅のように、北に位置するハンザ同盟都市ハンブルクとベルリンを結ぶ終端駅（いわばベルリンにとっての「北駅」）、それが今現代美術のための美術館として1996年11月に蘇り、オープンしたのである。そしてそのかたわらには、2005年に操業を予定しているベルリン－ハンブルク間を1時間で結ぶリニア・モーター・カーの高速交通システムのための新しい駅舎「レールター・バーンホーフ」の大規模な地下工事が着々と進行している。

おそらく19世紀の後半に美術史家ヴィルヘルム・ボーデがプロイセンの国威発揚を背景に巨大な美術コレクション、そして美術館群を形成したときと同じような規模の変化が、文化のレベルで今ベルリンに起ころうとしていることは確かであるように思える。こうした過激な変化は、一方で、さまざまな軋轢や矛盾を生んでいるにちがいない。かつてあれほど熱心に〈ハンブルガー・バーンホーフ〉やヴィデオ・アートの未来について語ってくれた辣腕の学芸員ヴルフ・ヘルツォーゲンラートはもはやベルリンにはいない。急激な変化は、人間相互の緊張を生まざるをえないものだろう。郵便局もそのなかにある、ひどくカジュアルで便利な仮設建築〈インフォボックス〉の保存を望む人々は、おそらく無意識のうちに、このささやかな施設が壮麗ともいうべき大ベルリン改造を、その背景にうごめく人間の愚かな所業も含めてすべて見守りつづける建築の「証人」ともいうべきものになりえることを直感しているのではなかろうか。

〈ハンブルガー・バーンホーフ〉は、決して巨大な施設ではない。いや、実際には8000m²以上の展示面積を持つ大規模な美術館でありながら、どうしてもそうは感じられないのだ。ポツダム広場から議事堂を右にみながらレールター・シュタット・バーンホーフに向かってモルトケ・シュトラーセからW・リスト・ウーファーに沿って歩いていくと、以前に「国境」の役目を果たしていたベルリン－シュパンダウ運河のすぐ西側に、むしろ忘れ去られたようにひっそりと姿を現わしはじめる。そして、歴史をふりかえるなら、この建物は、帝都ベルリンの建設にさきがけた最初の近代的な施設であったために皮肉なことにかえって歴史の表舞台から退場を余儀なくされたことがわかってくる。

ベルリン－ハンブルク間の鉄道の敷設が決定されるのは1835年のことであり、1846年12月12日にはじめての試験運転が行なわれている。ベルリン側の終端駅である〈ハンブルガー・バーンホーフ〉は、その翌年、この事業全体の設計を担当したフリードリヒ・ノイハウスの手によって設計され完成する（ちなみに現在でもベルリン－ハンブルク線のいくつかの駅舎はノイハウス設計のものが使用



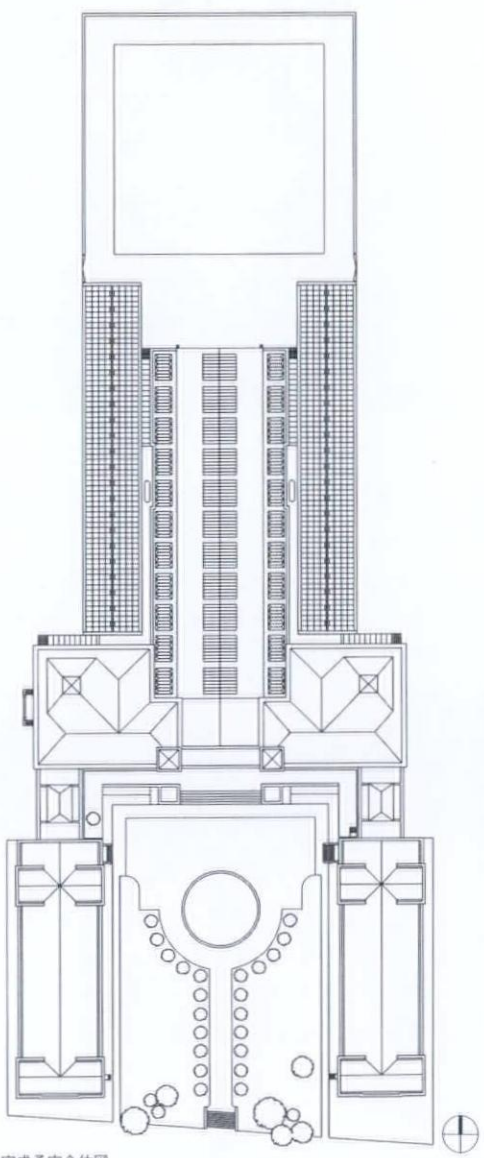
インフォボックス。ポツダム広場の新しいランドマーク。進行中のベルリンの都市計画について情報を提供するためのカジュアルで心地よい施設。屋上に登れば、「ポツダム広場プロジェクト」の進行状態を間近に眺めることができ、さらに北側にはハンブルガー・バーンホーフを望むことができる



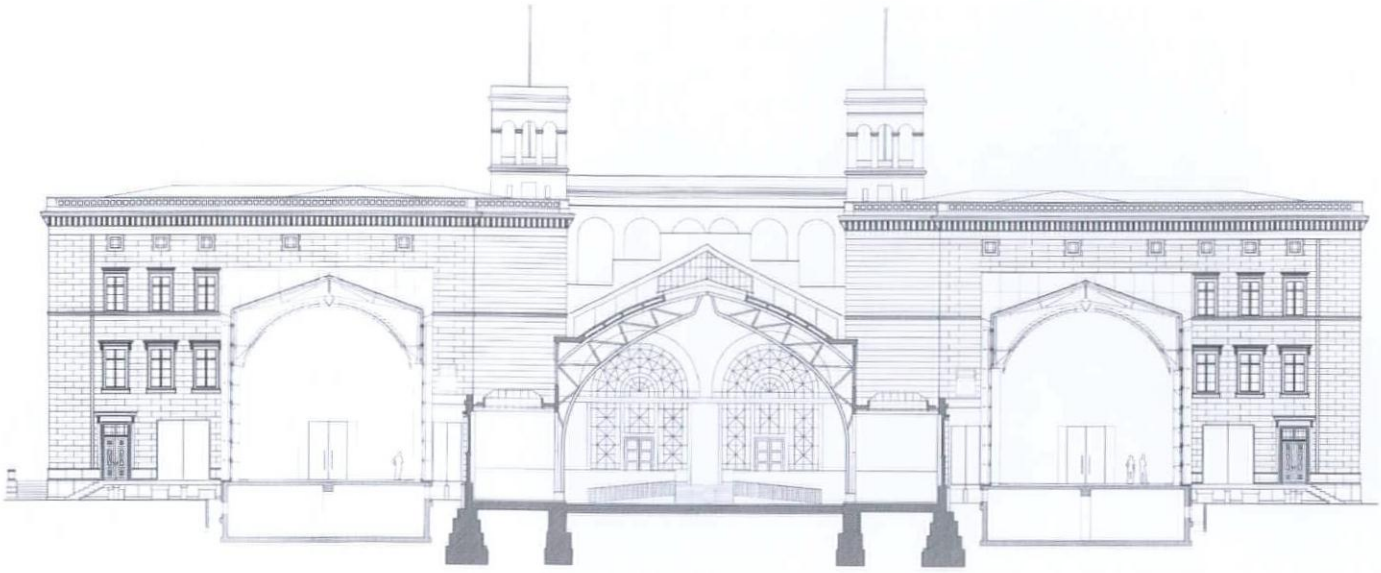
建設中のポツダム広場。1997年頃。かつての喧噪する20年代ベルリンの中心部は、刻々と変貌している。1999年ベルリン遷都をきっかけに、この周囲が新しいベルリンの中心部となっていくであろう



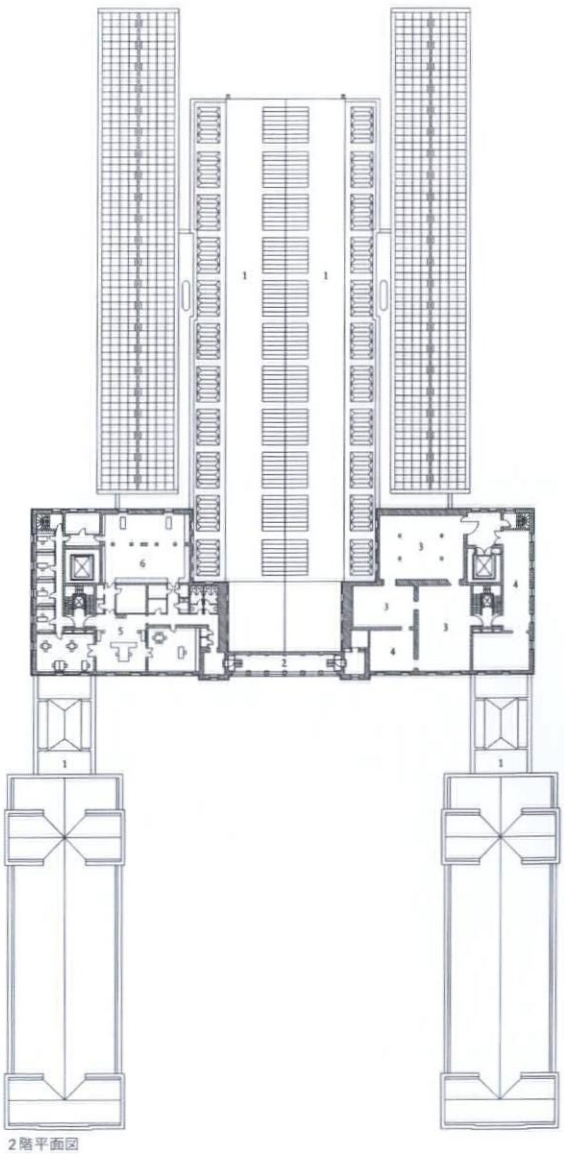
東側「グランド・ギャラリー」外壁（右図の右上部）。周囲はまだ工事中であり、散乱している。クライフスはベルリン―シュパンダウ運河に面する外壁を極めて禁欲的に構成している。しかし、この工場のような素気なさは内部に19世紀の象徴である「駅舎」を抱くことによって、自己主張へと見事に転化しえている



完成予定全体図

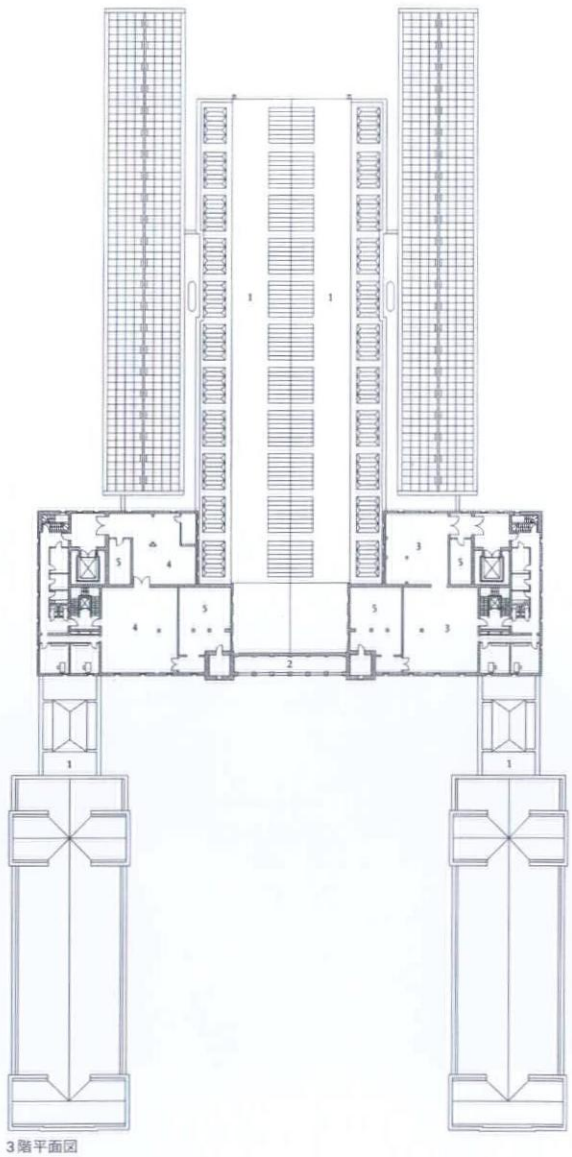


1：屋根
2：正面玄関の大円形アーチ通路
3：展示室
4：資料室
5：事務室
6：図書館



2階平面図

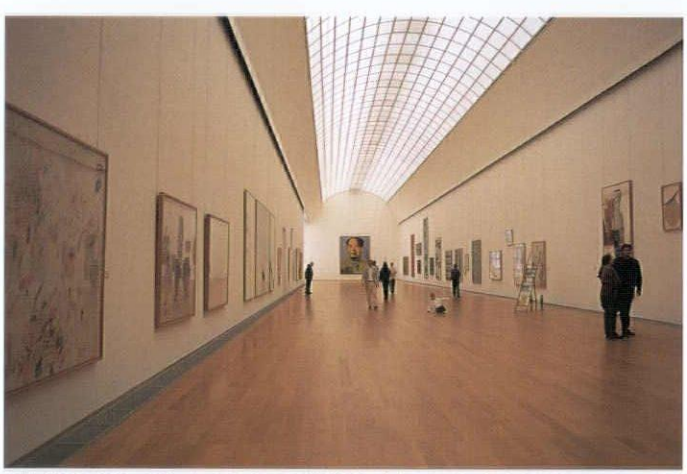
1：屋根
2：円形アーチのロッジア
3：修復作業室ならびの倉庫
4：展示準備室
5：機械室



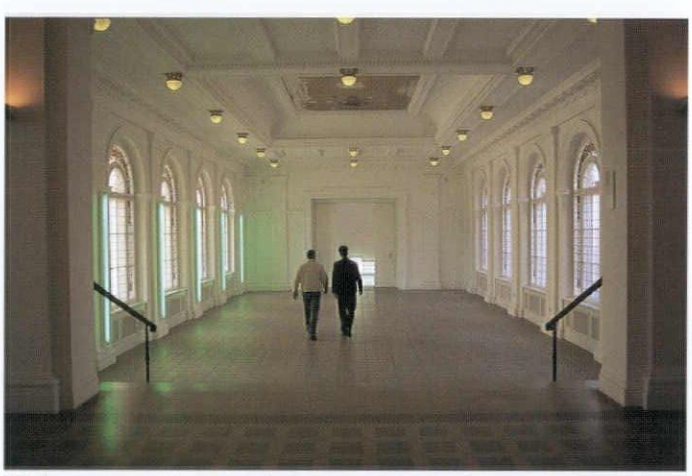
3階平面図



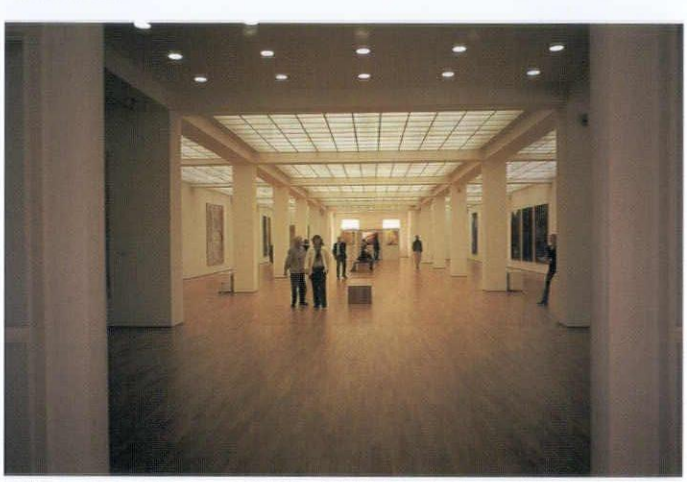
中央ホール。2階の東西を結ぶ通路からの眺め。手前にアンゼルム・キーファーの大作2点。中央にリチャード・ロング、さらに奥にマリオ・メルツの超大作。ほぼ1000m²の広さにわずか4点の展示という贅沢さ



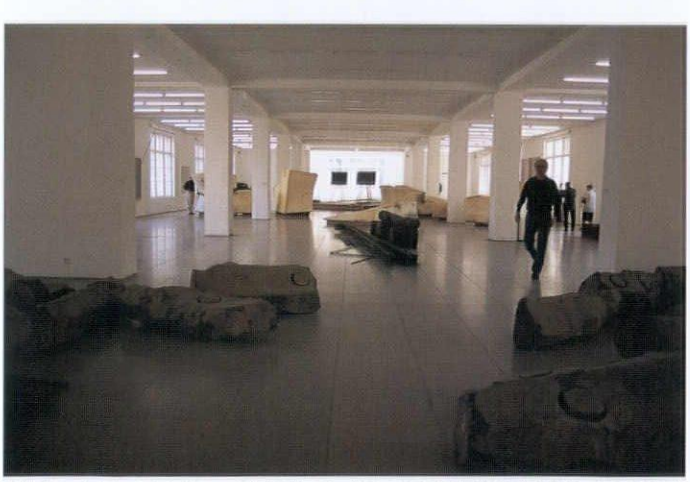
東側「グランドギャラリー」。クライフスの増築部分。「光のトンネル」とも呼ばれるように、北側のガラス壁による開口部の輝きへと観衆を自然に導く効果がある。まるで光のなかを回遊しているような気分になる



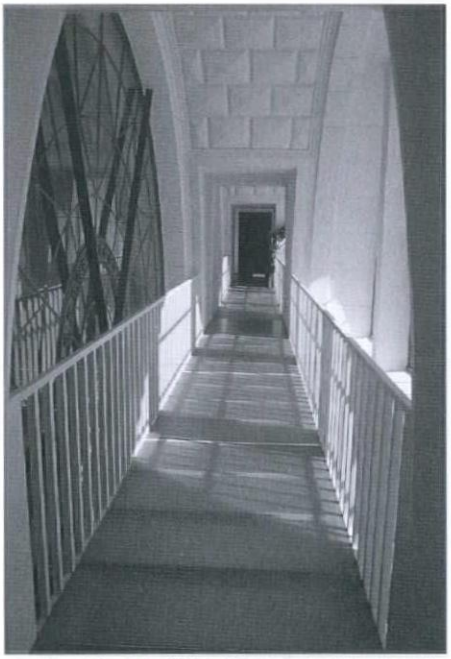
西側「エーレンホーフ・フリューゲル」1階。ボイスの部屋へのアプローチとでもいうべき部分。左右の窓の間にはダン・フラヴィンの作品が常設展示されている



東側「エーレンホーフ・フリューゲル」2階。角柱はオリジナルのもの。天井高が低いためにクライフスは、スポットではなく、平滑なグリッドのパターンによる照明を採用している。中央ホールやグランド・ギャラリーに比べると、劇的な効果は薄いが、賢明な解決策であろう



西側「エーレンホーフ・フリューゲル」1階。ヨーゼフ・ボイスの圧倒的な大作群が、まるで展示作業中というような、計算された乱雑さで並ぶ。『20世紀の終わり』『市電停車駅（未来への記念碑）』を見ながら会場に入っていくと「絶望」と「救済」というドイツの20世紀美術のキー・メッセージが響いてくる



2階通路。本来、汽車が通過した円形アーチを左右に結ぶ通路。このクライフスのアイデアは秀逸であり、やや、退屈な印象のある旧事務所部分の展示室の弱点を劇的に解消している。ただし、処理そのものは極めて控えめである



東側「エーレンホーフ・フリューゲル」1階。レストランへと接続する部分。第一次世界大戦前後に増築された部分であり、天井画が残っている。「建設」「鉄道」のふたりの寓意女性像が描かれる。衝立のようなものは、ボルケの透明画。



中央ホールを側廊部からのぞむ



側廊部の照明。左はマリオ・メルツの作品

されているという)。玄関部分のふたつの円形アーチをもった、現在の美術館の出入口は、本来、そこも機関車が通り抜け、手前にあった回転台によって方向転換をしていたことが当時の石版画によってうかがわれる。この円形アーチは、3層目にある円形アーチのロッジア、そして、左右の2基の塔の円形アーチへと順を追って小さくなって反復され、正面ファサードにヴィラ風の繊細なリズム感を与えているのだが、そこを近代を象徴する鉄の固まりが、蒸気と噴煙をまき散らしながら文字どおり貫通してくるさまは、上品な新古典主義的な表層を突破して都市へと侵入してくる異物としての「近代」を多くの人びとに実感させ、衝撃を与えたに違いない。事実、この駅舎は、19世紀前半のベルリンでのお手本とでもいえる存在であったのだ。しかし、ベルリンの急速な大都市化は交通網の大幅な拡充を必然的に要請するようになり、40年にも満たないうちにこのパイオニアともいうべき建物の歴史的使命をあっけなく終えさせることになる。1884年には、ハンブルクとベルリンを結ぶ新駅〈レールター・バーンホーフ〉が完成し、旧駅舎は、鉄道局の事務関係の施設として転用される。その後、プロイセンの帝国主義的野望を体現していた鉄道建設を全世界に誇示するために、繰り返し、万国博覧会に出品された鉄道関係資料の保管兼展示施設として、1906年12月14日にヴィルヘルム二世の列席のもと、〈交通・建設博物館〉として姿を変えて開館する。左右に平行して伸びている「エーレンホーフ・フリューゲル」と呼ばれる両翼部分は、この博物館のために開館後に増設された部分である。歴史の波は、この由緒正しい駅に、その後もなお容赦なく打ち寄せる。ヒトラーのベルリン大改造計画では、この施設は、もし実現すれば取り壊される運命であったばかりでなく、戦後、連合軍は、この施設を博物館ではなく鉄道関係のものとみなして、旧西ベルリンの側に位置するものでありながら、法的には旧東ベルリンの「ライヒスバーン(鉄道局)」の管理下に置かれるように処理してしまう。1957年のベルリン市の航空写真が残っているが、ほとんどの屋根が落ちた〈ハンブルガー・バーンホーフ〉が痛ましい姿をそこに確認できる。実際、戦後すぐの混乱のさなかに、この〈交通・建設博物館〉の所蔵資料の一部もまたソビエト軍によって運び去られている。ようやく、この破壊された駅舎を含む「Sバーン」関係施設すべてが、旧西ベルリンに委譲されるのは、1984年春になってのことだ。建築家ヴィネトウ・カンプマンが大幅な補修工事の指揮をとり、1987年には「ベルリン市750年記念祭」の事業の一環として『ベルリンへの旅』展が開催され、同年12月にベルリンの市議会は、この施設を美術館として再生させることを決定する。その翌年にハラルト・セーマンのキュレーションによって実現することになるヨーゼフ・ボイス、カール・アンドレ、ニエル・トローニ、ドナルド・ジャッド、サイ・トゥオンブリら31人の選りすぐられた現代作家による『ツァイトロース(時を越えたもの)』展が、〈ハンブルガー・バーンホーフ〉がいかに現代美術の展示に適しているかを誰にも納得させる伝説的な展覧会となった。

コンペによってベルリンの建築家ヨーゼフ・パウル・クライフス(1933年生まれ)が最終的に選ばれ、正式の名称を「ハンブルガー・バーンホーフ、現代のための美術館、ベルリン」という新しい美術館の全面改修と増築が行なわれることになる。すでにフランクフルト・アム・マインの〈先史・古代博物館〉(1988年竣工)でのカルメル会修道院との接合・同化の手際の見事さについては、この連載でのわたしの前回の担当のときに、指摘しておいたが、この19世紀前半の駅舎に対しても、クライフスは、最小限の介入によって、最大限の効果を得ようとするアプローチを貫いている。まさに駅の軌道とプラットフォームの部分が、中央と両脇の3つの部分から構成されるメイン・ホールとなっており、基本的には、駅舎が「交通・建設博物館」に改造されたときのままで、側廊のすべての窓を覆い、入り口から見て一番奥にあったテラスを取り外した以外、大きく変わっていない。玄関部分から階段を下がってメイン・ホールに入っていくという段差もそのときからのものであり、クライフスは、この空間の基本性格にはまったく手をつけずに、鉄骨による無駄のない空間の美しさを、いくぶんか青みを帯びた灰色の正方形の石材を敷きつめた床と、決して冷たい印象を与えることがないように配慮されたオフ・ホワイトの壁面と天井面の仕上げによって、まず最初に圧倒的なものとして提示する。『ツァイトロース』展のときの荒廃した状態の迫力は、もちろん失われたが(そして、そのコンテキストで際立つはずの芸術による救済という象徴性も同時におそ

らく半減したが)、多様なものを拒むことのない、許容力の大きな(中央に置かれているリーチャード・ロングの〈ベルリン・サークル〉は開館時に現場に設置されたものであり、総量30トンを越える)均質な透明空間が自然光を活かしながら出現したことが、まず、この美術館の成功を約束しているといっても過言ではあるまい。現在は、北側のガラス面の向かいに野外彫刻のための庭が整備される予定ではあるものの、輸送用コンテナが雑然と置かれている作業現場の様子がガラスを透かして見えてしまっている。「光のトンネル」と呼ばれるクライフスが新たに増築した東ウィングの展示室の運河側も建設資材が散らばっており、まったく予算のめどがたたずに放置されたままの西ウィング側もまた、この美術館がまだ進行中であることを誰の目にも印象づける。「モアビート」と呼ばれる、鋳造所のあったこの労働者たちの地域の歴史的記憶も、この未完成のさまによって喚起されずにおかないのだ。メイン・ホールに対してちょうど幅が半分ほどの細長い増築されたウィング部分(「グランド・ギャラリー」)でも、クライフスの仕事ぶりは、大げさな自己主張とは無縁であり、外光がガラスの壁面が差し込んでくる奥の光の頂点へと人をまるで吸引するような清潔で簡素な魅惑に満ちている。このトンネルを連想させるギャラリーの造形は、クライフスが手懸けた〈シカゴ現代美術館〉(1992年竣工)と同質のものであるが、旧駅舎のメイン・ホールのプロポーションと同調することによって、ここでのほうがその直線性の美しさを大らかに際立たせているのではなかろうか(「グランド・ギャラリー」のガラス壁面は、メイン・ホールの北側の終端部に接する部分からはじまっている)。クライフス自身が「詩的合理性」という言葉で説明する、明確で、しかも、古いものとの同居によってポリフォニックでもある空間の進行が、メイン・ホールと「グランド・ギャラリー」だけですでに4000m²を超える広大さでありながら、決して威圧的、あるいは、単調な印象を与えないような作用を働かせているのである。おそらく、「グランド・ギャラリー」の外壁にクライフスが採用した、縦1.2m×横3.6mのアルミニウムの鋳造パネルを接合させる乾式工法も、メイン・ホールのガラスと鉄骨による透明な構造性との対比を充分に計算してのことであろう。ガラス壁面部分以外には、「グランド・ギャラリー」の周囲は完全にこのアルミニウムのパネルの禁欲的なパターンによって覆われている(照明は自然光と人工光とのカクテル)。

クライフスはこう語っている。「わたしにとって、幾何学は、時空間を体験するための一種のカテゴリーのような機能を果たすものなのです。たとえば……アパメイア(シリア)の直列する列柱群を思い浮べてください……直列する列状構成は、静かに、そして非情に、道程と時間を暗示します。直列する列状構成こそが、わたしの考えでは、『最終的なもの』という意味での閉じたシステムを追求する古典的な姿勢を排除するものなのです。直列する列状構成は、並列的ないし階層的な秩序が奉仕する形式的に閉じた、あるいは調和的なシステムの古典的な探求よりも、むしろ時空間にかかわるものなのです」。

「時空間へのかかわり」をクライフスは、「直列する列状構成」を「グランド・ギャラリー」の外壁に採用することによって、〈ハンブルガー・バーンホーフ〉という基本的には新古典主義的なシンメトリーの「閉じた」構造を攪拌しようとしている。左ウィングが現在完成していないことも、皮肉ななりゆきとはいえ、このクライフスの美的な介入を際立たせているように思える。

メイン・ホールと「グランド・ギャラリー」以外の空間については、マルクス・コレクション(寄託)、ノイエ・ナツィオナール・ガレリーとプロイセン版画素描室の公立コレクション(1960年代半ば以降の作品)の常設展示場としての〈ハンブルガー・バーンホーフ〉の基本性格もあって、特に変則的な処理をクライフスは行なっていない。玄関ホールのふたつの円形アーチを2階よりもやや少し高いレベルで東西に横切っていく通路のような見せ場もクライフスの抑制によってこそ生きているようにみえる。東側の「エーレンホーフ フリューゲル」の1階にあるレストランや、アクツィオーンスラウム(多目的ルーム)の場合でも、むしろ不要に手を加えていない簡素さのほうが印象に残る。反対側の西側の1階は、マルクス・コレクションとノイエ・ナツィオナール・ガレリーのボイス作品が合体していることによって、ダルムシュタット州立美術館につぐ質量のボイス作品群となって、観るものを圧倒せずにはおかないものの、空間そのものは、そっけないほどにシンプルに処理されている(ただし、天井高が低く、ボイスの大作とのバランスは決して良くはない。また、そのために照明にも、一部むらが生じている)。

クライフスは、「グランド・ギャラリー」を細長く光の方向へと延長させることによって、この旧駅舎が、北への窓口として南北の軸線上に位置していることを強調してみせたともいえよう。そのことによってこの美術館には、透明な通路としての基本性格が与えられることになった。今は、まだこの美術館の運営やコレクションについて議論することは時期尚早であるにちがいない。しかし、議事堂南側の総統官邸の跡地に「虐殺されたヨーロッパのユダヤ人たちの記念碑」を建てるためのコンペに参加したアーティストたちが、例外なくその歪んだ台形の平面プランに、比喩的に「歪んだ」歴史を読み取っていたように、ポツダム広場から〈ハンブルガー・バーンホーフ〉にいたる南北の軸線もまた、屈曲を強いられたものである。クライフスの明快な軸線の提示が、ふたたび強大な大都市に変貌しつつあるベルリンへと「現代」を吸収し統括する手段ではなく、その駅としての本来の機能である異なる世界への旅立ちへの誘いの場となることを期待しないではいられない。

●みずさわ・つとむ／神奈川県立近代美術館主任学芸員



西側にあるブックショップ。「ヴァルター・ケーニヒ書店」がここでも店舗を構えている。現在流通しているドイツ語による近代・現代の美術本は、ほぼ網羅してある。写真は、ディスカウントのコーナー

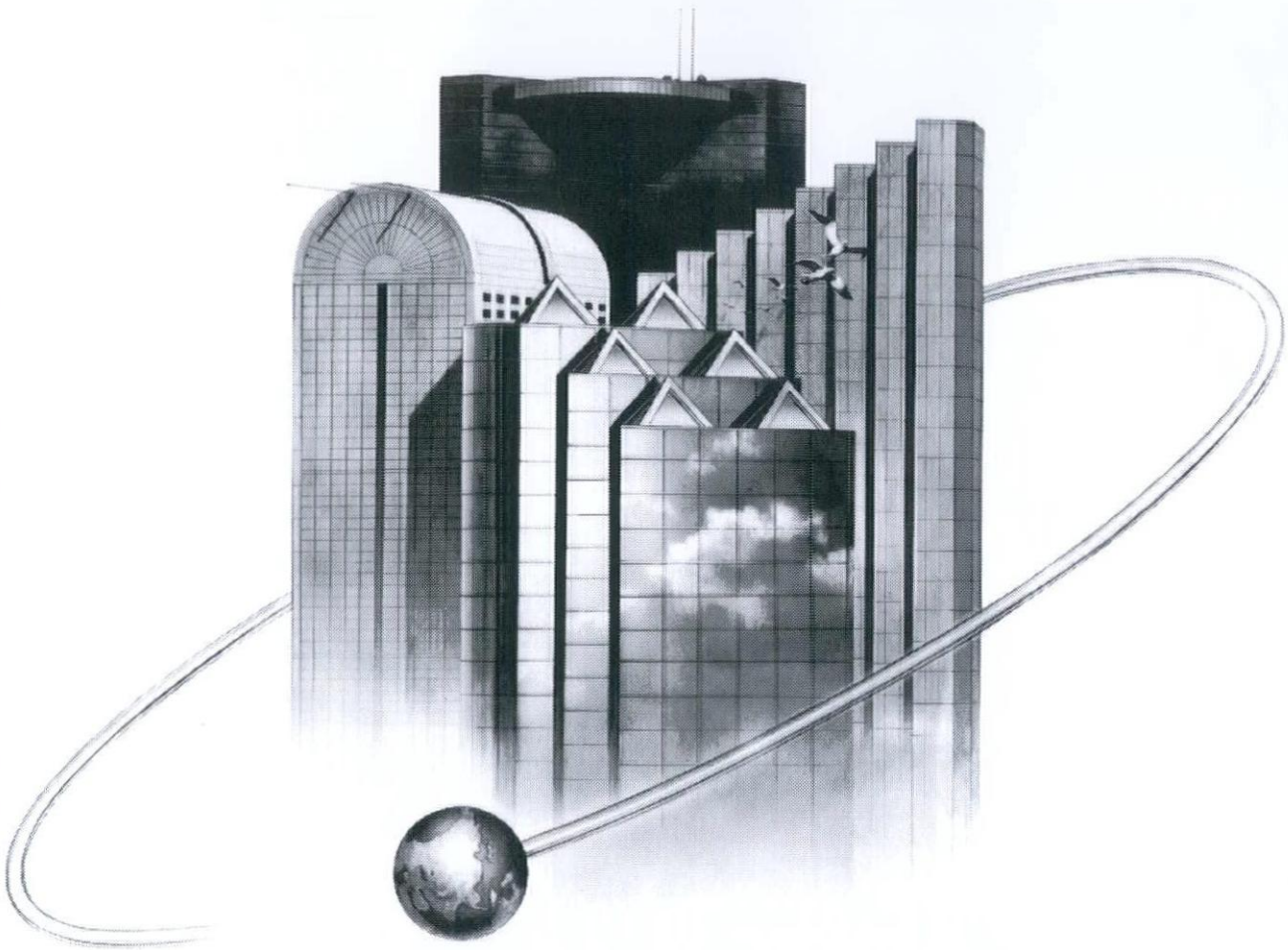


東側「エーレンホーフ・フリューゲル」のレストラン。現在レストランは、厨房が未完成であるという断り書きがある。簡単な食事と飲み物(ビールも可)がサービスされている。庭の側からの光が、あまりにも重い展示作品の圧倒的な印象から開放させてくれる

図版出典=
Josef Paul Kleihues, *Hamburger Bahnhof Museum für Gegenwart Berlin*, Verlag der Buchhandlung Walther König

美術館データ
●ハンブルガー・バーンホーフ
Hamburger Bahnhof Museum für Gegenwart-Berlin
所在地=Invalidenstraße 50/51 10557 Berlin Tiergarten

快適創造

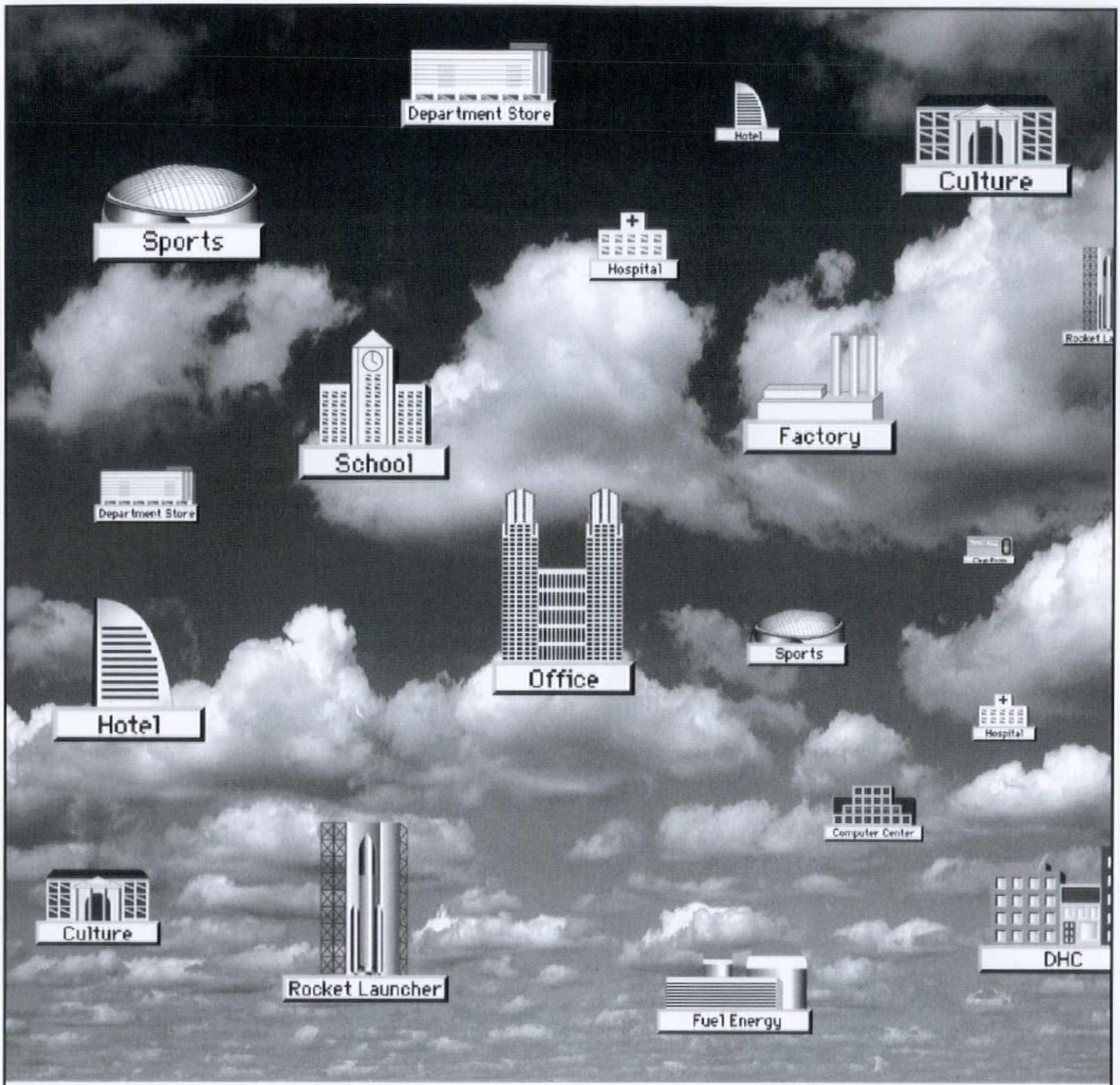


人と自然と機能が調和した理想の快適環境を。

人と自然、そして機能が調和した新しい快適環境を創造する。
それが三機工業のめざす総合エンジニアリングです。
都市、コミュニティ、産業施設…人をとりまくさまざまな環境について考え、
その理想を追いつづけている三機工業は、
いま、地球環境という視点にたって、すばらしい未来にむけての新しい環境のかたちを提案しています。

三機工業株式会社

〒100-8484 東京都千代田区有楽町1-4-1 TEL.03(3502)6111



空気のメニュー。

オフィス、工場、学校、病院…。それぞれの建物には、もっとも適した空調システムがあります。
新菱冷熱は「さわやかな世界を創る」という思想のもとに、
用途に合わせたオーダーメイドの空調システムを、設計・施工しています。
バリエーション豊かな私たちの空気のメニューから、21世紀の新しい都市環境が始まります。

新菱冷熱
SHINRYO CORPORATION

本社：〒160-0004 東京都新宿区四谷2-4 ☎03-3357-2151(代)　　支社：札幌・仙台・千葉・横浜・名古屋・大阪・富山・広島・福岡

新刊紹介

『ルーブルにピラミッドを作った男』
マイケル・キャネル＝著
松岡恭子＝訳
A5判変型　422頁
三田出版会　3200円
ケネディ家やミッテランを魅了し、多くの大物クライアントを持つI. M. ペイ。本書では、ルーブルのピラミッド実現までの様子や、米国留学時代、一族のことなどが生き生きと語られ、建築家という枠を超えて一人の移民の伝記としても、非常に興味深い。



『アメリカの住宅生産』
戸谷英世＝著
B6判変型　264頁
住まいの図書館出版局　2400円
アメリカの住宅の実情はこれまで日本にあまり紹介されてこなかったが、アメリカの住宅産業は、社会の変化にいち早く対応してきた業界でもある。
大家族主義から核家族化、高齢化社会、フェミニズムなどをからめながら、今後の日本の住宅のあり方に対して示唆に富む事例を数多く紹介していく。



『構造家　青木繁の軌跡』
青木繁先生退職記念出版実行委員会＝編
B5判　228頁
南風舎　非売品
法政大学を今年3月に定年退職する青木繁の退官記念出版。
構造設計によって「素晴らしい建築空間の創造」に携わる喜びを説く青木繁がこれまで手掛けた作品や、論文を収録。
川口衛、大谷幸夫、限研吾らが寄稿。



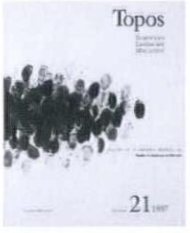
『建築MAP京都』
ギャラリー・間＝編
B5判変型　292頁
TOTO出版　1524円
建築MAPシリーズ第2弾。
寺院神社の古典建築から町屋、茶室まで、また様式建築からさまざまな近代建築まで、378件を網羅して紹介する。京都建築のトピックスを集めた「京都をめぐる言説」などを収録。第1弾に続いて、豊富なインデックスも建築めぐりに有用。



『横濱・開港の舞臺』
A3判変形　40頁
関内街並復元絵図刊行会　3400円
本書は、神奈川県横浜市中区が、区制70周年を記念して発行。明治末期から大正中期、開港当時の中区関内は、洋風、和風建築が混在し、独特の雰囲気をもっていた。本書は、当時の4つのメインストリートの両側にあった334棟の建物を、写真を始めとした資料をもとに絵図に表し、全長11.5mのジャバラ折製本の上に復元した興味深い資料である。



『Topos　日本語版』
A4判変型　136頁
カルウェイ出版+エーエルエス景観デザイン研究所
5500円
欧州全域の最新プロジェクトや話題のデザインを豊富な写真とスケッチで紹介している雑誌Topos。
最新の21号から日本語版も発売された。
ランドスケープ関係者の他、旅行者にも有用。
エーエルエス景観デザイン研究所では、直接販売も行っている。



『ポンピドゥー・センター物語』
岡部あおみ＝著
B6判　228頁
紀伊国屋書店　1900円
著者は、パリの国立ルーブル学院で博物館学を学び、ポンピドゥー・センター開設当時からスタッフとなって数多くの展覧会に携わった。本書には、常に先端的な企画を提示し続けたセンターの軌跡や舞台裏のキュレーターたちの活動が、著者の個人的な体験を交えて綴られている。



『野又穫画集』
A3判変型　132頁
トレヴィル　5900円
建築物を多くモチーフに用いて制作を続ける野又穫の作品集。1991年のSUBLIMEからSTRUCTURESまでの作品52点を収録。文、磯崎新。
CD-ROMも同時発売。
1986年佐賀町エキジビットスペースデビューから96年までの10タイトル210点に加え、リトグラフ、3D等も収録。5000円



『建築とデザインのフラクタル幾何学』
カール・ボーヴィル＝著
三井直樹+三井秀樹＝訳
A5判　194頁
鹿島出版会　2900円
基本的なフラクタル作図から始まり、
フラクタル・リズムの時間的変動など数学的理解を経て、フラクタルの概念の建築・デザインへの応用を考察する。
建築を見る側にとっても、新しい視点を獲得できる。



書評

『芹沢銈介の文字絵・讃』

評者＝田中一光

芹沢芸術を考える本



『芹沢銈介の文字絵・讃』
芹沢長介+杉浦康平＝著
A5判　212頁
里文出版　3400円

芹沢銈介の作品は、戦後すぐの1950年代から、身近に見ることができた。私が大阪で勤務していた職場に近いところに、一軒の日本料理店があって、店内の什器や家具がすべて、柳宗悦が指導する民芸作品で調えられていた。河井寛次郎や浜田庄司などの陶器が棚に飾られ、その上に芹沢銈介の染文字の額があった。「天」という字か「福」であったか、それは忘れてしまったが、濃紺と朱の対比の美しさが今でも目にやきついている。

2度目の驚きは芹沢銈介のパリ展のポスターだ。私の友人のオフィスに貼られていて、風という字の明快で力強い、品位ある美しさに圧倒された。芹沢銈介の作品は、実用性を重んじることや、文字をテーマにした作品が多いことなどから、われわれグラフィック・デザイナーと共通するのだが、あまりグラフィックの先達として広く論じられたことがない。今回の芹沢長介、杉浦康平による「芹沢銈介の文字絵・讃」は、様々な視点から芹沢芸術を浮き彫りにしている。とくに杉浦康平のアジア造型文化論の延長線上で芹沢銈助をとらえ直したことは、実にユニークで素晴らしい出来事である。

私は芹沢銈介よりずっと後になって李朝民画の文字絵を見たが、その時の感動の中に、文字絵と芹沢、このふたつの関係を見落としてしまっていた。芹沢銈介というと、つい日本の型染に焦点を求めてしまいがちで、せいぜい沖縄の紅型がその源流かと思っていた。

杉浦康平は、アジアの文化という広い視野に立って、芹沢芸術の美的構造を「山・水の豊穣」「翻る文字」「結ぶ文化」「血脈流れる文字」「寿・福の変幻」「生命をはらむ」「点・画を区切る」「文字を着る」「文字マンダラ」といった9つの視点から論じ、大へん丁寧に一点一点の作品を読み解いている。

杉浦康平は数年前、芹沢銈介の代表作を12枚にまとめたカレンダーをデザインしていて、それを入手しようと苦労したが、今、こうしてこの本の副題である「豊穣の文字、至福の文字」を手にすると、しばらく遠ざかっていた芹沢芸術の香気が、私の身体の中をかけめぐって、何年ぶりかでその豊麗な美意識に触れる思いがした。

芹沢銈介の文字絵の最大の特徴は、字が肉太で堂々としていることである。象形文字としての漢字の一字一字を、意味がようやく読めるか読めないかのところまで単純化し、新しい日本の造型美にまで高められている。

とくに型染の技法からくる、刃物を使った直線の部分と、字のもつ有機的な曲線が繋がってゆく箇所に、得も云われぬ美を感じる。

また筆順による字に形を分割するテクニックとして糊の清潔な白い線が生かされており、そのデリケートな味わいが優美である。

色彩も藍染の深いブルー、茶、黄土、さび朱や紅などといった草木染の色が、その大胆なカタチに対して、どこまでも日本的な情感をふりそそいでいる。

芹沢芸術は「数奇」とは対照的な日本の美である。

●たなか・いっこう／グラフィックデザイナー

Book Review

書評

『メタボリズム』

評者＝米山勇

読ませるメタボリ論の登場



『メタボリズム』
八束はじめ+吉松秀樹＝著
B5判　300頁
INAX出版　2800円

八束はじめと吉松秀樹の共著による『メタボリズム』が出版された。メタボリズムについては、これまでさまざまなところで語られてきたが、このように一冊にまとまったかたちで出版されたのは本書が初めてである。

本書のユニークな魅力はいくつも挙げることができるが、特に2点を挙げるとすれば、まず第一に、「カプセル」や「ムーブネット」、あるいは「メガストラクチャー」といった突出した未来主義的イメージで受け取られてきた従来のメタボリズム理解に対し、一石を投じようとした点である。そのために著者らは、多彩な章立てを用いながら、意欲的にメンバー個々の建築観の相違や衝突を描き出していく。たとえばカプセルとムーブネットはしばしば混同されがちなタームであったが、本書では両者の相違についてひとつの章を与えながら分析した上で、カプセルは「トレードマークとしてメタボリズムのオフィシャル・イメージをつくりあげることには寄与した。しかし、それは黒川以外のメンバーにとっては必ずしも本懐ではなかったはずだ」と断じる。そして、カプセルに潜在する可能性の延長上に、伊東豊雄と石山修武を位置付けていく箇所が、鮮やかである。また本書では、槇文彦に対し、これまでにない紙数が割かれている点も特筆される。従来のメタボリズムに関する論考が「川添、菊竹、黒川」という三者の相関図を基幹に展開されることがほとんどであったことを思うとき、メタボリストとしての槇に詳しく言及した本書の意味は大きい。さらに、これまでほとんど触れられることのなかった瀬底恒が、グループ成立のキー・パーソンとして登場するのも興味深い。

第二の点は、メンバーの各々に対して行ったインタビューを強力な資料としている点である。それによって、これまでのメタボリズム論のような、第三者による解釈の妙味によるものでも、またメンバー自身による懐古的自己言及でもない独自の客観性を、本書は持ち得ている。また、それらの発言に基づいた内容は、かなりスリリングだ。誌面の都合上、それらをいちいち挙げることはできないが、たとえば最年少の黒川紀章が「箸の上げ下ろしにまで他のメンバーにとやかくいわれた」こと、「(浅田孝が)自分の周りにいた黒川を半分雑用係として呼」んでいたこと、そして挙げ句の果てにというべきか、「ペルー集合住宅コンペのミーティングを多忙を理由に欠席した黒川が、実はテレビに出演していたことを知った菊竹・槇が、黒川をメタボリズムから除名する云々の話を持ちだし」たことなどなど、新たに知らされる事実が、随所に示されている。メタボリズムについてのまとまったかたちでの印刷物で比較的最近のものに『季刊approach No.116』(1991年)があるが、本書の方がはるかにリアルで読みごたえがある。このように、ひとつの読み物として充分に足る点も、魅力である。

ただ、「総体としてのメタボリズムが一体何であったのか」、この根源的な問いに対する回答を、本書は意図的に回避しているようにみえる。結局、メタボリズムの総体とは、八束も言うように「迷路のような非統一性」としてしか位置付けられないものなのだろうか。おそらくその問題こそが、この種の書がこれまで書かれなかった大きな要因だと思われるだけに、その点において若干の物足りなさを残しているようにも思えた。

●よねやま・いさむ／江戸東京博物館専門研究員

メトロポリタンライブラリー

1998年の評者＝
渡辺武信／太田佳代子／港 千尋

今月の評者＝港 千尋



『トロピカル・ゴシップ』
菅啓次郎＝著　青土社　2600円



『ロデーズからの手紙』アントナン・アルトー著作集V
アントナン・アルトー＝著　宇野邦一＋鈴木創士＝訳
白水社　2800円



『逸脱』
ルーチェ・デーラモ＝著　齋藤ゆかり＝訳
作品社　3500円



『誘拐』
G.ガルシア＝マルケス＝著　旦敬介＝訳
角川春樹事務所　2800円



『攻撃の人類学』
D.ギルモア＝著　芝紘子＝訳
藤原書店　4400円

闘いの言葉

今月の本棚には、さまざまな「闘い」と「移動」が並んでいる。管啓次郎の『トロピカル・ゴシップ』はブラジルからアリゾナへ、太平洋の島々からカリブ海へと「旅の思考」の旅を続ける男が、わたしたちの時代のもっとも熱く、もっともクールな言葉を貿易風に乗せて送ってくれた、かけがえのない手紙のような本だ。あらゆる言葉の細部に敏感な、著者自身は「犬」として、言葉が持っている匂いにおそろしく敏感な彼は、放浪することは進化であり、進化は記憶であり、記憶は創造であることを、すべての感覚を通して示そうとする。翻訳家として英語・スペイン語・フランス語と複数の「北の」言語を同時に訳しながら、常にマイナーな「南の」言葉の息吹を伝える驚くべき感性は、フェルナンド・ペソーア、ヴィクトル・セガレン、ポール・ボウルズといった熱帯の作家たちと、時空を超えて共鳴する。ここに提出されている問いは、すべて本質的なものばかりである。問うことは、闘いの第一歩だ。答えを探す勇気を出さなければ、旅は始まらない。今年旅をするのなら、目的地がどこであろうとも、この本が最良のガイドブックになるだろう。

思考は闘いのなかで鍛えられる。鍛えられた思考の本物の凄みを『ロデーズからの手紙』によって、額に一撃をくらったような痛みと眩暈のなかで感じ取る。これは1943年から46年のあいだ、ロデーズの精神病院に収容されていたアントナン・アルトーが書き続けた書簡集の、待望の日本語訳である。ドイツ占領期の過酷な状況のなかで、幾度となく電気ショックを与えられながら、キリスト教の原初に立ち返って西欧の全歴史と対決するアルトーは、言語の可能性をその極限において拡張している。革命とは、究極において言語の革命以外にないことを、知らされる思いだ。しかもそれが行われる場所は、アルトーの身体であり、それ以外の場所ではない。このような激烈な闘いの報告のなかから、私達はどのようにして創造の糧を受け取るべきなのか。ある手紙の追伸として、アルトーは次のように書いている。「踊ること、それは神話に耐えること、したがって現実で神話を置換することです」。

ルーチェ・デーラモがナチス支配下の収容所で女工として働きながら、2千万の移民労働者や囚人たちと地上の地獄を生きながら、彼らと連帯して抵抗するのは、このアルトーと同じ時代である。『逸脱』は、彼女のイタリアのムッソリーニ政権の高官の娘として生まれ、熱烈なファシストとして移民労働者に志願したという驚くべき生涯が、一遍の物語として書かれたものだ。生きることは自ら選択した道を、闘い抜くことである。1980年代にはイタリアのみならずフランスやドイツでも広く読まれており、フランス語版を通して私も強い印象を持っていたが、日本語版の遅れは、幸いにして斎藤ゆかりさんという優れた翻訳家を得ることによって、見事に挽回されている。限界的な状況を報告しているこの本に類い稀なある明るさを与えているのは、もちろん著者の人間的な大きさであるが、それに共感する翻訳を通して、私達は記憶を辿る方法をも学ぶのである。序文と巻末に付されたインタビューは、どちらも日本の読者へのメッセージだが、それは過去ではなく、現在についての言葉である。そのなかで彼女はきっぱりと言っている。ナチズムとは外界の出来事に無関心でいることである、と。

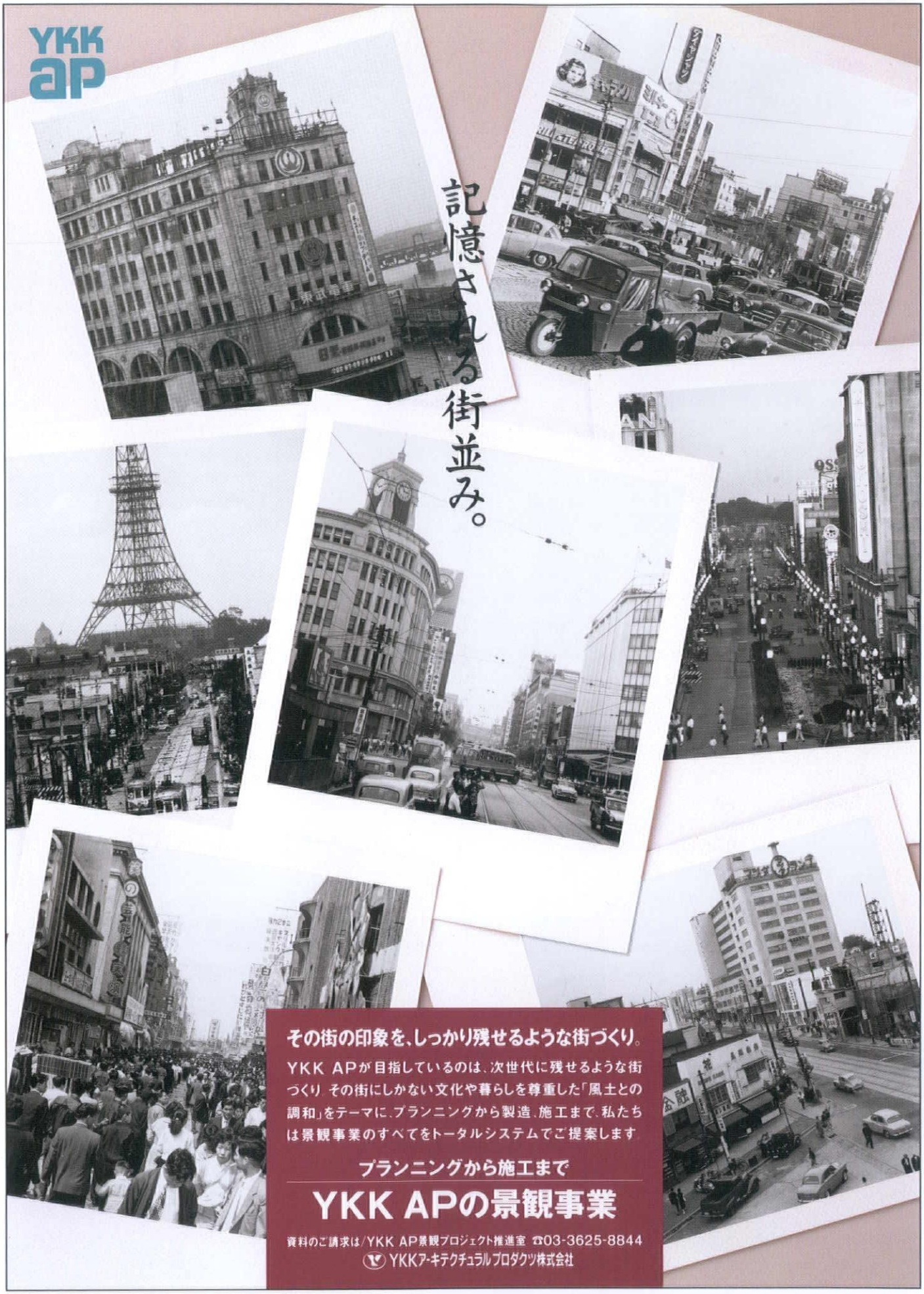
アルトーにならって、書くことは神話に耐えることであり、現実で神話を置換することであると言ってもいいかもしれない。ガブリエル・ガルシア＝マルケスの新作『誘拐』は発表当時、小説が現実を先回りしてしまったと騒がれた作品だ。1990年代初めに南米コロンビアのコカイン密輸組織が政府やマスコミの要人を次々に誘拐した事件を扱ったものだが、作品が発表される直前の1996年に誘拐事件が起きたためである。ジャーナリズム的手法はマルケス文学の原点にあるものだが、そこらの新聞にあるような無味無臭の文体とは対局にある。事件の細部を集めながら少しずつ加速し、あまりに世俗的な事件の構造の中核に神話的な次元を暗示しつつ、一気にラストまで持ってゆくパワーは、文句なく今世紀最大の作家のものであり、文句なく面白い。

このような言葉を紡ぎ出すスペイン語に、南米で出会えたのは幸運だったと言うしかない。そのような言葉を話す人々を被写体にしつつ写真を始めたことを、デイヴィッド・ギルモアの『攻撃の人類学』を読みながら思い返した。これはスペインのアンダルシア地方を対象にして、ひとつの社会に内在する攻撃の論理を分析したものだが、その本質はアンダルシアを遥かに越えて、地中海から南米にまで遍在するものだろう。特に人々の強烈な眼差しを分析するくだりを読んで、15年前にアルゼンチンやコロンビアのストリートで、そのような眼差しと格闘するスリルと悦びが、私自身のスナップ・ショットのスタイルを作ってきたのかもしれないと思った。

●みなと・ちひろ／写真家、多摩美術大学助教授

YKK AP

記憶される街並み。



その街の印象を、しっかり残せるような街づくり。

YKK APが目指しているのは、次世代に残せるような街づくり その街にしかない文化や暮らしを尊重した「風土との調和」をテーマに、プランニングから製造、施工まで、私たちは景観事業のすべてをトータルシステムでご提案します。

プランニングから施工まで

YKK APの景観事業

資料のご請求は/YKK AP景観プロジェクト推進室 ☎03-3625-8844

YKKア・キテクチュラルプロダクツ株式会社

展覧会レポート

脳内空間の現在形？
建築家・高松伸展より

末包伸吾

建築家・高松伸展
会期：1998年1月15日(木) ～2月1日(日)
会場：大丸ミュージアムKOBE(大丸神戸店)

阪神・淡路大震災から3年。この震災によって全壊し、97年3月に再建された大丸神戸店の大丸ミュージアムKOBEで「建築家・高松伸展」が開催された。

矩形のミュージアムは、所々に開口が設けられた白い曲線の壁で囲われている。この壁が、高松の脳の形を模すことで、彼の現在の関心を示すことがもくろまれている。

主たる展示は、20数点に及ぶ精緻な模型である。今回の展示では90年代後半の作品がほとんどで、それらは実現作、海外でのプロジェクト、そして計画案という3つのグループに曖昧にゾーニングがされている。それぞれの模型の近傍には、先の白い壁に図面やスケッチが配されている。模型と図面等とが明確に関係づけられて置かれているというよりも、近くの壁に散在的に配されているため、鑑賞者の視線は交錯を余儀なくされる。「織陣」をはじめとする旧作は、「脳」の外に置かれ、壁に穿たれた開口からその様子を伺うようになっている。こうした旧作は、現在の高松の関心事ではなく、時折参照されるものであることを示唆しているのである。

この展示のもうひとつの特徴が、この「脳」を延髄のように貫くアクリルのディスプレイである。ここでは、高松の自己形成の過程を、幼少期の写真に始まり、卒業設計、事務所開設時のパンフレット、装飾に関する修士論文、幾多の注釈が加えられた愛読書、建築雑誌や一般雑誌の記事等で示している。さらに床や模型の基壇の10000点に及ぶスケッチとともに、装身具、CG、マルチスライド、作品集など、決して広いとはいえない百貨店の美術館という制約の中、硬軟取り混ぜた構成がなされている。

ここに展示されている高松の90年代後半の作品は、プログラムも建設地も様々であるものの、公共建築を主に、その規模も大きい。これらの作品をその構成に関してみていくと、明らかにふたつの傾向が認められる。

まず、プログラムの主軸となる機能に、単純で強度のある形態を付与し、付置された諸機能をガラスの箱で関係づける構成である。「メテオ・プラザ(島根県八束郡)」や「カリフォルニア大学サンフランシスコ校新キャンパス計画案」に認められる、こうした構成によって、建築全体としては、分節化された形態の共振が顕示される。そして、もうひとつの構成が、「浜田市世界こども美術館(島根県浜田市)」、「Oプロジェクト(大阪)」、「アシュドット・カルチュラルホール(イスラエル)」にみられる、プログラム特有の機能に独自の形態を与え、それを単純な全体形態の中に挿入するとともに、その関係をファサードで示すものである。これらの構成は、自律した形態群をつなぎ止めるガラスの箱であるか、ガラスの箱の中に挿入された自律した形態であるかの差異はあるものの表裏一体のものである。この構成の主軸になっているのが、諸機能を関係づけるヴォイドである。このヴォイドは機能的にはホールやアトリウムとして種々の機能をつなぐとともに、空間的にも自律した形態群を3次元的につなぐ役割を果たしている。高松自身、このヴォイドを中心とする構成を「インタラクティブな交流と様々な活動の多様性や流動性を促進する開放的な秩序」とし、このヴォイドが新たな機能発生のためのシステムとなることを希求しているように思われる。プログラムの中心となる機能を散在的にインタラクティブなヴォイドと連担させていく構成、それこそ高松の脳内空間の現在形である。この構成自体は高松だけが取り組んでいるものではなく、多くの建築家に共有されているものでもある。しかし、高松の造形が、他の建築家と一線を画すのは、彼が活動初期から現在まで一貫して用いている「機械」のイメージとそこから導かれる「硬質性」であろう。特に今回の展覧会の作品においても、その「硬質性」が強調された造形が目を引いた。一般に「機械」は「散在的」な形式と相容れない。「機械」と「散在性」の邂逅がいかなるものであるのか、そこに新たな秩序を見いだすことは可能なのか、あるいは「エラタワー(イスラエル)」のような均質空間を主とする建築における構成のあり方は高松の今後を予兆するのか、そう考えさせられた展覧会であった。

●すえかね・しんご／神戸大学工学部助手



会場風景　写真＝筆者撮影



エラタワー、イスラエル、1996年

写真＝小林俊之

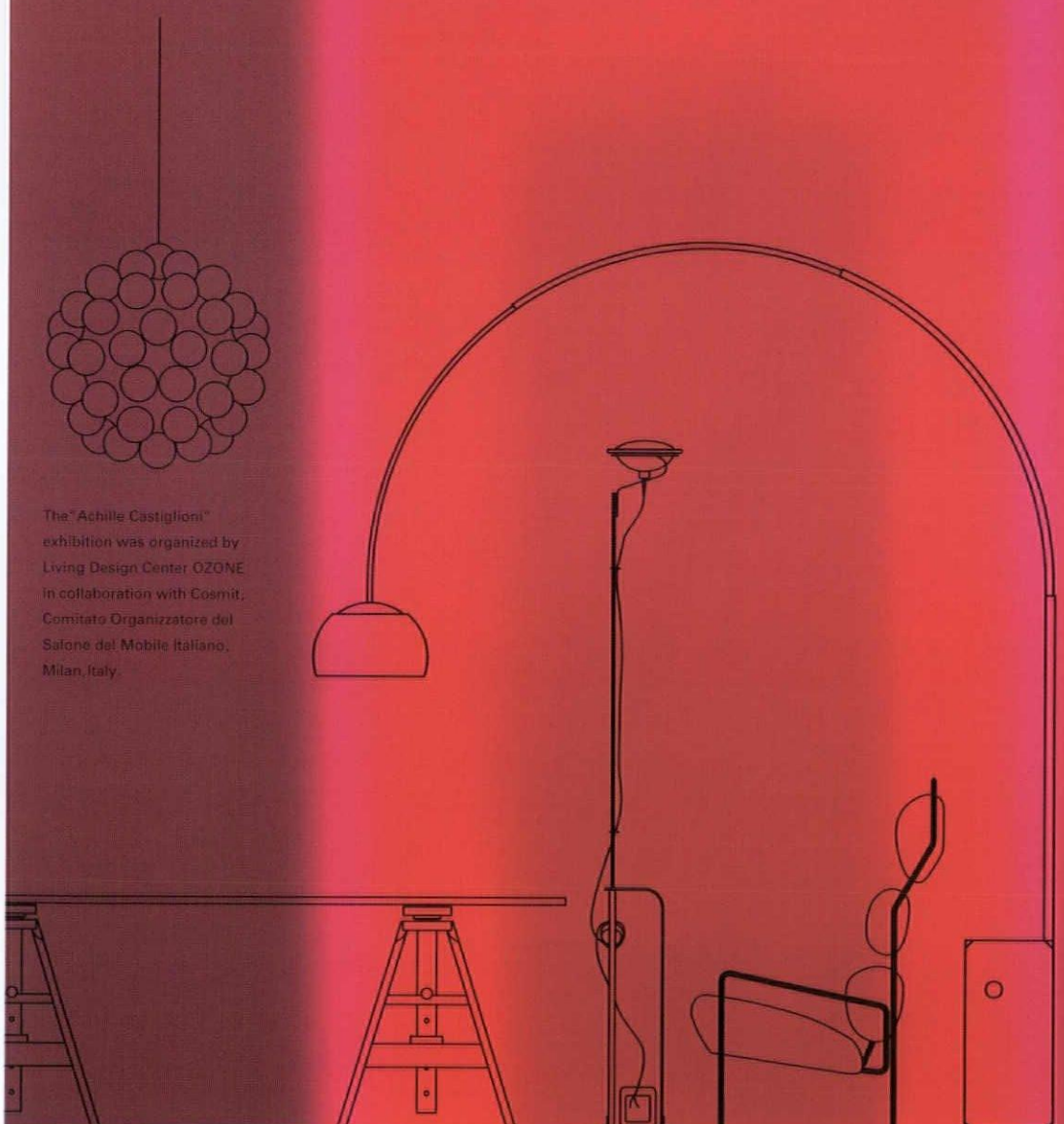
イタリアデザインの巨匠

アキッレ・カスティリオーニ展

1998年3月13日(金)—4月12日(日) 水曜休館 10:30–18:30

会場:パークタワーホール(新宿パークタワー3F) 入場料:一般700円、学生300円(中学生以下無料)

ACHILLE CASTIGLIONI



The "Achille Castiglioni" exhibition was organized by Living Design Center OZONE in collaboration with Cosmit, Comitato Organizzatore del Salone del Mobile Italiano, Milan, Italy.

主催
リビングデザインセンターOZONE

後援
イタリア大使館
日本建築家協会
日本インダストリアルデザイナー協会
日本インテリアデザイナー協会
日本産業デザイン振興会

協賛
住友ベークライト+ベークライト商事

協力
カッシーナ・インターデコールグループ
サントリー
日本プロス
ノバオオシマ

お問い合わせ
リビングデザインセンターOZONE
〒163-1062
東京都新宿区西新宿3-7-1
新宿パークタワー3-8F
TEL.03-5322-6500(代)

来日記念講演

今回の展覧会のための初来日を記念して、アキッレ・カスティリオーニ氏自身によるオープニングレクチャーを開催いたします。(通訳付)

●日時=1998年3月16日(月) 14:30-開場/15:00-17:00講演 ●会場=パークハイアット東京 ボールルーム(39階)

●参加費=3000円(税込み) ●定員=300人(申し込み先着順)

●応募方法=参加ご希望の方は、ハガキまたはFAXで、講演会名・郵便番号・住所・氏名・電話番号を明記の上、下記宛先までお寄せください。折り返しご入金方法など詳しい資料をお送りいたします。ご入金をもってお申し込みとさせていただきます。

●宛先=〒163-1062新宿パークタワー内私書箱8125株式会社リビング・デザインセンター「カスティリオーニ講演会」SD係 FAX.03-5322-6501

展覧会の開催にあわせ、カタログ「a la Castiglioni」を発売いたします。——定価:2800円(税別)

JR新宿駅南口から徒歩約12分
西口エルタワー前より約10分間隔で無料バス運行



ニュース

「新しい都市環境」展とシンポジウム

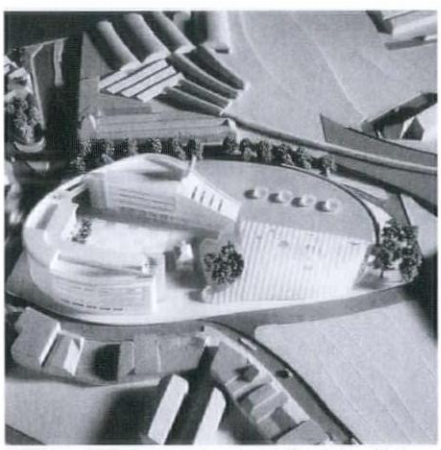
図版出典：「新しい都市環境＝現代英国建築とそのヨーロッパにおけるコンテクスト」展カタログ（デルファイ研究所発行）より

1月24日（土）～2月22日（日）の間、新宿パークタワーホールにおいて「新しい都市環境＝現代英国建築とそのヨーロッパにおけるコンテクスト」展が開催された。これは、英国のロイヤル・アカデミー・オブ・アーツが現代の英国建築家の功績を紹介する3つの大規模展覧会（1986年、1995-96年、1996年）に続く4回目のものとして企画されたものである。

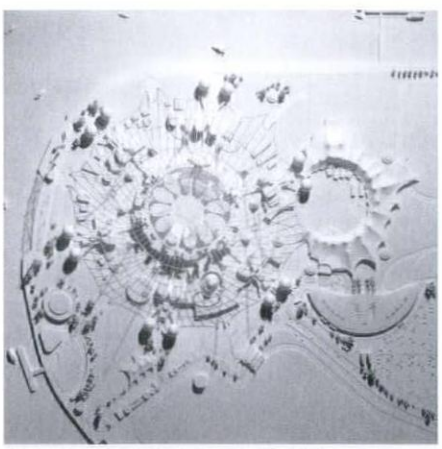
主旨は、「今後の都市環境を創造していく姿勢が明確に示され、画期的な成果をあげている英国建築家たちの最新プロジェクトと、英国以外の都市における類似例とを比較し、その共通性や差異についてさまざまな角度から検証する」というもの。会場には、41組の建築家による85点のプロジェクトが8つのセクション（ヨーロッパのコンテクスト、都市のコンテクスト、公共のための建築、輸送・交通のための建築、娯楽のための建築、文化のための建築、商業のための建築、エコロジーのための建築）に分けられ、模型、ドローイング、写真パネルなどにより紹介されていた。中でもノーマン・フォスターやニコラス・グリムショウのプロジェクトやエコロジーのための建築には興味深いものがあった。それらは、英国らしいハイテクと美的感覚のマッチしたプロジェクトである。

また、この展覧会を記念して1月23日（金）にラフォーレミュージアム六本木においてシンポジウムが開かれた。パネラーは、安藤忠雄（建築家、東京大学教授）、鈴木博之（建築史家、東京大学教授）、テリー・ファレル（建築家）、ロバート・マックスウェル（建築史家、プリンストン大学名誉教授）の4氏と、当展キュレーターのピーター・マレー氏が司会を務めた。まずは、「英国建築は機能・技術を基本としてきたが、これからは芸術性が必要である。そして都市の重要な視点として、モニュメントとしての建築を創ることではなく、建物と建物のあいだの空間をどう考えていくのか。」（R.マックスウェル）という発言を皮切りに、「ゲニウス・ロキをどう読むか。建築は空間を創ることと同時にその場所との関係をどう読みとるかが重要。大都市は場所性を失っているという点でインターナショナルな現代都市となっている。」（鈴木博之）といった「場所性」の話が続いた。それを受けて、「都市では、商業、文化、教育、居住といった各地域のネットワーク化が重要。これからは職住の分離ではなく、都心部で都市施設を上手に利用し、立体的都市としての生活が必要とされてくるだろう。住んでいてよかったと思われる街を創ることの責任が建築家にはある。」（安藤忠雄）そして、「英国ではテクノロジーに強い信頼がある。しかしテクノロジーは都市に従属するものであり、支配するものではない。自分としてはむしろ都市の持つ多様性に関心があり、ここが我々の都市だと思い活動する世代のためのデザインがこれからの都市には必要。」（T.ファレル）と各々建築家としての意見が発せられた。

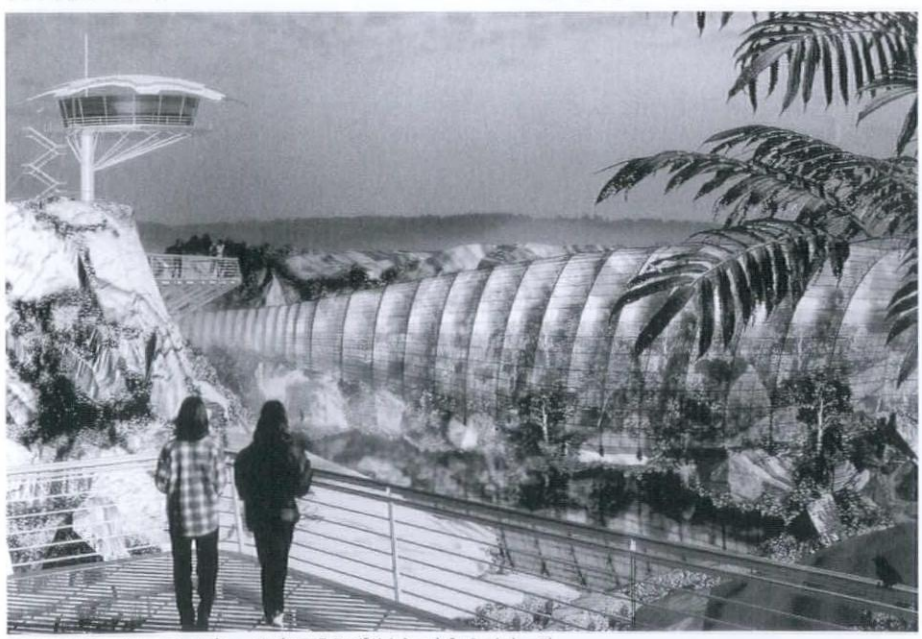
都市については、個々の建築デザインではなくより広い視点が必要とされ、その場所性や多様で複雑な構造をどう読み取っていくのかがキーとなる。さらに地球規模での環境問題も大きくクローズアップされてきている。21世紀へ向けての新たな都市環境創造への胎動を感じると同時に、現代都市がかかえる問題を早急に整理すべきだと、今さらながら改めて感じさせられた。（K.A.）



国際ライフセンター、ニューカッスル・アポン・タイン／テリー・ファレル＆パートナーズ



ミレニアム・エクスペリエンス、ロンドン／リチャード・ロジャース・パートナーシップ



エデン・プロジェクト、コーンウォール／ニコラス・グリムショウ＆パートナーズ

お知らせ

TNプローブ・サロン
ポスト・アヴァンギャルドとしての近代：ジュゼッペ・テラーニの作品をめぐって

日本で初めてのジュゼッペ・テラーニ展開催に際して、イタリア・モダンデザインについてのシンポジウムを開催する。
日時：1998年4月13日(月)　18:30～21:30
講師：多木浩二、若桑みどり、岡部憲明、鵜沢隆
定員：200人
申込み方法：当日先着順
入場料：500円
会場：TNプローブ　東京都港区六本木5-14-35
Tel：03-3505-8800　E-mail：tnprobe@obayashi.co.jp

ジュゼッペ・テラーニ　ファシズムを越えた建築展
会場：水戸芸術館現代美術ギャラリー
会期：1998年4月11日(土)～6月7日(日)
問い合わせ：水戸芸術館現代美術センター
担当：大橋、森　Tel：029-227-8120

「マン・レイ：自由と喜び」展

これまで主として写真作家として紹介されることの多かったアーティスト、マン・レイの総合的芸術に光を当て、マルチメディアの先駆者としてのプロフィールを検証する。
会期：1998年2月27日(金)～4月17日(金)
時間：10:00～18:00(土曜日は12:00～18:00)
日曜、祝日、3月14日は休廊
会場：伊藤忠ギャラリー　東京都港区南青山2-27-21セイリンビル
問い合わせ：伊藤忠ギャラリー　担当：伊藤、川鍋
Tel：03-3497-1261

日本サウンドスケープ協会1997年度発表会「サウンドスケープの世界と地平」

内容：サウンドスケープ研究とサウンドスケープをめぐる実践の最新の成果の発表とディスカッション。音から展望される時代と世界の探求を行う。
日時：1998年3月7日(土)　10:00～18:00
会場：聖心女子大学ブルーバーラー
会費：学生1800円、一般2500円

日本サウンドスケープ協会第27会研究会
「オイラの柴又 音風景―寅さんの聞いた音を訪ねて」
日時：1998年3月8日(日)
第1部5:45～、第2部9:30～、第3部12:00～
場所：東京都葛飾区柴又界隈
問い合わせ(発表会、研究会とも)：日本サウンドスケープ協会関東本部事務局　Tel：03-3486-7381
ホームページ：http://www02.so-net.or-jp/~saj/

GAギャラリー「住宅プロジェクト1998」展

住宅の設計において、日本の最前線で活躍する建築家31人の最新住宅プロジェクト展。模型、ドローイングを通して、「住宅」の現在と未来を展望する。
会期：1998年2月28日(土)～4月12日(日)
時間：12:00～18:30　月曜休館
入場料：500円
出展建築家(50音順)：青木淳、阿部仁史、新井清一、有馬裕之、飯田善彦、石田敏明、石山修武、入江経一、インターデザインアソシエイツ、F.O.B.＋アリミテ、岡田哲史、小川晋一、奥田信一＋若松均、岸和郎、北山恒、窪田勝文、隈研吾、近藤春司、坂本昭、シーラカンス、杉千春・高橋真奈美、高崎正治、竹山聖、内藤壽一、難波和彦、原広司、坂茂、前田紀貞、増田実、宮本佳明、横川健
場所：GAギャラリー　東京都渋谷区千駄ヶ谷3-12-14　Tel：03-3403-1581

建築等学会主催 年間ワークショップ参加者募集

建築等学会では、建築とその関連し得る領域とのかかわり合いの試みを積極的に取り上げ、かつ促進し、建築を総合的に捉えていくとともに、その成果を建築界に限らず、広く社会一般にフィードバックしていくことを基本理念に掲げている。本年はその一環として年間ワークショップを行う。
テーマ：表現における「労働」的諸問題
講師：西沢立衛(建築家)、岡崎乾二郎(造形作家)、小川てつオ(居候作家)
●西沢立衛氏の課題：2D――書籍の建築
形式：コンペティション　参加費：2500円
●小川てつオ氏の課題：新しいコンビニ
形式：ワークショップ　参加費：1500円
●岡崎乾二郎氏の課題：建築、そのゲームの条件
形式：サバイバル・コンペティション
参加費：3500円
問い合わせ：早稲田大学理工学部建築学科戸沼研究室　佐藤洋一　Tel：03-3200-0361

堀口捨己設計〈小出邸〉公開のお知らせ

小出邸は文京区西片町に1925年(大正14年)に建てられた住宅であり、後に江戸東京たてもの園に移転、復元された。外観は瓦葺き、急勾配の宝形屋根と水平に張り出した軒に特徴がある。内部は、応接間、食堂、和室などが配置されている。
日時：1998年2月28日～
(2月28日に公開記念ミニコンサート)
場所：江戸東京たてもの園
東京都小金井市桜町3-7-1
問い合わせ：江戸東京たてもの園学芸係　早川
Tel：0423-88-3317

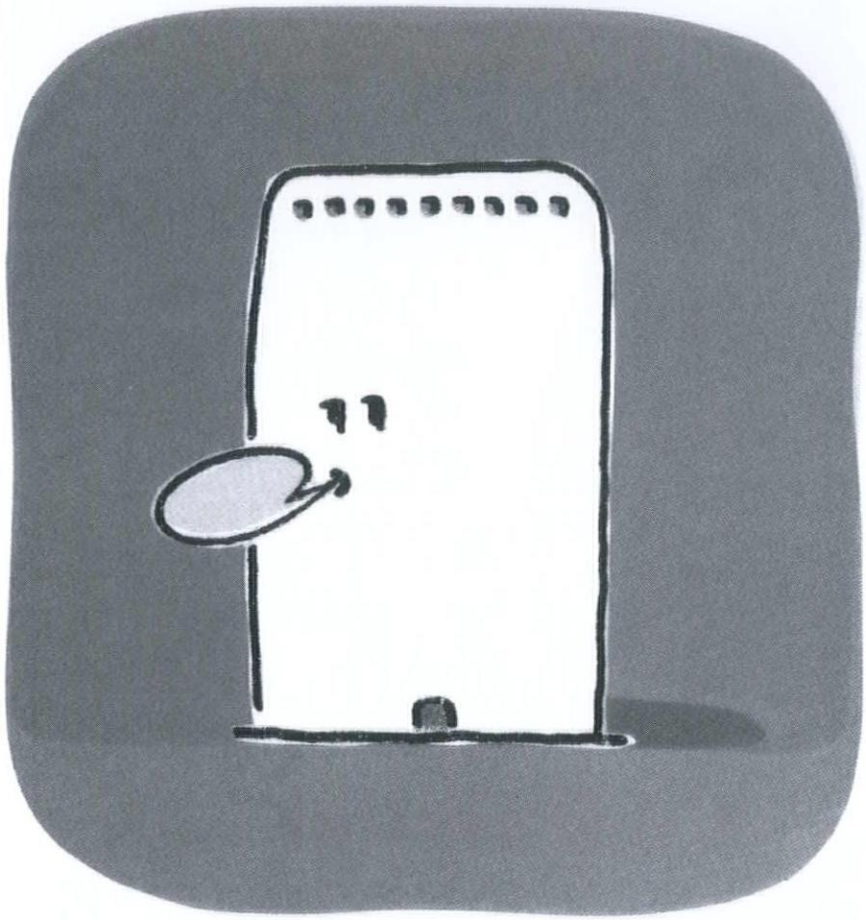
キリンコンテンポラリー・アワード'98 作品募集

キリンコンテンポラリー・アワードは現代芸術の一層の活性化を願い、若手芸術家の未知なる才能を見いだし育成していくことを目的とした一般公募コンクールである。なお最優秀賞受賞者には、キリンプラザ大阪などの個展の開催が援助される。
応募期限：1998年6月30日(火)当日消印有効
応募資格：特になし
応募規定：作品のジャンルおよびテーマの設定は自由。応募者自身による1996年1月以降に製作されたものであり、1人につき1点に限る。作品は家庭用VHSビデオテープに15分以内で収録。演劇、映画、ドキュメンタリー、映像、ビデオ・アート、ダンス、舞踏についてはやむを得ない場合、15分の収録時間を越えても構わない。
出展料：作品1点につき3000円
賞：最優秀賞1点、賞状、記念品、副賞100万円、キリンプラザ大阪での個展開催とその作品製作に対する援助を行う。優秀賞：3点、賞状、記念品、副賞30万円。奨励賞：適宜、賞状、記念品、副賞10万円。
審査委員：木村要一(美術評論家)、篠崎光正(演出家)、立川直樹(プロデューサー)、三澤憲司(彫刻家)
応募方法：住所、氏名を明記し、80円分の切手を貼った返信用封筒を同封の上、応募パンフレットを事務局に請求する。
応募、問い合わせ先：キリンコンテンポラリー事務局　〒151東京都渋谷区富ヶ谷1-2-1NYビル1F
Tel：03-5454-0728
キリンホームページ：http://www.kirin.co.jp

第14回吉岡賞記念フォーラム＋吉岡賞作品展開催のお知らせ

●第14回吉岡賞記念フォーラム
講演会：板谷リョク、阿部仁史の受賞者による受賞作品レビュー
座談会：「私性と共感を結ぶもの」
香山壽夫、鈴木了二、北川原温、板谷リョク、阿部仁史、橋本純
日時：1998年3月14日(土)　13:30～17:00
会場：住宅金融公庫本店1階　すまい・るホール
東京都文京区後楽1-4-10
●吉岡賞作品展
会期：1998年3月3日(火)～4月24日(金)
時間：10:00～17:00　土・日・祝日は休館、入場無料
会場：住宅金融公庫本店1階すまい・るギャラリー
東京都文京区後楽1-4-10
内容：第14回吉岡賞受賞者作品展示＋第1回～13回受賞作品パネル展示
申込み、問い合わせ先：住宅金融公庫すまい・るギャラリー「吉岡記念フォーラム」係
Tel：03-5800-8253

人間すう、はく。ビルすう、はく。



私たちの呼吸は
自然の呼吸に
支えられています。

私たち人間が意識しないで呼吸しているように、人をとりまく環境も、知らないうちに呼吸しています。海も陸地も、動物も植物も。この地球全体が、ひとつの完成された空調システムとなり酸素をつくり、酸素を消費しています。

東熱のめざすひとつの頂点が、この自然の摂理を解明し、システム化することです。温度、湿度のコントロールによる環境を超えて、フィジカルな面から、メンタルな面の可能性のヒントが自然の中に隠されています。

ビルも呼吸しています。中にいる私たちのために。さまざまな分野のさまざまな建物が呼吸しています。だから東熱はいつも考えています。次に求められる環境とは何だろう。より私たちに優しく、より私たちに身近な環境の実現のために。山の朝のさわやかな空気や、冬の夜の透明な空気を東熱は忘れません。

宇宙センターからスポーツドームまで、東熱のマインドはあなたのまわりに息づいています。

時代、呼吸、マインド

東洋熱工業

〒104-8324 東京都中央区京橋2-5-12 Tel.03(3562)1351(大代表)



都市の顔をつくる仕事。

都市の詩情をスクリーンのように映し出すカーテンウォール。
その多彩な表情のひとつひとつに私たちの技術が活かされています。
不二サッシは、都市景観を彩る、新しい建築文化
コミュニケーションスペースを創造してまいります。

窓から夢をひろげていきます
不二サッシ

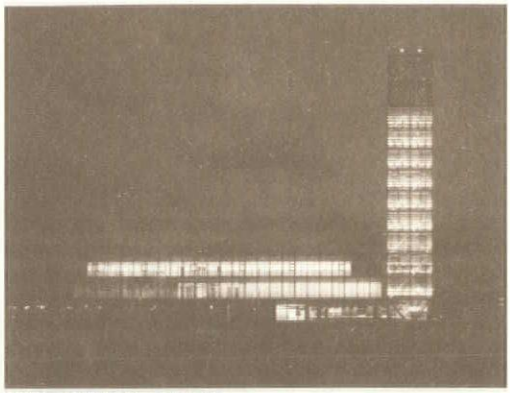
本　社 〒211-0012 川崎市中原区中丸子135 TEL.044-422-1111
東京本部 〒150-0031 東京都渋谷区桜丘町9-8 TEL.03-5458-7024

SD

4月号予告



〈STUDIO CUTIE〉インテンショナリーズ



〈NHK長野放送会館〉みかんぐみ



〈ミニハウス〉アトリエ・ワン



〈NO CONCEPT BUT GOOD SENSE〉Hデザイン・アソシエイツ

9804

特集

新世代のマルチアーキテクトたち

30歳代の若手建築家たちの中で、従来の建築家像にとらわれない活動により、新たなムーブメントを起こしつつある一群がいる。彼等の特長は、建築だけではなく、プロダクトやグラフィック、メディア・アートといった幅広いデザインを手掛けており、まさに現代を象徴する「ボーダーレス」な活動にある。さらに個人ではなく、ユニットで活動するという点も共通項である。本特集は、彼らの作品と創作活動を現場リポート仕立てで紹介し、現代のもつ時代性と若手建築家たちの感性を浮かび上がらせようとする試みである。

建築家＝クライン・ダイサム・アーキテクツ、インテンショナリーズ、みかんぐみ、アトリエ・ワン、建築少年、
Hデザイン・アソシエイツ、I.C.U.、F.O.Bアソシエイション、CLIP、パラボリック・ラボラトリ、E.P.A.
文＝五十嵐太郎、岸野雄一、他
座談会＝曽我部昌史+中村潔+長田直之+中谷礼仁+田路貴浩+大西若人

デスクトップ・コミュニティ

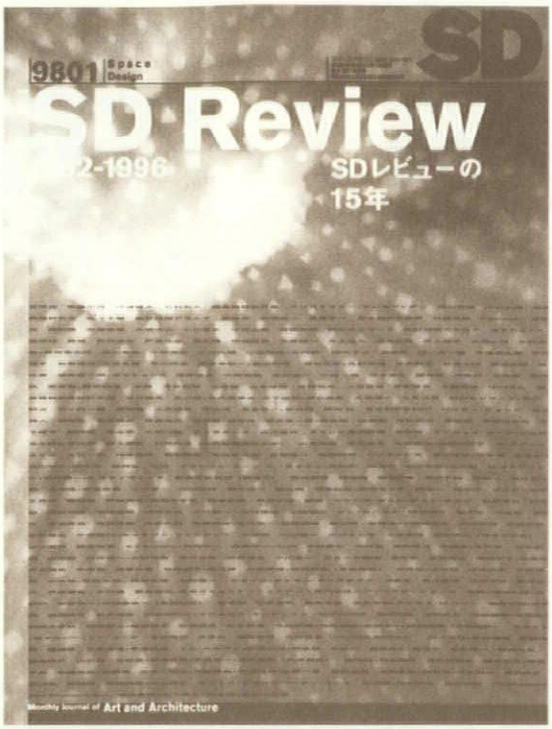
コンピュータ・ネットワークや携帯電話をはじめとする新しいコミュニケーション・ツールの普及によって新しく生まれるコミュニティ形式「デスクトップ・コミュニティ」。ここでは「Aラボ」と名付けられたデザイン研究グループが、「デスクトップ・コミュニティ」における我々の空間に対する感覚・概念がいかに変わり、またそれを基盤とした建築や都市が近未来においてどのように変わるかを予測し、記述する。

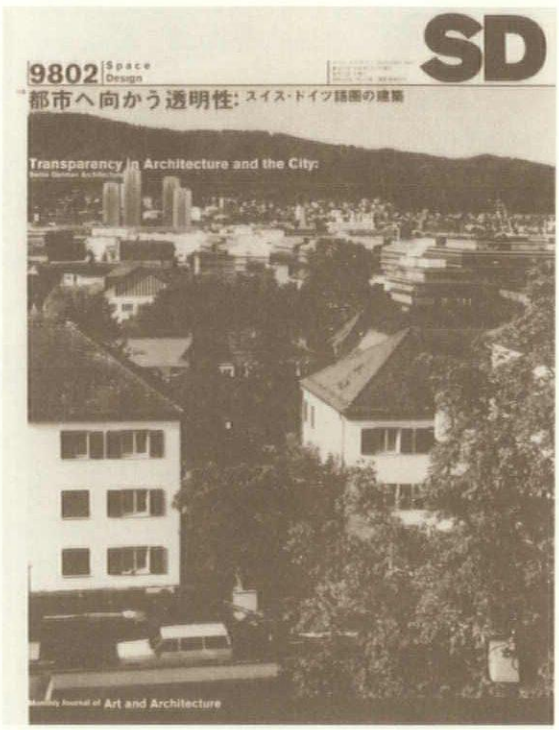
文＝吉松秀樹、山家京子、藤村憲之、山本幹子

連載：
世界の現代美術館探訪 9／渡辺真理
森島紘史の起こし繪図——日本のかたち紙考 4／森島紘史

SD

バックナンバー





9801

特集

SDレビューの15年

SD Review 1982～1996

1982年に第1回SDレビューを開催して以来、昨年で16年目を迎えたSDレビュー。その間の入選者数は延べ271人、審査員は30人を数えた。当初は100に満たなかった応募作品も、回を追うごとに増え続け、ここ数年では200～230の間で定着したようだ。また入選者の顔ぶれも多彩で、初期は第一線で活躍する建築家も多く参加していたが、応募総数の増加に伴い若手建築家たちが登場し、「SDレビューは若手建築家の登龍門」的色合いが出てきたとも言える。16年の間には、現在は巨匠となった作家の初期の作品なども見られる。本特集では、SD創刊400号記念として、こうしたSDレビューの15年を振り返るべく、これまでの入選作品を全て掲載、実現に至るまでの過程や、実現に至らなかった理由、建築模型から実作までの變遷などを検証する。建築家・建築界との関わりやその意義などを再確認し、今後のSDレビューの方向性をも探ろうとするものである。

文＝槇文彦、原広司、飯島洋一、水野一郎、中筋修、奥保多聞
座談会＝元倉眞琴×鈴木了二×栗生明×小嶋一浩

連載：森島紘史の起こし繪図――日本のかたち紙考1／森島紘史

特別定価＝2,800円／本体2,667円

9802

特集

都市へ向かう透明性

スイス・ドイツ語圏の建築

ここ数年、スイスの特にドイツ語圏における現代建築には、ヘルツォーク＆ド・ムロン、ブルクハルター＆ズミ、ジゴン＆グイヤーなどの建築家の作品に見られるように、興味深い「四角い建築」が多く見られる。それらの「四角い」単純な形態の中にスイスという文脈、素材、敷地といった様々な問題を読みとることができる。またスイス・ドイツ語圏の建築家の多くがETH（スイス連邦工科大学）の出身であることも興味深い点である。

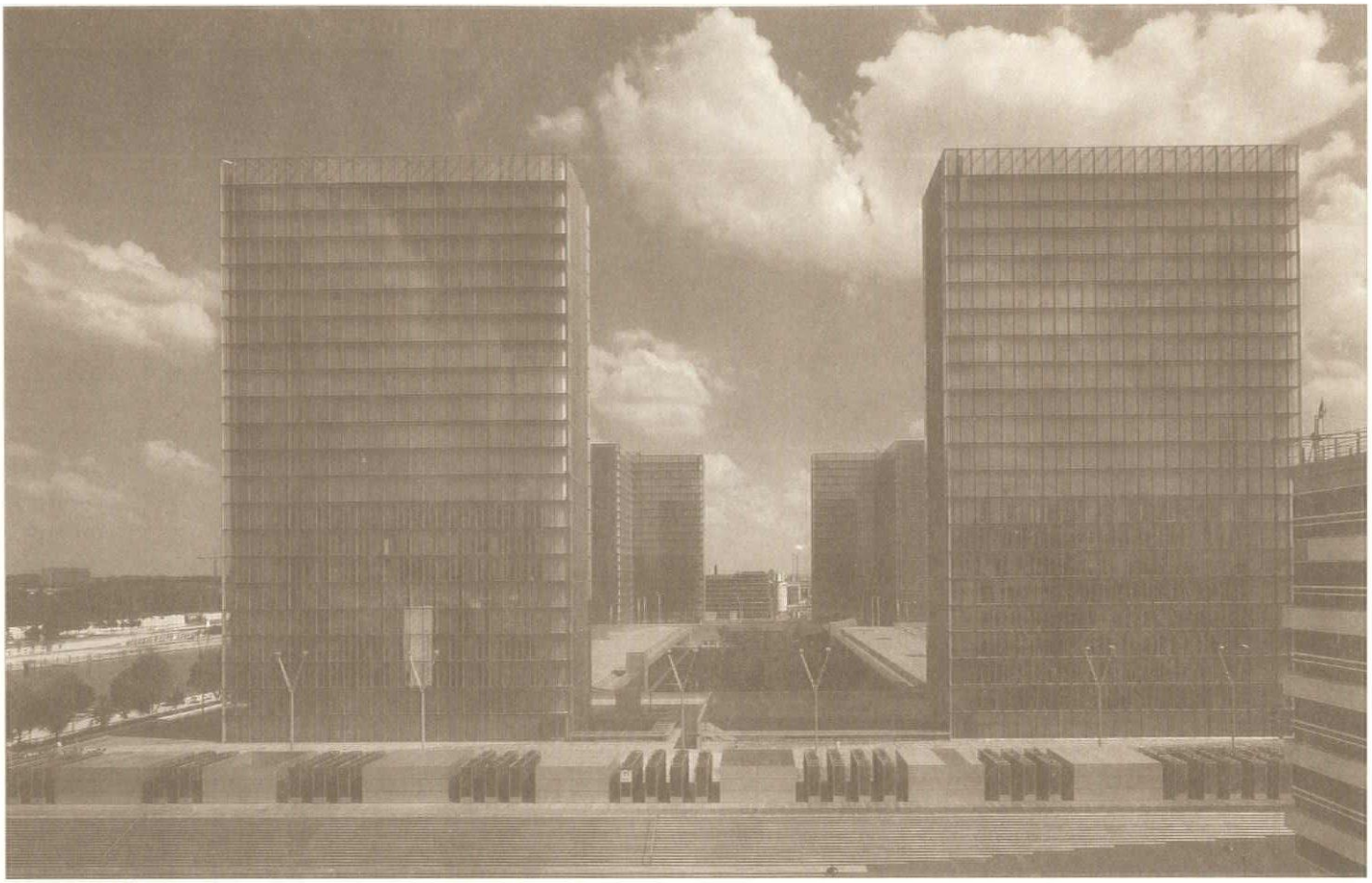
本特集では、スイス建築の背景、建築の生まれる文脈を捉えながら、特にスイス・ドイツ語圏の魅力をさまざまな視点から探っていく。

紹介建築家：ヘルツォーク＆ド・ムロン、ジゴン＆グイエ、ペーター・メルクリ、ディーナー＆ディーナー、マルセル・メイリ＆マークス・ペーター、ミロスラフ・シック、ブルクハルター＆ズミ、モルガー＆デゲロ、マルケス＆ツルキヒェン
執筆者：貝島桃代、塚本由晴、ハンス・フライ、アーター・リューグ、マルティン・チャンツ、パトリック・グムアー、アンドレス・ヤンサー、マリー・セレス・スタウファー

往復書簡：篠原一男×ヘルツォーク＆ド・ムロン

連載：世界の現代美術館7／カトリーヌ・グルー
連載：森島紘史の起こし繪図――日本のかたち紙考2／森島紘史

特別定価=2,200円／本体2,095円



フランス国立図書館

SD別冊31号

本と人のための空間——図書館建築の新しい風

植松貞夫＋SD編集部＝編

総頁：168頁　定価：3500円（本体＝3333円）　1998年3月16日発売予定

内外の43の図書館を厳選し、メディアの多様化への対応、転用・再生・増築、都市型複合施設、快適な閲覧空間、巨大化と複雑化、特異な形態、大学図書館という7つのテーマの下に、豊富な写真と図版で紹介。

図書館は今、さまざまな課題を抱えている。多様なメディアの発達と普及への対処、急激に増加する図書の配架と収蔵の方法、既存の環境や建築の保全と両立する建設の方途、日常の読書室としての居心地良いスペースの作り方、高齢者や身障者に対する配慮、若年層の利用を促す工夫、など。

本書は、そうした課題の解決に役立ち、明日の図書館の姿を考える上で、数々のヒントと情報を提供する内容となっている。

収録図書館：

フランス国立図書館
イギリス国立図書館
ドイツ国立図書館フランクフルト館
ハーグ市立図書館
ミシガン大学メディアユニオン
ロサンゼルス公共図書館
ビバリーヒルズシビックセンター
オウル大学図書館、
オーデンセ音楽図書館
ハスレブ市立図書館
ヨエンスウ市立図書館
豊の国情報ライブラリー
国立図書館関西館（基本計画）
慶應義塾大学SFCメディアセンター
市川市生涯学習センター
大阪市立大学学術情報総合センター
伊万里市民図書館
湖東町立図書館、他

執筆者：

植松貞夫／図書館情報大学教授
小川俊彦／市川市生涯学習センター所長
寺田芳朗／山手総合計画研究所

SD別冊

SD選書229

サウンドスケープ

—その思想と実践—

鳥越けい子著

四六判　216頁　定価(本体1,800円＋税)

近年アーバンデザインの分野でも関心の高まりつつあるサウンドスケープについて思想と計画の両面から理論的に紹介する。カナダの現代作曲家マリー・シェーファーの仕事を基礎に都市デザインへの展開を試みる。

［主要内容］

序　章　音の風景をめぐって

第Ⅰ章　マリー・シェーファーと20世紀音楽の地平　マリー・シェーファーとサウンドスケープ概念の成立／新しいデザイン活動の提唱／音の環境芸術の地平

第Ⅱ章　音の風景を聴く　聴く技術としてのアート／音風景の解析／サウンドスケープから捉える環境

第Ⅲ章　サウンドスケープ思想に基づくデザイン活動　思想としてのサウンドスケープ・デザイン／デザイン活動における聴覚の意識化／「モノづくり」から「情況づくり」へ

終　章　サウンドスケープを生きる

SD選書230

風景のコスモロジー

吉村元男著

四六判　224頁　定価(本体1,800円＋税)

地球環境が瀕死の重症に陥っているとき，地球の自然のなかで人類に文明の位置を明らかにするべき時代が来ている。本書では，古代世界の風景のなかに，楽園の思想を探り，持続可能な世界とは何かを考える。環境創造時代における新しい緑化，修景の技法として生み出す原理を探究。

［主要内容］

Ⅰ　コスモロジーの誕生—コメによる古代日本文明の誕生／自然における文明の位置／恐怖との闘い／コスモロジーの誕生

Ⅱ　風景のコスモロジー—共同体の風景／国づくりの風景／救済の風景／他

Ⅲ　楽園の領域：ニワの構図—楽園の構図／森の風景：神奈備の森／塔の風景：天と地を結ぶ道／自然と融和する都市の風景

Ⅳ　楽園のデザイン：ソノの構図—水平と垂直のコスモロジー／「しま」のコスモロジー／「流れ」のコスモロジー

Ⅴ　楽園の建設—古代世界の完成／寝殿造り庭園世界の建設

SD選書231

庭園から都市へ

—シークエンスの日本—

材野博司著　四六判　224頁　定価(本体1,800円＋税)

本書は，回遊式庭園の空間特性であるシークエンス(継起性)を誘因として，「その都市らしさ」をもった日本的都市空間の回復を目指して，現代都市をいかに豊かで変化のある空間へと演出してゆくかについて論じている。

［主要内容］

Ⅰ　動きを誘う空間の萌芽—シークエンス空間の遠視
京の空間を歩いて—京を特色づける歴史的空間／「らしさ」のある地域空間／空間のリズムと「ゆらぎ」／他

Ⅱ　連続性と分節性のあいだ—シークエンス空間への近づき
都市空間の分節性／大空間と独立的微小空間／パノラマ景観と額縁的景観／見透しのきく空間と小さい眺め／他

Ⅲ　継起的回遊空間の魅力—シークエンス空間の探訪
空間のシークエンス／日本の空間の継起的展開／シークエンス空間の恵み／回遊式庭園の継起性／他

Ⅳ　日本的都市空間づくりへ向けて—シークエンス空間による演出
現代都市空間のシークエンス／継起性から見た日本的都市空間／シークエンスによる都市空間の演出

SD選書232

都市・住宅論

東　孝光著

四六判　224頁　定価(本体1,800円＋税)

60年代末に「塔の家」でセンセーションを巻き起こして以来，多くの都市住宅の設計に携わってきた著者による都心部居住論。戦後日本の都市発展とともに変化してきた都市居住の解析をふまえ、21世紀に向けて新たな提案をする。

［主要内容］

プロローグ—私の都心居住二都物語

Ⅰ　都市居住の魅力と意義—何故、都市型住宅なのか
都市に住むという行為／塔の家の場合／住むことの単位／住み手とともにつくる／都市問題の顕在化／ひとつの仮説

Ⅱ　都市型住宅の冒険—空間素材の点検／機能から空間化へ／認識と方法／形態とすき間／ポリフォニイ建築論

Ⅲ　都市と住居のつながり—住居の外回り／都市の庭／個から集合／路地から〈都市的スペース〉へ

Ⅳ　都市の再生のために—場所の意味性：試論／街並み形成と建築／計画なき計画による都市づくり／集合のあるべき姿

小さなエピローグ

都市空間の芸術

パブリックアートの現在

カトリーヌ・グルー著　藤原えりみ訳
A5判　208頁　定価(本体3,000円＋税)

本書は現在関心が高まりつつあるパブリックアートを歴史的文脈に沿って語りつつ，公共空間の意味とパブリックアートの現代的意味を示唆する。欧米のすぐれた最新事例を30余り豊富な写真とともに紹介する。

［主要内容］

1章　公共空間とは―ディブ・ダーク・ウォーター／リエージュ通り／サーチ／芸術の領域
2章　記憶の現代性―ドラム罐の壁―鉄のカーテン／勝利の門／共和国の本質と道徳／バス・ステーション／エイリアン・スタッフ／他
3章　場から多様性へ―垂直の1キロメートル／水鏡の上の光信号／ペサンの人／プレファブリケーション／時の蘇生，長崎／サンドイッチマン／他
4章　現在の時と空間の知覚―上下の方向，現場で働く彫刻／古典的な交信機器　伝声管／ハインツのナイチンゲール／植物の劇場／9つの空間，9つの木／他
5章　プロジェクト実現のための3つの方法論―ストラフブールの市街電車のためのプロジェクト／リヨンのテロー広場／他

美術から都市へ

インディペンデント・キュレーター15年の軌跡

南條史生著
四六判　240頁　定価(本体2,700円＋税)

現代美術の最前線で活躍する著者の初めてのエッセイ集。現代美術館，パブリックアート，国際展の企画，アーティスト・イン・レジデンス等，現代美術とのかかわり合いの中で思索した，様々なテーマについて語る。

［主要内容］

1章　パブリック・アートの現在―アートがつくる公共空間／職場におけるアートについて／都市は芸術を求める／美術館と都市のはざまで／他
2章　現代美術のための空間―理想の美術館と，美術館の理想／美術館建築とは何か／光と空間の夢を訪ねて／美的精神の形象としての美術館／他
3章　国際展をめぐって―芸術の国際交流について／ドクメンタ8の現場から／パヴィリオンを越えて／クオ・ヴァディス／読み終えることのない書物のために
4章　日本のアイデンティティ―前衛の日本展／リアリティからの出発／国際展と日本
5章　アーティスト・イン・レジデンス―アーティスト・イン・レジデンスとは／世界のアーティスト・イン・レジデンス

20世紀の建築思想

―キューブからカオスへ―

杉本俊多著
四六判　224頁　定価（本体2,800円＋税）

著者は20世紀の建築のパラダイムの崩壊から再生，転生を経て爛熟に至る段階的変化を示す。さらにエコロジー，情報空間論等21世紀的テーマにも言及する。19世紀建築論である前著『建築夢の系譜』に続く、20世紀建築論。

［主要内容］

I　世紀末からの離陸／①カオスの坩堝／②古典回帰と抽象幾何学
II　理想の冒険／①ゼロからの構築／②1930年代ロマン主義／③空間構造論
III　転換／①ポスト・モダン／②タイポロジー古典主義
IV　成熟期の風景／①カオスへの旅立ち／②萌芽期の新パラダイム
結　21世紀へ

数寄屋の美学

―待庵から金属の茶室へ―

出江　寛著
四六判　224頁　定価(本体2,800円＋税)

和風建築で定評のある著者がその独自の美学をもとに，日本の古典建築と文化について語るエッセイ集。風土・建築・美術・文化など著者の関心は多岐にわたり，数々の実作を通してその思想の展開を具体的に紹介する。

［主要内容］

1章　文明と文化―風土から生まれた美意識と風物／風土に根ざした色感／不透明な光と聖／俗と聖／色気の抽象化／二元対比の美／真・行・草の美／創造とは／住居の本質／古美る／文化の高さ／ウェットとドライ／冷艶美／沈黙の美／「逆」アール・デコ／他
2章　伝統建築の美について―茶室より学ぶ美学／金閣は宙に浮いた／龍安寺・銀閣寺の庭の真行草について／数寄屋とは
3章　実作品より―丸亀の家「ペンキの数寄屋」／逆瀬台の家「日本の倉」／朧月夜の家／瓦ミュージアム／竹葉亭／トタンの茶室「茫々庵」／岡慶東京支店／三四郎の家／基督兄弟団西宮教会

北　京—都市空間を読む—

陣内秀信＋朱自煊＋高村雅彦共編
四六判・248頁　定価(本体2,900円＋税)

中国の首都北京を対象にその歴史的都市空間の特質を描く。歴史地図をもとに住宅，商業空間，官庁街など様々な表情を見せる現在の北京を解読する。アジアの都市を解析するための手引書ともなる待望の一冊。

［主要内容］

1 王の都の空間構造—いざ王の都へ／水の都／都城のコスモロジー／表徴の都市／象徴性の裏側で
2 都市を読む・北京—「乾隆京城全図」／道・土地利用／場所の論理／街区・敷地・建築
3 中庭住宅の建築文化—北京の〈四合院〉／中庭建築の空間構成／多様化する四合院／近代住宅への趣向／四合院への固執／他
4 商業空間の成り立ち—都城の商業機能／商人のまちの構造／二つの店舗形式／店舗の空間構成／他
5 盛り場の都市建築史—文化と享楽の解放区／享楽のまち・八大胡同／名所のある場所／メディアセンターとしての会館／他
6 近代都市のレトリック—近代北京を考える意味／都市近代化の原理／変容のメカニズム／北京の異界：東交民巷／中国の台頭：西交民巷／北京式里弄の出現：都市的集住への変容／偽装する近代・王府井／他
7 今に生きる北京—新生中国の理想都市／天上の前庭／他

世界都市の論理

ポール・L.ノックス，ピーター・J.テイラー共編
藤田直晴訳編
A5判　208頁　定価(本体3,600円＋税)

世界都市に関する分野の理論的・実践的なオリジナル論文13編を訳出した21世紀を占う画期的著。

［主要内容］

第1部　導入：世界都市，その理論と文脈
　世界都市研究の課題と方法／世界都市研究の到達点：この10年間の展望／世界都市と領域国家：その相互性の隆盛と衰退／世界都市における集中と中心性について／他
第2部　システムのなかの都市
　グローバル・マトリックスのなかの都市：世界システムからみた都市システムの地図化に向けて／世界都市，多国籍企業，都市階層：アメリカ合衆国の事例／世界都市仮説：周辺からの省察／シカゴ，ニューヨーク，ロサンゼルスの比較／他
第3部　世界都市における政治と政策：その理論と実践
　世界都市の再定義：文化的理論／社会的実践／地球 地域関係の理論化／世界都市の消滅と地域政治のグローバル化／付録：世界都市仮説

環境デザイン学入門

—その導入過程と展望—

G.T.ムーア他著　小林正美監訳　三浦研訳
A5判　200頁　定価(本体3,600円＋税)

人間と周囲のあらゆるスケールの物理的環境の相互関係を探究。得られた知識を，政策・計画・デザイン・教育に活かすため，生活の質の向上や人間行動を理論的に解明。21世紀に向けた学際教育・研究の実践的な啓蒙書。

［主要内容］

第Ⅰ部　環境デザイン学の試み
　1章—環境デザイン学とは何か　2章—この分野の歴史と影響　3章—目的，価値，方向付け　4章—枠組みによる組織化
第Ⅱ部　環境デザイン学で議論される重要な問題
　5章—理論，概念の問題　6章—場所の問題
　7章—利用者の問題　8章—社会行動的な現象
　9章—プロセスの問題
第Ⅲ部　環境デザイン学の実践に向けて
　11章—環境デザイン学を発展させる方策
　用語解説　付録A，B，C

環境保全と景観創造

—これからの都市風景へ向けて—

西村幸夫著
A5判　328頁　定価(本体4,200円＋税)

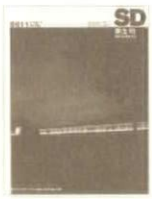
歴史や文化を見すえた都市計画こそ必定である。新まちづくりを支援する歴史的環境保全の思考の枠組と，景観創造へ向かうこれからの行政施策を，理論的・実践的に展開。英米の事例から日本まで扱う本邦初の大系書。

［主要内容］

第Ⅰ部　イギリス・アメリカにおける歴史的環境保全
　1章　英国シビック・アメニティ法と保全地区制度
　　シビック・アメニティ法(1967年)以前／制定とその後
　2章　英国の環境保全運動
　　土地所有による環境保全という運動論の成立／他
　3章　米国の都市計画制度と歴史的環境保全の系譜
　　歴史的環境保全制度の確立／国家歴史保全法／他
第Ⅱ部　わが国の歴史的環境保全と景観コントロールの現段階
　4章　日本の歴史的町並み
　　歴史的環境保全運動の展開／歴史的町並みの現状と課題
　5章　都市デザインと景観コントロール
　　都市デザイン思潮の現在／四則演算の都市計画／他
　6章　環境学習へ向かうまちづくり
　　子どもたちが参加する町並み学習活動／都市計画と環境教育／他
　結章　都市風景の恢復へ

SD Space Design Back Issues

Home Page Address:
http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm



9611 Akira Kuryu: Introduces the works crystalizing the fine collaboration supported by his outstanding direction. Okazaki Art and Historical Museum, Core Yamakuni, Patrie+Kiyosato Museum of Photographic Art, Uemura Naomi Memorial Muzeum, Carnival Showcase, etc. Text: Yoichi Iijima, etc. **Project pour La Chapell de St. Vigor de Mieux Par Takubo-3** ¥2,548



9612 SD Review 1996: Publishing the result of SD Review contest with comments from the screening committee. Participants : Justus Pysall and Peter Ruge, Masami Takahashi, Nagisa Kidosaki & Associates. **From the Recent Works of Jun Itami: Chapel of Stone, Chapel of Wood and Chapel of Earth.** ¥1,988



9701 Shoei Yoh: 12 Calisthenics for Architecture: Intoroduces majar works demonstrating the "calisthenics" prescribed for architecture under twelve categories. Uchino Community Center for Seniors and Children, Sundial, Welfare Facility for Seniors, Glass House with Breathing Grating, etc. ¥3,059



9702 Frameworks and Space for Wood: Twenty-five examples of architecture in Japan and Around the world featuring the bueuties of wood as architectural material. **The New Generation of Architects Exciting Asia:** Looks at architecture and metoropolises in Asia and how they will look in the feature. ¥1,988



9703 Minimal Space Architecture: Introduces simple architecture we call 'minimal': John Pawson (John Pawson House, Jigsaw), Shinichi Ogawa (Glass House), Waro Kishi (House in Nipponbashi), Toshiaki Isida (NOS House). Text: Hiroshi Maruyama, Tsuyoshi Matsuhata, etc. **Tokyo International Forum:** Photo: Koji Horiuchi. ¥1,988



9704 Expanding Horizons of Digital Design: introduces projects creating new environment of architecture and city with computer and network technology. Text: Noriyuki Tajima, Sigeyuki Yamaguchi, Eisi Katsura, Michael Benedikt, Masaki Hujihata, Akihiro Kubota, Ken Sakamura, Naohito Okude, Mitsuo Morozumi, etc ¥3,059



9705 Afra & Tobia Scarpa and Benetton: They have worked together for about 30 years. Introducing the office building, warehouse, shops etc they designed. Text+Interview: Hiroyuki Toyota. **Pisa and the Works of Massimo Carmassi:** Casa Muti, Restoration of the Theatro G.verdi,etc ¥2,000



9706 Takahiko Yanagisawa: The Composition of Theatrical Space: Introduces receent works focusing on the elements. New National Theatre, Tokyo Opera City, etc. Text: Muneshige Nagatomo, Yoshiaki Ogura, Shouzo Motosugi, Junichi Kawamura Disucussion: Masato Kawamukai and Takahiko Yanagisawa **Swedish Good Design: Undecorated Form Design** ¥2,000



9707 Hong Kong 1997: The Accelerating City
Grasping the aspect of Hong Kong through visual works by artists and interview with architects. artists: Alan Chan, Tycoon Graphics, Satoshi Asakawa, Shin Egashira, etc. Supervision: Shin Muramatsu, Kazuhiro Kojima, Hikaru Kinoshita. Text: Naonori Matsuda ¥2,000



9708 Venturi, Scott Brown and Associates: 1990's Works: Focuses on the first work in Japan, Mielparque Nikko Kirifuri and introduces 1990's works such as Seattle Art Museum and Additions, Renovations and Restoration, San Diego Museum of Contemporary Art. **Toward a New Living Environments:** Gifu Kitagata Housing Project ¥2,400



9709 A New Phase of Railway Station Space: Introduces Railway Stations having additional value and tie with community such as JR Yabuki and JR Ohmagari. Also Introduces JR Kyoto widely noticed as International Competition. Text: Takayuki Miyabayasi etc. Talk: Tadanori Yokoo×Hiroshi Hara ¥2,000



9710 Architecture in Glass: Introducing architectures which adopt the characters of glass in such as optical and structural aspects. Searching for the present situation and possibility in the future: Extension of the Winterthur museum of Art, Hotel P, Konami Nasu Seminar House, etc. Text: Kazuhiko Nanba, Masao Ando, etc. ¥3,000



9711 Kengo Kuma: Digital Gardening: Introduces recent leading works of Kengo Kuma, advocate of post-modern architecture and winner in 1997 of the Architectural Institute of Japan Prize and the Benedicta Prize. Memorial Park and other designs. Articles by Youichi Iijima, Greg Lynn, etc. Discussion: Fumihiko Maki and Kengo Kuma. ¥2,800



9712 SD Review 1997: Publishing the result of SD Review contest with comments from the screening commmittee. Participants: Shigekatsu Takayasu Architects+Tatsuya Sakuma+Hirotada Hashizume+Hiroyuki Shigetomi, Hiroshi Kawahito, Sosuke Hujimoto, etc. **Spaces of Lighit and Color: Glass Artsits of Czecho** ¥2,000



9801 SD Review 1982-96
16th anniversary retrospective of SD Review looks at entries later built, examines relation to and significance in the world of architecture, and considers future directions. Text: Fumihiko Maki, Hiroshi Hara, Youichi Iijima, Osamu Nakasuji, ect. Round-table discussion: Makoto Motokura, Ryoji Suzuki, Akira Kuryu, and Kazuhiro Kojima ¥2,800



9802 Transparency in Architecture and the City: Swiss German Architecture Explores the appeal of the Swiss German sphere through an understanding of the background of Swiss architectural works and the context in which they came into being. Architects introduced are Herzog & de Meuron, Gigon & Guyer, etc. Texts by Momoyo Kaijima, etc. ¥2,200

SD

Space Design
Hardcover Edition
and Order Form

Space Design published its first issue in 1965 as a monthly journal for a general readership introducing noteworthy achievements and leading works in the fields of architecture, urban problems, design, and the fine arts. The journal has established a solid reputation over the years in the fields of architecture and design. It enjoys the support of a broad readership in an age when up-to-date information on contemporary design, urban planning, and architecture is in heavy demand. **SD** endeavors to make its features and articles ever richer in content, focusing attention on the methodological, and aesthetic themes of modern architecture, the city, design, and the arts. The text of **SD** is mainly in Japanese, but in certain cases English translations or summaries are provided for feature articles.

Send your order for subscriptions to Space Design and/or for back issues or hardcover editions by:

Filling in the order card below and faxing it to:
Space Design: 81-3-5561-2560

Or mail the card to:
Subscriptions Department
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka, Minato-ku,
Tokyo 107, Japan
tel: 81-3-5561-2550

An invoice will be sent immediately. Upon receipt of the invoice, you may pay by check or international money order or bank check.

Order Card
Name (in block letters please):

Address:

Fax number (if available):

Occupation:

Please check one of the options below:
☐ Please enter my SUBSCRIPTION to Space Design, starting in

	sea mail	air mail
12 issues	¥30,000	¥55,000
24 issues	¥50,000	¥80,000

Price includes postage and bank charges.

☐ Please process my order for the following BACK ISSUES and/or HARDCOVER EDITIONS of SD:

The invoice includes:

1. Price of the publication
2. Bank charges(¥1,500 per order)
3. Postage(determined upon receipt of order)

Alvar Aalto
A special comprehensive collection of celebrated architect Alvar Aalto's major works. Aalto's Design Vocabulary, by Akira Mutoh / Chronological Review of A. Aalto's Life : 1898-1976 / Worldwide Distribution of Alvar Aalto's Works ¥3,090

Tadao Ando 2
His 21 works since 1981 including Church with the Light are classified into five categories and introduced at once here. The 10-meter long drawing of Nakanoshima Project lets the readers feel his vigorous approach to architecture. ¥4,800

Arata Isozaki 2
Introduces whole of Isozaki's major works, 1976-1984, especially his shocking work : Tsukuba Center Building. Ministry of Foreign Affairs of Saudi Arabia, MOCA, Blick of Flats, Berlin, Okanoyama Graphic Art Museum, ¥4,944

Kiyonori Kikutake
Collection of Metabolist Kiyonori Kikutake's works from the early years to 1980 : Architecture of The Third Generation, On the Notion of Replaceability, Phase of Methodological Search, Data, Location of Works ¥3,090

Kisho Kurokawa 2
13 major works for these 10 years, including Hiroshima City Museum of Contemporary Art which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan, and 2 other Museums are introduced. ¥4,300

Seiichi Shirai
Introduces a collection of the gem-like works by Seiichi Shirai, an architect of proud loneliness. Kaisetsu-kan, Noa Building, Sei-Akira-kan, Sassetsuken, Kohakuan, etc. Essays by Arata Isozaki, Ichiro Haryuu, Ikuma Shirai ¥ 3,605

Atelier Zo
Presents the first collection of the works by Atelier Zo who has continuously brough forth fresh works by their original formative ideas. Nago City Hall, Shinsyukan Community Center, etc. Essay by Hiroshi Aramata ¥4,000

Kenzo Tange 3
29 projects are introduced at a stroke so that his footwork in 1980's can be seen. Also, the noticeable new Tokyo City Hall is introduced through many drawings and photographs of new model. Full English text. ¥4,100

Fumihiko Maki 2
Presents the second collection of Maki's works which show his activities in 1980s. Spiral, Keio University Hiyoshi Library, Fujisawa Municipal Gymnasium, Hillside Plaza, Tokyo Metropolitan Gymnasium, etc. ¥4,326

Toyo Ito
9 projects of his semi-permeable architectures such as restaurant NOMAD and Silver Hut and 11 projects of Transformations by Light are introduced. The Shinorama Space by Kishin Shinoyama shows White U. ¥3,900

Shin Takamatsu
All of his major works including Kirin Plaza Osaka which won 1988 The Prize of the Architectural Institute of Japan are introduced. His working field in which he has continuously been creating his sharp works can be observed. ¥3,800

Kunihiko Hayakawa
His original pastel-colored works such as ATRIUM and STEPS give the architectures allegro rhythm and feast one's eyes. His works and projects for 10 years since 1978 show his world. ¥4,300

Kazuhiro Ishii
His Sukiya-village which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan and 51 other works introduce his method of composition. ¥4,300

The Expressionist Architecture of Germany
Meaning of the Expressionism which is the mother of the modern architectures and has influence on the contemporary ones is introduced by 12 architects' works. ¥3,300

Wooden Architecture Today 1989
Introduces works of Europe, mainly German, Swiss, and French, as well as of the United States, Australia, and Japan. Works in Japan include those by Shoei Yoh, TAKE-9, Hideaki Katsura and others. ¥3,708

Bruno Taut
Introduces his activities mostly while staying in Japan 1933-36. Features in memory of Taut in 40th year of his death. Architect's Own House Istanbul, Housing on Erich-Weinert Strasse, etc. Taut's Handicraft and Books ¥2,575

Ecole des Beaux-Arts and its Glorious Tradition Updated: Essays: History and Credo, Thought Backbone/ On the Grand Prix : List of Recipients and their Presentations/ Genealogy of its Ateliers/ Collections : Notre-Dame at Lorette, Opera Theater, Paris, etc. ¥2,575

Details by Maki & Associates
Shows detail at Forum TEPIA, a showcase of high technology using a variety of new materials. The work features studies in surface, point, and line and develops numerous types of detail. ¥6,800

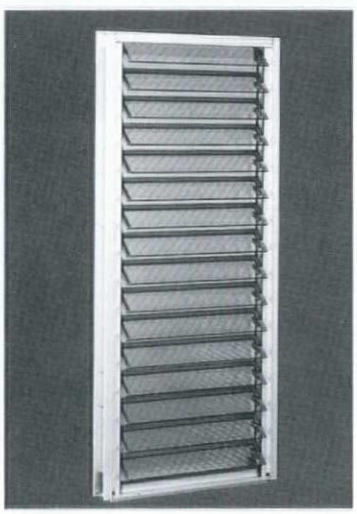
Kim, Swoo Geun
Introduces his 30 projects, mainly in Korea. Masan Cathedral, Korean Overseas Development Corporation Building, Art center of Korean Cultural and Arts Foundation, Seoul Sports Complex, Nam Dae Mun Market Redevelopment Plan, etc. ¥3,090

Architects Own Houses of the World
Introduces famous architects' own houses of the World. Architects: Richard Foster, Frank Gehry, Don Hisaka, Wilhelm Holzbauer, Michael Hopkins, Barton Myers, Christopher Owen, Arthur Erickson, Ulrick Franzen, Paul Gray, etc. ¥4,944

●
サッシ

サンミッテII70シリーズ

●
三協アルミニウム工業株式会社



三協アルミニウム工業㈱では，'97年７月に発売した，集合住宅用サッシ，サンミッテII70（引違い窓）に引き続き，今回，32の窓種を揃え，性能・安全性・快適性を向上させ，サンミッテII70シリーズとして一本化，幅広い建築用途に対応する．　今回発売のサンミッテIIシリーズは，同社ビル建材事業部門売上全体の３分の１強を占める基幹商品のフルモデルチェンジである．

特長

①ガラスルーバーサッシ「フリーゼ」（写真タイプ），非常脱出機能付き面格子一体サッシ「エマード」，採風機能付きドア，下枠のフラットタイプ（バリアフリー対応）などを設定，開口部の安全性・快適性を向上．

②６タイプの枠を設定し，オフィス，学校，集合住宅，病院，工場，研究所など幅広い建築用用途に対応する．

③引違い窓２枚建て，内動片引き窓，FIX窓には，中層用から，超高層用の６段階の耐風圧性能を揃え，高層集合住宅においても，最上階まで対応できる．

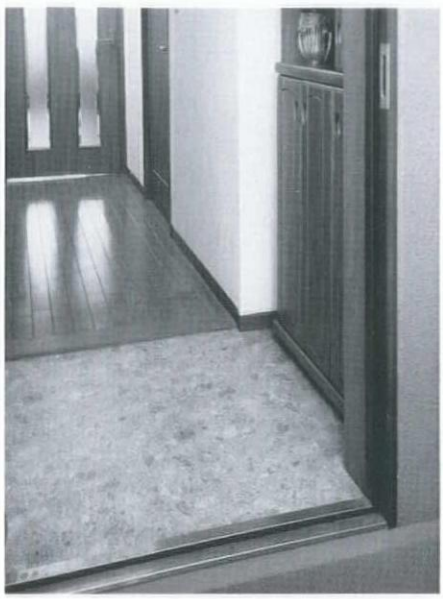
④引違い窓２枚建てと内動片引き窓には，標準タイプと遮音性T１〈25等級線〉，T２〈30等級線〉をクリアした，防音タイプを揃えた．

⑤ほとんどの窓種に断熱・省エネに有効な複層ガラスタイプを用意した．

●
床材

ベステル

●
株式会社タジマ



㈱タジマでは，玄関専用部床材，ベステルを新発売した．　玄関は，人の出入りも多く，しかも水や砂などにより滑りやすくなるところであり，防滑性が求められている．　同製品は，一般に使われることの多い石材よりも大幅に防滑性が高く，しかも耐久性や防汚性・意匠性に優れている．

寸法

2.5㎜（厚さ）×1,230㎜（幅）×10m（長さ）

色数

６色

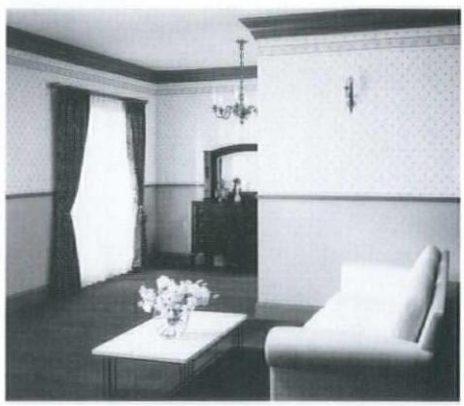
価格

4,500円/㎡

●
壁装材

東リウォール1000 〝1998～2000〟

●
東リ株式会社



東リ㈱では，壁装材，東リウォール1000〝1998～2000〟を新発売した．　その名のとおり１m当たり1,000円までの商品を収録したシリーズになっている．　壁紙業界全体でも，このクラスの商品がボリュームゾーンとなっている．　サンプル帳は，施工イメージ写真を大きくし，変化に富みながら見やすい構成となっている．構成は，輸入品，ボーダー（輸入・国産），エコウォール防汚，エコウォール防汚(抗菌)，ケナフ，アクリル・オレフィン，織物調，砂・石目調，天井柄，ストライプ，フラワー，トラッド，モダン，カジュアル，サニタリー，和風，じゅらく，木目，防火１級．

特長

①国産壁紙は全点が，安全品質で世界的権威のある，RALマークを取得している．

②環境保全を配慮したエコマーク壁紙を76点収録した．

③枯渇することのない天然資源，「ケナフ」を素材とした，世界初の壁紙が新登場．

④アクリル系・オレフィン系壁紙を積極的に収録した．

⑤汚れ防止壁紙（業界統一基準）を164点収録した．

⑥表面強化壁紙（業界統一基準）を160点収録した．

⑦防かび加工壁紙（業界統一基準）を490点収録した．

⑧今，話題の抗菌壁紙を55点収録した．

三協アルミニウム工業株式会社　広報室
富山県高岡市早川70番
〒933-0957　Tel　0766-20-2332

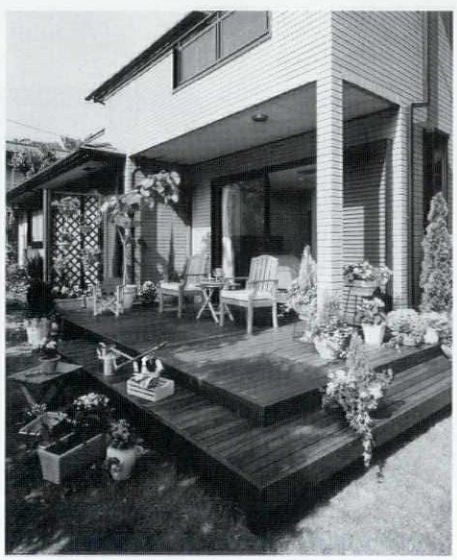
株式会社タジマ
東京都千代田区岩本町３丁目11番13号
〒101-0032　Tel　03-5821-7731

東リ株式会社　営業企画部
兵庫県伊丹市東有岡５番125号
〒664-8610　Tel　06-494-6605

●
デッキ

木製デッキ

●
新日軽株式会社



新日軽㈱では，昨今ブームとなっているガーデニング向け商品として，天然木（米杉）を使った，木製デッキを新発売した．　室内から庭までのプラスαの生活空間として，また，ガーデニングをより楽しく・素敵に演出する．

特長

①敷地プランに合わせてコーナーをカットしたり，2段組みにしたり，フェンスを組合わせたり，プランに合わせて様々なコーディネートが可能である．

②デッキを室内の床面とフラットに設置することにより，室内空間からの連続した広がりが演出でき，リビング感覚で使用できる．

③木製デッキ用の屋根として同社テラス，フォルテラスを，また木製フェンス，手摺，ステップと組合わせて思い思いのガーデニングが楽しめる．

④サイズは，建物や敷地の形状に合わせて，最小セットサイズ間口1間（1,820㎜）×出巾3尺（910㎜）～間口4間（7,280㎜）×12尺（3,640㎜）を超えるサイズまで対応できる．　デザインは，縦張り，横張り．

⑤作業時間・施工時間も短縮できる．

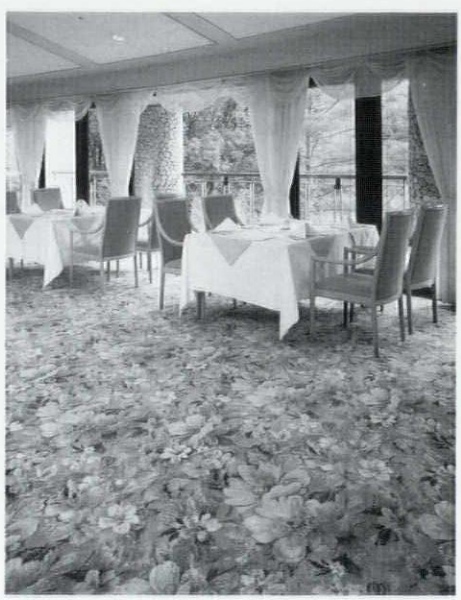
参考価格

198,000円（1.5間，6尺，縦張り）

●
カーペット

1998-2000カーペット総合
1998-2000カーペット5000

●
株式会社サンゲツ



㈱サンゲツでは，カーペットの新商品を収録した見本帳，1998-2000カーペット総合と，その中から5,000円/㎡までの商品のみを収録した，1998-2000カーペット5000を新発売した．　商品構成は，カーペット総合では，96柄419色（うち新柄・色　36柄185色），カーペット5000では，33柄199色（うち新柄・色　13柄87色）である．主な新商品は，サンドマーニ，サンアクティブ，サンハミング，サンコーラス．

特長

①無地カーペット57柄中40柄のパイルまたは第一基布に防ダニ・抗菌剤を練り込んであるので，長期間，安定した効果が持続する．

②天然素材のウールは風合いがよく，部屋の空気を浄化する，燃えにくく低発煙性で，汚れにくくいつまでも美しく，長寿命で経済的である．

③ウール商品は，5,000円台から20,000円台まで幅広くラインアップした．

④タバコ消臭カーペットは，イオンの働きで気になるタバコの悪臭を吸着し，さわやかな空間を保つ．　ペットやトイレなど家庭悪臭に対しても効果がある．

⑤ホテルなどコントラクト物件で好評なグラフィックカーペット商品を充実させた．

●
システムキッチン

レガセスシリーズ

●
TOTO



TOTOでは，好評のシステムキッチン，レガセスシリーズに，スペースアップカウンタータイプを新発売した．

特長

①奥行き125㎜の棚（スペースアップカウンター）を設けることで，調理中にちょっと置きたい調味料や食材，調理器具などを一時置きすることができる．　メインのカウンターは調理スペースとしてより広く使うことができ，作業がはかどる．

②業界初の棚下水栓設置方式で，専用水栓をスペースアップカウンター下面に取付けるので，汚れが付きにくく，手入れも簡単である．　吐水口の位置が高く（カウンター面取付タイプの水栓に比べ約40㎜高い），背の高いパスタ鍋などもラクに洗うことができる．　また，吐水口先端は引き出して使えるハンドシャワータイプなのでシンク内の掃除も簡単である．

③専用清水器の取付けが可能である．　専用清水器は吐水量が多いので（従来品に比べ25%アップ）米研ぎや野菜洗いにも十分対応できる．

④棚下に設置する水栓への給水・給湯配管は，キャビネット下部から立ち上げる．　壁面に新たな配管を行なう必要がなくなり，リフォームも容易である．

新日軽株式会社　住宅建材事業本部
東京都江東区木場2丁目7番23号
〒135-0042　Tel　03-3820-2159

株式会社サンゲツ　営業推進課
名古屋市西区幅下1丁目4番1号
〒451-0041　Tel　052-564-3111

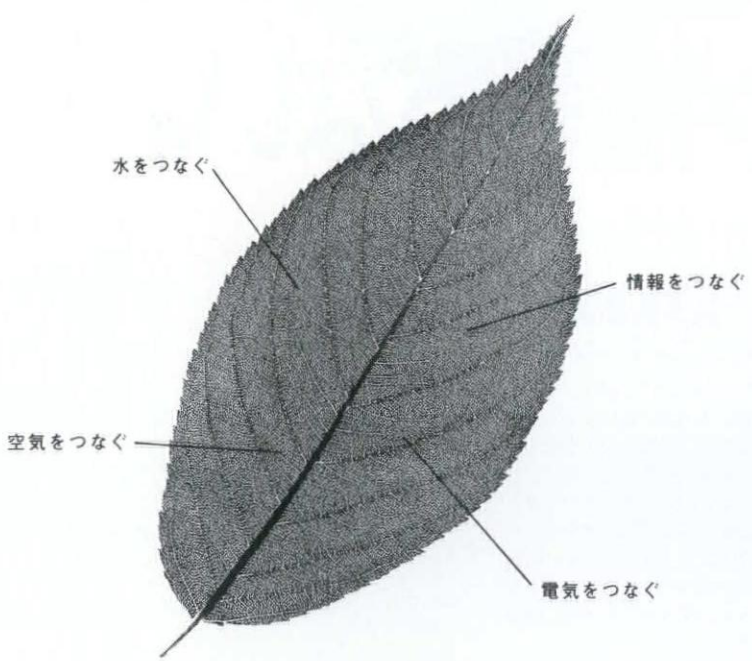
TOTO　広報室　東京広報グループ
東京都港区南青山1丁目24番3号
〒107-0062　Tel　03-3595-9422

SEM

ビルの、工場の、街の、
すみずみに、つながろう。

私たちの仕事は、ビルに、工場に、
街に、生命を与える葉脈として、
そのすみずみにつながっています。
もっと、人が快適になる環境へ。
総合設備業の
リーディング・カンパニーとして、
先端の技術で、高度な未来を
提案し続けます。

あなたと快適をむすびます。



住友電設株式会社
大阪本社 〒550-0011 大阪市西区阿波座2-1-4 Tel 06(537)3400
東京本社 〒105-0014 東京都港区芝2-2-17 Tel 03(3454)7311

営業種目：電気設備／空調・給排水・衛生設備／
プラント設備／情報通信設備／電力流通設備／その他

OSAKI



集中管理だけじゃ物足らない。

かゆいところに手が届く、ビル管理システム
OSMAC-mini
――中央監視装置オスマック・ミニ

いまやビルは集中管理の時代。照明や空調も定時にON、OFF。無駄な手間も経費もかけず、ビルを一括して制御できるようになりました。しかしビルの機能は様々。テナントや企業、そこで働く人の事情も多様化しています。OSAKIは、ビル設備の制御を画一的にではなく、ビルの利用者一人ひとりのニーズに対応できるものであるべきだと考えています。中央監視装置OSMAC-miniは従来の設備機器のスケジュール運転に加え、各テナントからのコントロールで、スケジュール時間外の運転を可能にし、各テナントごとに料金算出のためのデータを集計できるシステム。ビルをもっと生き生きと活動させるための、隅々にまで神経が行き届いた管理を実現します。

特　長

- 基本スケジュール運転の他に各テナントから時間外操作が可能。
- 時間外運転時間は各テナント単位に積算され、1ヶ月毎に料金管理データとして印字。
- 登録された機器の運転時間を積算し、表示・記録。
- 全発停点数に対してスケジュールを任意に設定、年間の休日指定も可能。
- 発停点数最大48点、負荷監視点数最大96点と豊富な管理点数。
- 故障および警報信号を外部に取り出せるので、無人管理が可能。
- 設定操作は画面との対話設定メニュー方式で、使い易いシステム。
- 盤内のケーブルレス化により小形・軽量・低価格。

主な仕様

●**定格電圧**／100V±10%●**定格周波数**／50Hz、60Hz共用●**管理点数**／運転監視入力…48点(増設タイプ96点)、故障・警報監視入力…48点(増設タイプ96点)、テナント操作入力…20点、発停制御出力…48点、警報移報出力(電力)…4点、警報移報出力(一般)…8点●**表示**／5×7ドット　モノグリーン螢光表示管　40字×4行、運転時間表示、時間外運転時間表示、カレンダー表示、当日プログラム表示、システムテーブル内容表示●**設定操作部**／シートフラットキー、螢光表示管との対話方式●**記録**／停復電記録、状態変化記録、故障・警報記録、日変わり記録、時間外運転記録(日報、月報)、個別発停操作記録、運転時間記録、カレンダ設定変更記録●**停電補償**／240時間●**外形寸法**／壁掛形48点タイプ…600(W)×1100(H)×230(D)mm、壁掛形96点タイプ…600(W)×1350(H)×230(D)mm、自立形…600(W)×2000(H)×400(D)mm

大崎電気工業株式会社

本社／〒141-8646 東京都品川区東五反田2-2-7
システム機器営業部第2課　☎03(3443)7176

大阪支店 ☎06(373)2556
札幌営業所 ☎011(251)6622　仙台営業所 ☎022(223)3747　北関東営業所 ☎048(653)5901
千葉営業所 ☎043(221)5714　横浜営業所 ☎045(664)5561　広島営業所 ☎082(243)1611
沖縄営業所 ☎098(832)7406

日章工業株式会社

●本　　社 〒101-0047 東京都千代田区内神田３－11－７(日立神田別館) ☎03-3254-3000
●大阪支店 〒541-0043 大阪市中央区高麗橋２－４－６(大正不動産ビル６階) ☎06-201-5704
●仙台営業所 〒980-0021 仙台市青葉区中央３－２－27(日産生命ビル) ☎0222-21-6989

日立製作所エレベーター・機電特約店
日立製作所ＯＡシステム特約店
日立金属フリーアクセス、ハイベース特約店
旭化成建材パイル・ヘーベル代理店
大和ハウス工業代理店

施設商品

エレベーター・エスカレーター
立体駐車場設備(新明和工業)
バスユニット(日立化成工業)
住宅機器類
集中浄化槽
受水槽
ソーラー
受変電設備
自家発電設備
無停電定電圧定周波電源装置
ビル監視制御装置
冷暖房空調設備
通信設備
ターボ冷凍機・吸収式冷凍機
各種ポンプ設備・換気設備

OAシステム機器

パーソナルコンピューター
ワードプロセッサー
ファクシミリ
オフィスコンピューター

建材商品

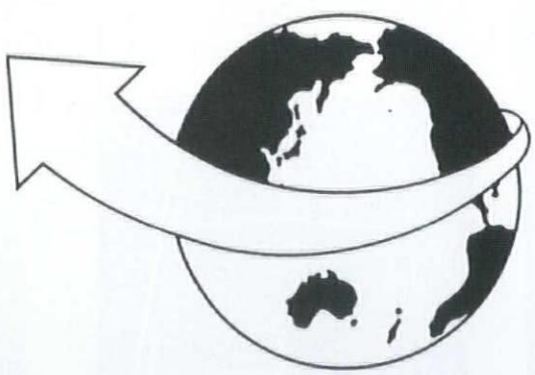
AHSパイル
ヘーベル
フリーアクセスフロア
ハイスプリット・ハイベース
鉄骨
大昭和ユニボード

建設商品

クローラクレーン
ショベル
軽量鉄骨プレハブ規格建築物
軽量鉄骨系プレハブ住宅

未来に向って…

限りある資源
限りある空間の中で
より快適な環境づくりの
ために努力しています。



●営業品目
空気調和・冷暖房・給排水・衛生設備・設計施工

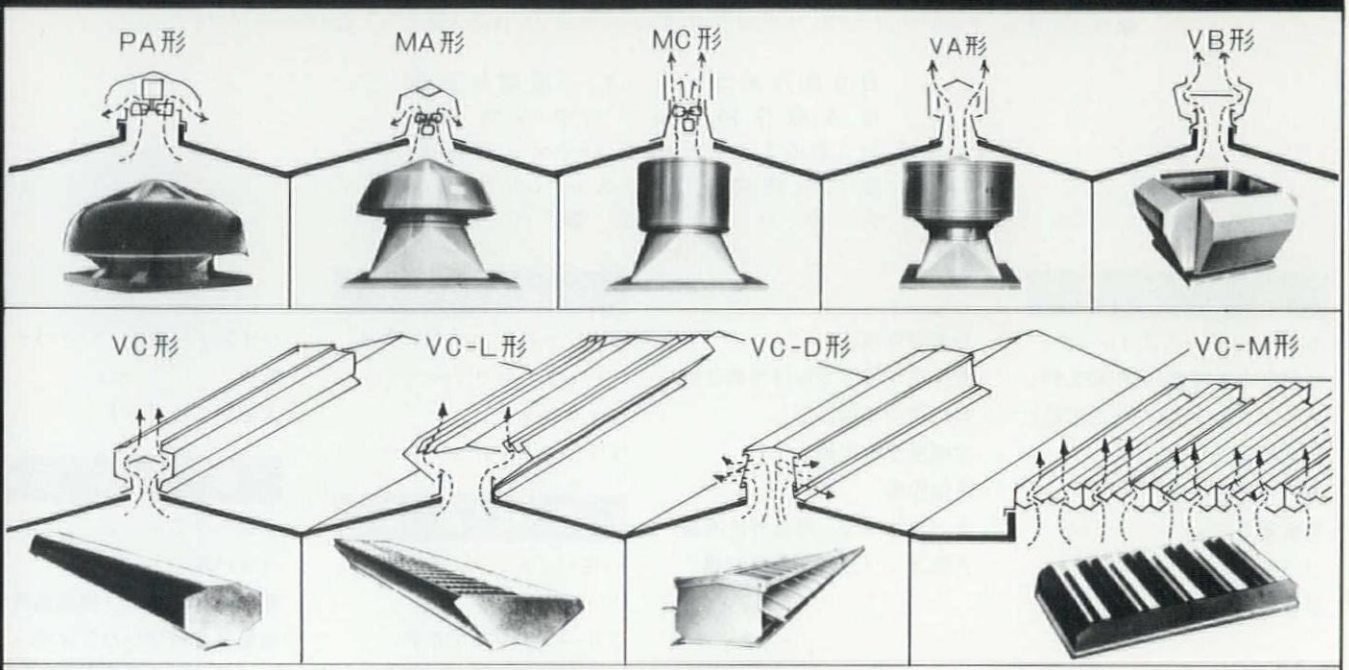
株式会社朝日工業社

本社・東京支社　〒105-0013 東京都港区浜松町1-25-7　電話 03(3434)5711
大阪支社　〒532-0031 大阪市淀川区加島1-58-59　電話 06(302)2273
支　　店　北海道／東北／北関東／横浜／名古屋／中国／九州

坂本商会は創業80年 換気・排煙・採光の専門メーカーです

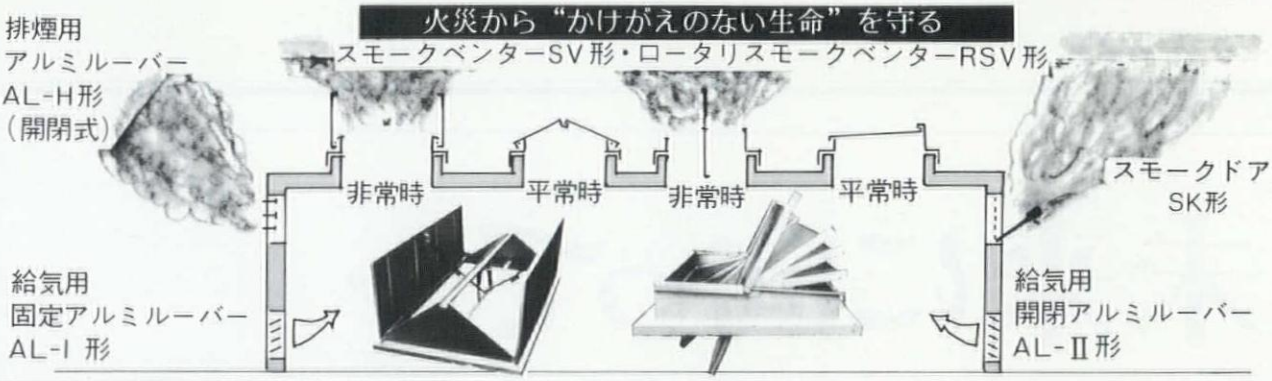
強制換気・自然換気装置

“自然の風”を効率よく招く坂本式ルーフベンチレータ群



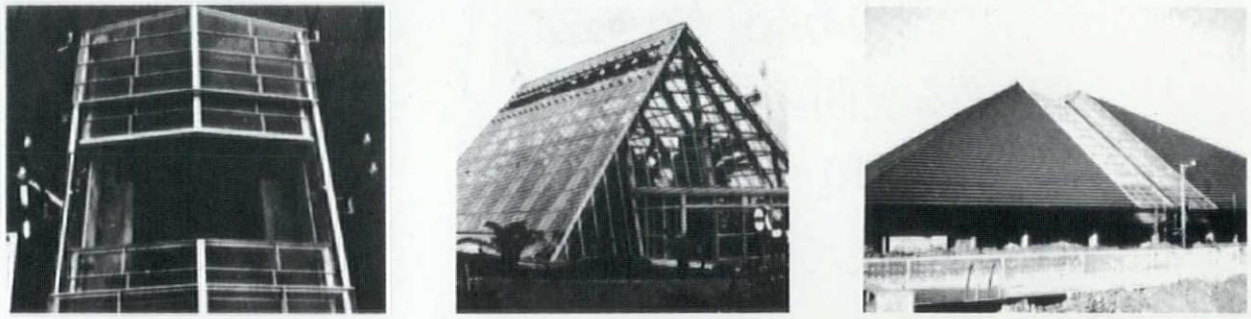
排煙・ルーバー装置

火災から“かけがえのない生命”を守る



採光装置

“太陽の恩恵”を全身でウケとめる坂本式スカイライト



株式会社 坂本商会

本社	東京都中央区日本橋2－16－12(江戸二ビル)	〒103-0027	電話 東京 (03)3271－5591(代)
松戸工場	千葉県松戸市松飛台420番地	〒270-2214	電話 松戸 (0473)87－6595(代)
技術研究所	千葉県松戸市松飛台217番地	〒270-2214	電話 松戸 (0473)87－3148
施工部	東京都墨田区東向島2丁目15番11号	〒131-0032	電話 東京 (03)3619－2221(代)

広告目次

SD誌に広告をお申込みの際は下記広告代理店にご用命下さい（五十音順）

●共栄通信社

東京――東京都中央区銀座8-2-1
新田ビル（3572）3381
FAX（3572）3590

大阪――大阪市北区西天満3-6-8
笹屋ビル06（362）6515
FAX06（365）6052

●建報社

東京――東京都文京区湯島2-30-8
（3818）1961
FAX03(3818)1968

大阪――大阪市中央区淡路町1-4-9
昭栄ビル06（231）4548
FAX06（227）0268

●新建社

東京都中央区八丁堀2-1-10
ハヤシビル（3552）8247㈹
FAX（3552）8249

●中外

大阪――大阪市北区浪花町14-25
日本生命天六ビル06（379）1791

東京――東京都千代田区神田須田町2-5-2
須田町佐志田ビル（3255）8411

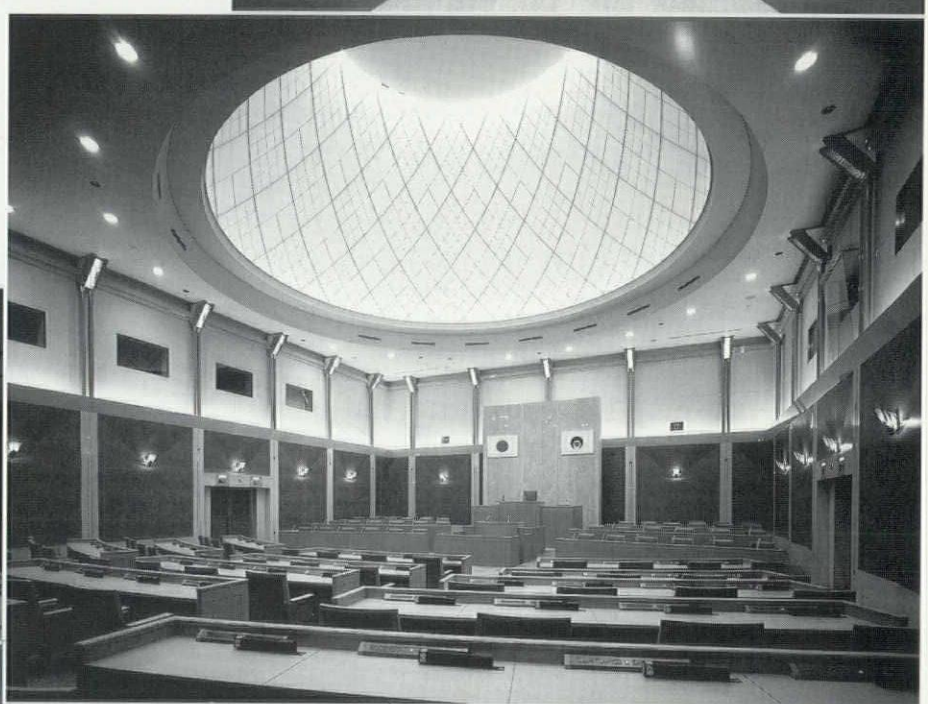
名古屋―名古屋市中区錦2-2-13
名古屋センタービル052（221）7641㈹

ア ㈱朝日工業社――A21
オ 大崎電気工業㈱――A20
カ ㈱関電工――表2
鹿島――A4・A5
軽井沢ホテル鹿島ノ森――A6
川崎電気㈱――A14
ク 栗原工業㈱――A15
サ 三建設備工業㈱――A13
三機工業㈱――103
㈱坂本商会――A22
シ 新菱冷熱工業㈱――104
ス 住友電設㈱――A19
タ 大興物産㈱――A8
ダイダン㈱――A13
大栄電気㈱――A14
高砂熱学工業㈱――表3
チ ㈱中電工――A15
ト 東陶機器㈱――A1
東光電気工事㈱――A3
東洋熱工業㈱――115
㈱東芝――A16
ナ 中立電気㈱――A11
ニ 日新工業㈱――A10
㈱西原衛生工業所――A12
日章工業㈱――A21
ヒ ㈱日立製作所――93
フ 不二サッシ㈱――116
ホ ホテルイースト21東京――A7
マ 松下電器産業㈱――A2
ミ 三菱電機㈱――表4
美和ロック㈱――96
ヤ 山田照明㈱――A24
リ ㈱リビングデザインセンター――112
ロ ロンシール工業㈱――A9
ワ YKKアーキテクチュラルプロダクツ㈱――109

表情多彩

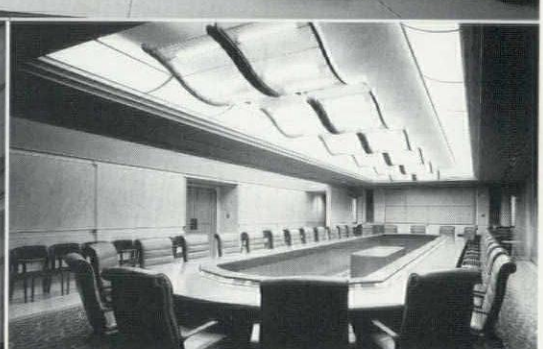
照明は空間づくりの重要なポイント。
人々に、常に気持ちよく空間を利用してもらいたい・・・。
山田照明ではさまざまな条件やニーズを満たすために、
多種多様な照明器具を用意。ベストなあかりで、
ひとつひとつの空間を、個性的・機能的に演出し、
表情多彩な空間創造を力強くバックアップしています。











鹿児島県庁舎（鹿児島）
設計管理：株式会社 佐藤総合計画

yamada

山田照明株式会社

本　　社／ショールーム　〒101 東京都千代田区外神田 3-16-12　TEL.03-3253-5161
仙台支社／ショールーム　〒980 仙台市青葉区二日町11-11（ANDOビル）TEL.022-267-1630　横浜支社／ショールーム　〒220 横浜市西区南幸 2-20-1　TEL.045-311-1731

大 阪 支 社　〒542 東大阪市楠根 2-2-6　TEL.06-745-6811
北関東営業所　〒370 高崎市上中居町 51-1　TEL.0273-26-4111
広島営業所　〒730 広島市中区十日市町 2-2-34　TEL.082-293-6119
福 岡 支 社　〒810 福岡市博多区店屋町 8-30　TEL.092-282-7635
名古屋事務所　〒461 名古屋市東区泉 1-21-35-1102　TEL.052-963-8411
鹿児島営業所　〒890 鹿児島市上之園町 4-14（第6相良ビル）TEL.0992-58-0031
札幌営業所　〒003　札幌市白石区菊水七条 2-61　TEL.011-811-2215
静岡事務所　〒420　静岡市西草深 23-9-502　TEL.054-247-0811
宇都宮事務所　〒321-0902　宇都宮市海道町818-2-1002　TEL.0286-60-1381